チョゴリザ

京都大学図書
1000265315
大学院 AA研究科

092.58
3

チョゴリザ

京都大学学士山岳会　編著

CHOGOLISA

The Japanese Chogolisa Expedition, 1958

The Academic Alpine Club of Kyoto

京都大学
00026531
図書

2854
民寄贈

朝日新聞社

序

チョゴリザ登山隊の隊長から「登頂に成功」との電報を受けた時の感激は、いまも忘れることができない。一九〇九年アブルッジ公の、一九五七年にはヘルマン・ブールの登山隊をしりぞけたヒマラヤの処女峰チョゴリザは、ついにわが京大学士山岳会にその登頂を許したのだ。まことに世界山岳界における快挙である。

登頂隊員の感激はまたひとしおであったろう。藤平君はその報告の一節に述べている。

『……頂上の前で手を握りあって、いっしょに頂上の岩を踏んだ。「おめでとう」と声を合わせていった時、私は涙が胸につかえたような気がした。私はそれを振りはらうようにして、「花嫁は足でさわるもんじゃないよ、手で抱くものだ」といって頂上の岩を抱いて見せた。つめたくてザラザラしていたが、胸をつくようなうれしさがこみあげた……。』

この報告書『チョゴリザ』は、若い感激と自然の美にみちみちている。

だがチョゴリザの登頂成功のうしろには、長い京大学士山岳会のたくましい歴史がある。私はこの学士山岳会の実績に深い敬意を表し、心からその前途を祝福してやまない。

京都大学総長　平沢興

はしがき

京都大学学士山岳会は、一九五八年の夏、カラコラムのチョゴリザ（七六五四メートル）に遠征登山隊をおくり、八月四日その登頂に成功した。本書はその公式報告である。

ヒマラヤの処女峰への登頂という、本会創立以来の目標が、四分の一世紀をへて、ここに実現されたのであって、本会として感慨無量のものがあるが、これはただに本会の喜びにとどまらない。戦前の立教大学によるナンダ・コット、一九五六年の日本山岳会のマナスルにつづく、日本人による第三のヒマラヤ初登頂を記録した点において、日本登山界全体の誇りとすることは許されるであろう。しかし、地球上になお未登の山は多く、日本の登山家による登頂は第四、第五とつづくにちがいない。その踏石の一つとして、今回の遠征をくわしく報告することは本会の義務であろう。

本会の編集委員会は、隊長が『チョゴリザ登頂』と題して、その個人的手記を別に出版することを認めると同時に、本会の責任編集によって重要な写真を可能なかぎり収めた公式報告を朝日新聞社から出版することを決定した。

ヒマラヤ遠征登山の報告としては、すでに日本山岳会の『マナスル』があり、そこには装備、食糧、医療等々、各項目について綿密な記述がみられる。私たちの隊もそれと大同小異の面が多いので、おなじ方式によって屋上屋をかさねることをさけ、本報告は座談会という新しい形式をとることとした。本会には海外遠征の経験者が多く、また各種の問題を研究している若手も少なくないので、その参加を求めて隊員とともに自由討論するならば、一般読者にとっても興味があるのみでなく、遠征登山の問題点を明らかにし、その解決への道しるべともなりうるだろうと考えたのである。そのさい、自分たちの弱点ないし失策をも、あえてかくそうとはしなかった。人間は自己批判によってしか進歩しないからである。

座談会は、会員である梅棹忠夫司会の下に、二日間にわたって、なごやかにしかし熱心に行われ、その速記は五百数十枚に達したが、紙数の関係上、かなりの割愛をよぎなくされた。その編集にも主として梅棹があたった。

最後に、この遠征登山について特別の好意を示されたパキスタン政府当局、スカルドのP・A、レーマン・カーン氏、日本外務省、在カラチおよび在コロンボ日本大使館、「序」をよせられた総長平沢興氏をはじめ京大学内の各位、後援会長鳥養利三郎博士、後援かつ援助をあたえられた朝日新聞社をはじめ、別に貴名をかかげた会社ならびに個人にたいして心からの感謝を申しのべることは、本会の喜ばしき義務である。

一九五九年九月

京都大学学士山岳会

会長　桑原武夫

目次

序　文……京都大学総長　平沢　興

はしがき……京都大学学士山岳会会長　桑原　武夫

カラー

スカルド出発　1
デュモルド谷のつり橋　2
バルトロ氷河をゆく　3
バルトロ・カンリⅡ　4
第2キャンプへの荷揚げ　5
頂上から見るカベリ氷河　6・7
チョゴリザ頂上　8

グラビア

北東よりのチョゴリザ　1
カラチ　2・3
スカルド　4・5
ポーターとクーリー　6・7
キャラバン開始　8・9
シガール　10・11
ザーク　12・13
途中の村々　14・15
バルチスタンのひとびと　16・17
行進　18・19
アスコーレ　20・21
氷河へ　22・23
つり橋　24・25
クーリーの生活　26・27
バルトロ氷河　28・29
ウルドカス　30・31
セラックをぬって　32・33
マッシャーブルムとミートル　34・35
ムスターグ・タワーとK2　36・37
ブロードとガッシャーブルムⅣ　38・39
バルトロ氷河源流へ　40・41

隊員

桑原武夫（隊長・55歳）
京大・人文科学研究所教授

加藤泰安（副隊長・47歳）
東京樹脂工業株式会社重役

藤平正夫（33歳）
北陸銀行東京支店

山口克（32歳）
大阪市大・工学部助手

脇坂誠（32歳）
京大・農学部農学科大学院学生

中島道郎（27歳）
京大・結核研究所副手

平井一正（26歳）
金沢大・工学部講師

高村泰雄（23歳）
京大・農学部農学科大学院学生

岩坪五郎（24歳）
京大・農学部林学科学生

芳賀孝郎（23歳）
学習院大・政経学部学生

今川好則（25歳）
在カラチ日本大使館員

潮田三代治（カメラマン・43歳）
日映新社社員

アンワール・ワジー（連絡将校・28歳）
パキスタン陸軍大尉

第3章　キャラバン

インダス渡河(24)　はじめて氷河を見る(24)　野生のネギ(25)　ベース・キャンプへ(26)　なくなってゆくタキギ(27)　キャンプ・サイトをえらぶには(28)　汚いキャンプ地(28)　クツとマメ(29)　朝食ぬきの行進(30)　ポーター採用(32)　ポーター論(33)　クーリーの要求(34)　クーリーの統制(36)　労力か費用か(36)

第4章　攻撃・登頂

チョゴリザ見ゆ(38)　アイス・フォールに登路を求めて(38)　第二キャンプへ(39)　しゃにむにの登行(40)　転進ルートの発見(41)　登頂前後(42)　ベース・キャンプ集結(43)　ヘルマン・ブールのルート(44)　最前進キャンプの位置(44)　頂上攻撃と酸素(45)　頂上での行動(46)　ヘルマン・ブールの亡霊(47)　隊長の苦心(47)　心臓障害か栄養失調か(48)　高度影響(50)　二度目の高度影響(51)　ポーターは必要か(52)　ポーターの利点(53)　ポーターとシェルパ(54)

第5章　帰　途

ベース・キャンプ集結(55)　外国隊(55)　オーストリア隊(57)　ビアンジェ行(57)　シャクスガムをのぞく(58)　帰途(59)

第6章　装備の検討

登頂用の装備(60)　ハシゴとショイコ(61)　酸素ボンベとマスク(62)　酸素使用法(63)　酸素の量(64)　酸素はほんとに必要か(65)　プロパン・ガス(66)　無電とラジオ(67)

第7章　装備の検討（つづき）

テント(69)　個人装備(69)　軽量化と強度(70)　テトロン(71)　装備係の意見(72)　バランスのとれた装備(73)　下着論(75)　下着論（つづき）(76)　登山デザイン(76)　テントの色彩(77)　登山服の美学(78)

第8章　食　糧　論

食糧計画のプリンシプル(80)　高地食の方針(80)　メザシと兵糧丸(81)　現地食(82)　現地食の是非——米とチャパティ(83)　現地食の是非——ネパールとカラコラム(84)　現地食の是非——コックとサブリメンタリー・ボックス(85)　ポーター食糧の食いこみ(85)　ポーターとクーリーの雇用条件(86)　ポーターの食生活(87)　食糧管理(88)　味覚の差(89)　趣味と年齢(90)

第9章　健康管理と科学

病気と薬(91)　伝染病(92)　水(92)　ドクター批判(94)　現地人の診療(95)　写真(96)　植物と昆虫(97)　トリとケモノ(98)　魚(99)　登

キャラバンの行進おわる　42・43
ベース・キャンプ　44・45
花嫁の峰　46・47
偵　　察　48・49
登路みつかる　50・51
荷上げ・1　52・53
荷上げ・2　54・55
第1キャンプ建設　56・57
第2キャンプへ　58・59
前進根拠地　60・61
第4キャンプへ　62・63
ヘルマン・ブールのテント　64・65
第1次・第2次頂上攻撃　66・67
転　　進　68・69
新第4キャンプ建設　70・71
カベリ・ピークからのチョゴリザ　72・73
最後の攻撃　74・75
頂上にて　76・77
ベース・キャンプ集結　78・79
ビアンジェ氷河をさぐる　80・81
隊員とポーター　82・87
頂上よりのパノラマ　83～86
帰　　途　88

座談会・チョゴリザ遠征をめぐって

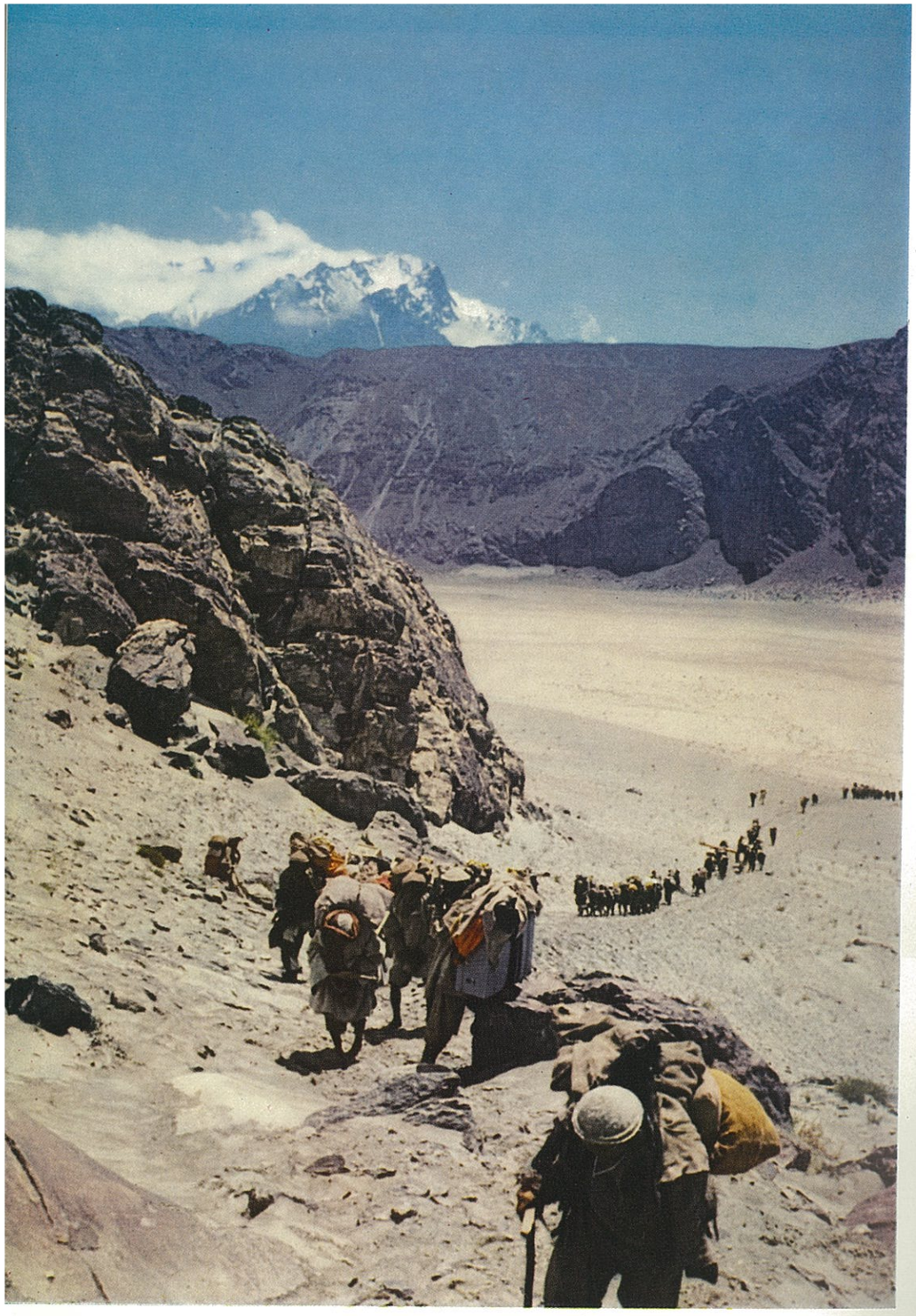
はじめに

第1章　出発まで

発端——1953年の秋(4)　探検から登山へ(5)　パーミッション来たる(6)　チョゴリザをなぜえらんだか(7)　隊長がきまるまで(8)　桑原会長の考え(8)　副隊長問題(9)　隊員の選考(9)　予算(10)　募金(11)

第2章　スカルド集結

船便をさがす(12)　動乱のコロンボ(12)　船賃論(13)　藤平先発隊(14)　ラクダに乗らなかった話(14)　大使館員・今川君(15)　連絡将校ワジー大尉(16)　カラチでの交渉(16)　チェナブ急行(17)　副隊長の病気(17)　ラワルピンディにて(18)　スカルドへ飛ぶ(19)　ナンガ・パルバットの威容(20)　スカルドでの仕事(20)　事情は変った(21)　P・Aとラジャー(21)　マネージメントと教育(22)



I　キャラバン第1日　スカルド出発

頂第一主義と学術(100)　学術尊重は観念論か(101)

第10章　これからの問題

バルトロ・カンリ(102)　ガッシャーブルム、バイジュ、トランゴ(103)　山のきりょう(104)　新しいヒマラヤの技術(105)　マナー(106)　趣味とエチケット(107)　年齢階級(108)　人の和(109)　選手制か同志的結合か(109)　カルチュアと仲間意識(110)

付・装備一覧表

個人装備・隊員用(112)　個人装備・高所ポーター用(113)　露営用具(113)　炊事用具および燃料(114)　登攀用具(114)　調査用器具(115)　雑品(115)

日　誌

1958年5月2日～12月4日 (119—138)

折込み地図

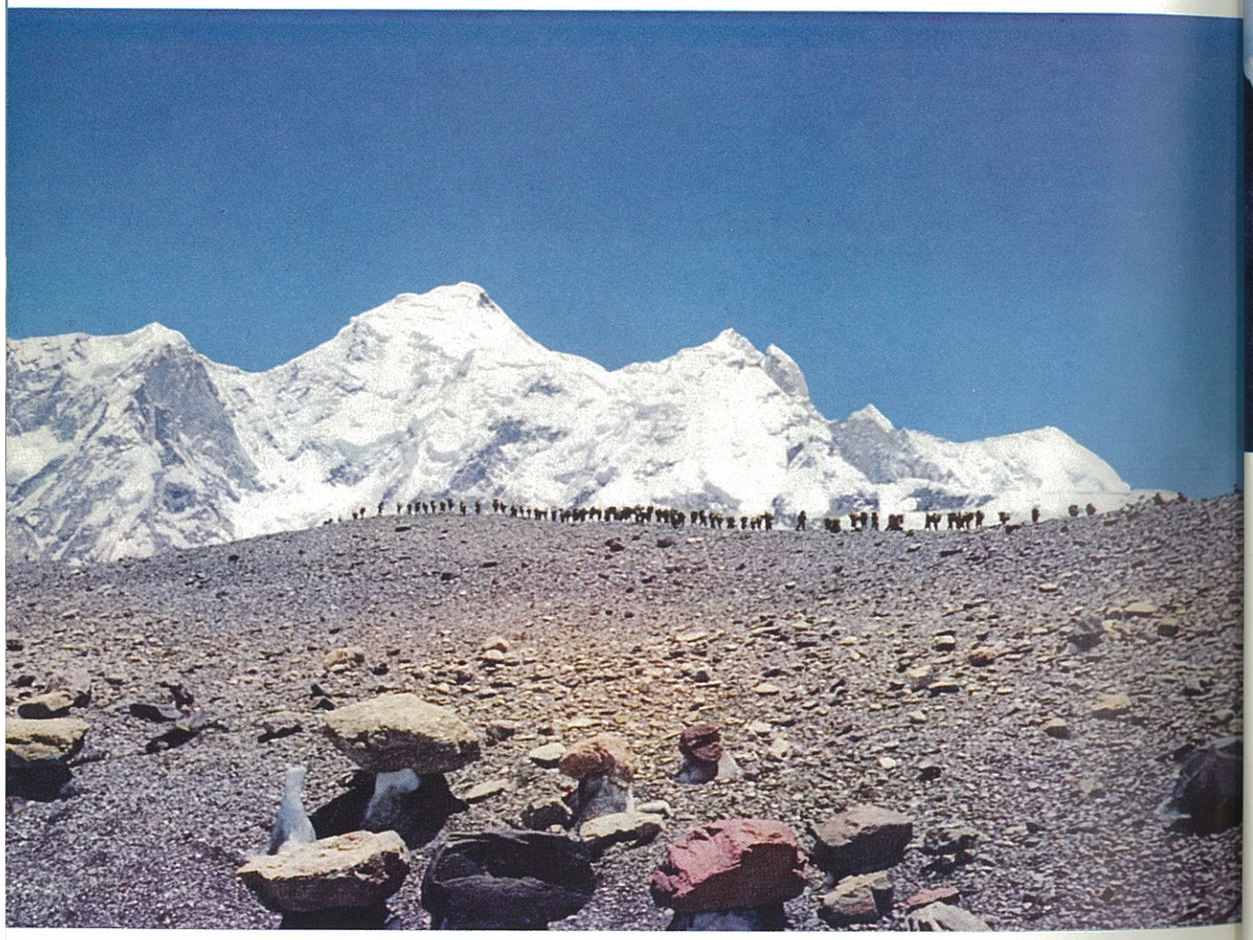
パキスタン北部地方　巻末
チョゴリザ登頂ルート図　巻末
バルトロ氷河周辺図　巻末

装幀　高橋　錦吉

2 デュモルド谷のつり橋

3 バルトロ氷河をゆく

2 デュモルド谷のつり橋

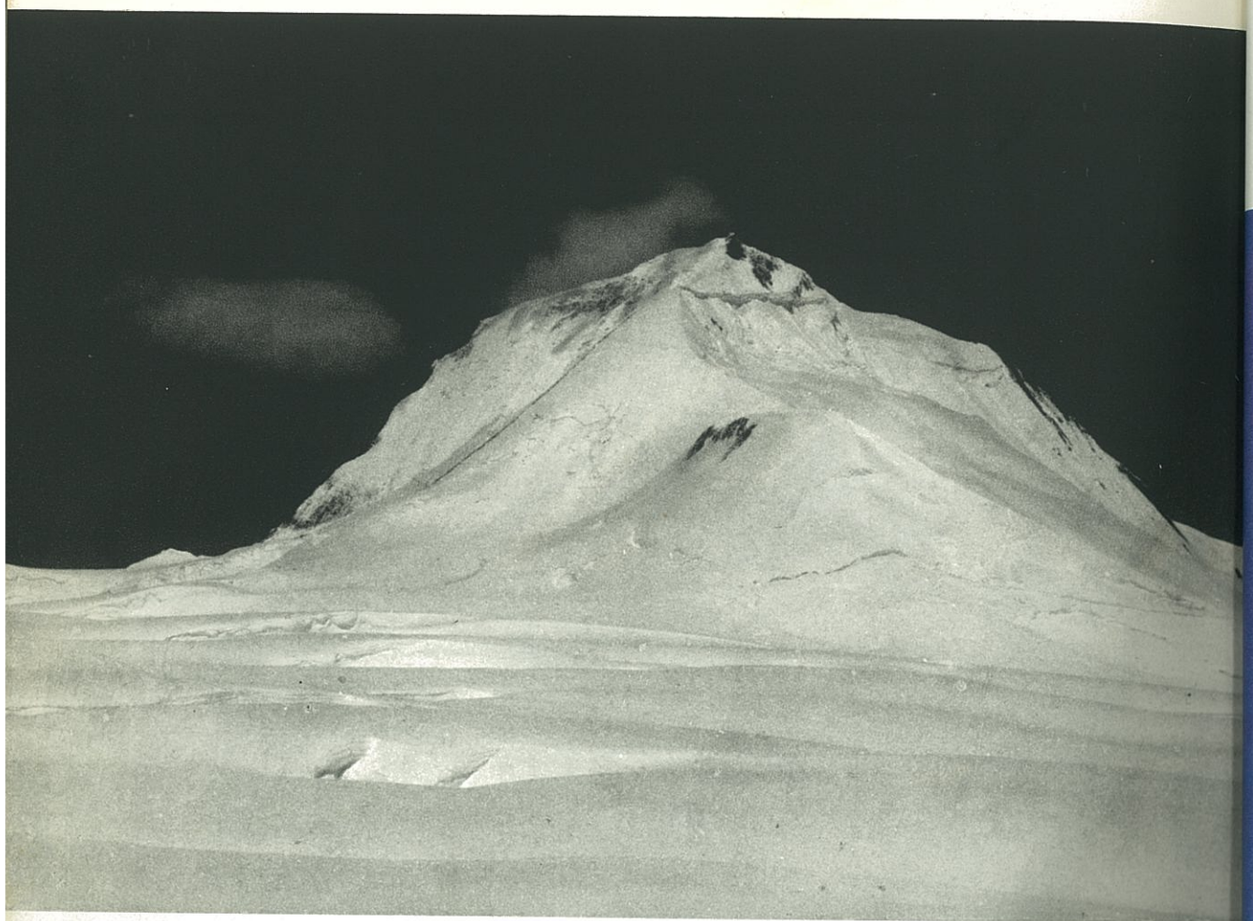


3 バルトロ氷河をゆく

5 第2キャンプへの荷揚げ

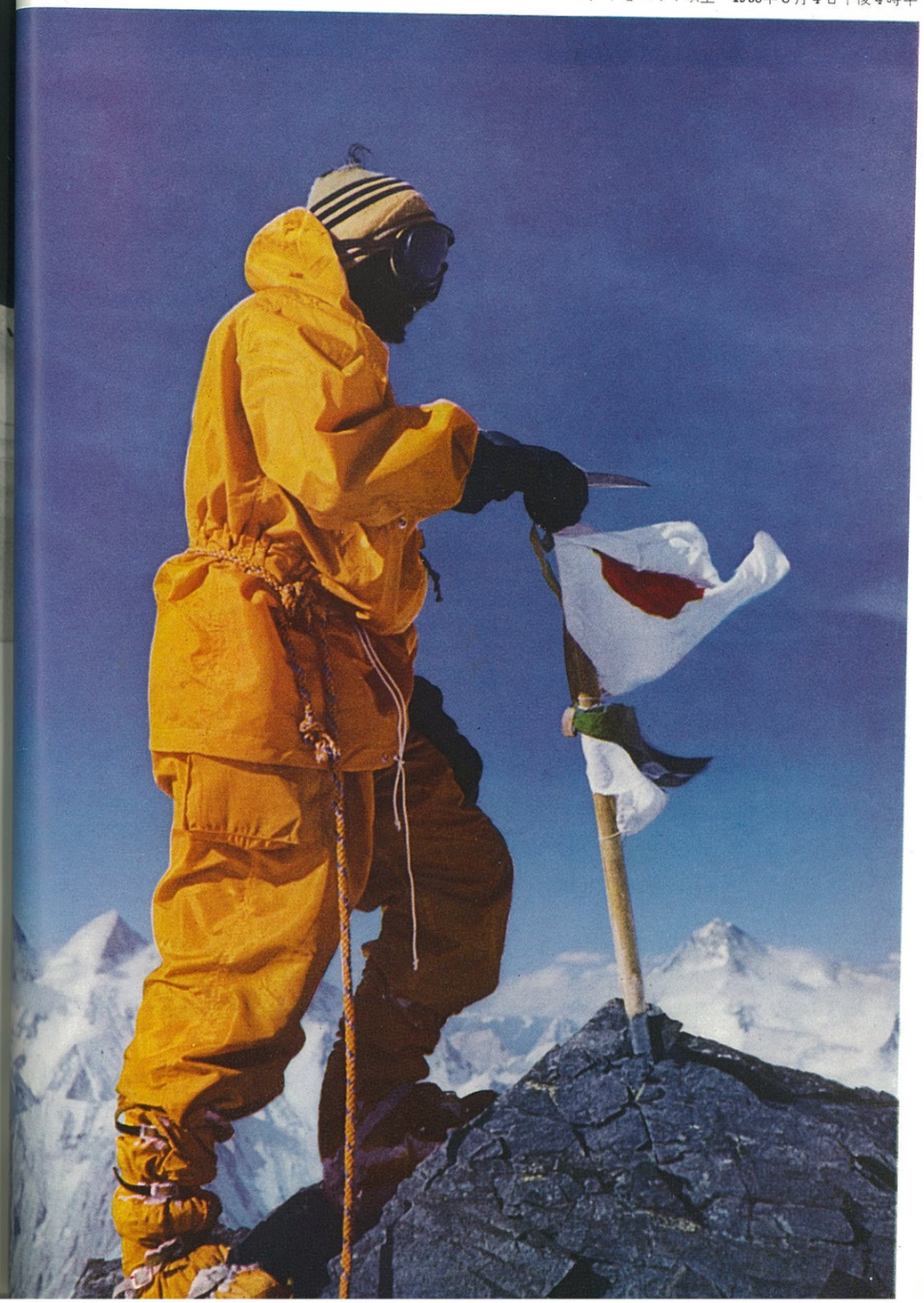
4 第2キャンプ　正面はバルトロ・カンリII

6 チョゴリザ頂上からカベリ氷河を見おろす



1　北東よりみた花嫁の峰・チョゴリザ

7　チョゴリザ頂上　1958年8月4日午後4時半



1958年５月30日。山下汽船の山下丸で先発隊が到着した。ただちに荷物をハシケどり、通関をおえて、大使館の庭にうず高くつみあげた。

カラチは砂漠の中に建設中の近代都市である。メーン・ストリートには新しいビルが立ちならんでいる。しかし横町に１歩ふみこむと、昔ながらのにおいが鼻をつく。そこには、喧噪に明けくれる庶民の生活がある。

すずをならしてゆくラクダ、チャドルをかぶって顔をかくす女の姿、アラビアン・ナイトそのままの世界だ。

3　カラチの旧市街

2　荷物は130箱　約3.3トン

カ　ラ　チ

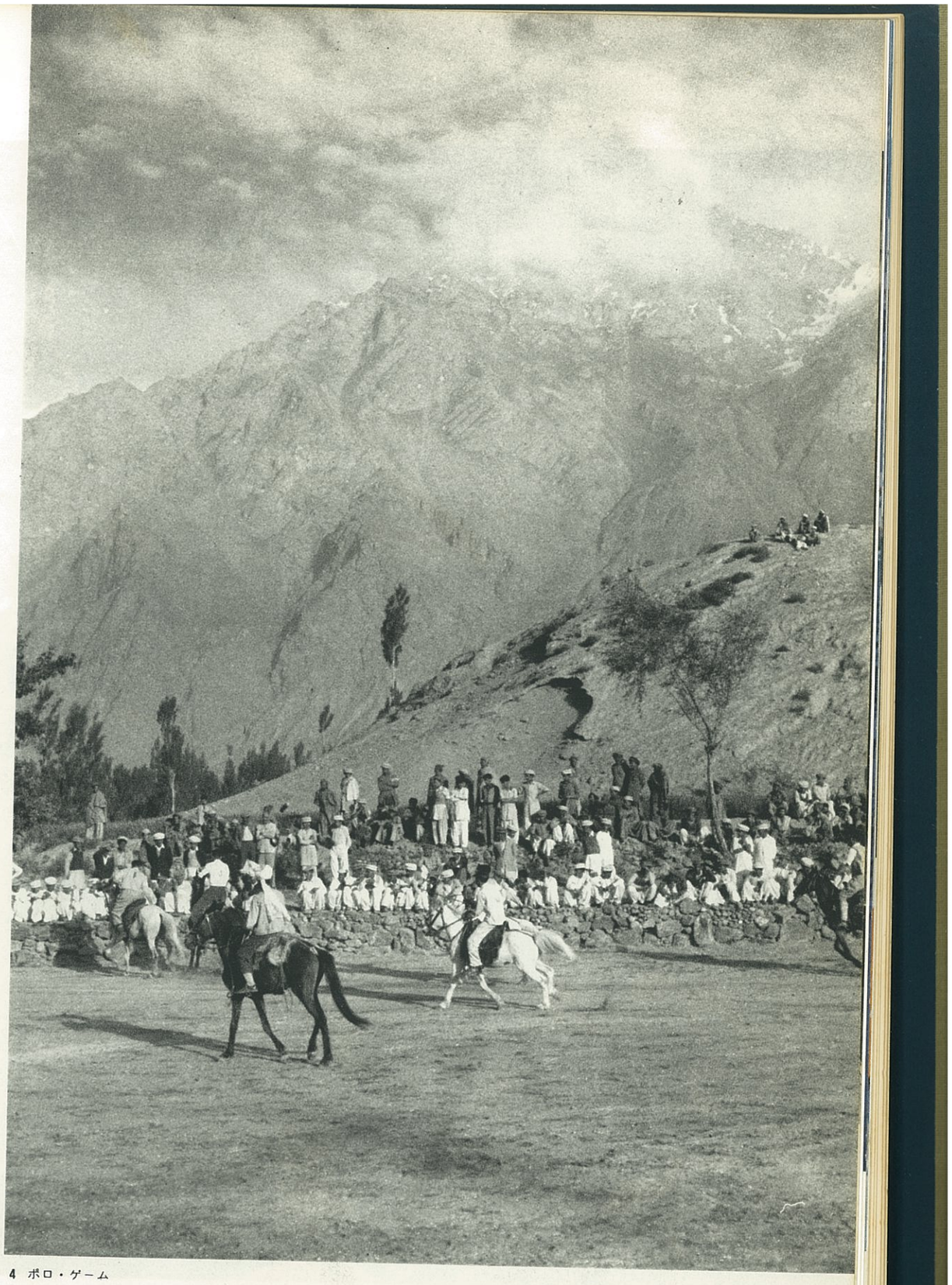
スカルド

政府すじとの交渉。ながい飛行機待ち。２週間のラワルピンディ滞在は、たえがたく暑い。

やっとスカルドに飛ぶ。ここはカラコラムの東玄関、政治・経済の中心地である。といっても、小さな村にすぎない。気温は日中でも20度ぐらい、たいへんしのぎよい。きのうまでの炎暑は、うそみたいだ。ポプラの並木を吹きぬける風のここちよさ。

山の眺めのよい芝生の上にテントをはって落ちついた。クーリーにやとわれたい連中があたりをうろうろする。親日家のＰ・Ａ（執政官）が、ポロ大会を開いてくれた。ポロはこのあたりが、世界の発祥地だ。

5 スカルドのキャンプ



4 ポロ・ゲーム

7 採用のきまったクーリーたち

8 私たちを歓迎する村びと

出発の前日、ポーターをえらぶ。これはネパールのシェルパにあたるもので、高所まで連れてゆくのだから、選択には慎重を要する。外国隊からもらった証明書をみると、みんなりっぱな仕事をしたように書いてあるが、写真もなく、他人のを借りてくるやつもあり、あてにならない。

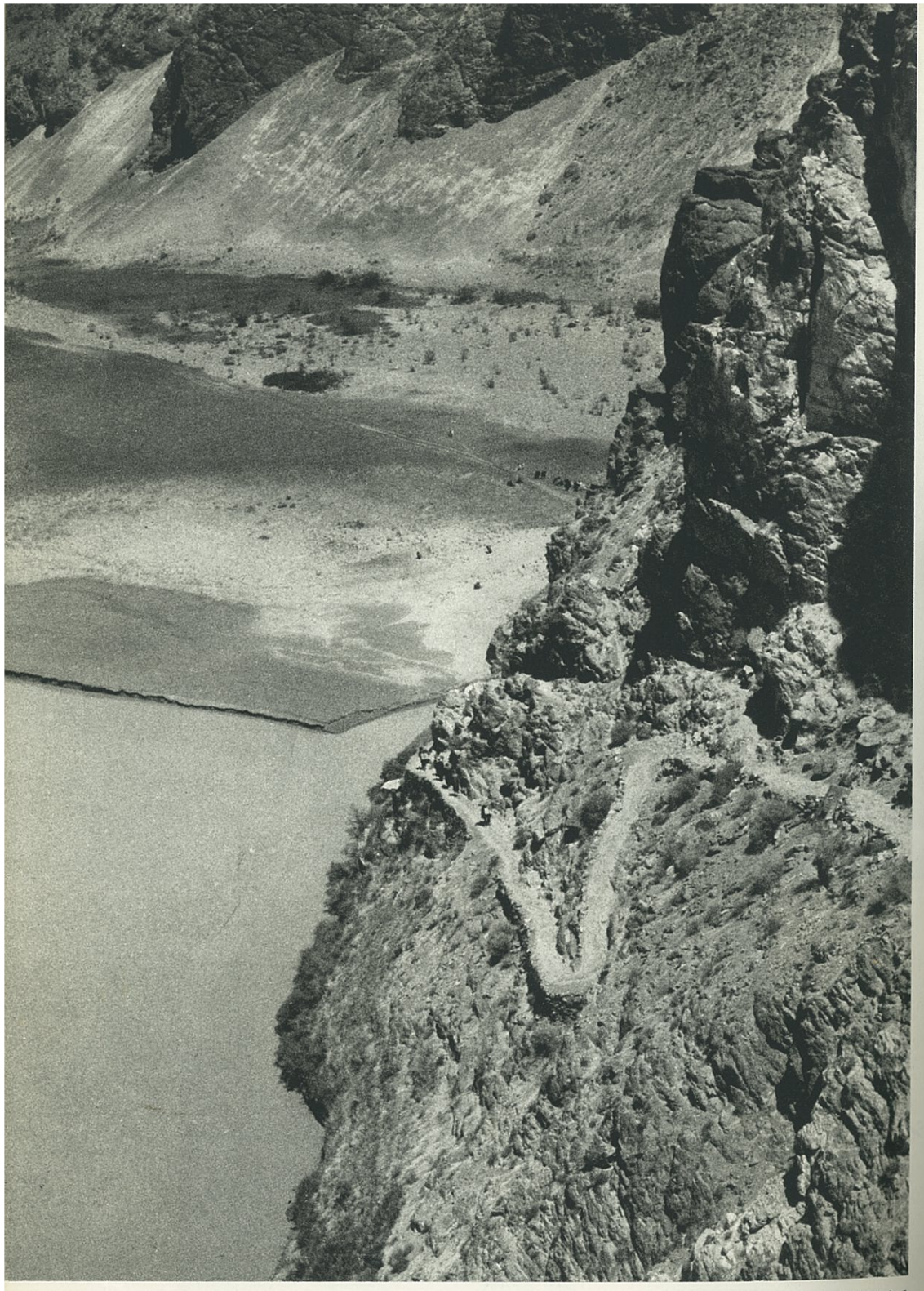
ともかく９人えらんで、中古のＧ・Ｉの服を着せたら、かんろくがあがった。

クーリーは、152人とった。あちこちの村から候補者が押しかけてくる。部落の勢力のバランスを考えねばならず、とても私たちの手におえないので、選定は巡査にまかせた。

就職あらそいで大げんかがはじまる。やっとおさまったが、翌朝いざ出発となると、荷物のとりあいで、きのうのとりきめはほご同然、要領のわるいのはみなあぶれてしまった。

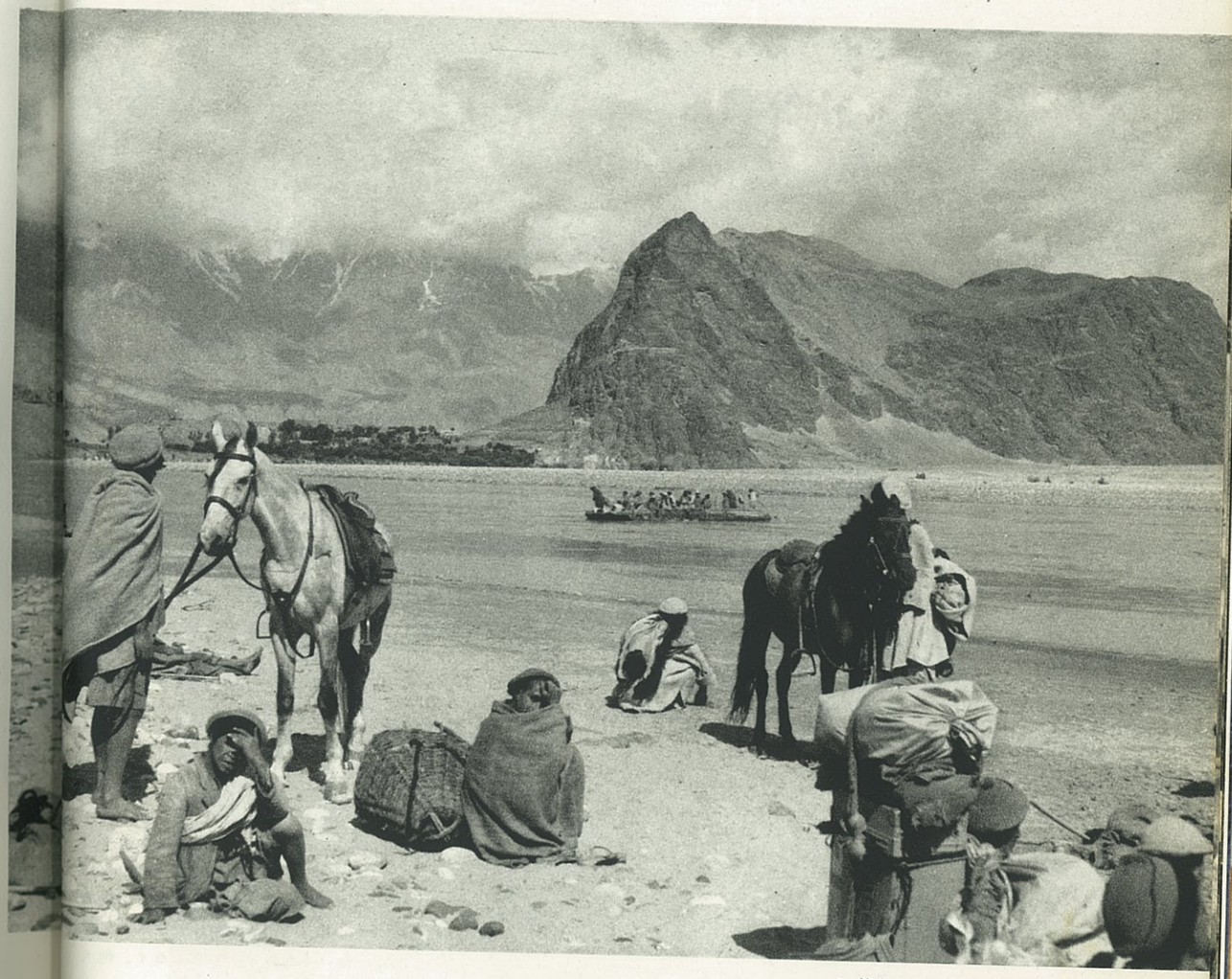
ポーターとクーリー

6 ポーターに装備を支給する



10 インダス右岸の高まきをくだると　シガールの村がみえる

キャラバン開始



9 箱舟にのってインダス川をわたる

6月21日早朝、いよいよキャラバンは動きはじめる。

巨大なインダスの本流は、太古のままの箱舟でわたる。流れは急で、水はどろ色ににごっている。土地の連中にいわせれば、これでも〝きれいな、よい水〟だそうだ。

152 人のクーリーは、1列になって、砂漠のような河原をゆく。乾燥しきって、砂と石のほかはなにもない。

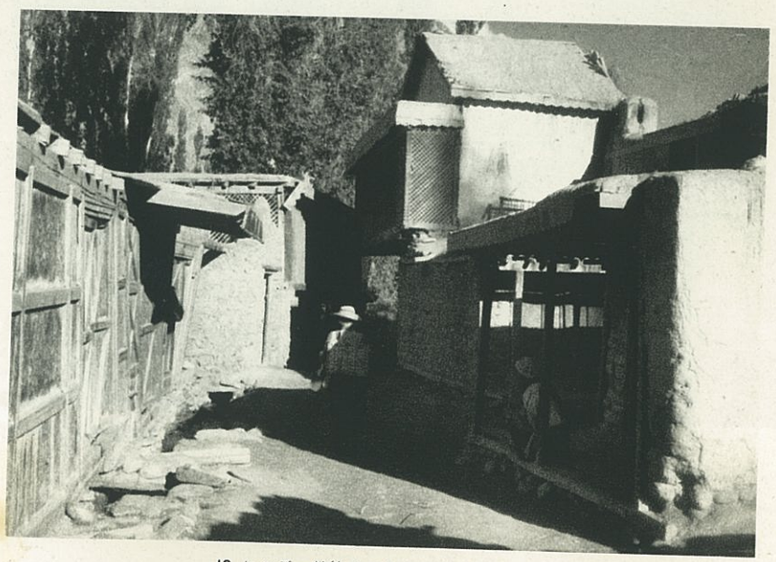
ポプラ、ヤナギ、クワの緑につつまれた美しい村だ。ここにもポロ・グラウンドがある。その芝地で、キャラバン1日目の夜を迎える。翌朝はやく出発して村道をゆくと、スコロ峠やコゼル・グンジュが白雪にかがやく。以前、ヒンズー教徒が経営していたというバザール（市場）は、今はすっかりさびれていた。

クワの木には、枝もたわわに実がなっている。炎熱下のキャラバンに疲れた私たちは、その実をむさぼり食った。

13 いこい

11 シガールのオアシス　北にコゼル・グンジュ（6400メートル）がかがやく

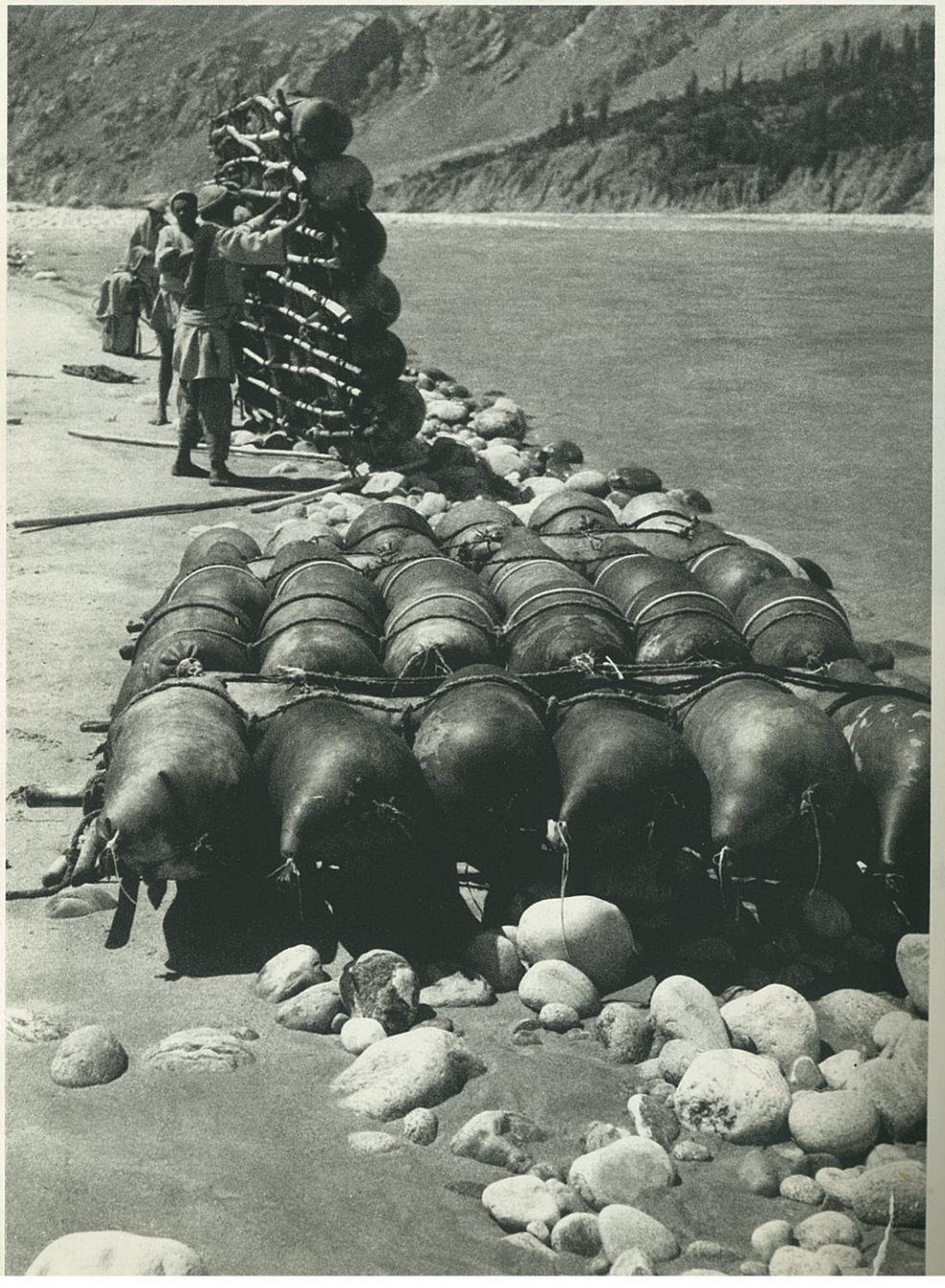
シガール

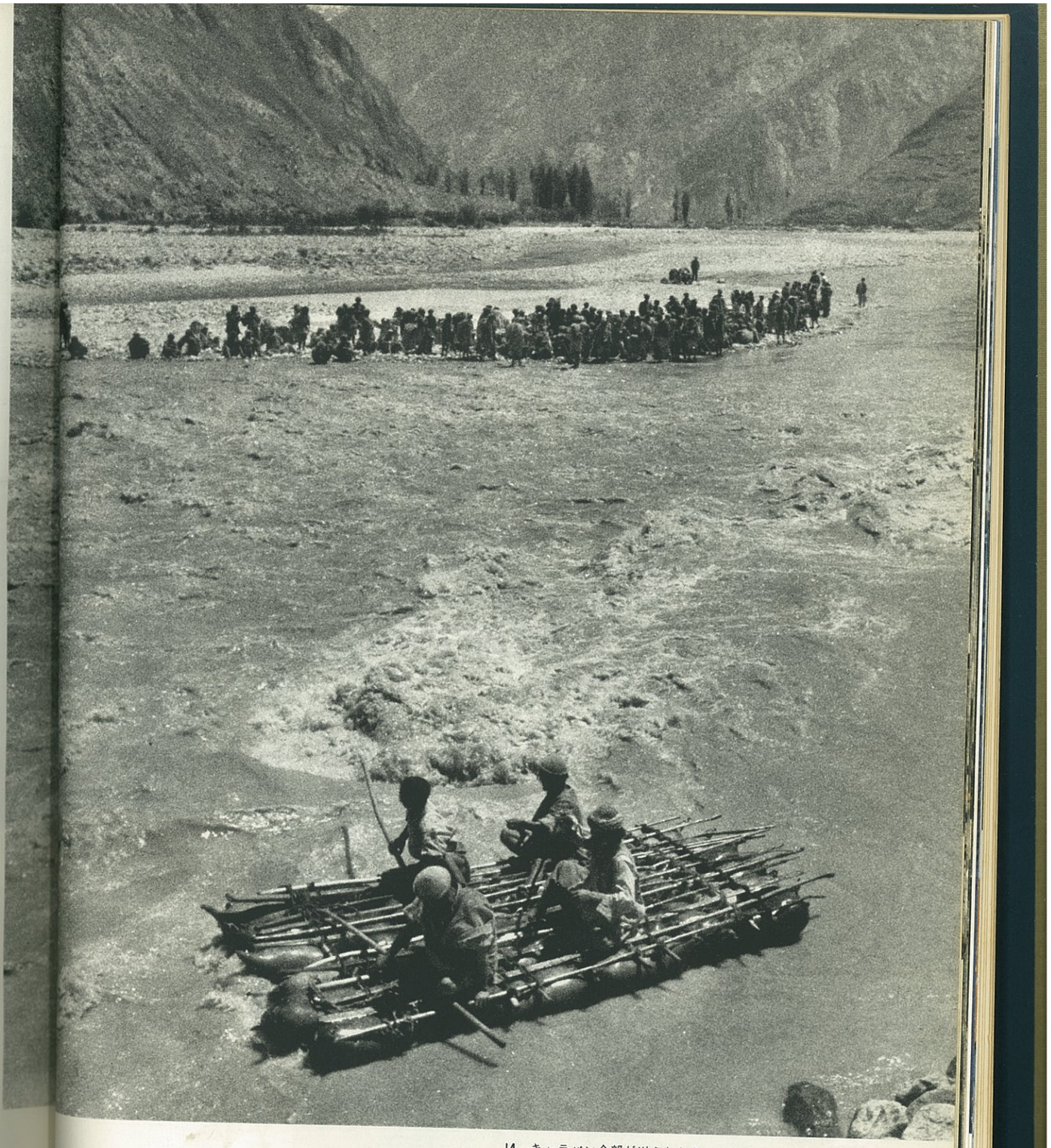


12 ヒンズー教徒のひきあげで　すっかりさびれてしまったバザール

シガール川からプラルド谷に入るとすぐ川をわたる。この地方独特の、ヒツジの皮で作ったザークというイカダを使った。空気を入れた皮袋を2、30つなぎ、ポプラの木のわくにはめてある。原始的なものだが、あんがい安定はよい。

ザークひとつに船頭4人。棒を使って激流をこす。乗客も4人、荷物はせいぜい5つ。船頭は、岸に着くたびにタバコをねだる。"タバコがないと早いとこ仕事ができない"といってきかない。彼等もやはり、川渡しの雲助である。





14　キャラバン全部が川をわたりきるには　3時間半はかかる

ザ　ー　ク

15 ザーク　口で吹いてふくらませ　ひもでしばる

デュッソー、チャポ、チョンゴ、アスコーレと、ブラルド谷沿いにキャラバンは進む。

途中の民家は、石とどろで作った粗末なもので、天井はあってなきがごとし。雨はほとんど降らないから、これでけっこうなのだ。

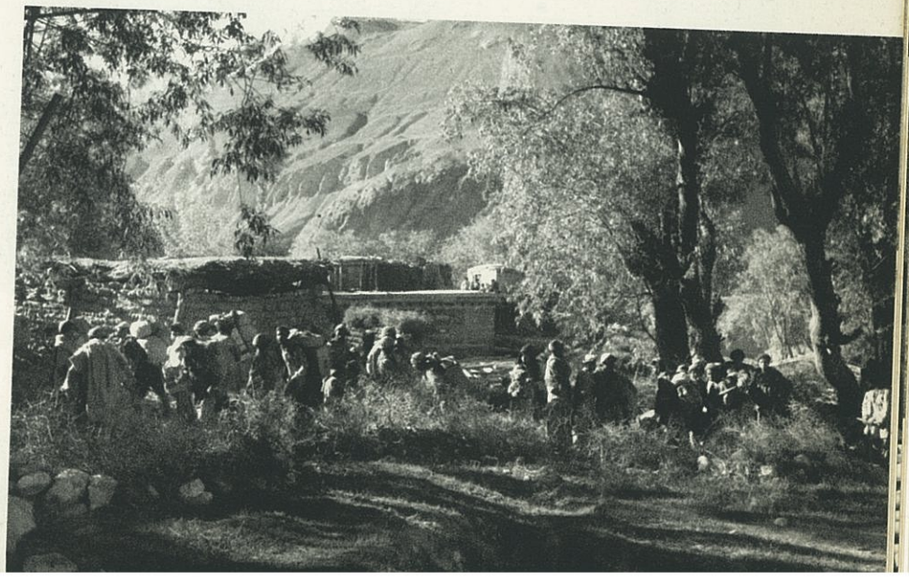
オアシスの畑のまわりに、ヒツジの侵入を防ぐため、トゲのあるグミやバラの枝でうまく垣根が作ってある。

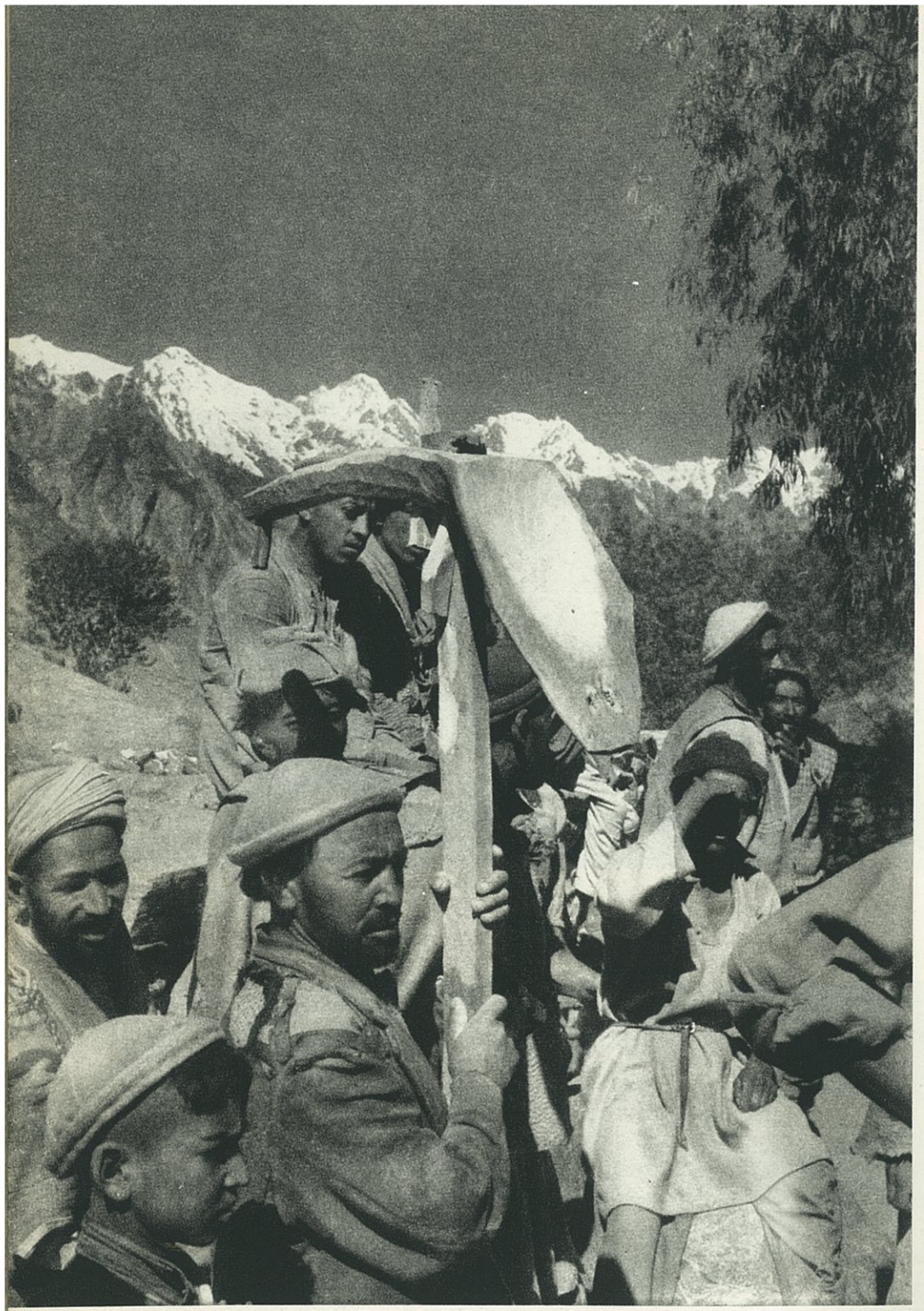
18 チャポ村の入口の橋

16 村の家

途中の村々

17 緑の村





21 バルチスタンの農民たち

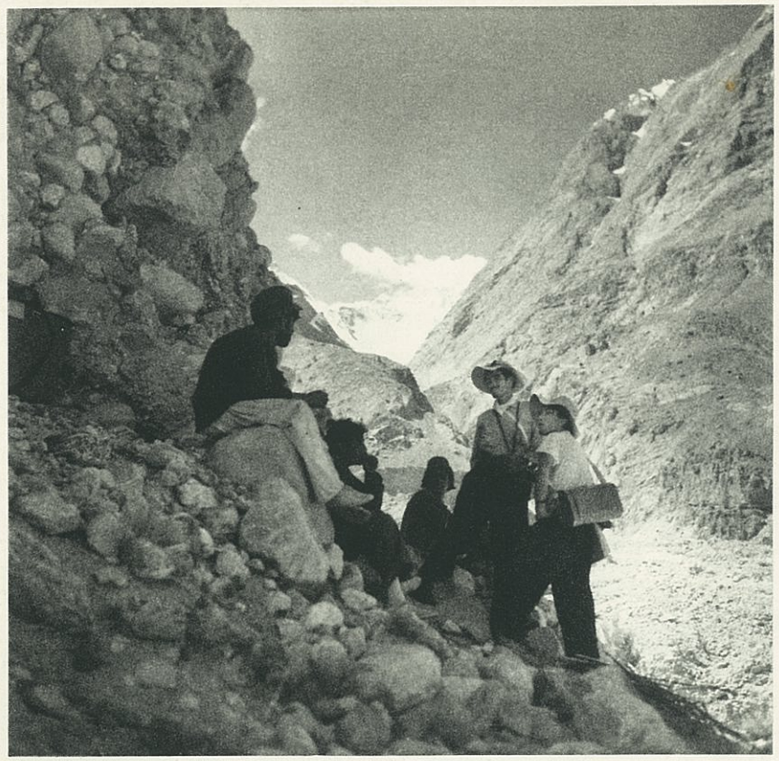
おやじは牛を使って耕作する。スキもクワも木製だ。こどもは男も女もりっぱな牧童で、1日中、ヒツジやヤギを草から草へ追っている。

着物はホーム・スパンの毛織物だが、わんぱく坊主たちの服はひどいつぎはぎ。着物といえるようなしろものではない。

バルチスタンのひとびと

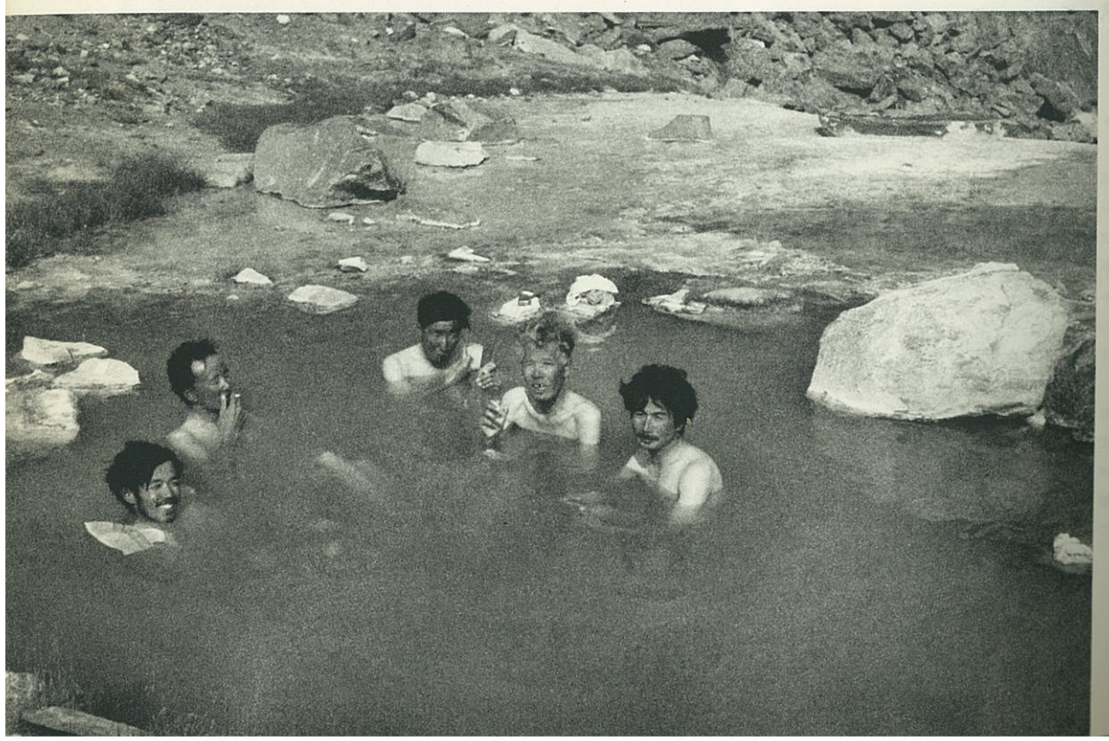
19 女の子が姿を見せることは少ない

20 わんぱく坊主たち



23 ポーターたちともしたしくなった

22 朝めしが待ちどおしい



24 チョンゴの温泉

行　進

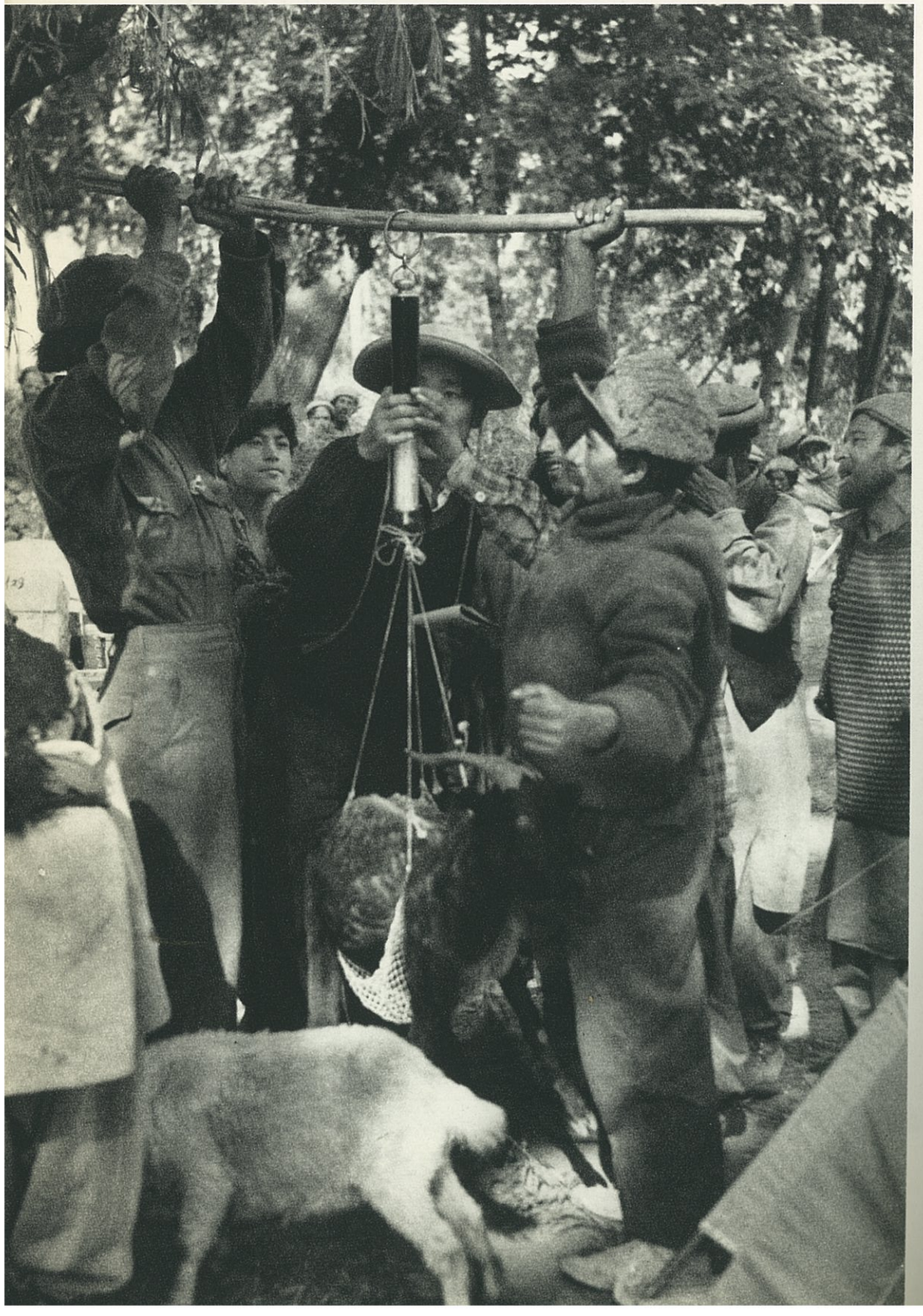
毎朝、起床は５時。紅茶１ぱいですぐ出発だ。朝食が待ちどおしい。朝食は８時の大休止のときにとることになっているが、準備がなかなかはかどらない。コックがスロー・モーションなのだ。みんなしぶい顔。

植物採集、昆虫採集、水温測定などと、隊員はそれぞれのペースで歩く。

途中の休息には、ポーター相手にウルドゥ語のけいこだ。日が経つにつれて、自称ウルドゥ語のエクスパートがふえ、うるさいことだ。

チョンゴの温泉は、久しぶりの入浴とて、勢いこんで飛びこんだが、35度のぬるま湯。これでは、風でも吹けば、寒くてでられないことになる。でも湯上がりの気分は爽快だった。

27 ヤギの買いつけ　ヤギは歩く食糧だ



25 クーリーへ賃金を支払う

アスコーレ

チョンゴからゆるやかな扇状地を下ると麦畑だ。その真中にぽつんと小さな森にかこまれた部落がある。人間の住む最後の村、アスコーレだ。ものめずらしげに、こどもたちが飛びだしてくる。

スカルドから連れてきたクーリーの大半はここから帰るので、さっそく、給料を払う。自分の名前を呼ばれてもぽかんとしている。ひとりひとりならばせて金を払うのがたいへんだ。

翌日は食糧の買いつけで１日滞在。アタ(粗製小麦粉)、ギー(ヒツジのバター)、ニワトリ、タマゴ、ヤギなど。すでにアメリカ隊やイタリア隊が買い荒したあとなので、買いつけは容易ではなかった。

26 ポーターのブロッコ・フセインはアスコーレの出身だ　こどもが飛びだしてきてしがみつく　よきパパのうれしそうな顔

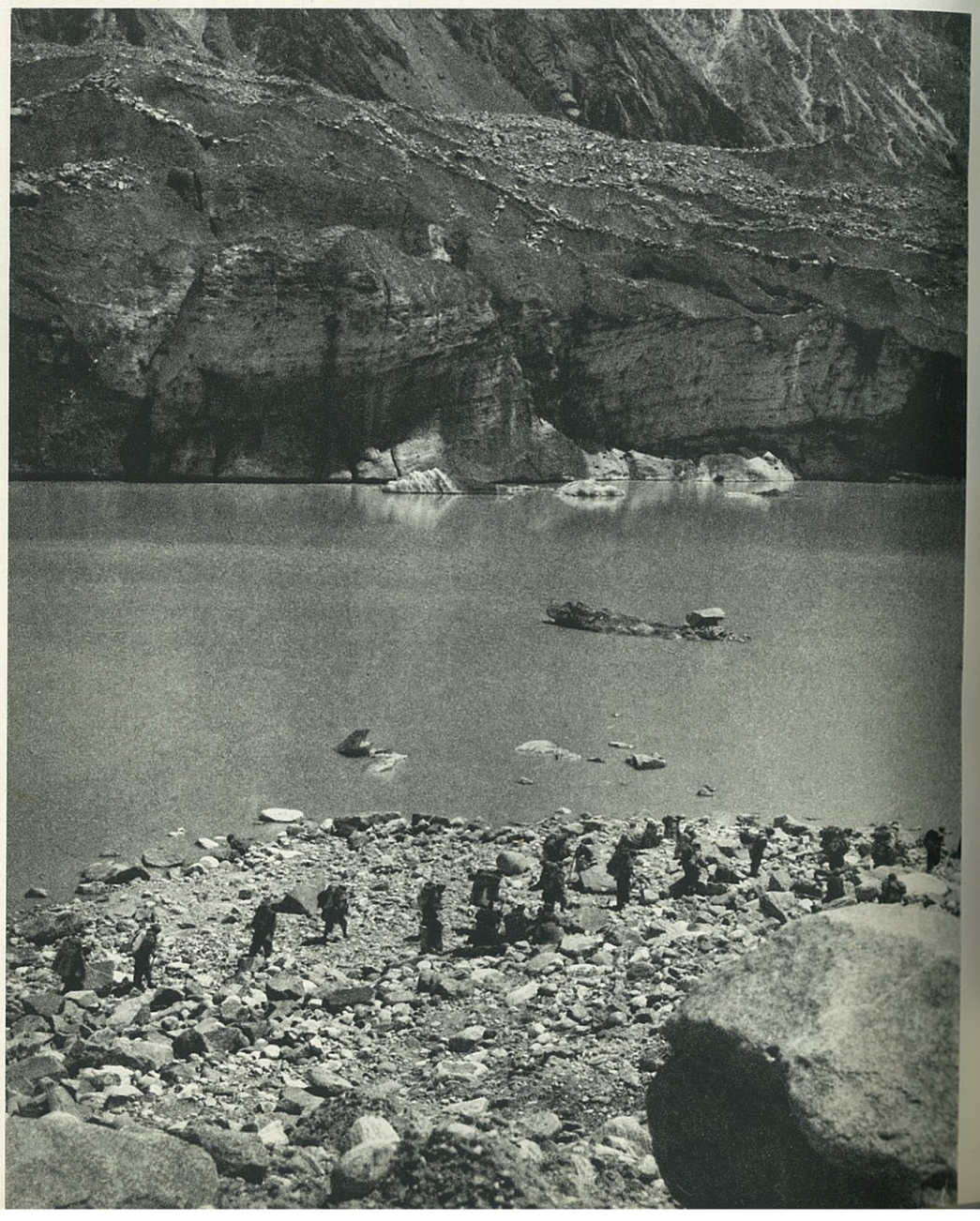
氷河へ

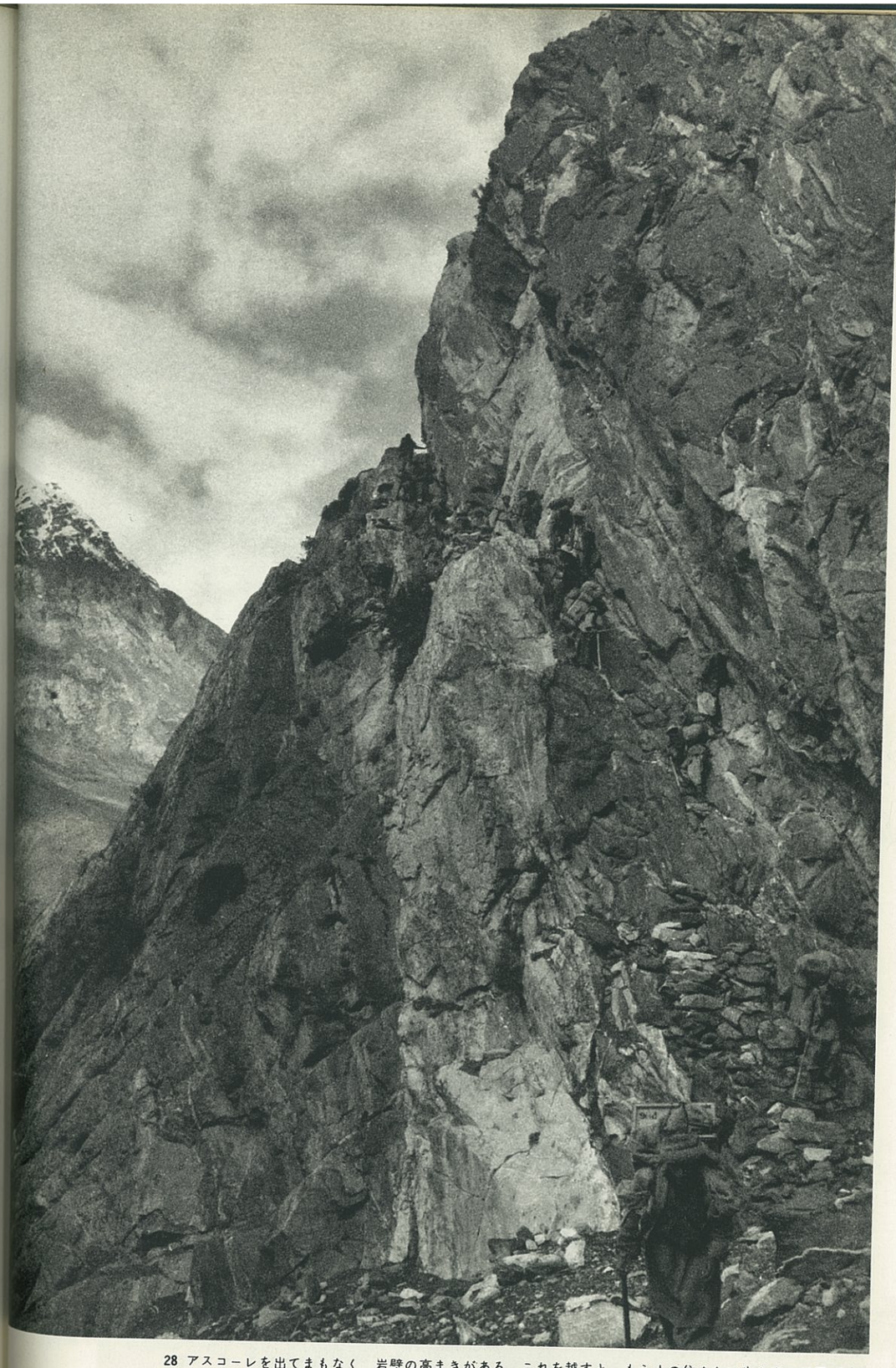
6月28日。アスコーレ出発。いよいよ氷河に近づく。部落を出はずれたところで、クーリーたちは大声でアッラーの神に祈りをささげた。これからの危険な氷河の旅の無事を願ってのことだろうか。お祈りがおわると、とたんに団体交渉だ。あすはバクリイード（ヒツジの正月）だからヒツジをよこせという。名にしおうカラコラムのクーリーのストライキ第1号である。

やがてビアフォ氷河の末端に着く。氷河はどす黒いモレーン（堆石）におおわれているが、断面には氷が光る。

出発して5時間でコロフォンに着いた。石がこいがあるだけだ。

きょうはデュモルド谷を越すつもりだったが、クーリーがもうこれ以上は進もうとしない。どろ水しかないひどい泊り場だが、しかたがない。ここに泊る。





28 アスコーレを出てまもなく　岩壁の高まきがある　これを越すと　もう人の住まない氷と岩の世界である

ビアフォ氷河の末端　若い隊員たちはここではじめて氷河というものをみた

31 デュモルド谷のつり橋

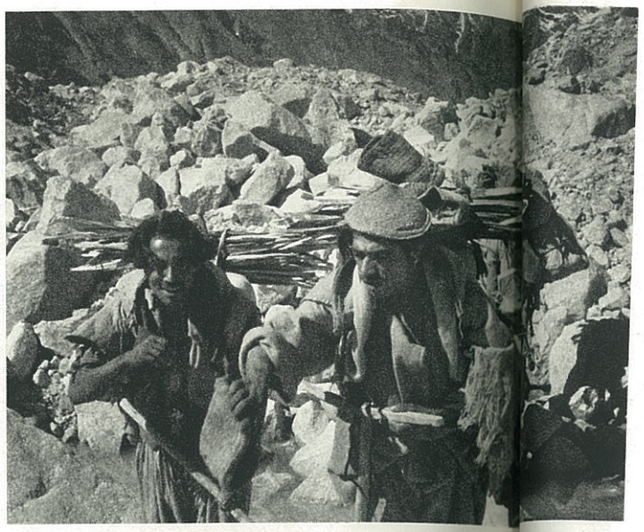
30 パイジュ手前のまがりかどをまわると　バルトロ氷河の末端がはじめてみえた

つ り 橋

デュモルド谷にはあぶないつり橋がある。ダケカンバの細枝で編んだ綱でできている。ところどころちぎれていて危いので、ロープで補強した。体重がかかると両方の手すりがからだをしめつけるので、クーリーを6、7人出し、からだでつっぱらせた。下はつめたい水の激流、落ちたらおしまいだ。

パイジュまでくると、バルトロ氷河の末端がみえる。どす黒い段丘のようだ。

35 ねどこ



33 まきはこび

36 治療

34 炊事

パイジュを出ると、すぐ氷河の上に登る。たきぎはこのあとウルドカスまでない。クーリーたちはパイジュでうんとこさ集めてかついできた。モレーンの登り降りの連続に疲れるのか、15分もゆくとすわりこんで一服だ。バルトロ街道の宿場はきまっている。彼等にとって、なにも急ぐわけはないのだから。

宿場に着くと、おもいおもいのグループで場所をきめ、ふしどをつくる。石をたいらにし、側壁をつくる。

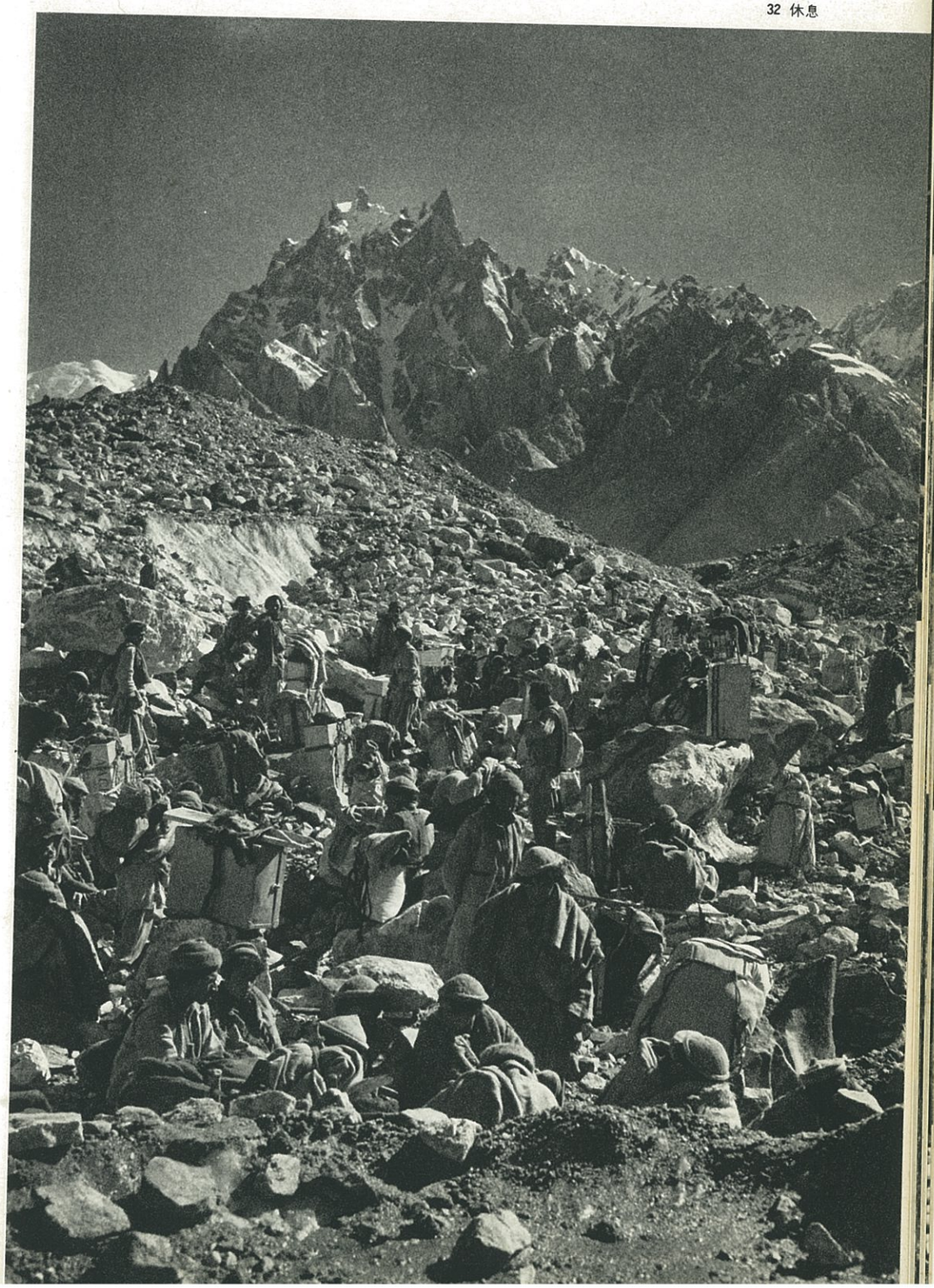
食糧の配給がはじまると、アタが少ない。ギーが少ない。塩、砂糖、茶をもっとよこせと、彼等の要求にはきりがない。

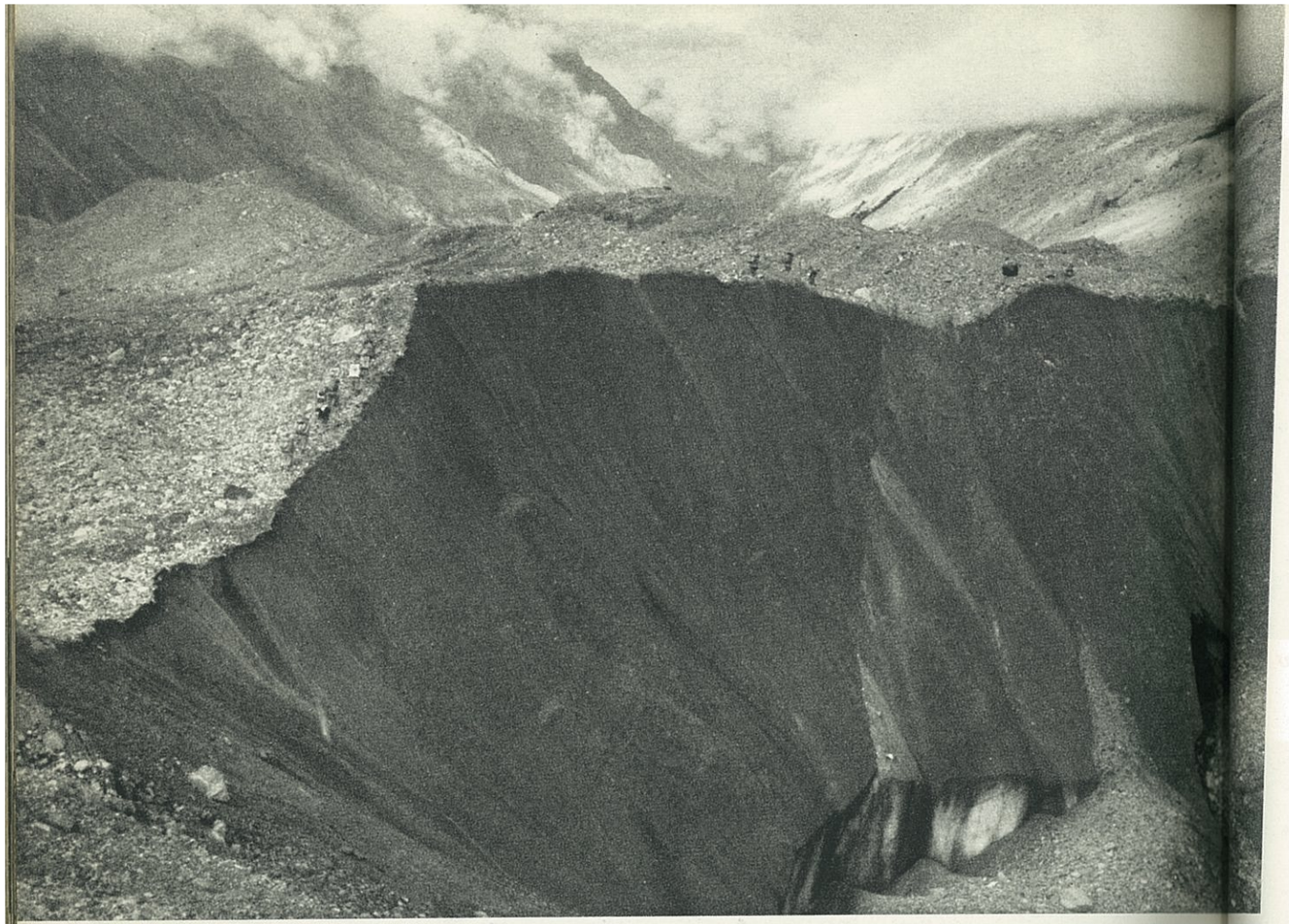
夕食をすますと、着物をぬいで下に敷き、はだかになって、お互にからだをくっつけ合い、上から毛布をかぶって寝る。

メッカに向ってのお祈りは、1日5回、これは行進中も欠かさない。

クーリーの生活

32 休息





39 氷河の断面

40 テーブル・ストーン

7月1日。あこがれのバルトロ氷河にとりつく。表面はすっかりモレーンでおおわれている。その上の登り降りをくりかえし、氷河を横断し、左岸のリリゴの泊り場に着いた。

バルトロ氷河

37 氷河の末端のわきをのぼる

38 リリゴの泊り場

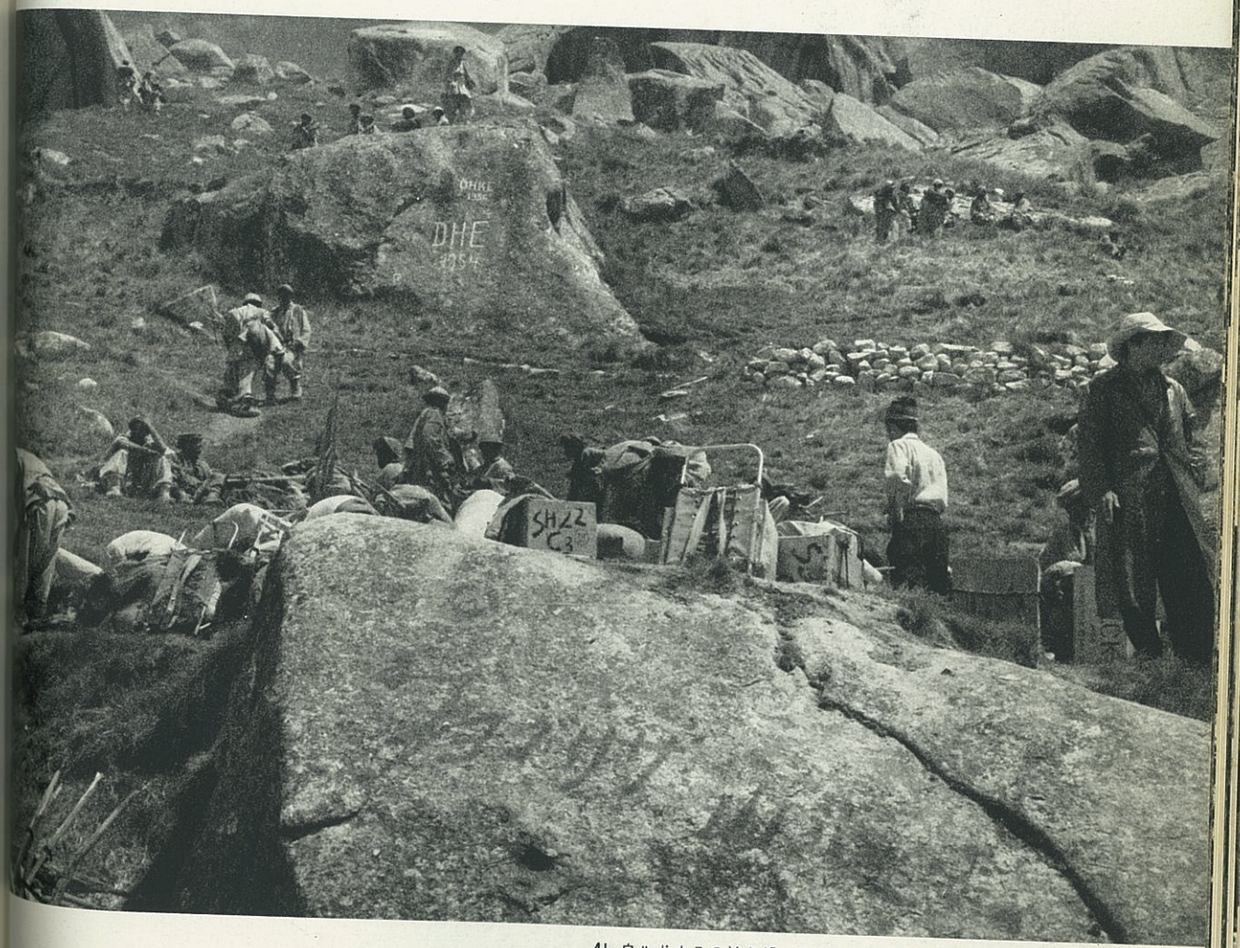
ウルドカス

ウルドカスは、バルトロ随一の宿場だ。

モレーン上の行進に疲れたころ、左岸に目のさめるような緑の斜面がみえる。標高4025メートル。古い紀行文に書かれているヤナギはほとんどなくなったが、清流がほとばしるわきにサクラソウが咲いている。

岩には、各国登山隊の落書が残っている。赤ペンキで"チョゴリザ山道"と、たくみな日本字も書いてあった。イタリア隊のマライーニ君のしわざにちがいない。彼は日本にいたことがある。京大の講師だった。

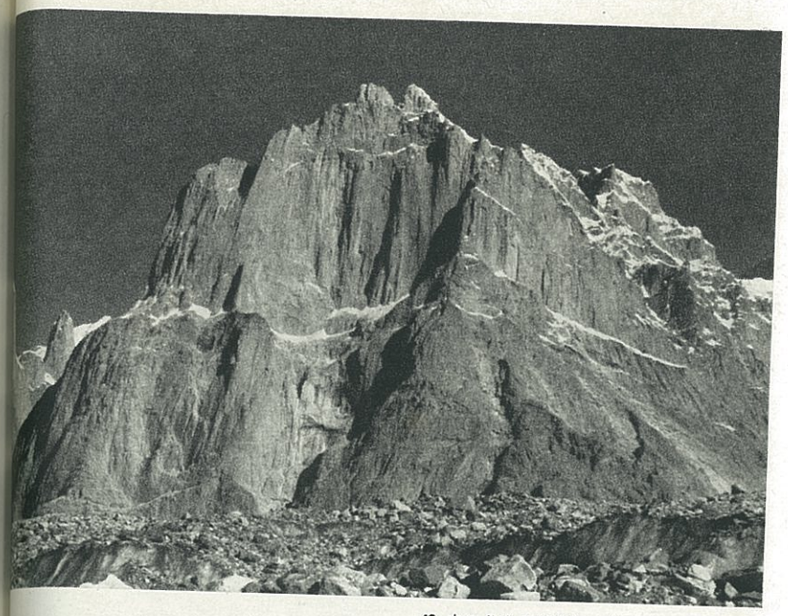
クーリーにチャパティ（アタでつくるパン）を焼かせるため、1日滞在。



41 ウルドカスの泊り場　岩には各国登山隊の落書が残っている

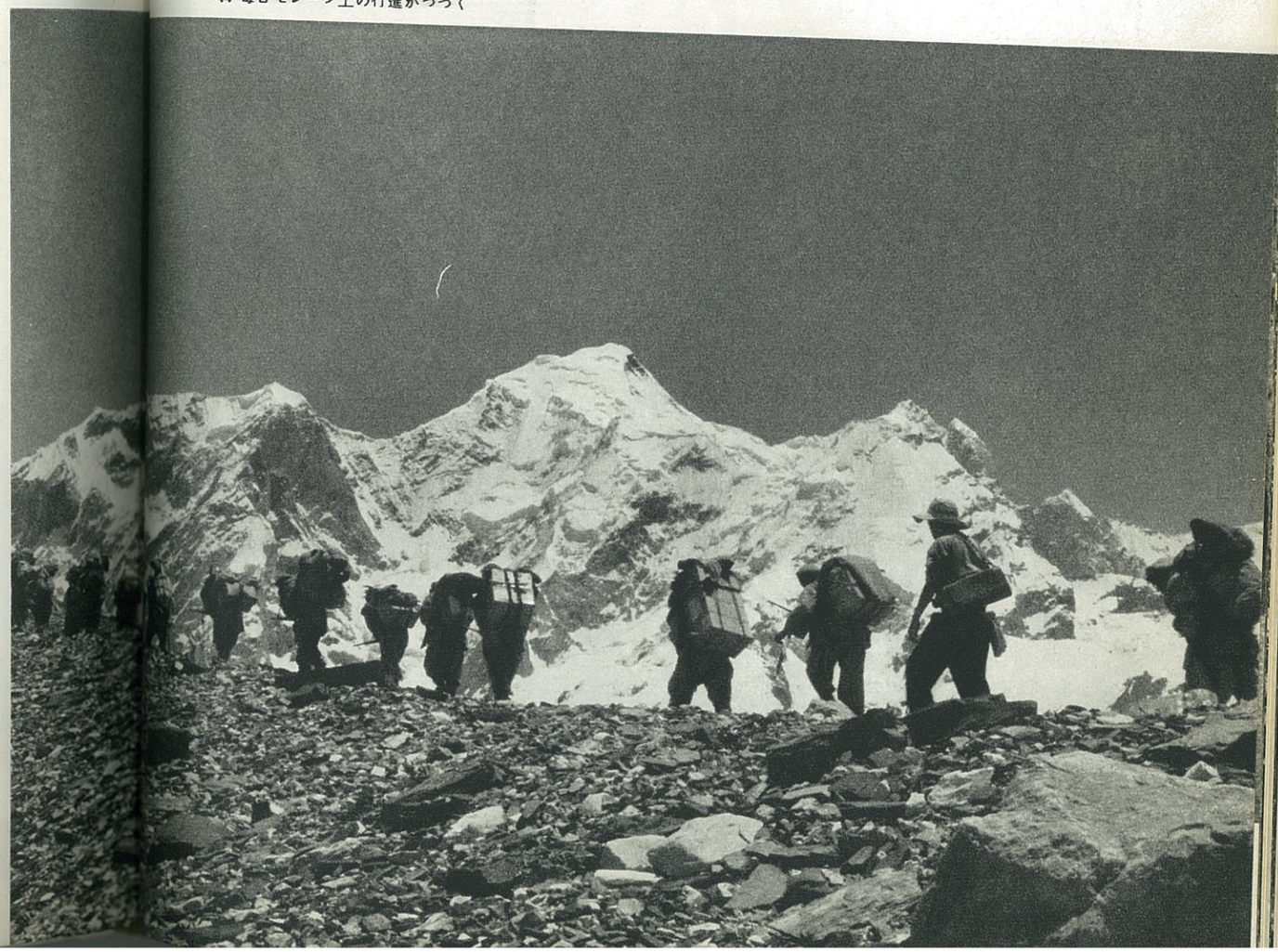
42 ウルドカスからバルトロ氷河をみおろす

セラックをぬって



43 ウルドカスの真向いはトランゴの岩峰だ

44 毎日モレーン上の行進がつづく



氷河とは名ばかり、毎日モレーン上の石ころ道の行進だ。ウルドカスをすぎると、どす黒いモレーンをつき破って、純白のセラック（氷塔）がにょきにょきあらわれはじめた。小山のように大きいのもある。クーリーをやりすごしておいて、ステップ・カッティングの練習に興じたりした。

午後になると、氷河の表面がとけて、小さな流れになる。アフターヌーン・フラッドだ。これをわたるのに、ときどきやっかいな思いをする。

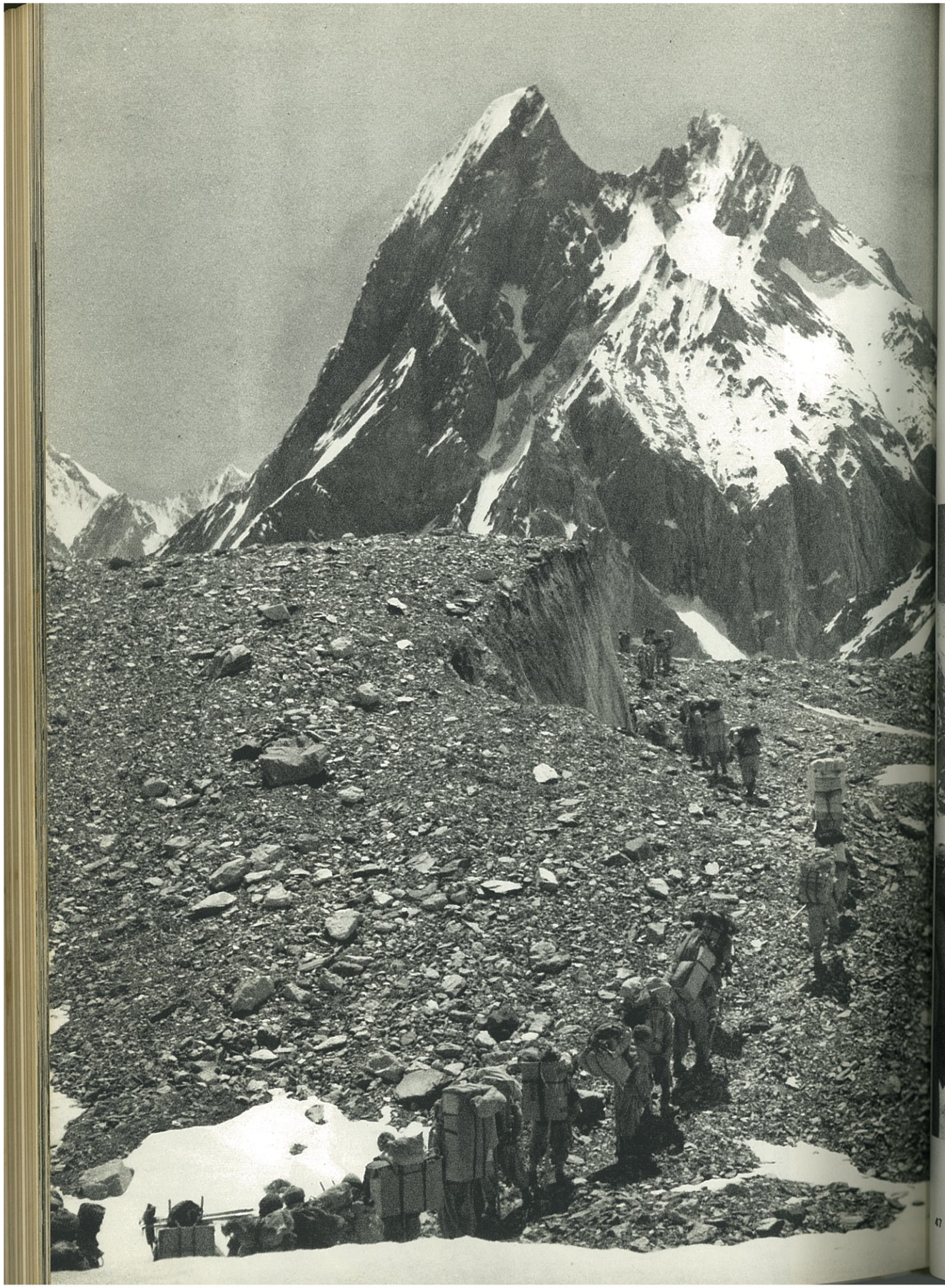
45 セラックの間をぬって

マッシャーブルムとミートル

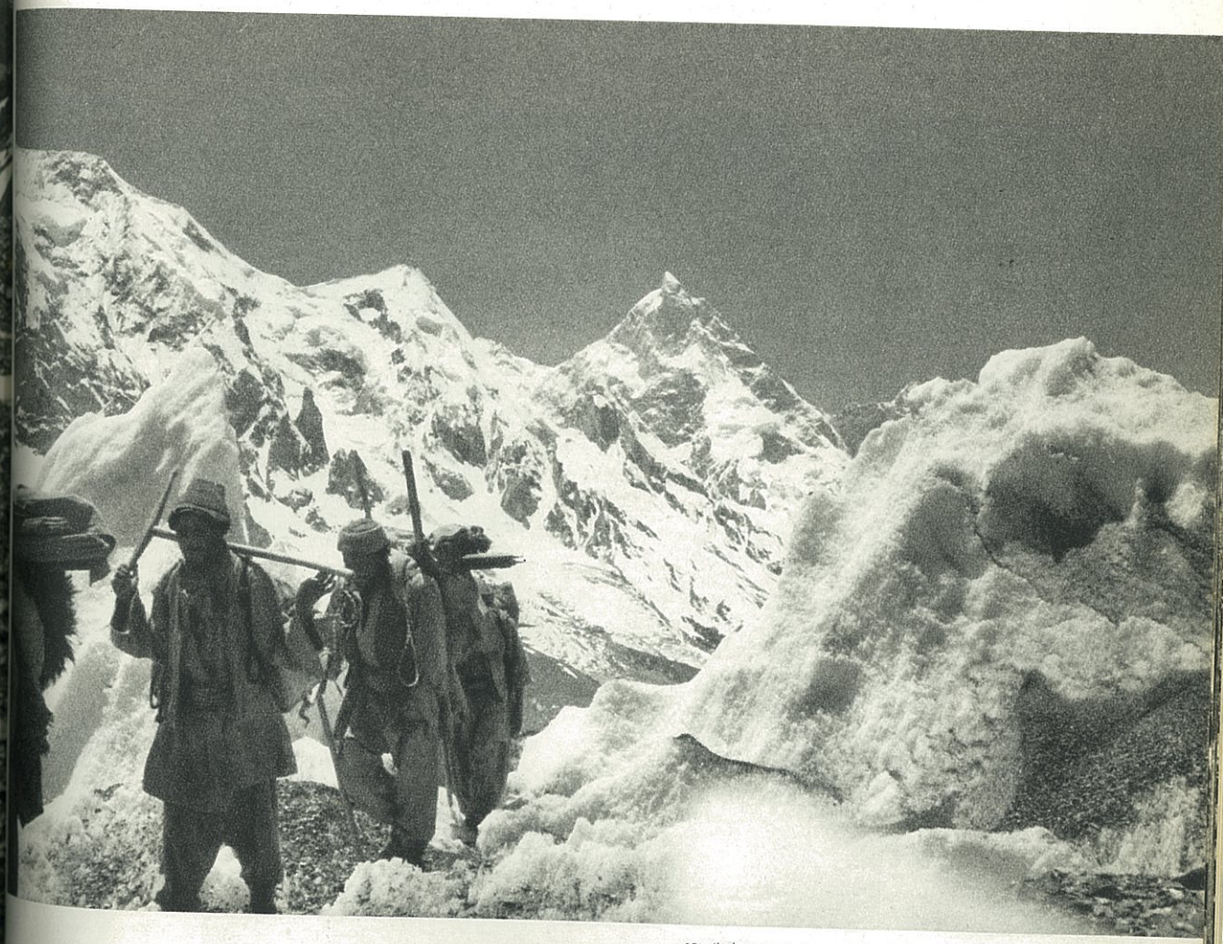
いよいよバルトロの核心部に近づいた。巨峰、名山があらわれはじめる。

ウルドカスを出て、尾根をひとつ回りこむと、突如として右手に秀れいそのもののような山峰が目をうつ。マッシャーブルムだ。この処女峰に攀じる幸運はだれのものか。

ミートルとは、カトリックの司教の冠のことだそうだ。これはまっ黒にそびえている。直立していて、雪もひっかからないのだ。だれかが、あれくらいの岩なら登れる、とりきんでみせた。



47 ミートル（6010メートル）の北面



46 北東からみたマッシャーブルム（7821メートル）

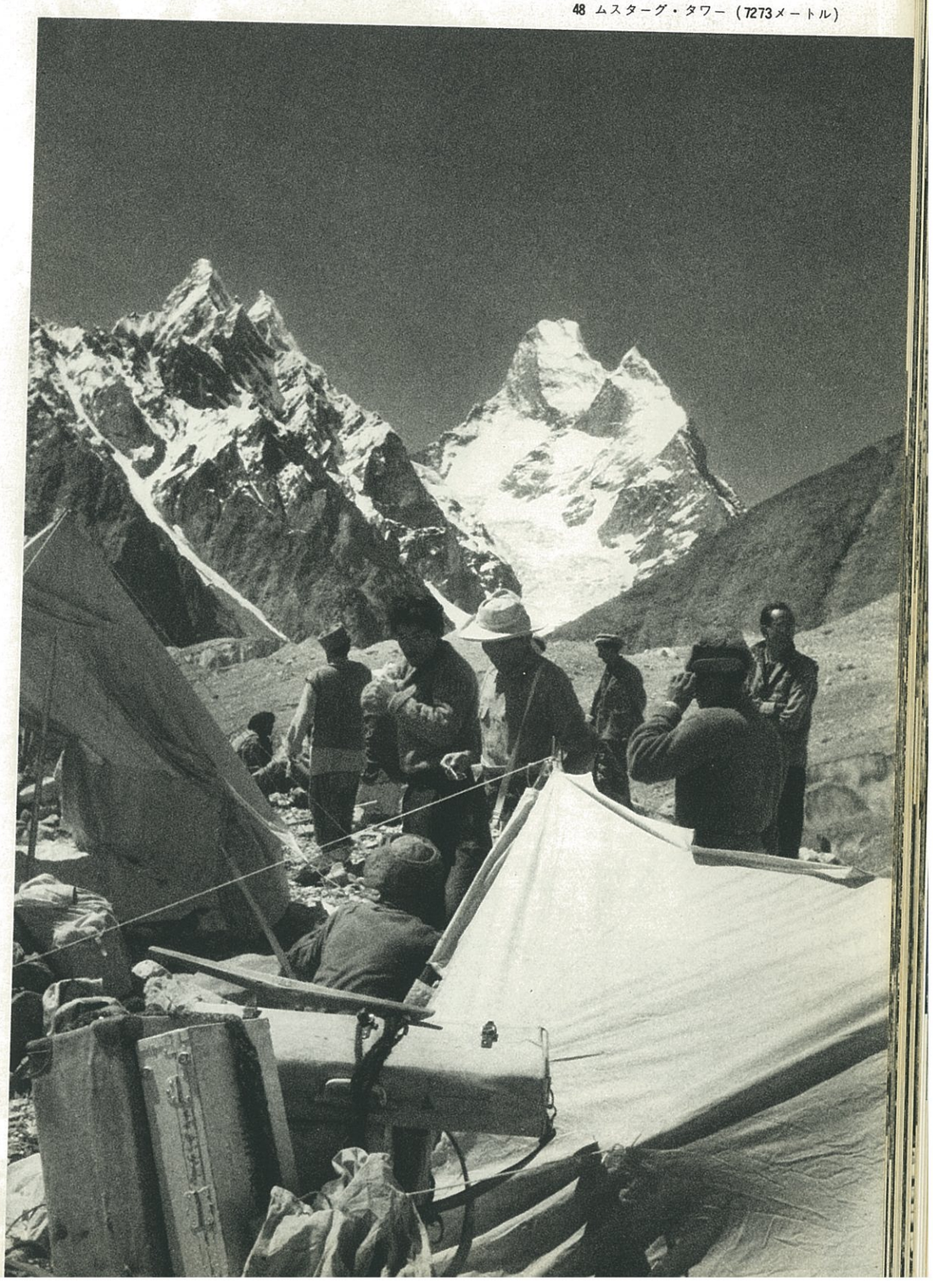
49 K₂（8611メートル）

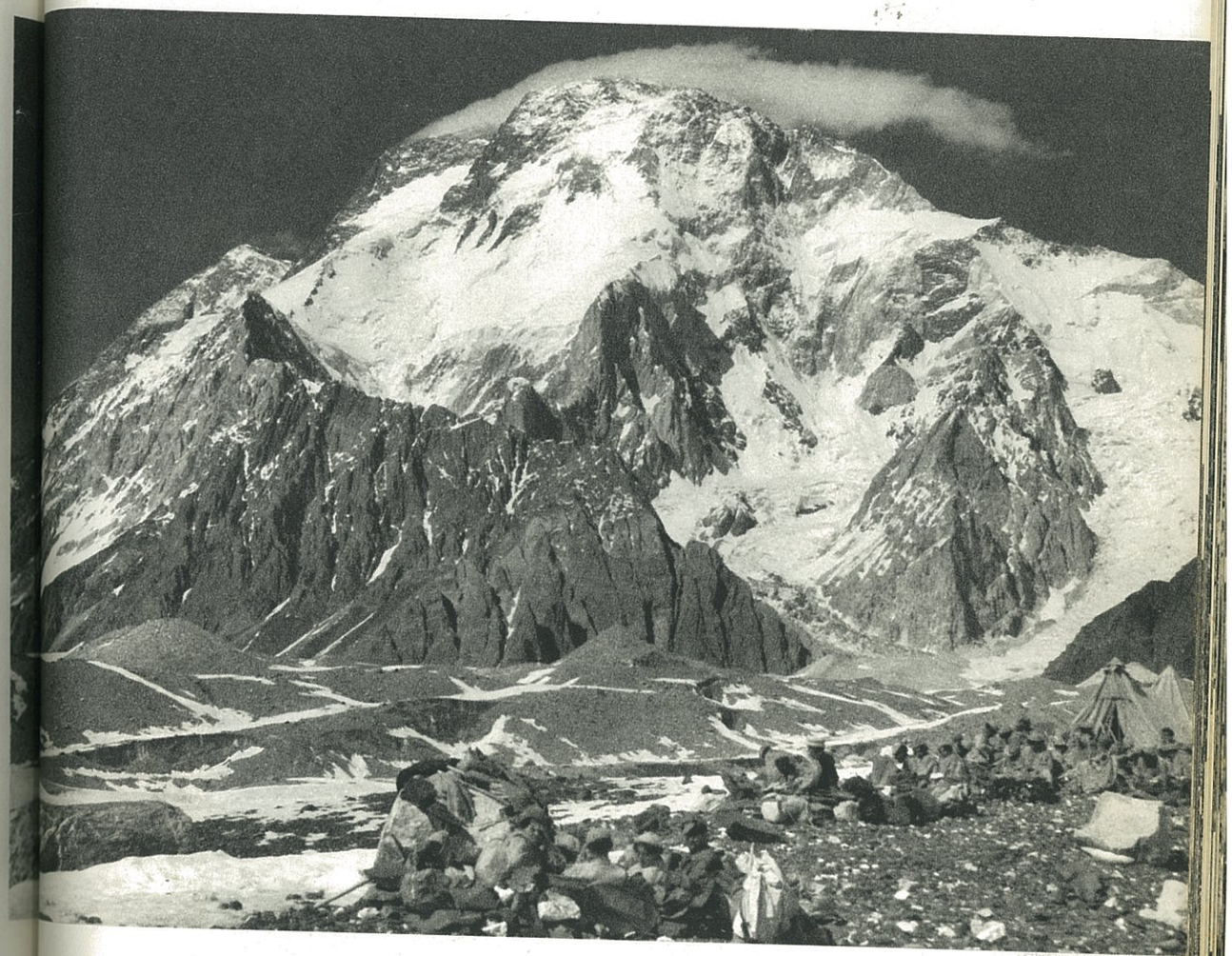
ムスターグ・タワーとK₂

ピアンジェの泊り場から、世にも奇怪な形のムスターグ・タワーがみえる。1956年、イギリスとフランスの2隊が、東と西から同時にこれにいどみ、イギリス隊が先に登頂した。

コンコルディアからみるK₂ の姿。巨大といっても、豪壮といってもいいたりない。あるのは世界第2の巨峰の威圧感のみ。クーリーたちが脱帽して"サラーム、K₂ サーブ。（K₂ さま、こんにちは）とつぶやいたのが印象的だった。

48 ムスターグ・タワー（7273メートル）





50 ブロード・ピーク（8047メートル）

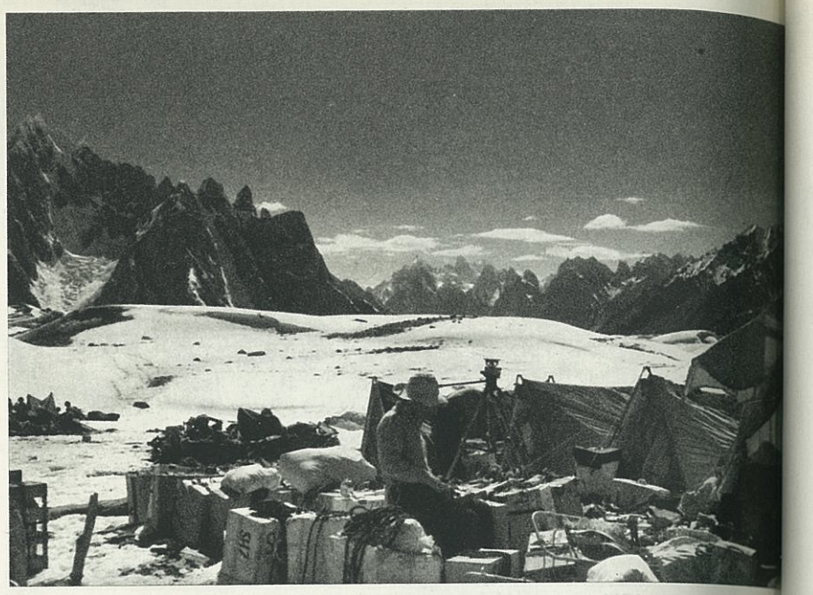
ブロードとガッシャーブルムⅣ

ブロード・ピークはK₂ のとなり、その東南にある。その名のように頂上は広くゆったりしてみえる。1957年にオーストリアのヘルマン・ブールらが、ラッシュ戦法で登頂した。ブールは、その余勢をかってチョゴリザにいどんで遭難した。

コンコルディアから少しゆくと、ガッシャーブルムⅣのかっ色の大塔がまっ近くだ。イタリア隊が2カ月の苦戦ののち、8月6日、ついに登頂に成功した。

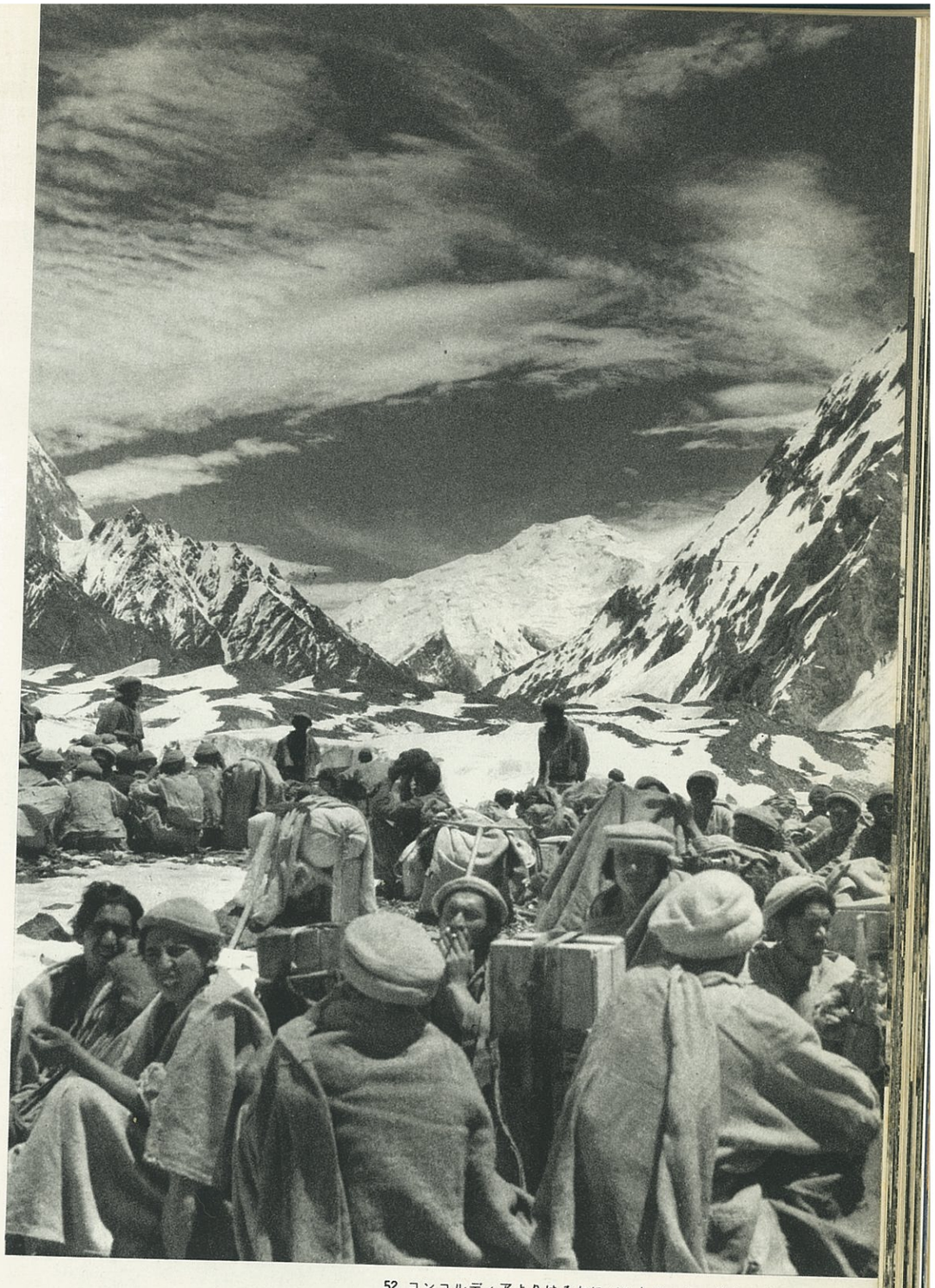
51 ガッシャーブルムⅣ（7980メートル）

バルトロ氷河源流へ



53 コンコルディア・キャンプ

54 バルトロ氷河の源流にむかう

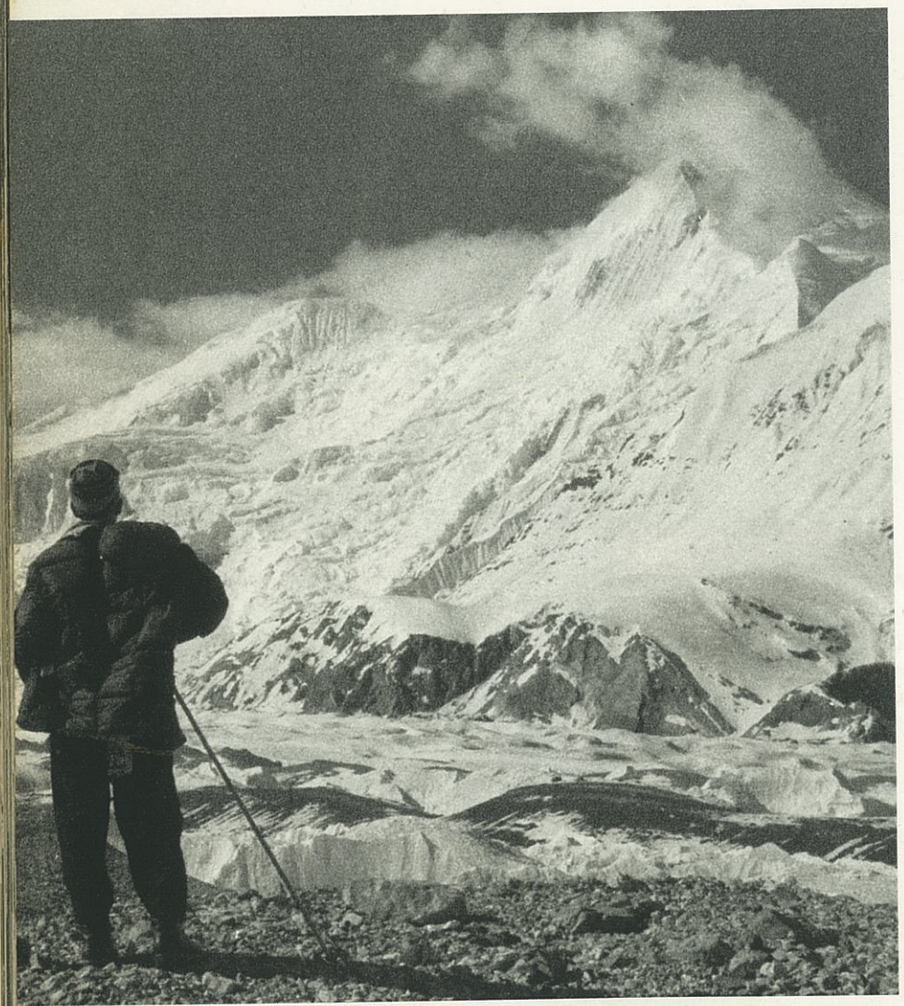


52 コンコルディアよりはるかにバルトロ・カンリをのぞむ

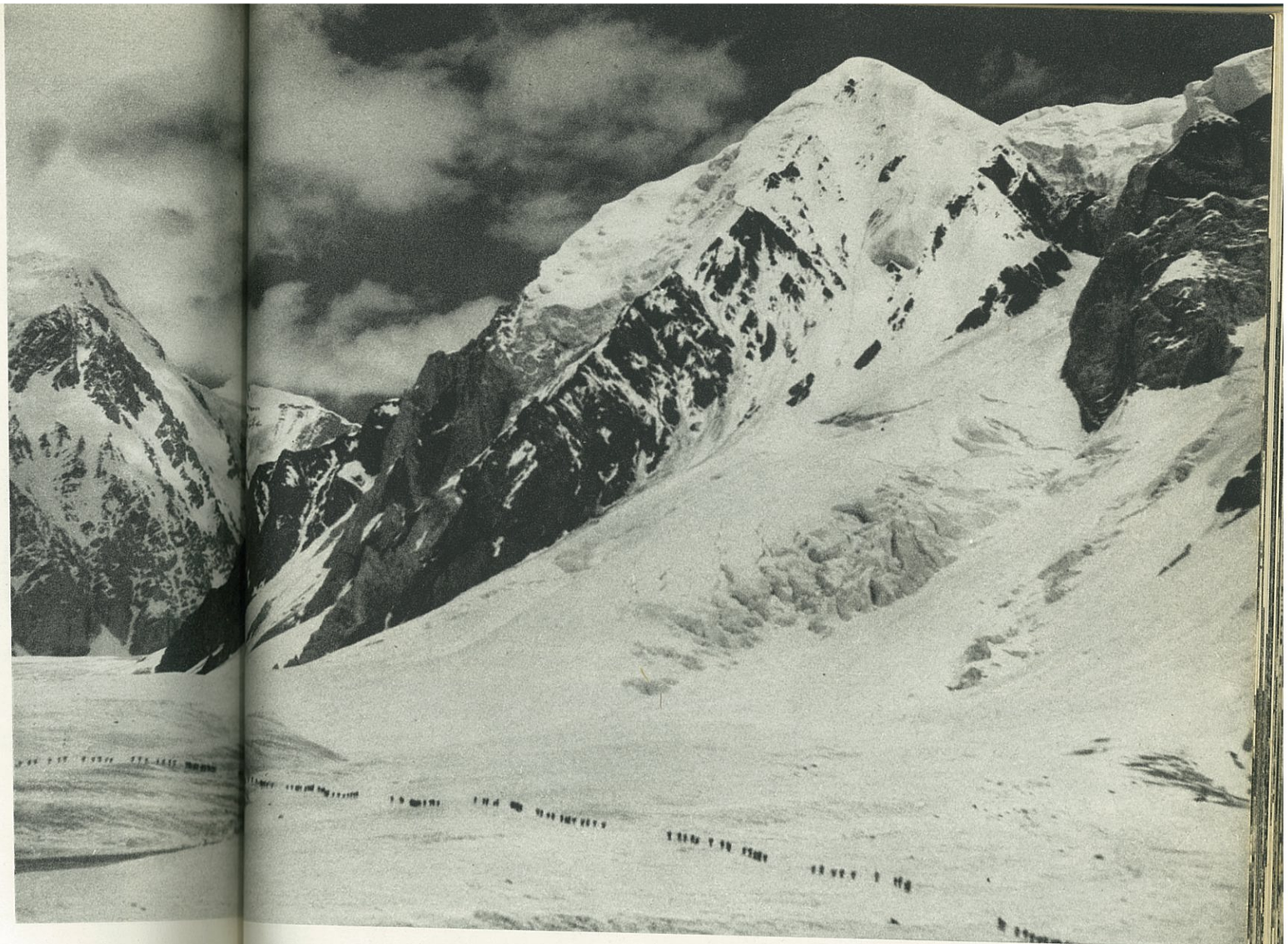
7月7日。今日からは、日本人にとっては未踏のルートだ。コンコルディアまでは1955年に今西隊が入り、くわしい地図をつくってくれてあったのだ。先発隊を出して慎重に進む。

このあたりから上は，氷河の上に残雪が多く、歩きにくい。チョゴリザはまだみえない。

キャラバンの行進おわる



56 チョゴリザがはじめてみえたが　雲のベールをはずそうとしない

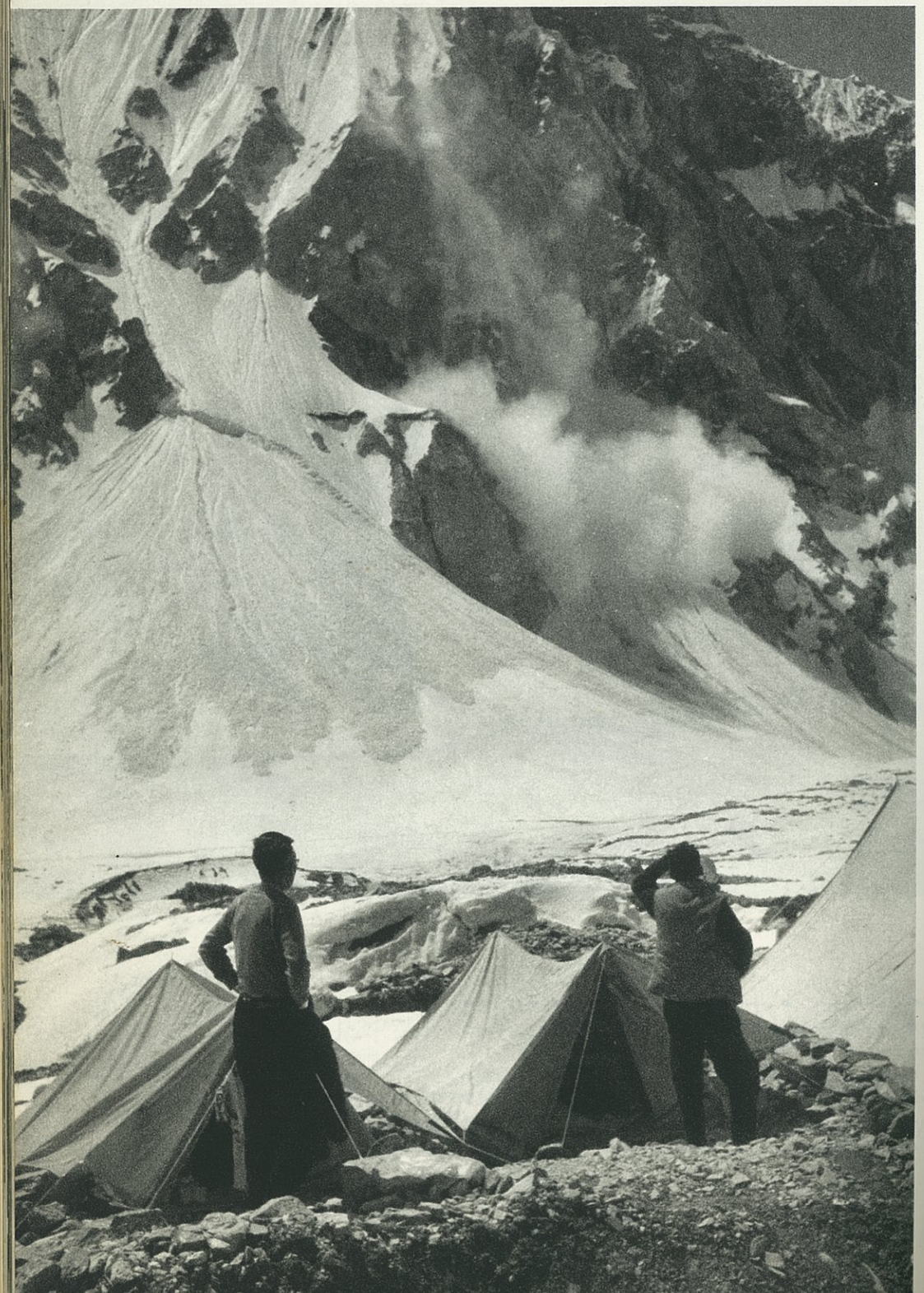


55 ベース・キャンプ予定地もまじかだ

7月8日。スカルドから18日にわたるキャラバンの行進も、きょうが最後だ。しかし、苦しい1日だった。氷河の上には、かくれたクレバスが無数にあり、雪がくさって、先発隊は腰までもぐってラッセルした。

クーリーはおびえて、ロープをくれという。あるだけのロープを出して、じゅずつなぎにする。それでも安心できないとみえて、大声でわめく。祈りが氷河にひびきわたる。

60 バルトロ・カンリの岩壁からはナダレがたえまなく落ちる



57 標高5000メートルのベース・キャンプ

58 集会所は食堂にもなった

59 ポーターたちはラジオでパキスタン音楽をたのしむ

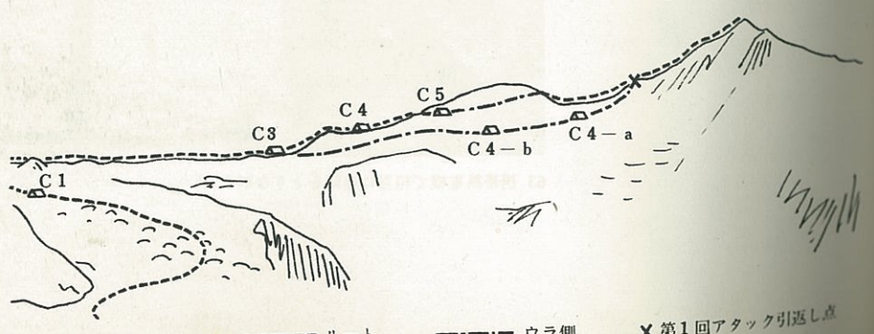
ベース・キャンプ

バルトロ・カンリの岩壁から出るモレーンの上に、私たちのベース・キャンプがはられた。テントは8個。

166人のクーリーたちに支払いをすませてかえすと、残るは総数25人。氷河上の静寂が、あらためて感じられる。

まじかにヒドン・ピーク、はるかにK₂、ムスターグ・タワー、それにミートルが青空にそびえる。世界中にこれほどぜいたくな眺めはなかろう。

61 ベース・キャンプからのチョゴリザ（7654メートル）



花嫁の峰

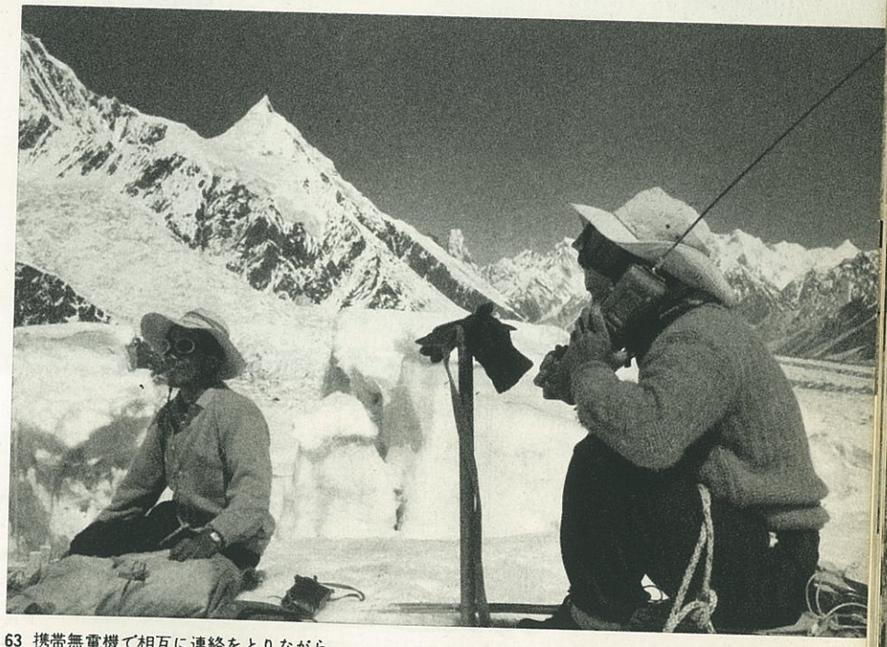
私たちがベース・キャンプの建設をおわるころ、花嫁の峰は快晴の空にはじめてベールをすてた。純白、清楚、いくらみてもみあきない。

だが私たちは、山を眺めにきたのではなかった。登るという目でみれば、美しい白は深い雪であり、かがやくアイス・フォールはクレバスのおとし穴だ。

ルートはどこにとるべきか、心ははやる。

62 偵察隊の出発準備

偵　察



63 携帯無電機で相互に連絡をとりながら

荷物の整理に１日滞在。７月10日からただちに行動開始。第一の難関、アイス・フォール突破のルートを求めて３隊の偵察を出す。

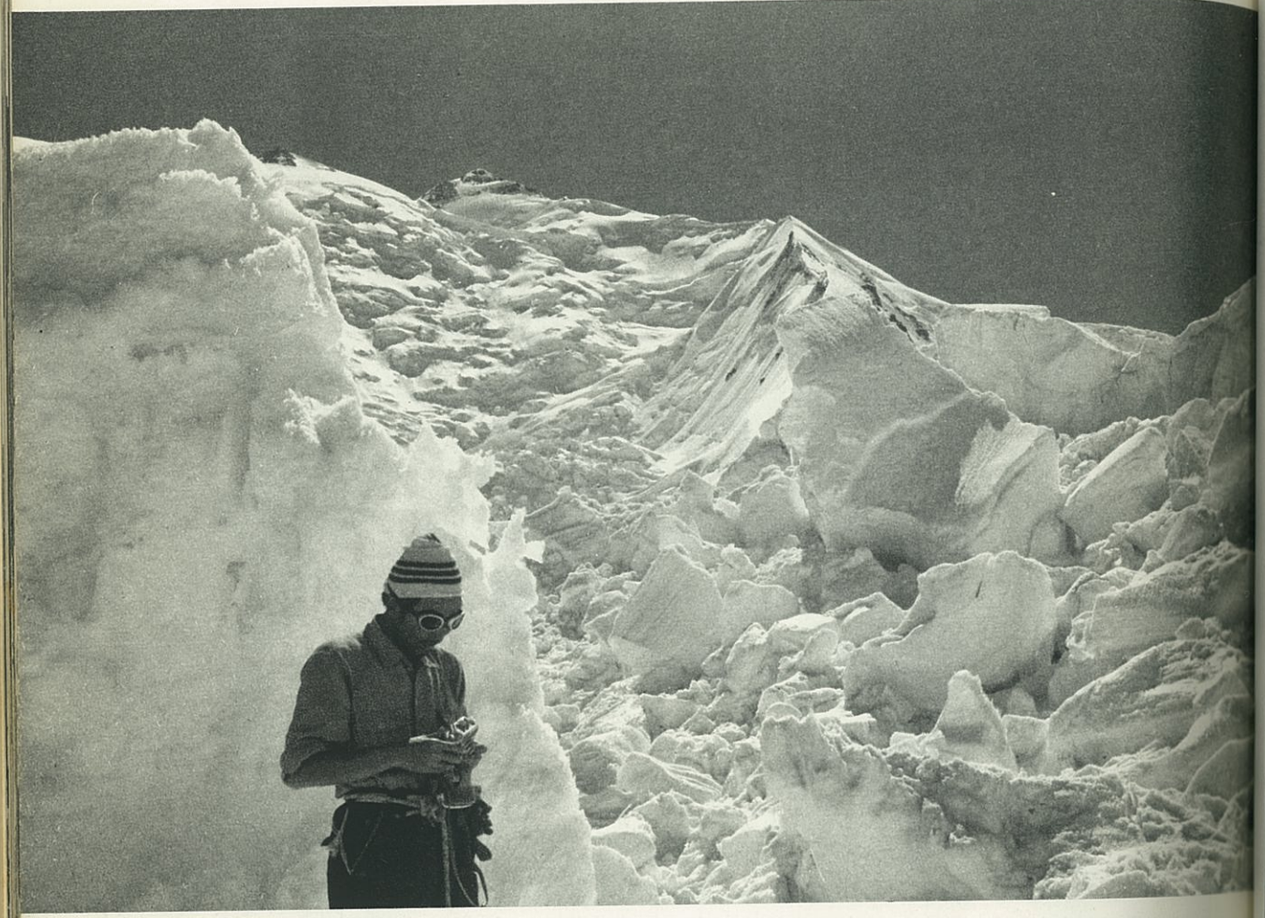
1909年のアブルッジ公による最初の攻撃のときも、この部分の通過に数日を費している。ここをいかにのり切るかが、成功への最初のキイ・ポイントである。

３隊は無電で連絡しつつ苦闘する。

64 アイス・フォールに迫る

登路みつかる

66 アイス・フォール　乱雑をきわめた氷塊の積みかさなり

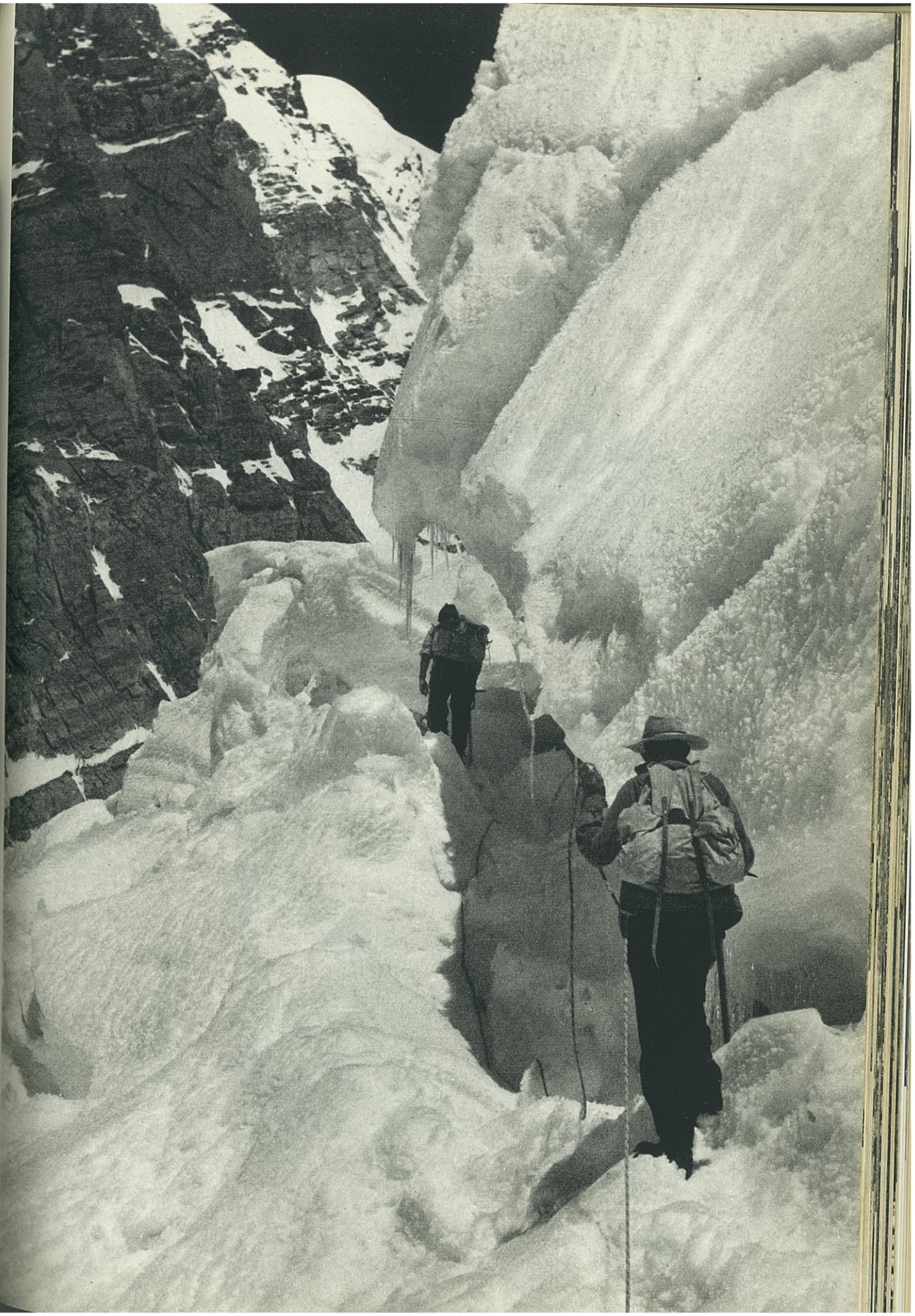


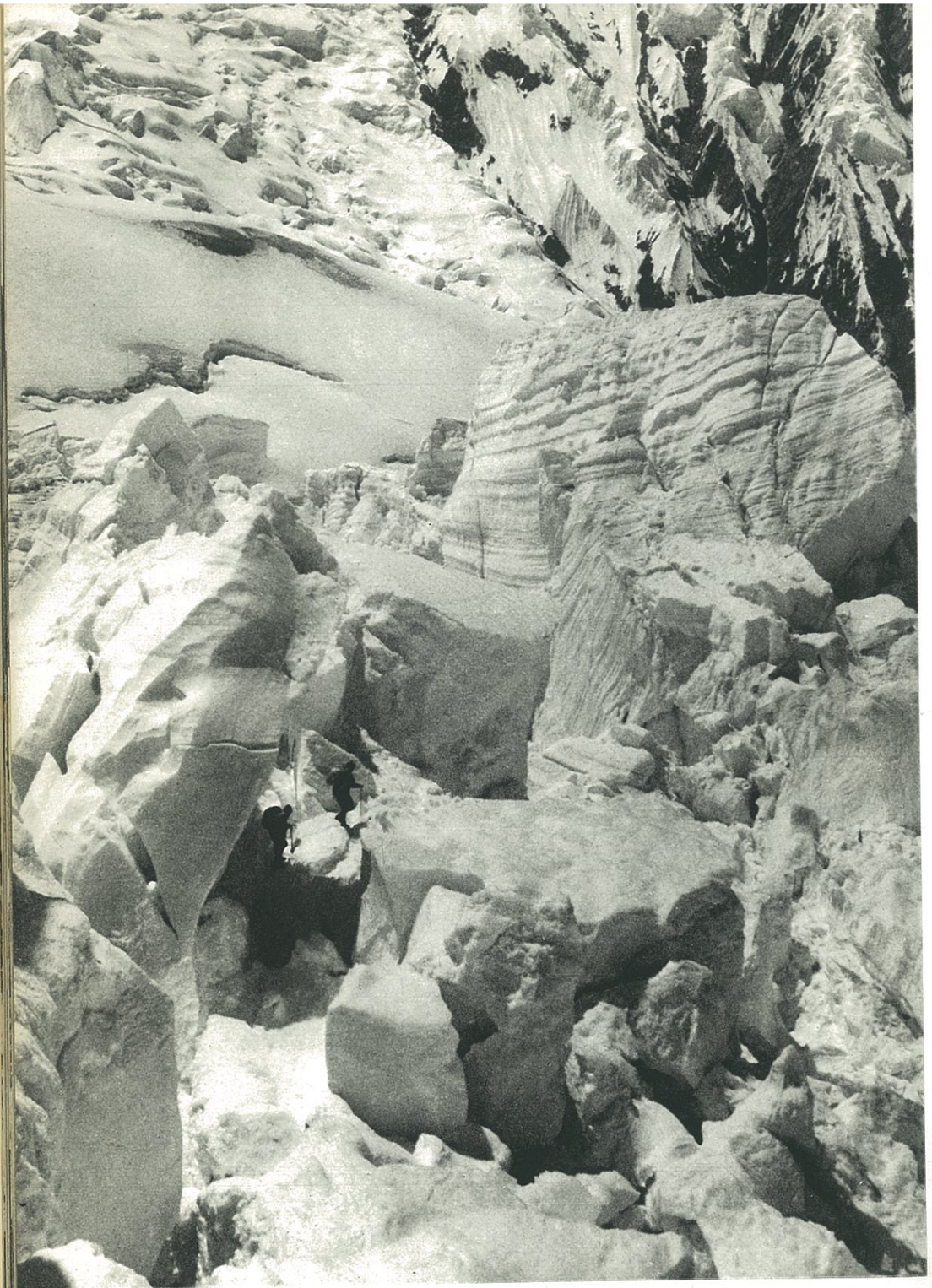
アイス・フォールは、高度差にしておよそ500メートル。上部雪原の雪と氷が、徐々にずり落ちる間に、裂け、砕けてできた無数の大きな氷のブロックからなっている。

そのなかに足を踏み入れると、乱立する巨大な氷塔、縦横に口を開いたクレバスが行手をさえぎる。右に左にルートを求めるが、登高は遅々としてはかどらない。

氷塔をぬい、クレバスを避けながら進む。まさに迷路だ。しかしアイス・フォールの右はしに沿って進んだ1隊が、ついにこれを突破するルートを見出した。

65 氷塊の下をくぐるときは　いまにもくずれ落ちそうな気がして緊張する





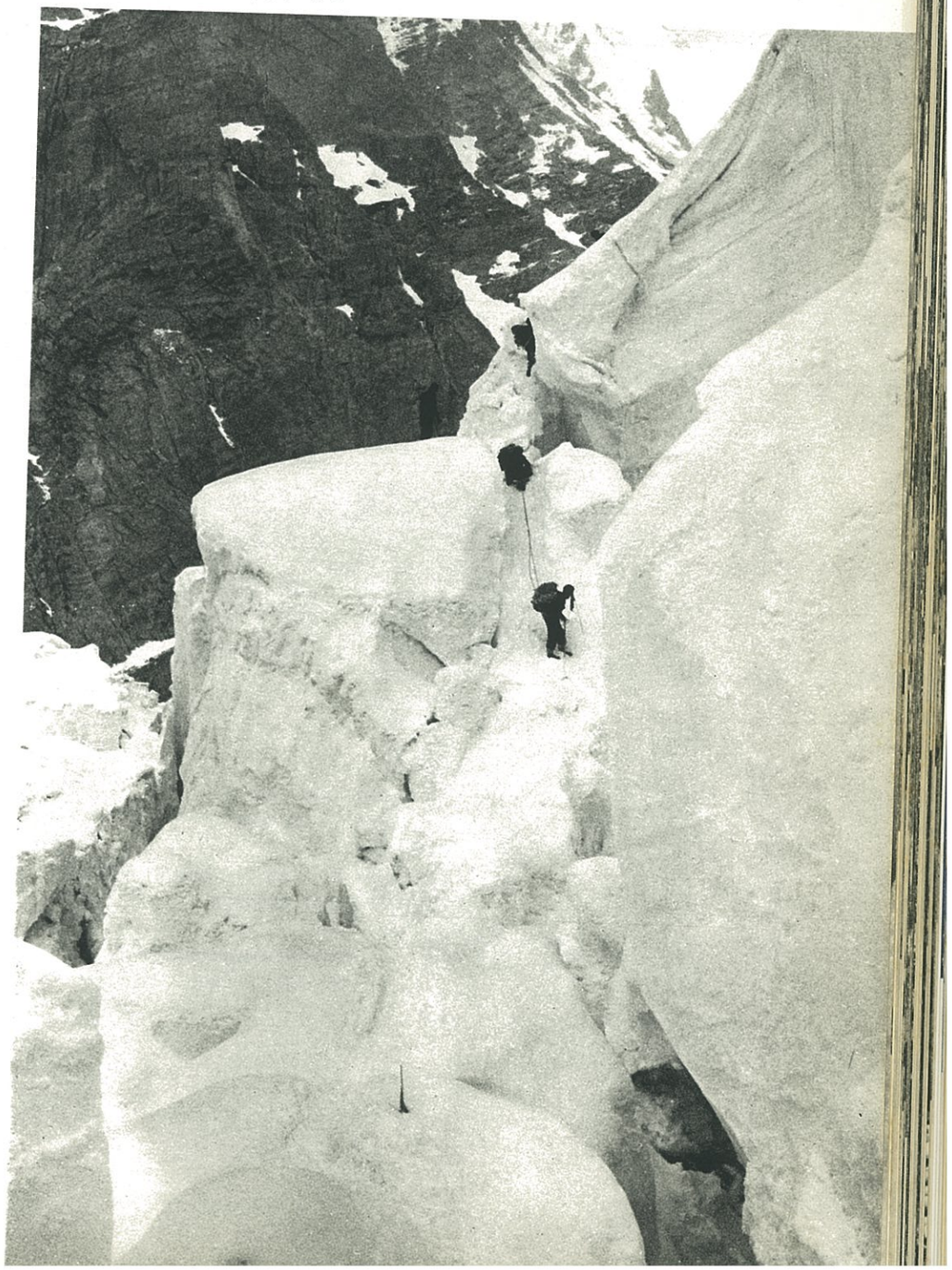
68 迷路　最初ここに踏み込んだときはどうなることかと思った

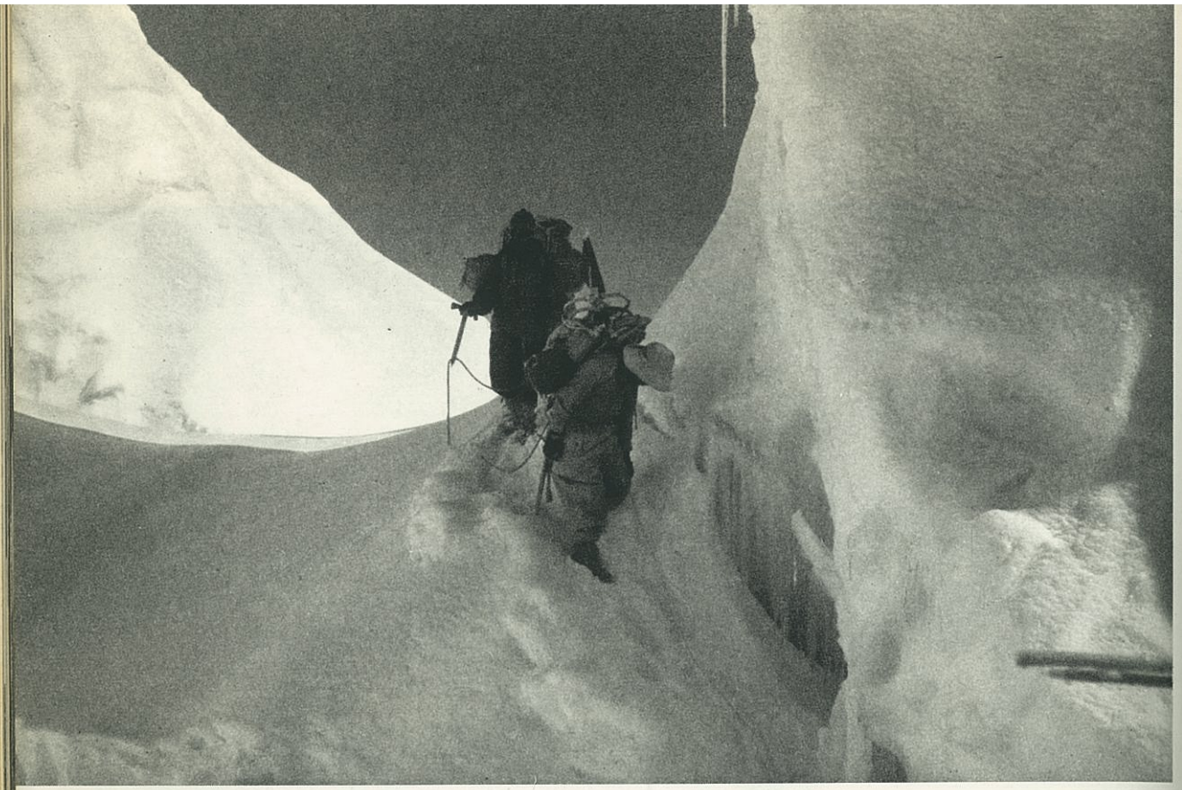
荷上げ・1

7月11日。ルートは決まった。時を移さず隊員、ポーター総出で荷上げがはじまる。ルートを示す赤旗をつぎつぎと立て、不安定な場所には固定ロープを取りつける。

日を追って、氷塔の間の迷路も踏み固められた。なじみの場所もできて、"ツララ横丁"、"這い這い横丁"などと名前もつく。それでも、ときおりかくれたクレバスに落ちこんでキモを冷やす。

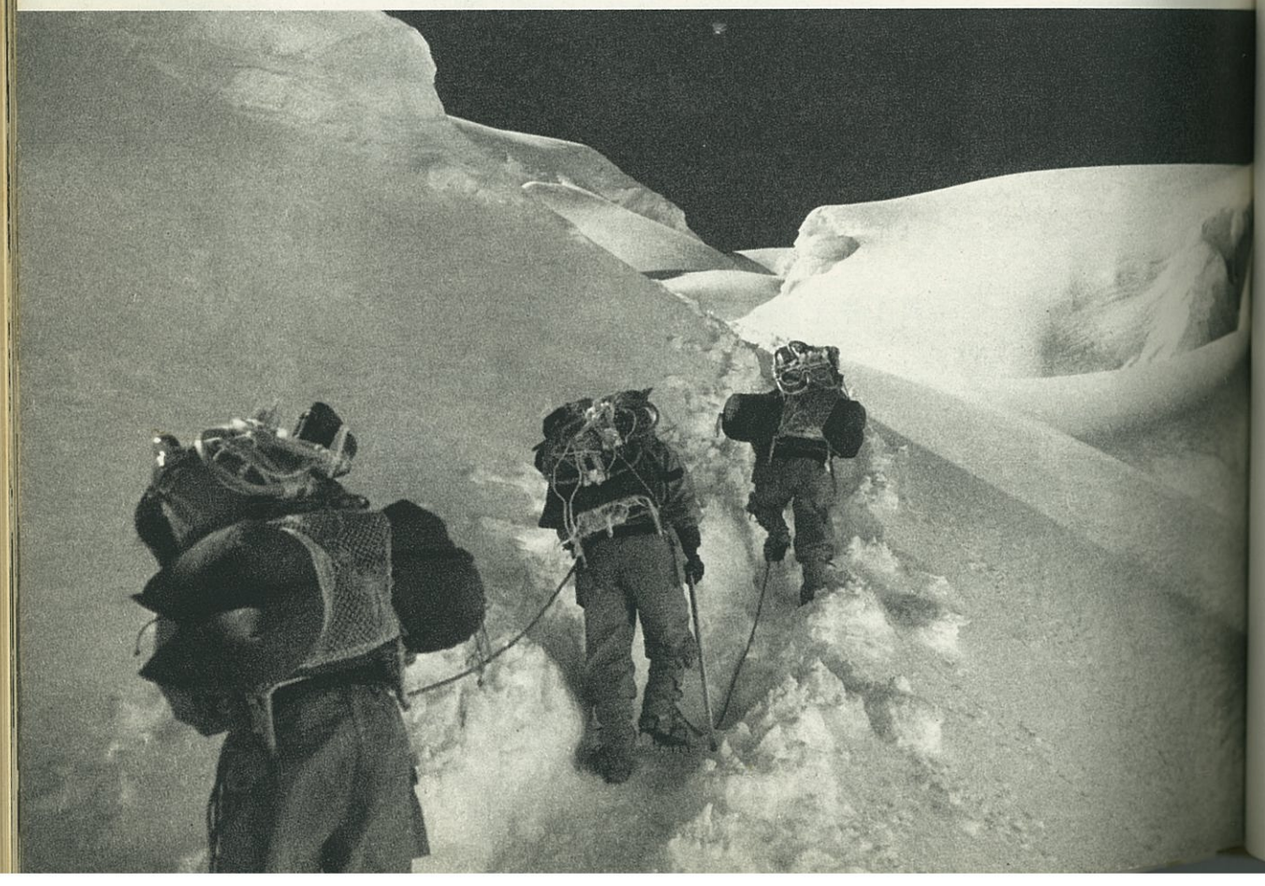
67 急な斜面には固定ロープをとりつける



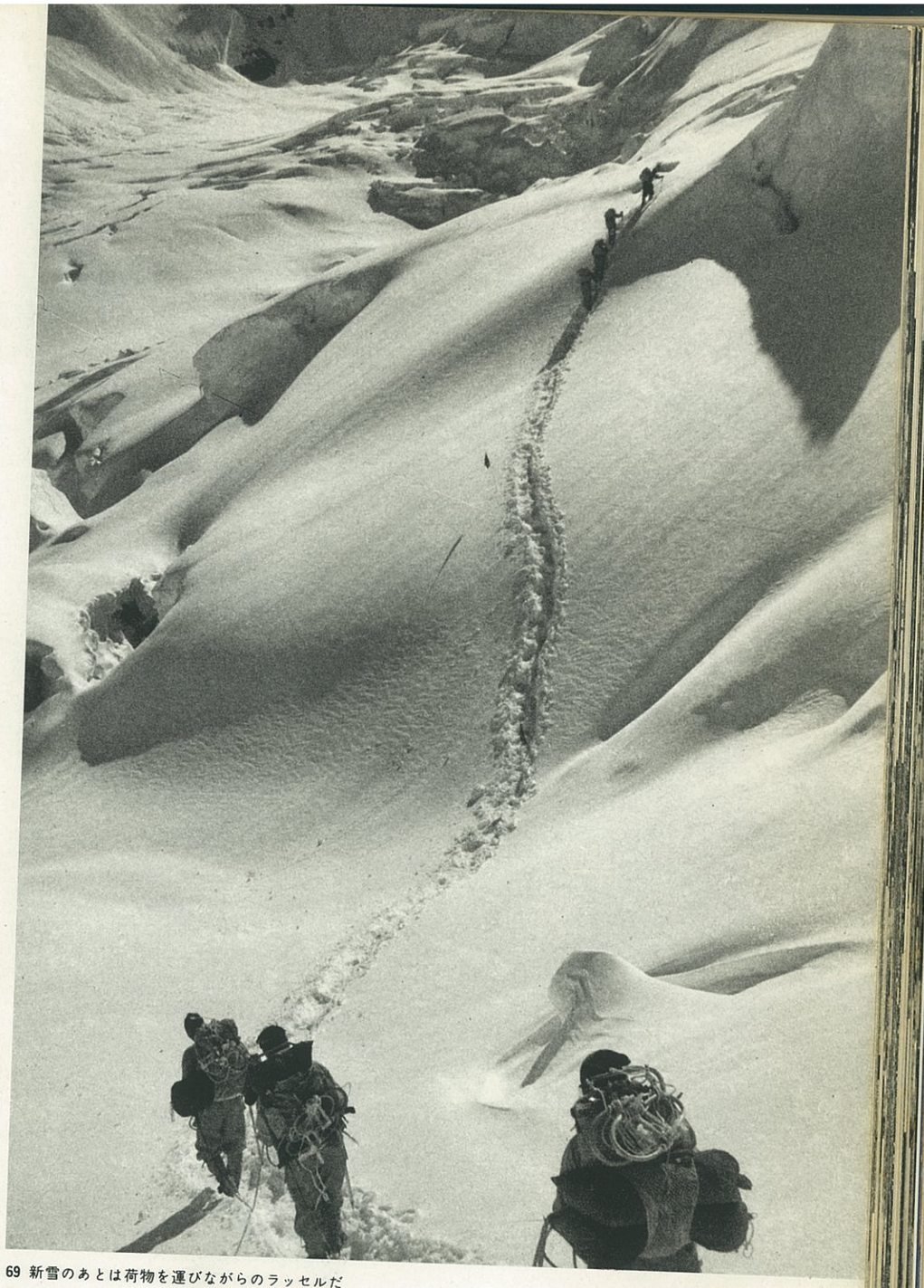


70 荷上げは絶えまなくつづく

71 クレバスの道



荷上げ・2

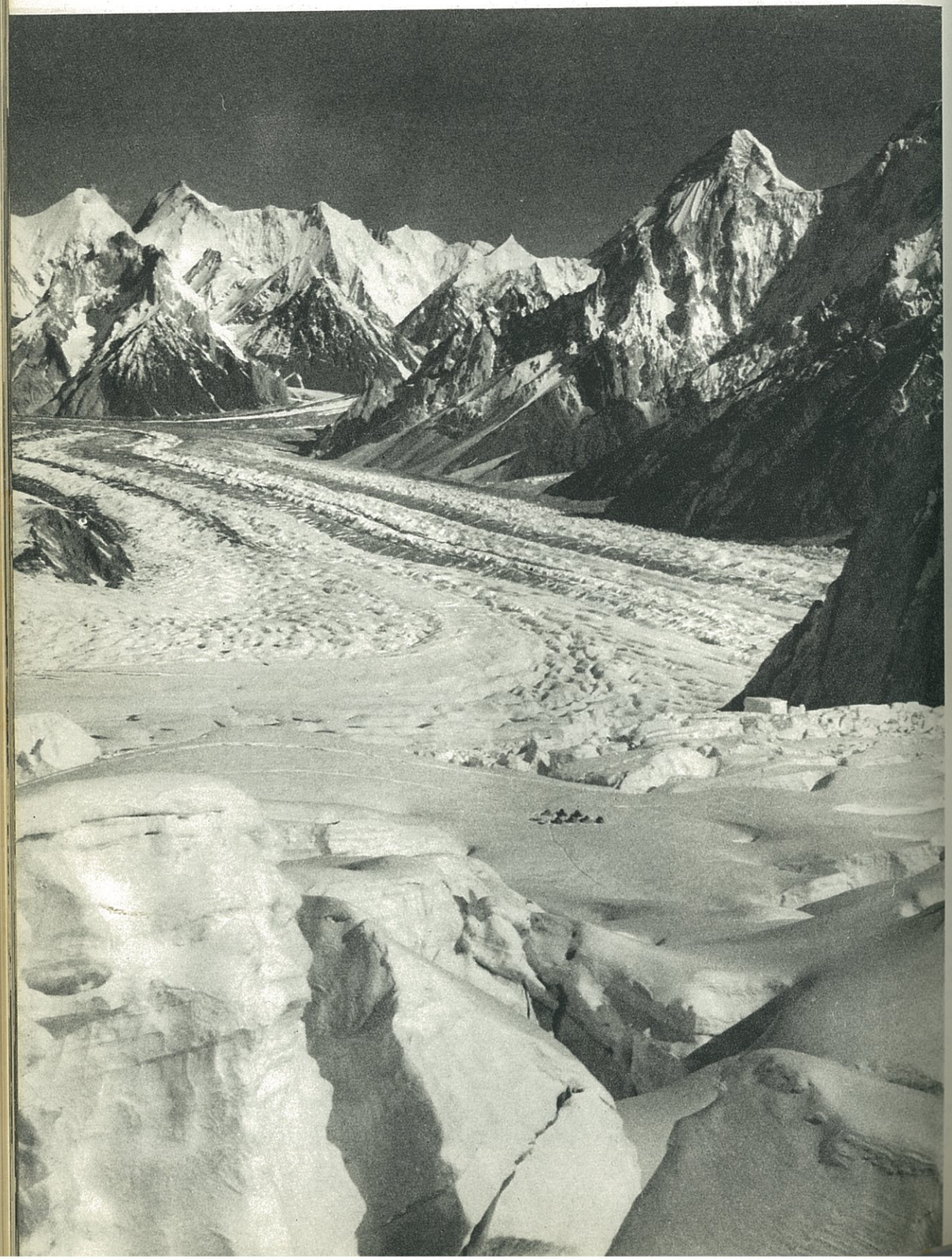


69 新雪のあとは荷物を運びながらのラッセルだ

隊員は、しばしばポーター以上に荷物をかついでいる。そうしないと計画が進まないのだ。ここでは、ポーターの能力はシェルパにくらべてはるかに低い。あまり彼等に頼るわけにはいかない。

新雪が降ると、せっかく開いたルートが雪でおおわれてしまう。荷物を運びながらラッセルして、ルートを固めなおす。

73 第Ⅰキャンプ上方よりバルトロ氷河をみる



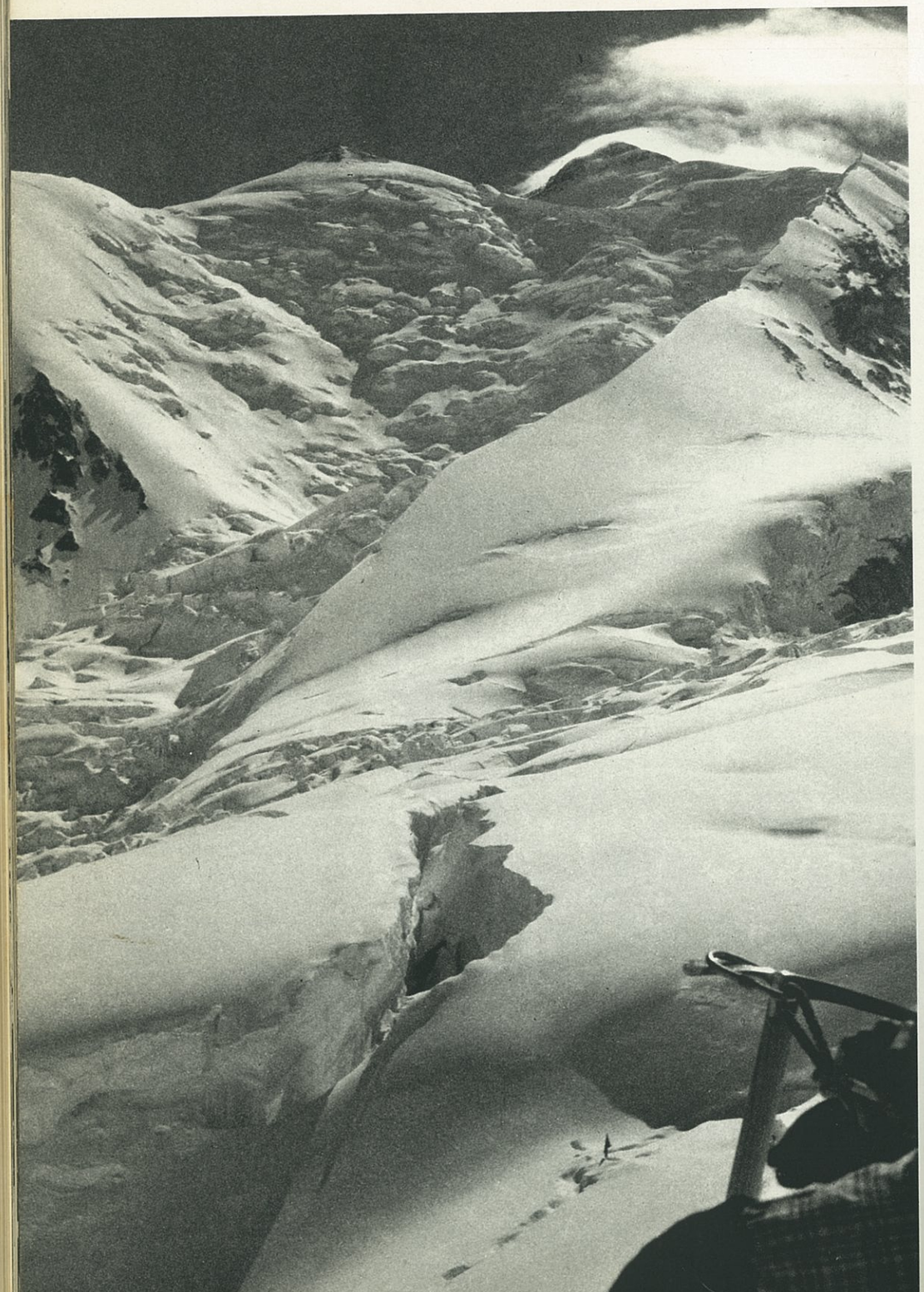
72 第Ⅰキャンプ（5500メートル）

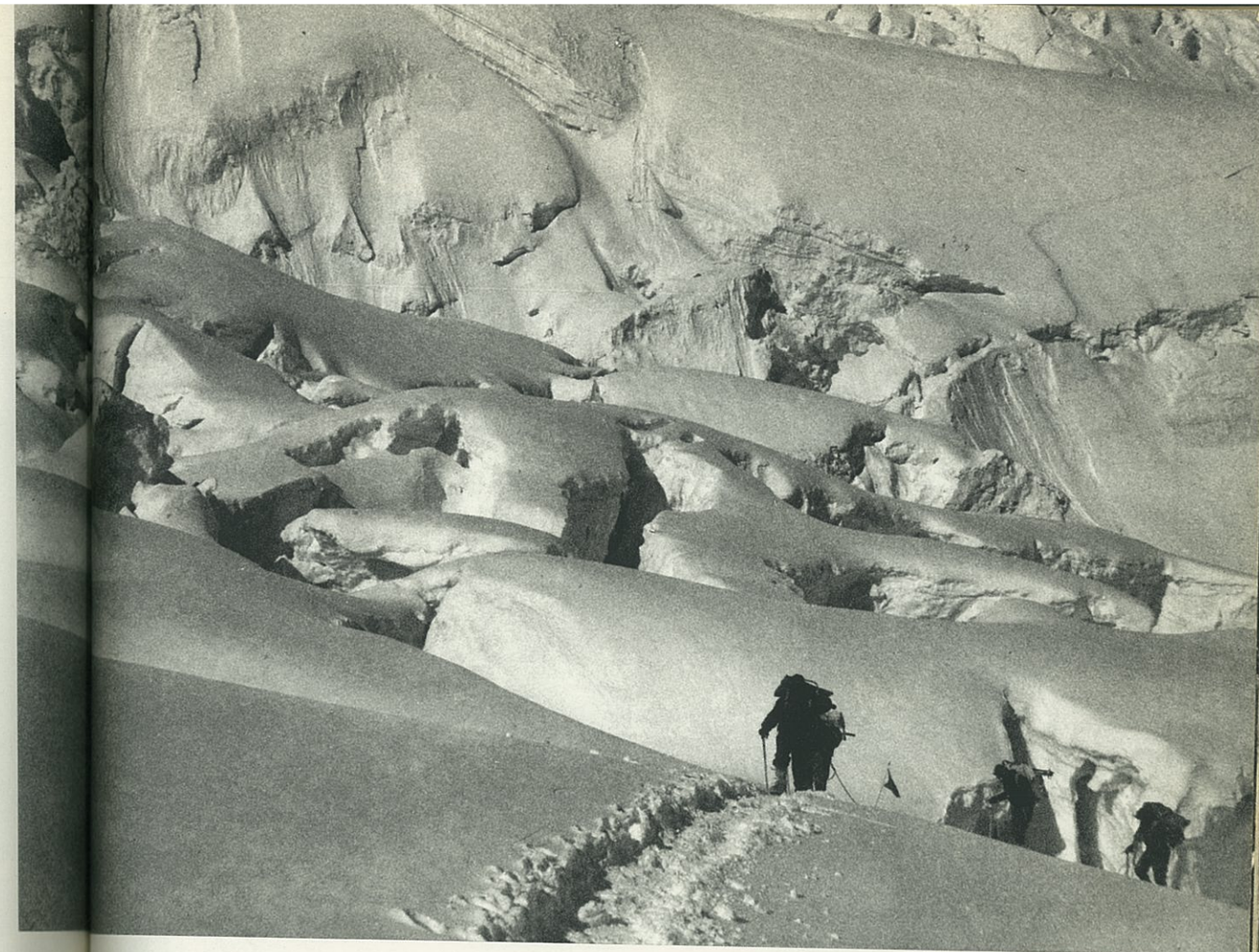
第1キャンプ建設

第1キャンプは高度5500メートル、アイス・フォール地帯を登りきったところの広い雪原にある。荷上げをつづけること5日。ここにもつぎつぎとテントが立ちならび、物資の集積は順調に進んだ。

第一の難関、アイス・フォールの突破には成功した。しかし、前途はながい。第2キャンプへのルート偵察と荷上げが、ただちにはじまる。氷塔こそみられなくなったが、依然として、クレバスは多い。むしろ、これからが、本格的クレバス地帯であった。

76 第2キャンプからバルトロ・カンリは近い



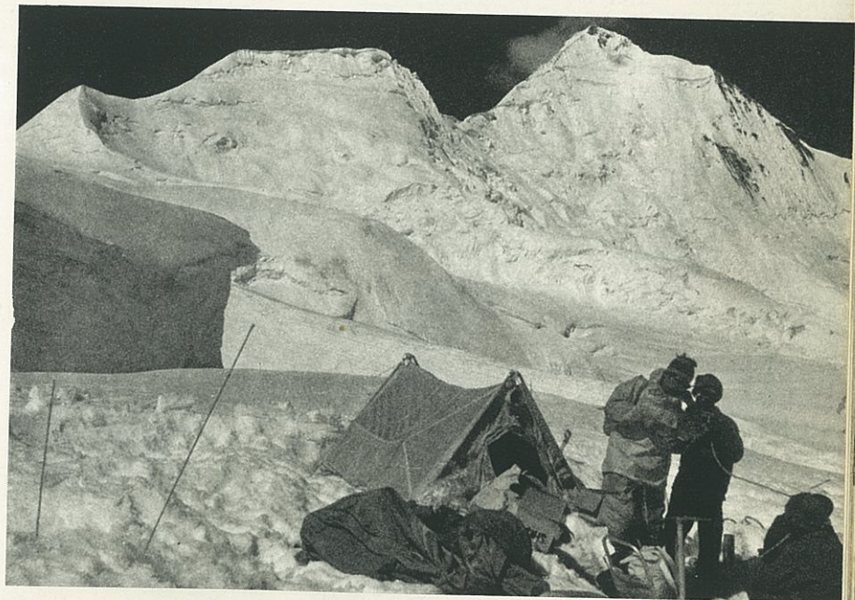


74 クレバス地帯をゆく

第2キャンプへ

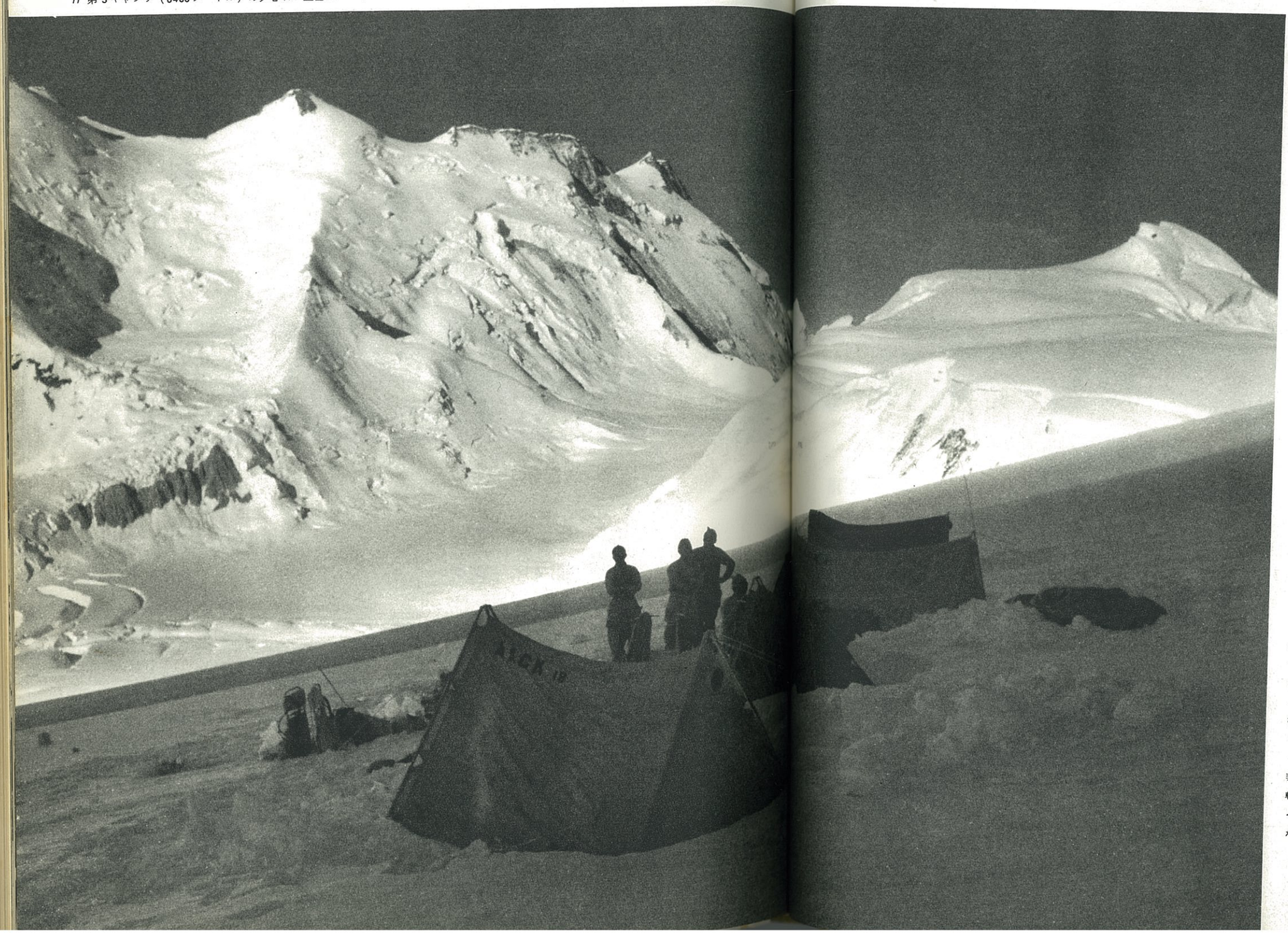
7月18日。第2キャンプ（5900メートル）建設。アミの目のように走る大きなクレバスには大いに悩まされた。クレバスは、ところによってはスノー・ブリッジがかかっており、不安定ながら渡ることができる。だが、たいていは右に左に迂回しなければならない。そのうちに、ルートは左に片寄り、バルトロ・カンリのほうに近づいた。

途中に1カ所、物資の中継所を設け、リレー式の荷上げを行って、とにかく、第2キャンプをコンダス・サドル近くにうちたてた。



75 第2キャンプ（5900メートル）

77 第3キャンプ（6400メートル）の夕暮れ　正面にバルトロ・カンリの連峰がならぶ

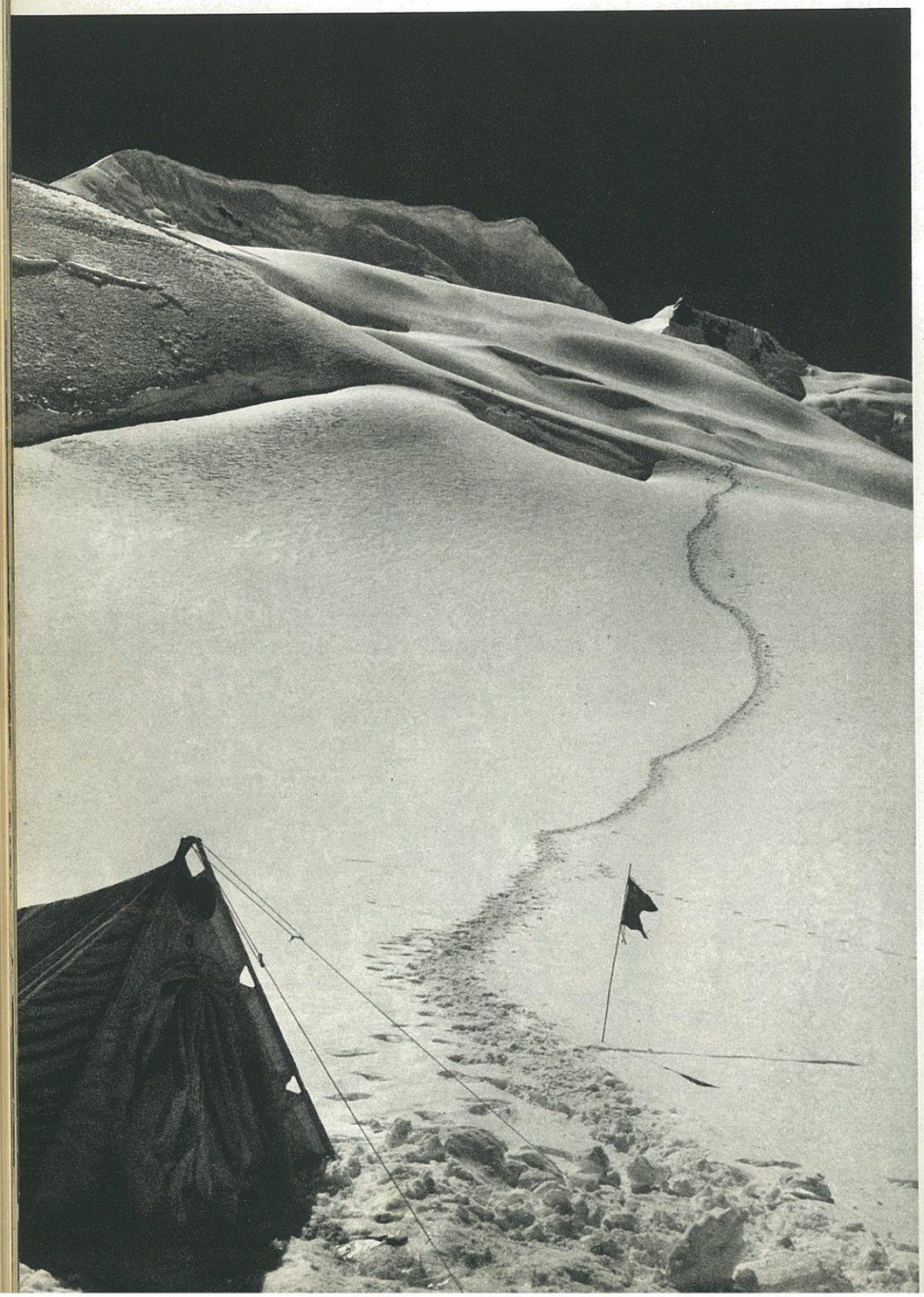


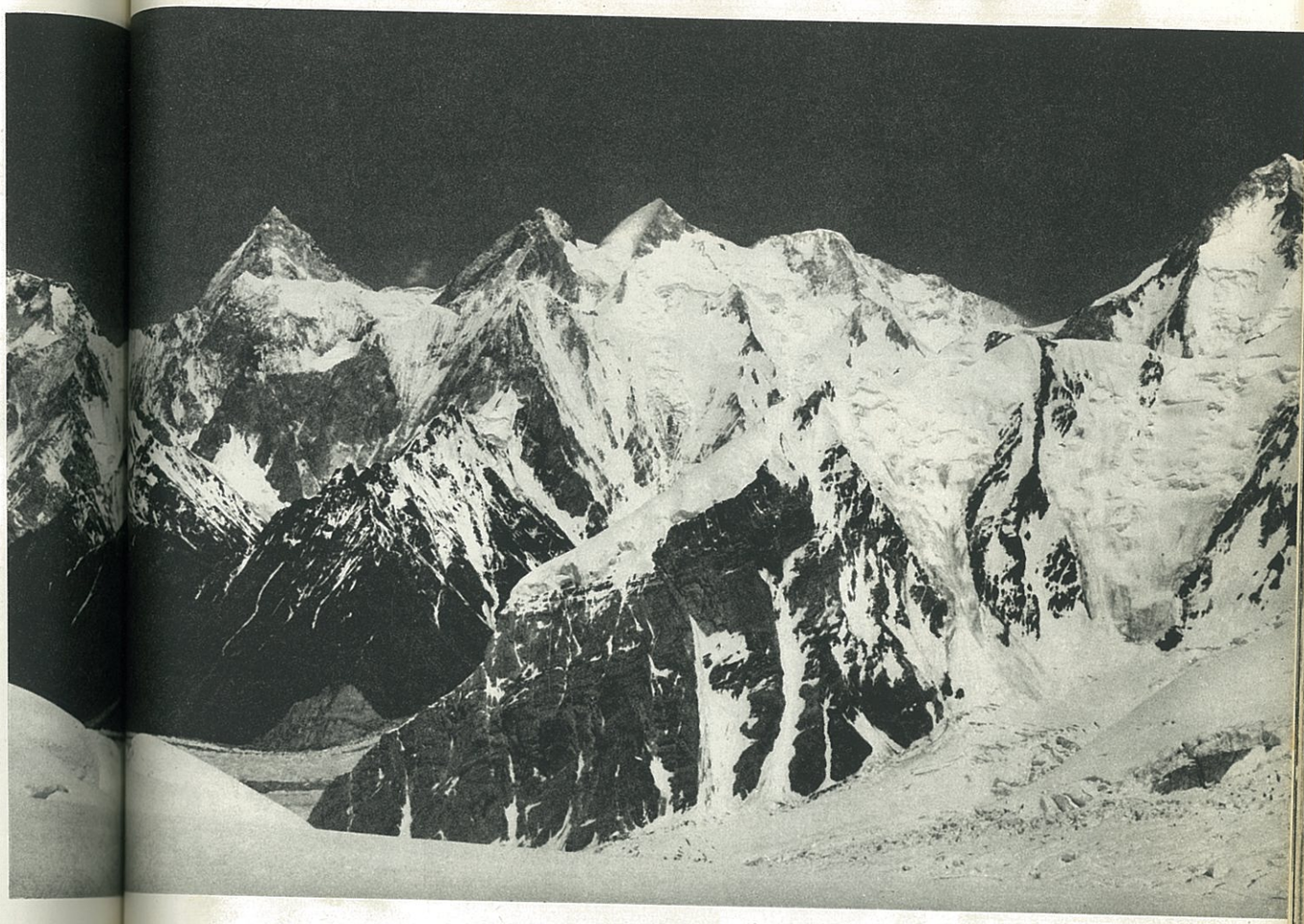
前進根拠地

第2キャンプから広大な雪原を横切ったところに、第3キャンプをつくった。ここからいよいよアイス・ドームの登りにかかる。このキャンプは、はじめは単なる中継地のつもりであったが、これまでの長い道と、これからはじまる急峻なアイス・ドームの登りを考えると、どうしても本格的な前進根拠地としなければならないということになった。

ドーム経由のルートはのちに放棄することになり、雪原ルートに転進したが、いずれの場合にも、その起点として、重要な役割をはたした。

79 第3キャンプよりドームにむかう





78 ガッシャーブルム連峰

第4キャンプへ

第3キャンプからは、ヘルマン・ブールのルートをたどり、ドームの登りにかかる。上にゆくほど傾斜は急で、重荷を負っての登りはらくではない。高度もすでに7000メートルに近く、ポーターたちは、そろそろ尻ごみをはじめた。彼等は高いところにゆくことをきらっているようだ。

K₂、ブロード・ピークはもちろんのこと、すぐ近くに立ちならぶガッシャーブルム連峰が、登高中の休けいのひととき、私たちの目をたのしませ、元気づけた。

80 ヘルマン・ブールのテント

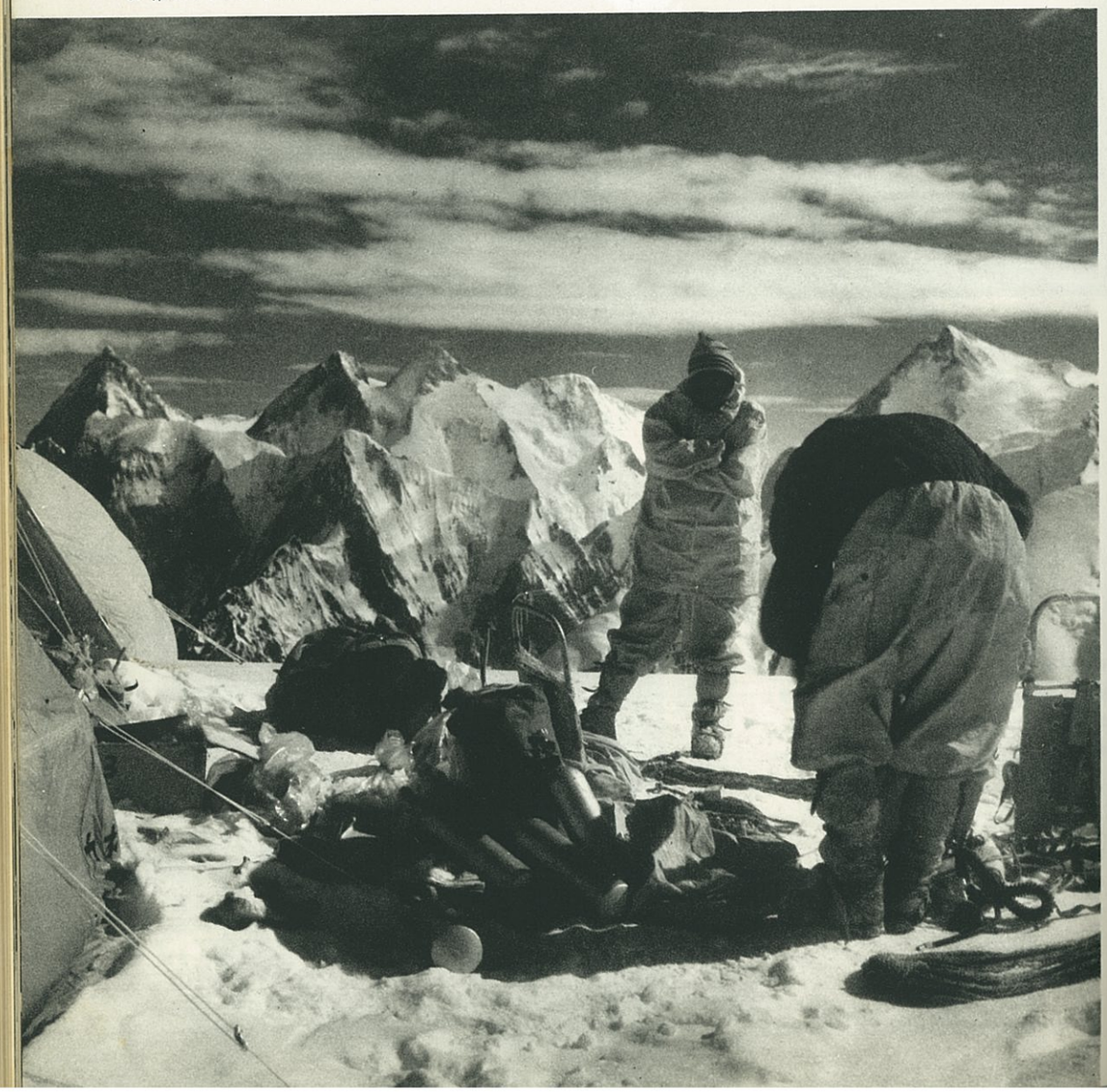
ヘルマン・ブールのテント

7月22日。第4キャンプ建設。高度6700メートル。ドームの最後の登りにかかる少し手前だ。

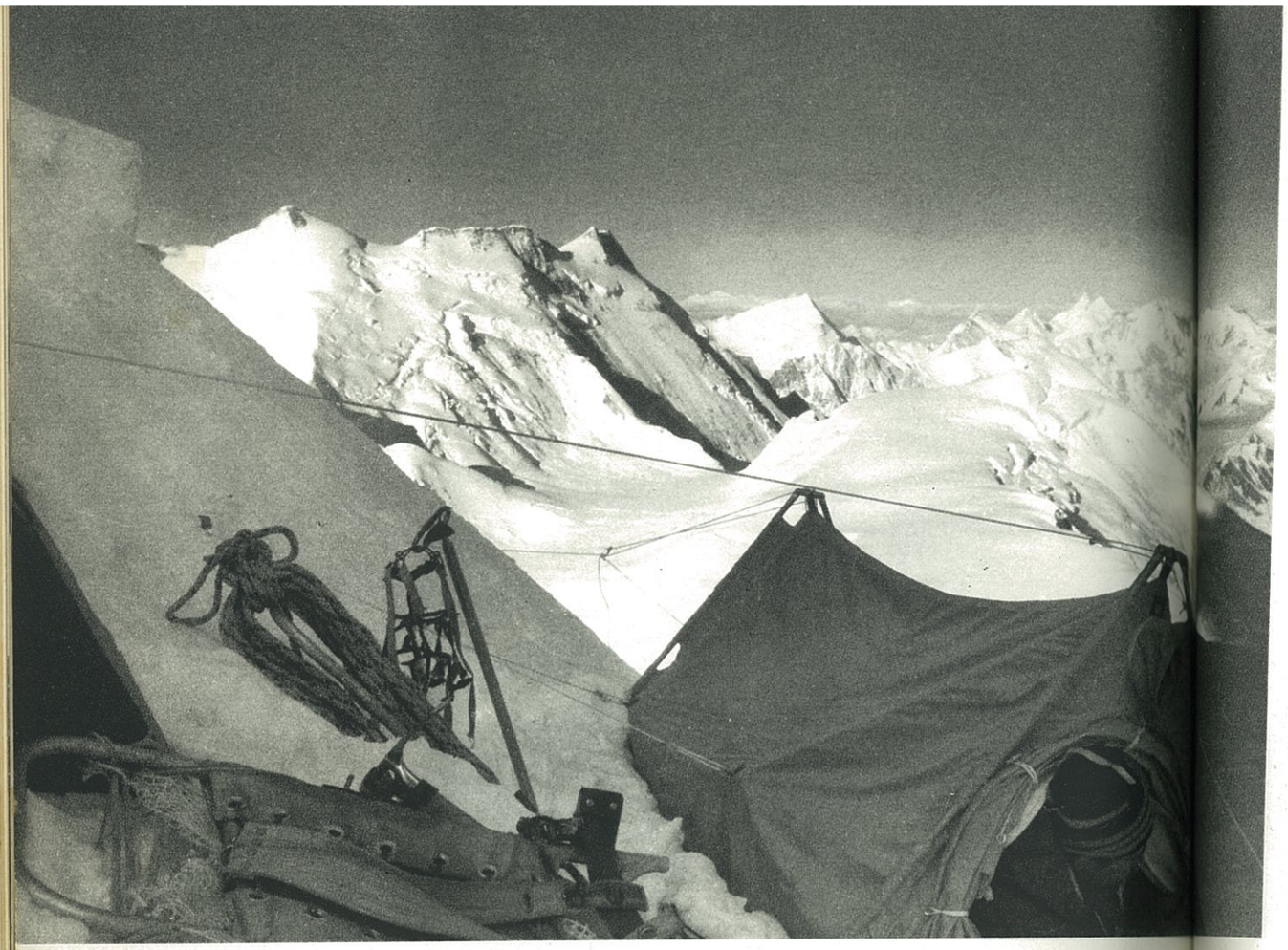
第4キャンプのすぐ近くに、半ば雪に埋もれた、古いテントを発見した。ヘルマン・ブールのテントだった。1957年、彼はこのテントを出発して、私たちがこれからたどろうとするこのルートを通って頂上アタックに出かけ、ついに帰ってこなかったのだ。1年間の風雪にたたかれてテントの色はあせていたが、それでも主人の帰りを待つように立っていた。

第5キャンプへの偵察と荷上げは、困難をきわめた。ドームの登り、急な氷の斜面の重荷を負ってのトラバース。高度影響と疲労から、隊員、ポーターともに故障者がではじめる。

第5キャンプが、頂上攻撃のための最前進根拠地になる。しかし、いざというときには、第4キャンプからでも頂上攻撃が強行できるように、第4キャンプへの荷上げは急ピッチで完了する。酸素呼吸器の点検もして、万全を期す。



81 第4キャンプ（6700メートル）



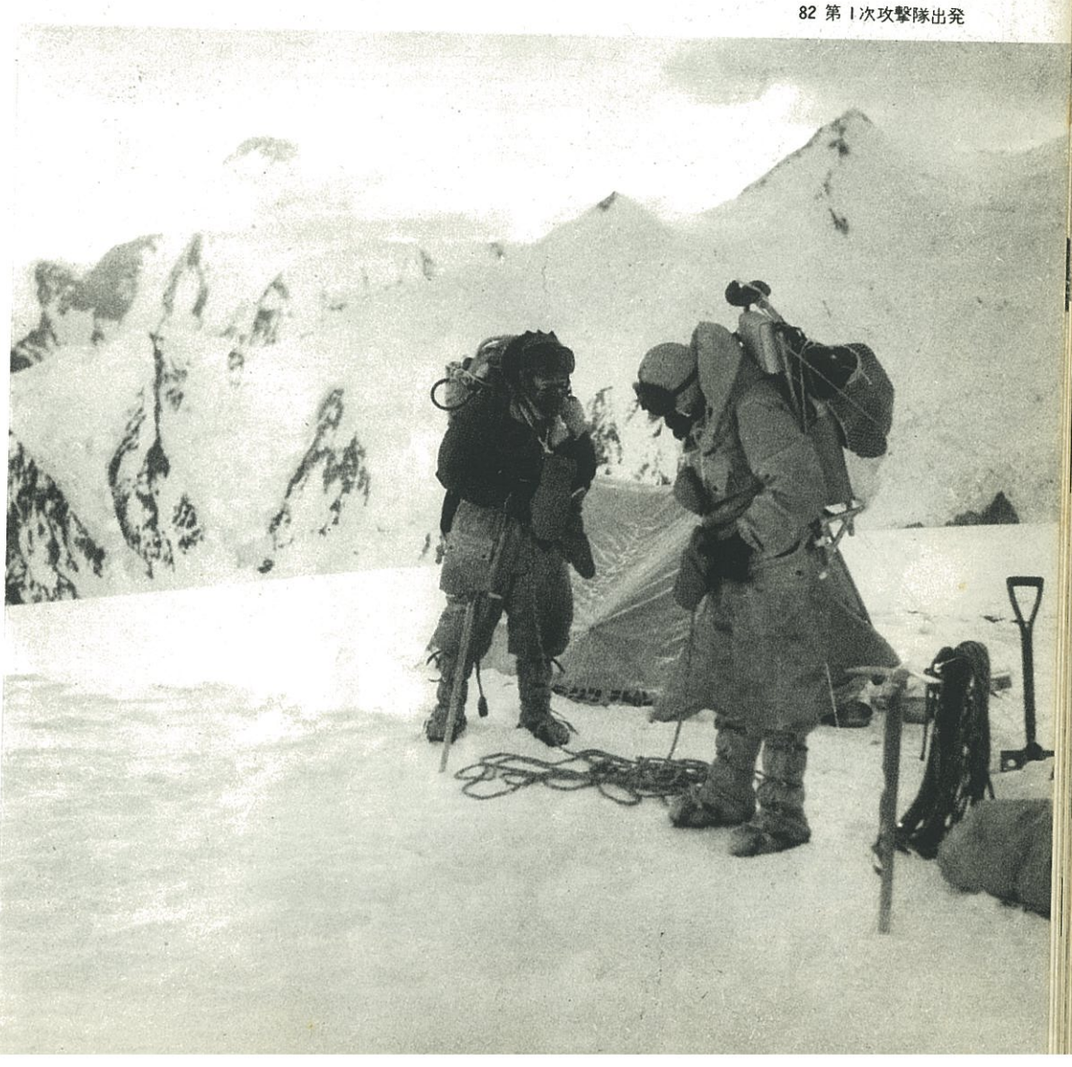
83 第5キャンプ（6950メートル）

84 高所キャンプの炊事

7月26日。アタック・メンバーの藤平、平井は第4キャンプから直接、頂上攻撃にむかった。しかし、ここからでは遠すぎた。そこで6950メートルの第5キャンプから、7月31日、再度攻撃をこころみた。

第1次・第2次頂上攻撃

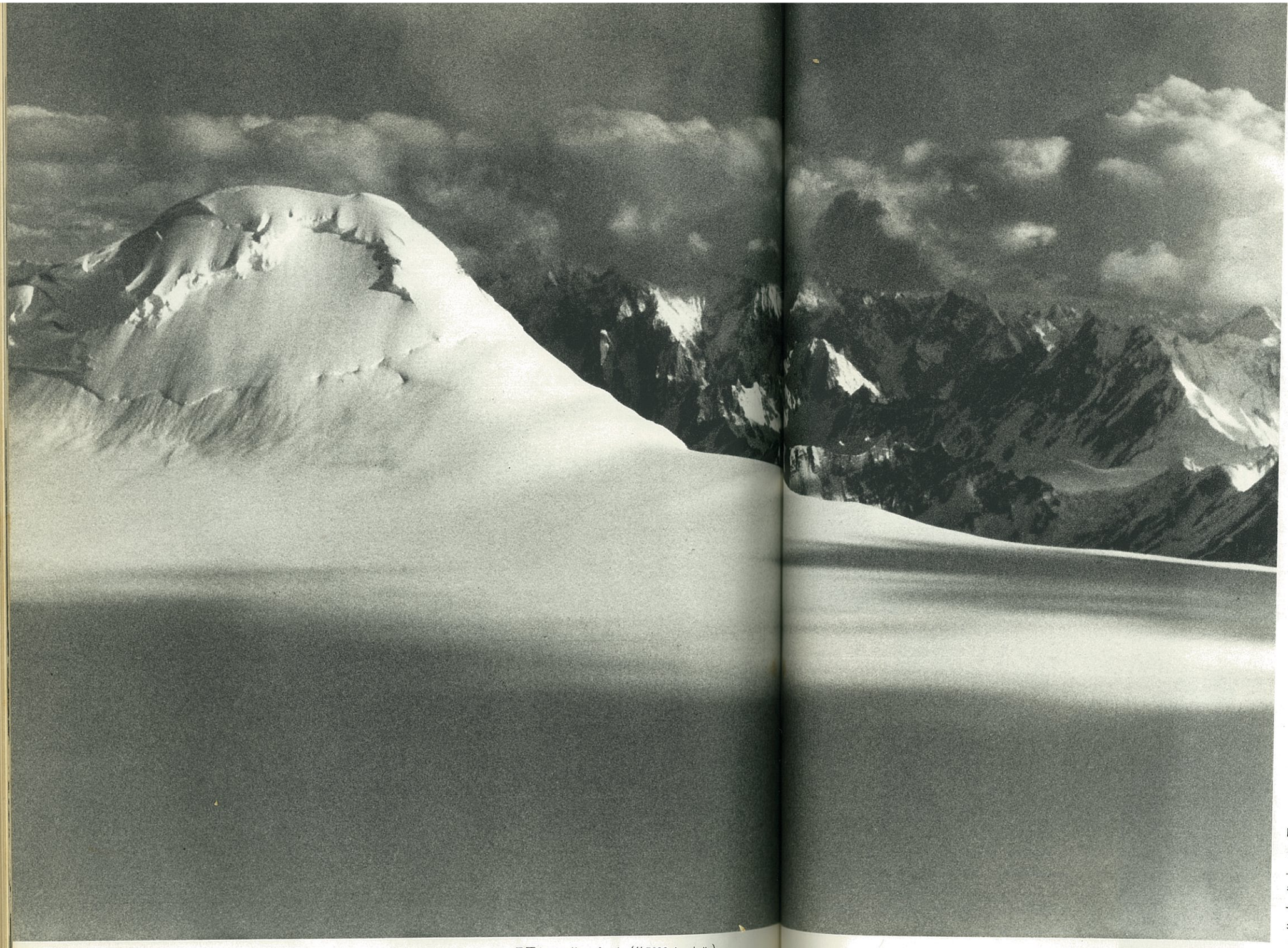
82 第1次攻撃隊出発



転　進

ドームを経てのルートは、頂上との間のコルへの下りが非常に悪かった。ここで予想外に時間を費したので、頂上への登りの途中で引返えさざるを得なかった。私たちは方針をかえて、ドーム南側のチョゴリザ氷河をつめて、コルに近づくことにした。

氷河の源頭はクレバスのほとんどない、すばらしい雪原となっていて、そのむこうには約7000メートルの処女峰が立っていた。これは、いままでどの地図にもその存在は記されていない。私たちはカベリ・ピークと名づけ、8月5日、山口、中島、高村の3人が登頂した。



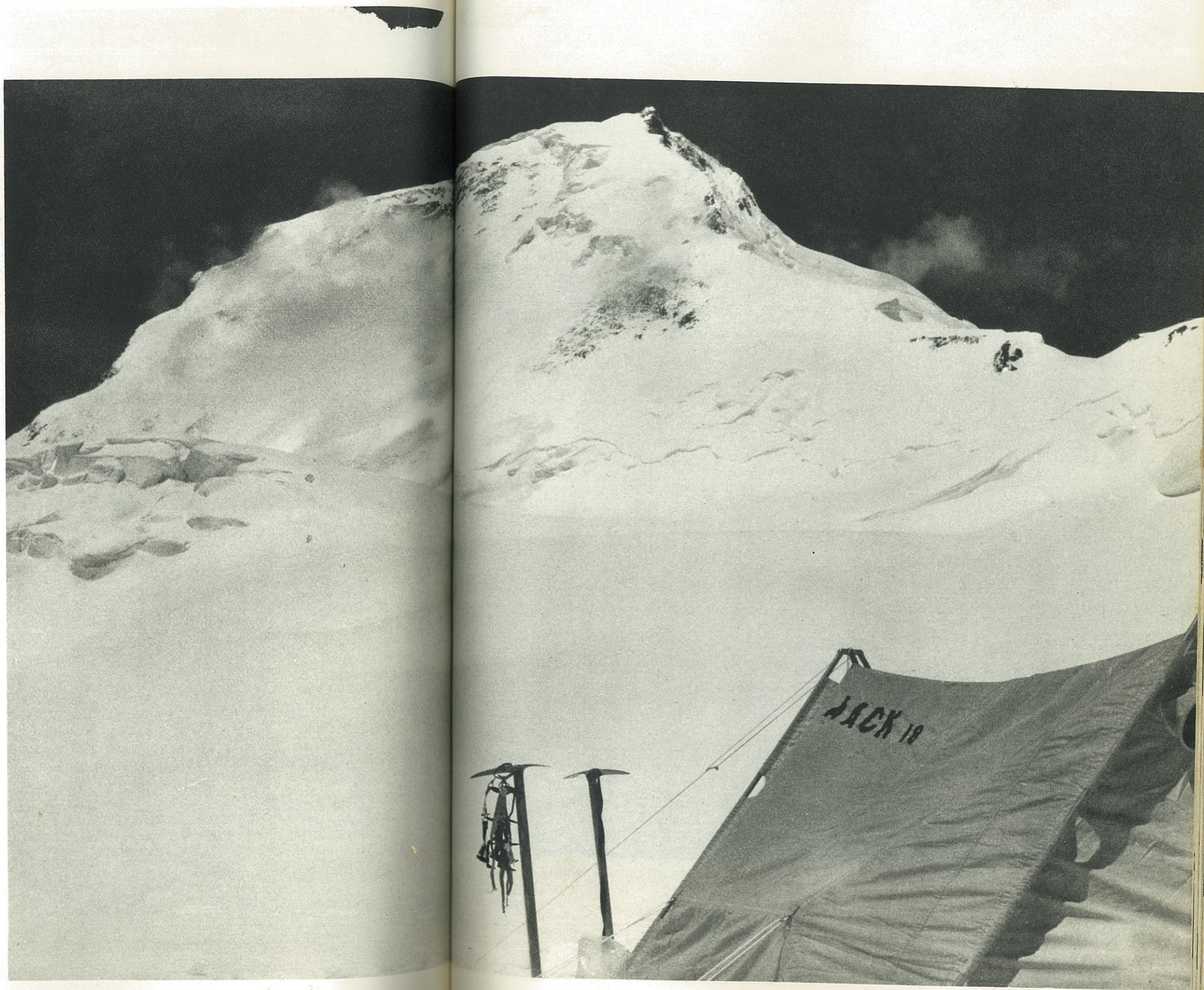
85 雪原とカベリ・ピーク（約7000メートル）

新第4キャンプの建設

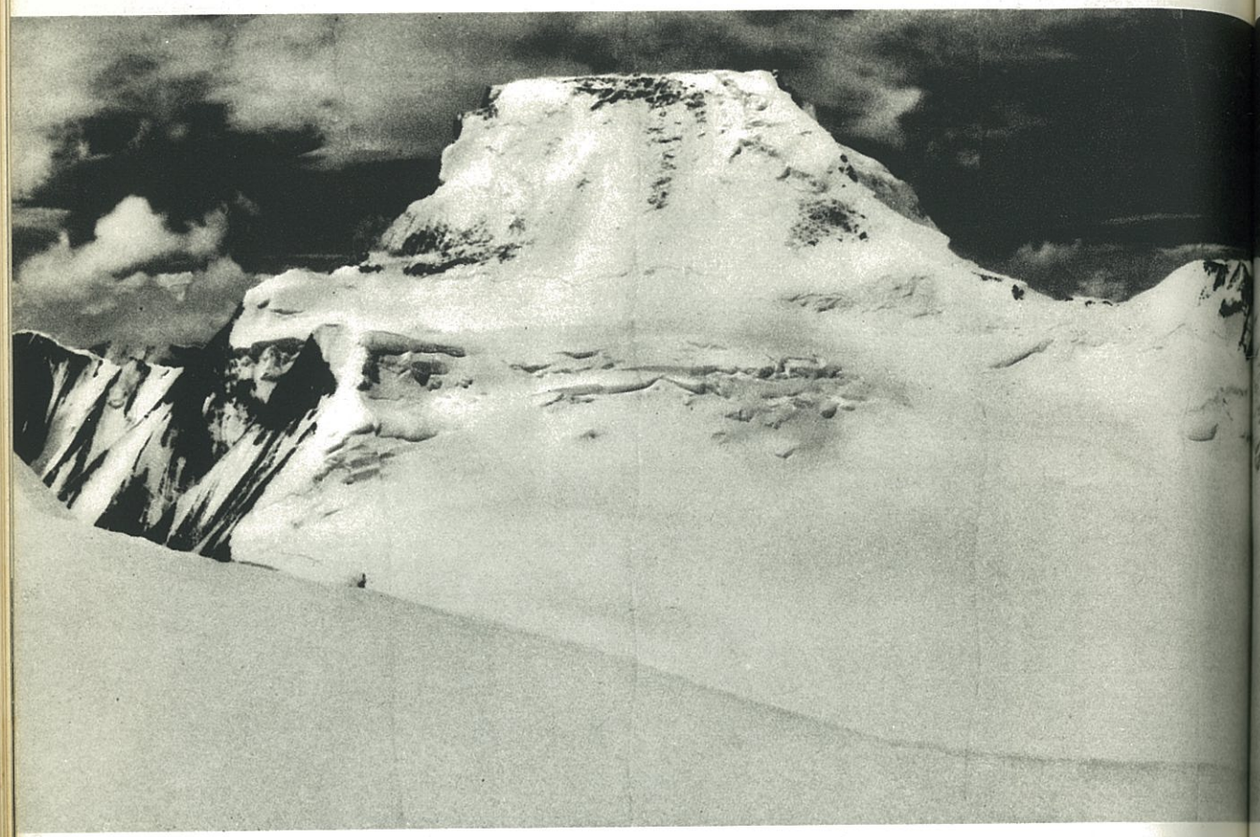
ドーム・ルートを放棄した私たちは、いったん第3キャンプに集結した。そこで1日の休養をとったのち、8月3日、新しい第4キャンプの建設地点を求めて雪原を登って行った。ポーターたちは急斜面にさしかかると、とたんに前進を拒否したので、結局コルの真下に新しい第4キャンプを張ることにした。

頂上攻撃と、カベリ・ピーク攻撃の2点を考慮してキャンプを上と下のふたつに分け、第4キャンプaおよびbと呼ぶ。

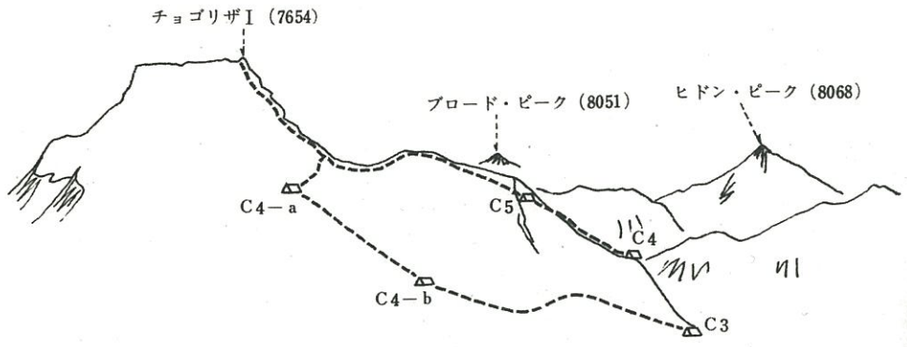
下の第4キャンプbから見上げると、チョゴリザのボリュームは、やはり相当なものである。

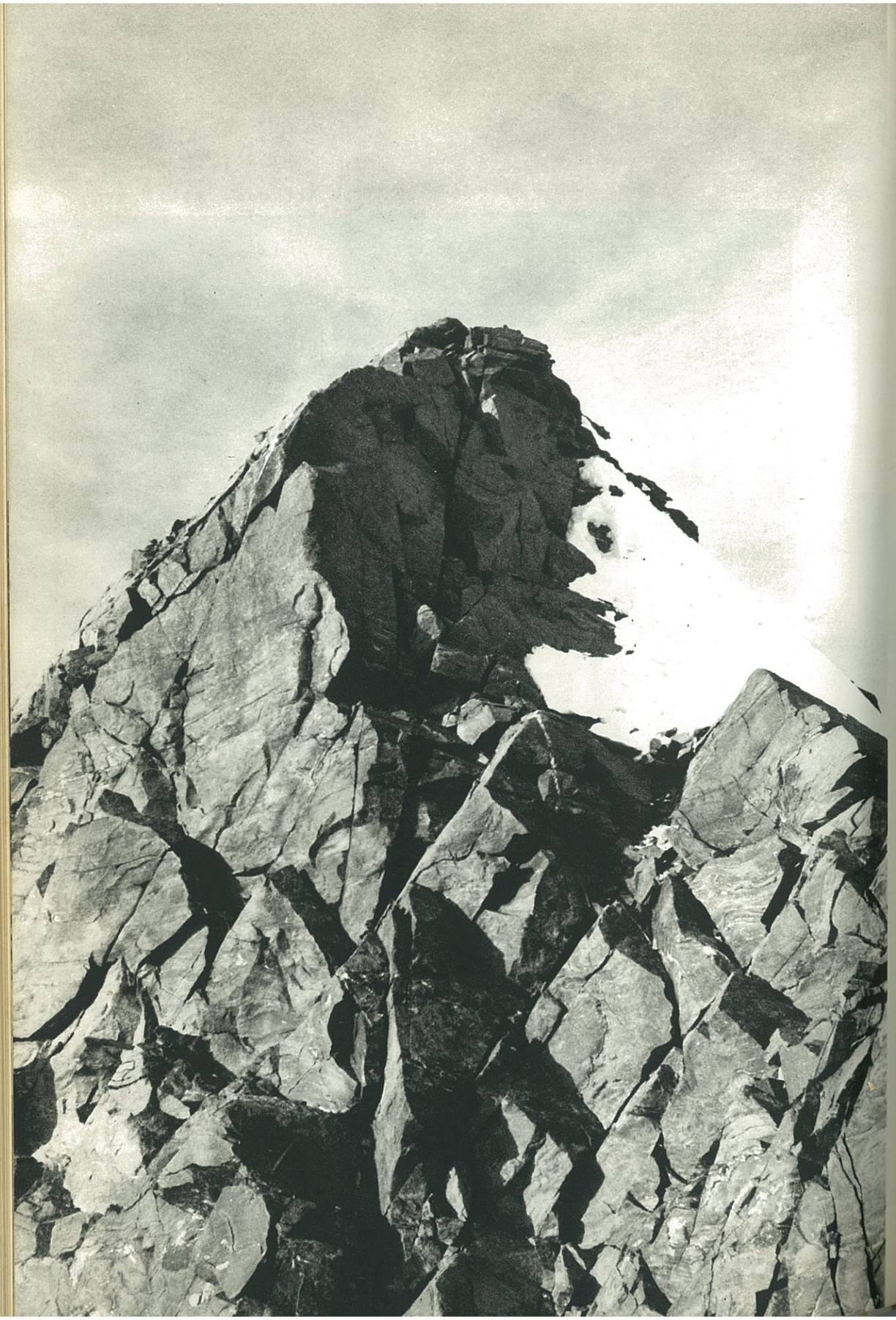


86 第4bキャンプよりのチョゴリザ



87 チョゴリザ東面（カベリ・ピークの頂上から）





89 最後のピナクルはまっすぐ岩を登った

最後の攻撃

8月4日。アタック隊藤平、平井は、第4キャンプaをあとにして頂上にむかった。45度の急斜面と、胸まで没するラッセル。酸素は最初の6時間で切れた。苦闘は12時間つづいた。午後4時30分、ふたりは頂上に立った。

88 頂上めざして

頂上はせまく、岩クズでおおわれていた。北側をのぞくと、はるか下にベース・キャンプのテントが小さくみえた。労苦にみちた30日間であった。ふたりは頂上に旗を立て、おもいおもいにカメラを振りまわした。

5時、下降をはじめる。コルまできたときはすでにまっくらだった。サポート隊が迎えにきていた。10時半、テントに着いた。

91 東側カベリ氷河をみおろす

頂上にて

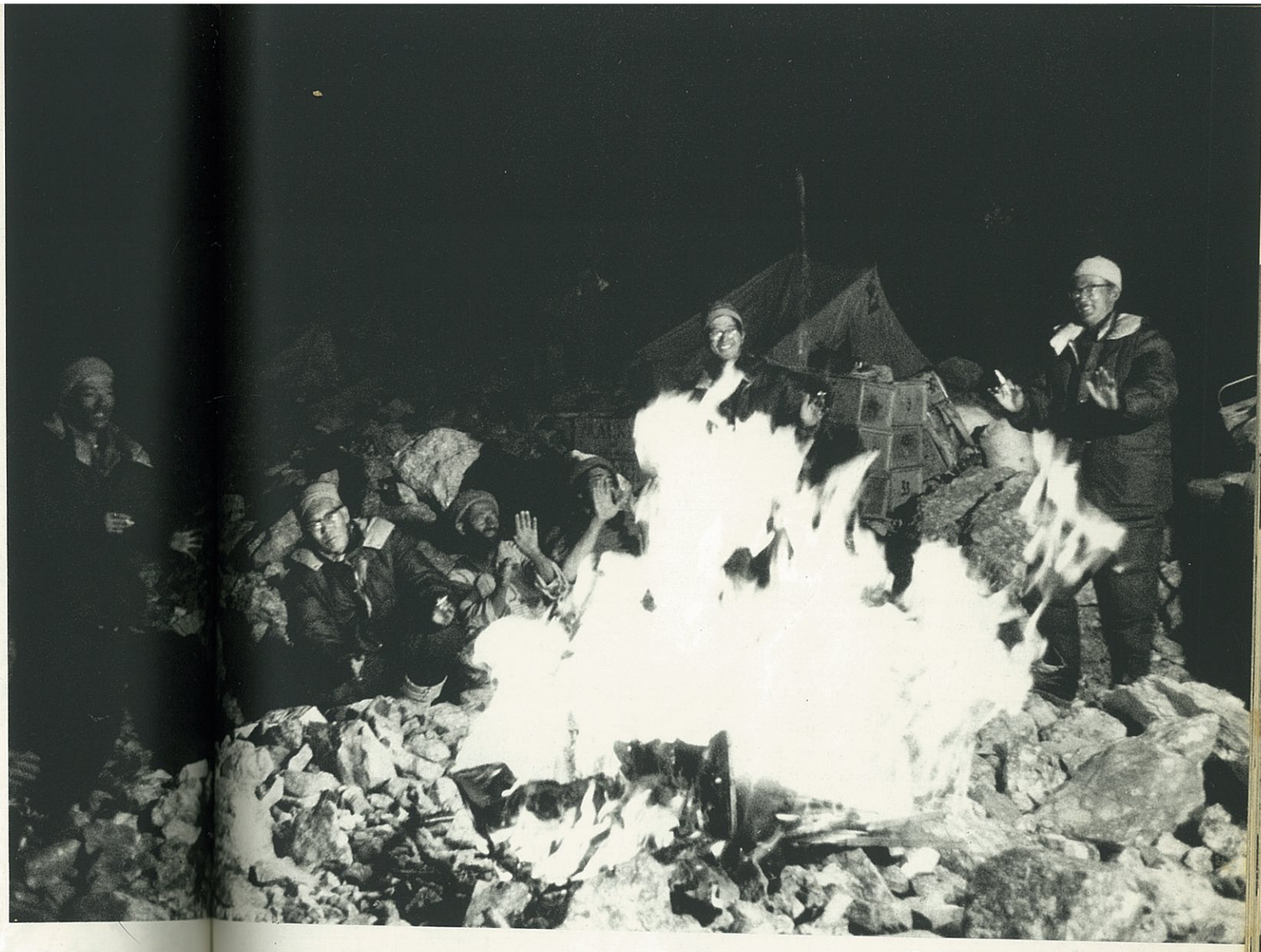
90 頂上ではピッケルに旗をむすんで立てた

ベース・キャンプ集結

8月10日。高所キャンプの撤収は完全におわり、全隊員はベース・キャンプに集まった。その晩は火をかこんで、お祝いの合唱にくれた。

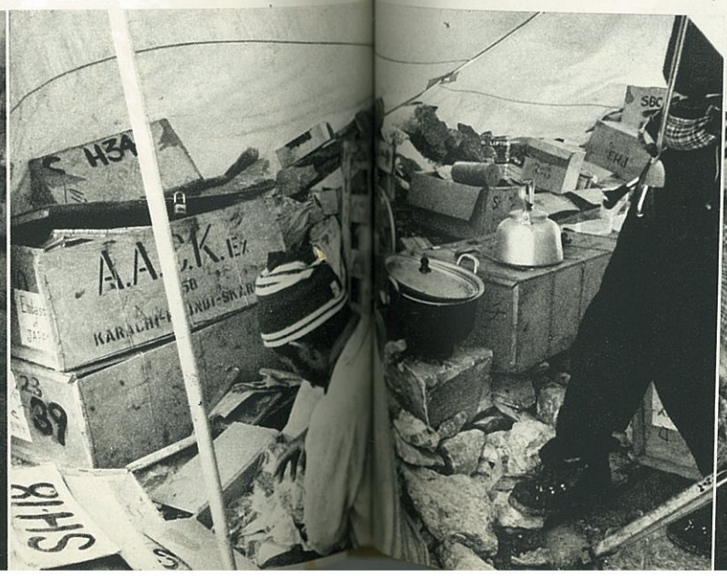
アスコーレからクーリーがくるまでは、休養また休養で1週間はくれた。その間に、イタリア隊のマライーニ氏らが訪ねてきた。プールの遺品を託した。

話は前にもどるが、私たちがベース・キャンプを建設してすぐ、ガッシャーブルムIに登ったアメリカ隊のショーニング氏が訪れている。私たちの装備をたいへんほめた。山の仲間の話は万国共通で、すぐにたのしいふんいきをつくりだせるものだ。



92 よろこびのキャンプ・ファイアー

95 イタリア隊にヘルマン・プールの遺品を託す



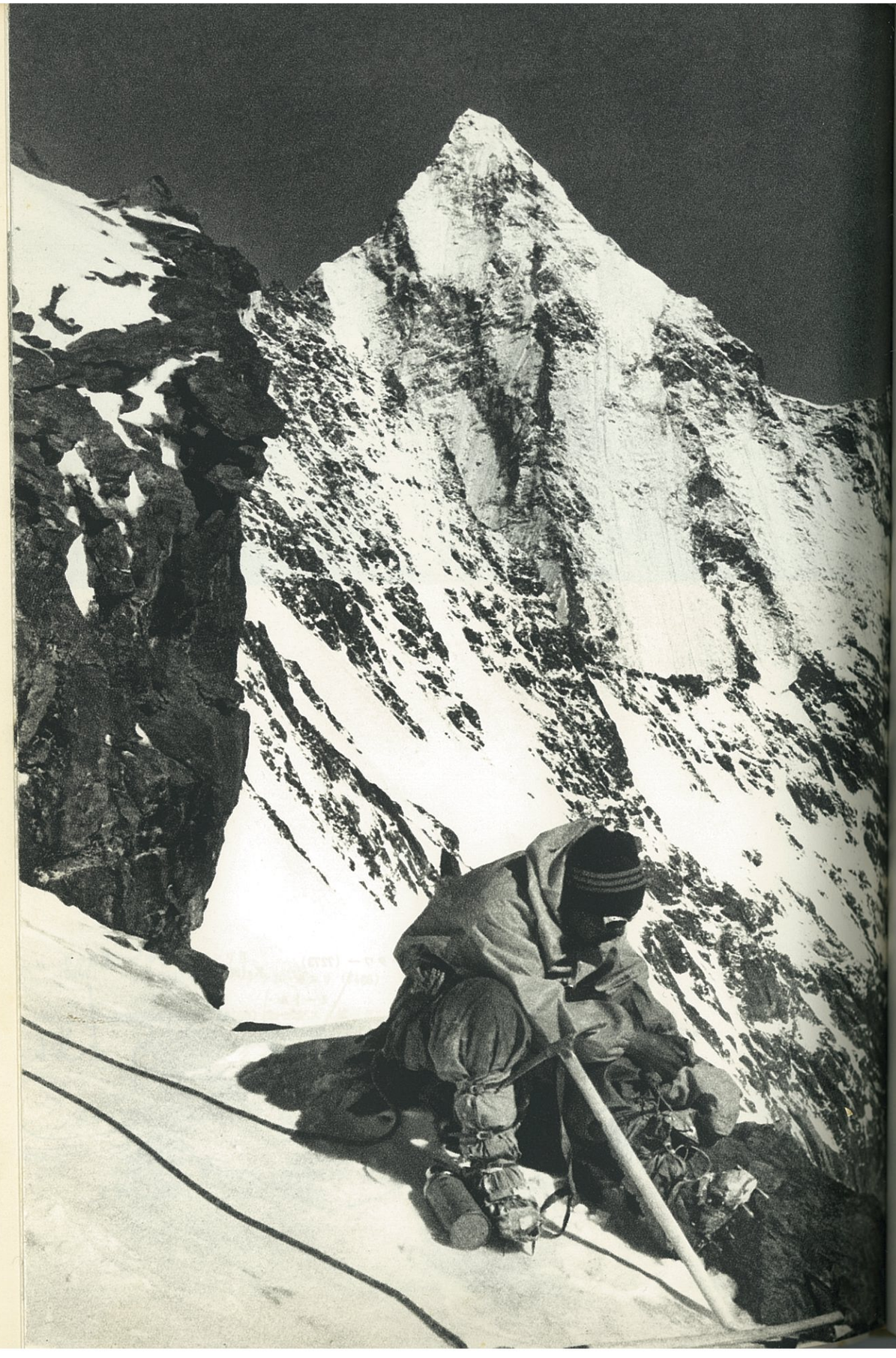
94 食糧も残りすくなになった

93 アメリカ隊のショーニング氏来訪

96　ビアンジェ氷河をみおろす

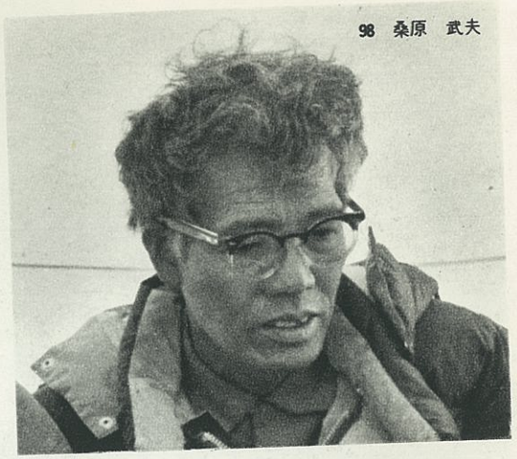
ビアンジェ氷河をさぐる

本隊のベース・キャンプ出発に先立って平井、芳賀のふたりは、ビアンジェ氷河にむかった。氷河源頭のステステ・サドルに達し、さらに7170メートルの無名峰の試登を行った。稜線からは、多くの未探検地域をふくむシャクスガム流域の山々がみえた。

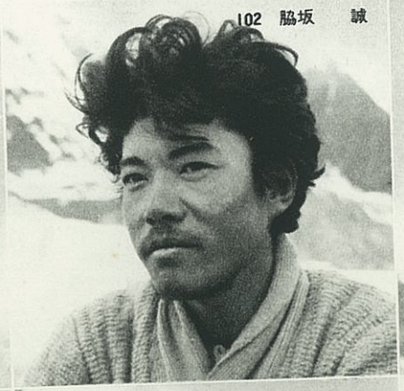


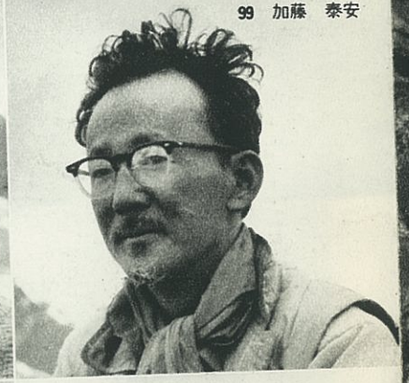
97　ビアンジェ氷河の源頭で

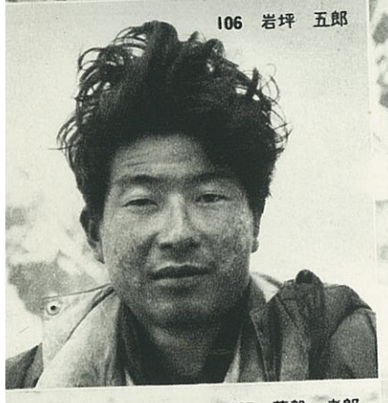
隊員とポーター


98 桑原　武夫

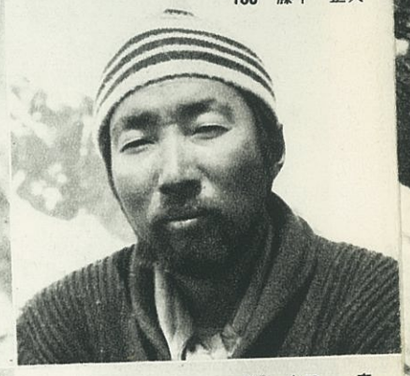
105 高村　泰雄

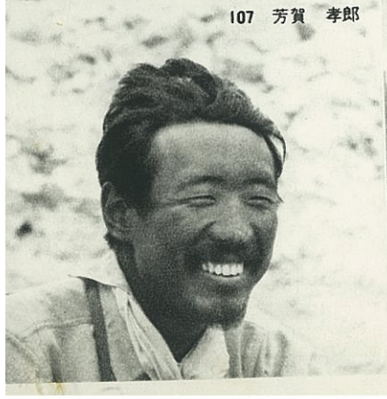

102 脇坂　誠


99 加藤　泰安

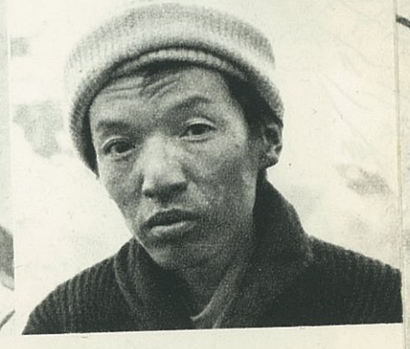

106 岩坪　五郎

103 中島　道郎


100 藤平　正夫

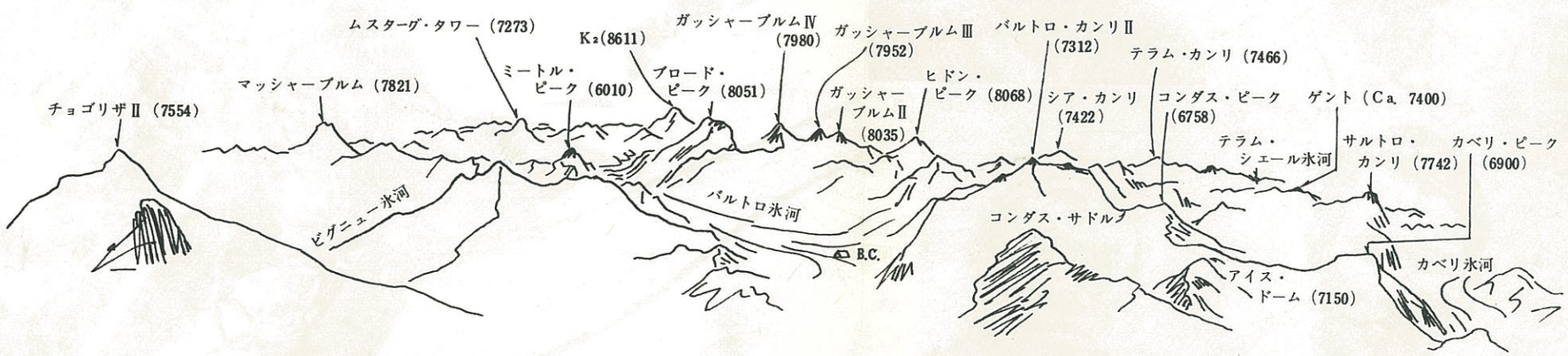

107 芳賀　孝郎

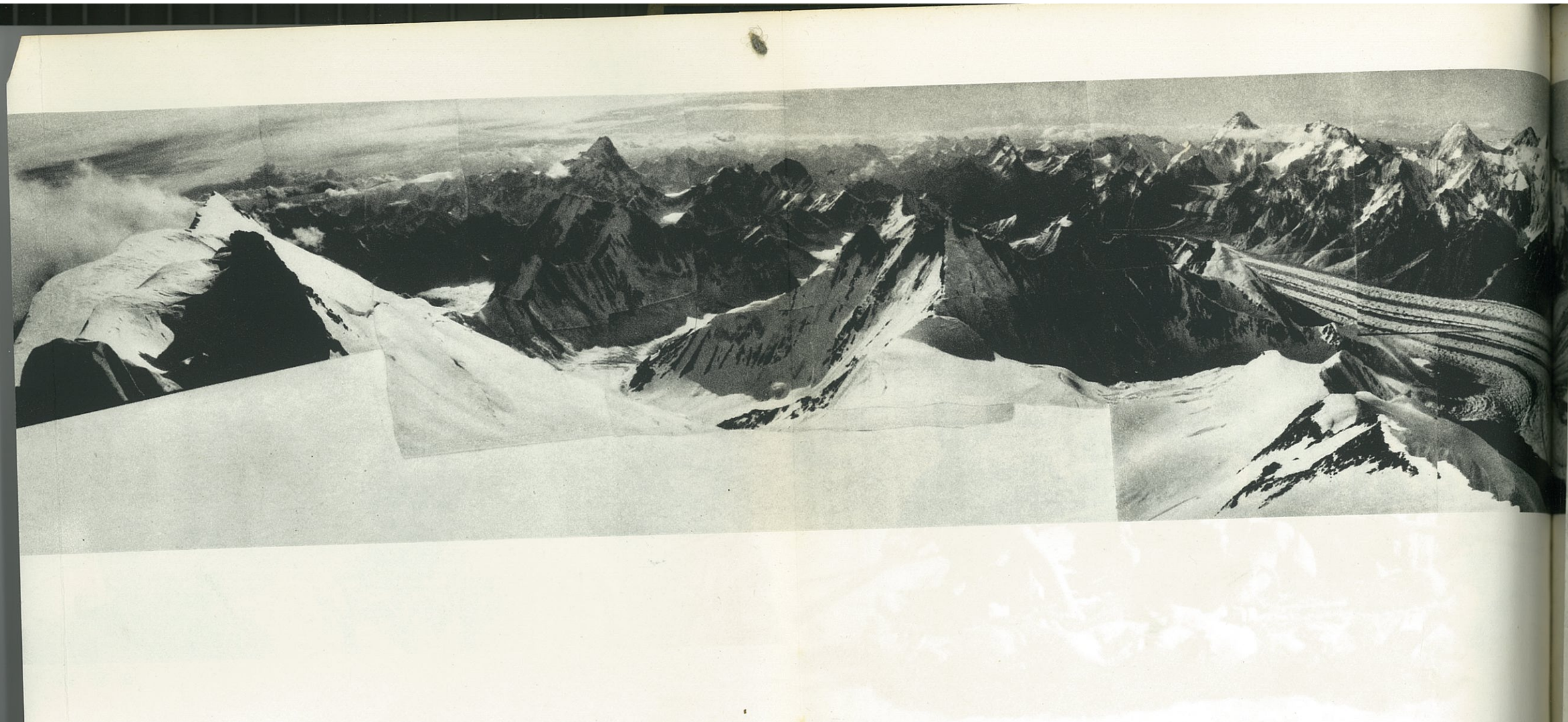
104 平井　一正


101 山口　克

野　ビアンジェ氷河の源頭で

119 頂上よりのパノラマ





120 シガール川はイカダで一気に下った

帰　途

帰路、ウルドカスにきて、急に季節を思いだした。そこは、秋の花のまっさかりだったからだ。

私たちは、全員元気にバルチの里に帰ってきた。農民は秋のとり入れにいそがしそうだ。村々のアンズの木には、枝もたわわに黄金の実がなっていた。

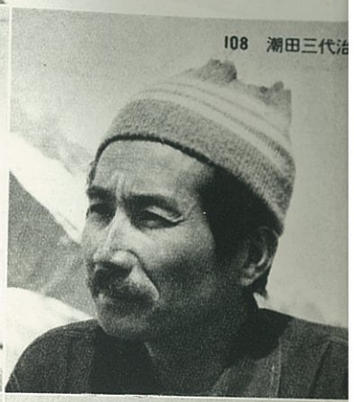
帰りはデュッソーからイカダにのって一気に下った。シガール川の急流は、下るにしたがっておだやかになり、イカダはやがてスカルドに流れ着いた。

115 マハン

111 イスマイル

116 フセン

112 モハメッド・アリ

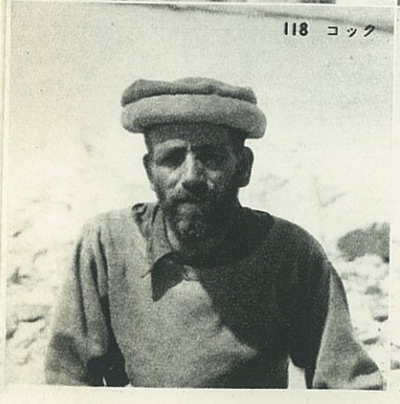


108 潮田三代治

117 グラム

113 ハサン

109 今川 好則



118 コック

114 フセイン

110 アンワル・ワジー大尉

チョゴリザ遠征をめぐって

——座　談　会——

120 シガール川はイカダで一気に下った

帰　途

帰路、ウルドカスにきて、急に季節を思いだした。そこは、秋の花のまっさかりだったからだ。

私たちは、全員元気にバルチの里に帰ってきた。農民は秋のとり入れにいそがしそうだ。村々のアンズの木には、枝もたわわに黄金の実がなっていた。

帰りはデュッソーからイカダにのって一気に下った。シガール川の急流は、下るにしたがっておだやかになり、イカダはやがてスカルドに流れ着いた。

はじめに

梅棹　これから、チョゴリザ遠征の報告と批判の会を開きます。

はじめに、この集まりの意図というようなことについて、チョゴリザ遠征隊長であり、また、AACK会長であるところの、桑原さんから、お話をおねがいします。

桑原　かんたんに説明します。チョゴリザ遠征は、さいわいにして一つの事故もなく、ぶじ登頂に成功したのでありますが、わがAACKとしても、また日本の登山界としても、これでヒマラヤ遠征が終了したわけではすこしもない。むしろ、ひきつづいて、新しい計画がつぎつぎに企てられることになるだろうと思うのであります。ここで、こんどの経験をひとつ洗いざらいお話して、それに対して、隊員以外の皆さんからも、遠慮のない批判をいただいて、なっとくゆくまで討論する。これはおそらく、将来の遠征の参考資料として、必ず役に立つだろうと思うのであります。

みんなそれぞれに仕事をもつ身であって、なかなか集まる機会にめぐまれないが、この二日間は、東京在住の加藤、藤平両君も来ていることでありますから、思う存分の討論をしていただきたい。

なお、きょうは隊員以外に、AACK会員中よりゲストに来ていただいております。京都大学としては、すでに一九五五年のカラコラム・ヒンズークシ学術探検隊以来、五六年の藤田隊、五七年の松下隊と、カラコラム地域だけでもすでにこれで四回のエクスペディションを出してきました。ほかに、AACKとしては、一九五三年以来のマナスルにひきつづき隊員を送り、また五三年にはアンナプルナⅣに遠征隊を送っております。そのほかにも、会員中には、ネパール、ブータン、そのほかのアジア諸地域の、探検家・登山家がたくさんおられるわけで、きょうはそういう方々にも出席してもらっていますから、さまざまな角度からつついてもらいたいと思っております。

この会は、速記をとっておりますが、これは整理した上で、印刷し、公刊して、それをもってチョゴリザ遠征の公式報告書としたい考えであります。討論会形式の報告書というのは、エクスペディションの報告としては例のないことであって、成功するかどうか、問題はありますが、隊員だけの経験をこえて、ひろく経験者一般の批判と意見をも盛りこむためには、かえって好都合ではないか。多数のエクスペディション経験者をようするわがAACKとしては、これによって一つの特色を出し得るかもしれないと思っております。遠征の単なる紀行的報告ではなく、いま一歩、深くふみこんだ、新しい形の山岳文献でありたいとねがっています。

出　席（アイウエオ順）

今西錦司　京大・人文科学研究所教授（人類学）
1952年マナスル踏査隊長
1955年京大カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊カラコラム支隊長
1958年アフリカ学術調査

○岩坪五郎　京大・農学部林学科学生
1957年スワート・ヒマラヤ探検隊員

梅棹忠夫　大阪市大・理学部助教授（人類学）
1955年京大カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊員
1958年大阪市大東南アジア学術調査隊長

荻野和彦　京大・農学部林学科大学院学生
1957年スワート・ヒマラヤ探検隊員

○加藤泰安　東京樹脂工業株式会社重役
1953年第1次マナスル遠征隊員

○桑原武夫　京大・人文科学研究所教授（西洋文学）

近藤良夫　京大・工学部助教授（冷金学）

斎藤惇生　京大・付属病院副手（外科）

四手井綱彦　京大・理学部教授（原子核理学）

四手井綱英　京大・農学部教授（林学）

末包慶太　京大・付属病院副手（内科）

高野昭吾　京大・工学部鉱山学科大学院学生

○高村泰雄　京大・農学部農学科大学院学生

田附重夫　京大・工学部繊維工学科大学院学生

谷　泰　京大・文学部史学科大学院学生

中尾佐助　大阪府大・農学部助教授（植物学）
1952年マナスル踏査隊員
1953年第1次マナスル遠征隊科学班員
1955年京大カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊員
1958年ブータン学術調査

○中島道郎　京大・結核研究所副手

○芳賀孝郎　学習院大・政経学部学生

林一彦　京大・付属病院副手（外科）
1952年マナスル踏査隊員

○平井一正　金沢大・工学部講師（電気学）

藤田和夫　大阪市大・理学部助教授（地学）
1955年京大カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊員
1956年パンジャブ・ヒマラヤ探検隊長

○藤平正夫　北陸銀行東京支店
1953年京大学士山岳会アンナプルナ遠征隊員

松浦祥次郎　京大・工学部原子核工学科大学院学生

○山口克　大阪市大・工学部助手（有機化学）

○脇坂誠　京大・農学部農学科大学院学生
1953年京大学士山岳会アンナプルナ遠征隊員

○印はチョゴリザ遠征隊員

紀行については、私の個人の手記『チョゴリザ登頂』（文芸春秋社・刊）が別に公刊されておりますから、それのほうを見ていただくとして、ここでは、できるだけ資料記述的なことをさけ、問題提起的なゆき方をとってはどうかと考えております。活発にご発言をねがいます。

梅棹　司会者から、一言つけくわえます。いま、桑原会長のおっしゃったような趣旨で、いずれこれは印刷されて公式報告となるはずのものでありますが、それとともに、この会自体は、完全な秘密会でありますから、その点はどうぞご心配なく、なんでも発言して下さい。公表をはばかる部分は、申し出があればもちろんけずりますし、また、のちほど編集者のほうで、じゅうぶんに検討して手を入れたいと思っております。

それから、討論の順序は、各項目ともはじめに担当者から概略の報告をしてもらって、あと自由討論に入ります。話の途中でわりこんでもらっても、かまいません。質問はどしどしシャープにお出し下さい。とくに、きょうゲストとして来ていただいている今西さん、四手井さんはじめ、エクスペディションの経験者のみなさんに、どんどん発言していただきたいとのぞんでおります。

なお、きょうはオブザーバーとして、ＡＡＣＫ会員以外の、現役の京大山岳部員にも出席してもらっていますが、その方々も、発言していただいてけっこうです。

第一章　出発まで

発端——一九五三年の秋

梅棹　それでは、そもそもの話の始まりを、今西さんからお話しねがいます。なぜチョゴリザをえらんだか。

今西　発端をお話しするためには、今度のチョゴリザだけでなく、一九五五年のカラコラム・ヒンズークシ探検のときの事情までさかのぼらなければならないと思います。だいたい、ＡＡＣＫの二十五周年の記念事業として、カラコラムをやろうということを私が提案したのは、そのもうひとつまえ、一九五三年の秋だったと思う。楽友会館でのＡＡＣＫの総会の席上だった。

私はそのとき、ＡＡＣＫは戦前にもカラコラム遠征を考えたこともあり、そのとき以来の会長の木原さんを、ぜひ隊長として実現したいと考えた。それで、五四年の暮れから五五年の初めころにかけて、大いにＡＡＣＫをゆさぶった。ところが、ＡＡＣＫのほうは、もうひとつ気勢があがらないのだ。

一方、木原さんを引っぱり出すということになると、登山隊のほかに、もちろん学術班を組織しなければならない。京大としては、そっちのほうは、ＦＦ（生物誌研究会）で担当することになるわけだが、ところが、そのほうがひじょうに熱が高まってきて、けっきょくＡＡＣＫの立ちあがるのを待っていられない状態になった。というのは、探検の費用を、大学の経費として文部省から出してもらうという方策だったから、予算提出の期限があるわけだ。文部省からそういう学術探検に金を出すということは、それまで一つも先例がないので、ＦＦのほうでも、悲観的な意見もあったのだけれども、これはどうしても実現したいということで、そのほうに話が進んでしまった。その結果、ＦＦの独走となって、ＡＡＣＫがおきざりにされてしまう結果になった。

桑原　ぼくは最初の五三年のときの事情はよく知らぬけれども、五四年にカラコラム・ヒンズークシを出すというころになって、その計画にはＡＡＣＫ的要素が少ないということでだいぶんもめた。四手井（彦）君と君とがそれで論戦したことがあったな。今西がＦＦによろめいて、ＡＡＣＫ的でなくなってきた、というものすごい激論をやったことがある。

加藤　それはアンナプルナ隊が帰って来たときですよ。神田の駿台荘で鈴木信と今西さんと私とでサルトロ・カンリをＡＡＣＫでやろうという話になった。私はそうでもないけれど、鈴木はＡＡＣＫの楠木正成ですよ。（笑声）　いきり立って、帰って四手井さんと話して、これはぜひＡＡＣＫでやろうということだった。ところがそのうち、話がだんだんＦＦのほうへ行ってしまって、楠木正成のおやじの四手井さん——後醍醐天皇だな。（笑声）——その四手井さんがまた怒り出した。はじめのいきさつはそうだったのですよ。

桑原　今西は色気が多すぎるというのでもめた……。

加藤　武士と町人の違いだという。（笑声）

梅棹　四手井さんと今西さんが、激論のはてに、最後は捨てぜりふを残してわかれた……。

桑原　そういうことがあったのが、チョゴリザの目に見えぬ精神的推進力になっているのですよ。ああいうものすごい議論があったから、今度こういう一種の解決法が出たときに、みなすっと力が入っていったということはありますね。

探検から登山へ

今西　ともかく、五五年のカラコラム・ヒンズークシ探検は、ＡＡＣＫの手をはなれてＦＦでやることになった。

しかしながら、ぼくがカラコラムに行くについてなにを考えていたかというと、ぼくはそのときには、シアチェン氷河を、シア・カンリの横っぱらをトラバースして、コンウェイ・サドルへ出て、それからバルトロへ出たいと考えていたのだ。それが一つの課題であった。それからその次は、アスコーレまで行って、もう一ぺんずっとビアフォを上って、スノー・レークからむこう側のシムシャールのほうへおりたいということを考えておった。しかしながら第一のものは、ＡＡＣＫの登山家がサポートしなかったら、ＦＦの学者たちだけでは、ちとむつかしい。また、とくにインドとパキスタンの国境の問題がある。これはまた将来だれかがやるだろうということにしてあきらめた。しかし、なお、シムシャール越えは、五五年にやるつもりでおったのです。しかしそれもできなくなった。

それから五五年の計画は、東のほうをあきらめたから、西のほうさんがまた怒り出した。はじめのいきさつはそうだったのですよ。

桑原　今西は色気が多すぎるというのでもめた……。

加藤　武士と町人の違いだという。（笑声）

梅棹　四手井さんと今西さんが、激論のはてに、最後は捨てぜりふを残してわかれた……。

桑原　そういうことがあったのが、チョゴリザの目に見えぬ精神的推進力になっているのですよ。ああいうものすごい議論があったから、今度こういう一種の解決法が出たときに、みなすっと力が入っていったということはありますね。

探検から登山へ

桑原　今西は色気が多すぎるというのでもめた……。

加藤　武士と町人の違いだという。（笑声）

梅棹　四手井さんと今西さんが、激論のはてに、最後は捨てぜりふを残してわかれた……。

桑原　そういうことがあったのが、チョゴリザの目に見えぬ精神的推進力になっているのですよ。ああいうものすごい議論があったから、今度こういう一種の解決法が出たときに、みなすっと力が入っていったということはありますね。

へ少し伸ばしたいということも考えておった。それも資金難でついにだめになりました。結局五五年の延長として、藤田君が五六年にスワート・ヒマラヤをやり、五七年に松下さんが東ヒンズークシをやって、西のほうを片づけたのです。

そのときの隊員は探検部の現役学生だったが、ぼくはこの若い連中が六〇〇〇台の山を一つくらい登ってきてくれることを期待しておった。そのときのことは五七年の隊員であった荻野もここにおりますから、知っていると思うけれども、結局六〇〇〇メートルくらいの山でも、学生だけでは登れぬという実績がでたわけです。

そういう結果が出て、その次には、もう学術探検でなくて、どうしても一ぺんカラコラムの本格的な山登りをやりたいという気があった。いい忘れたけれども、五六年、五七年はバキスタンのバンジャブ大学とジョイントしてやっているのです。ところがバキスタンの連中は、どちらかというと学術ということにあまり熱心でない。むしろ山登りでハデにやりたいという気持があって、できればジョイントの「登山」がしたいという気持だったようだ。それをこっちは、いままで学術探検のほうへひっぱっていったわけです。そこでいよいよ、こっちも山登りでゆくときめて、バキスタン側にもそのことを提案した。それまでもずっと交渉のあったバンジャブ大学のベッグ教授に、五八年にはジョイントで山登りをやろうということを、ぼくからいってやった。それが一九五七年の五月ごろです。

パーミッション来たる

今西　しかし、はじめから、チョゴリザをやると確定していたわけではない。近藤君に記録を見てもらえばわかるわけだが、五七年の五月に手紙を出したときには、もうチョゴリザの名前が出ていますか。

近藤　五七年の五月にベッグへ手紙を出した。そのときにラカポシ、ハラモシュの代りにチョゴリザをジョイントでやろうと……。

今西　むこうははじめラカポシを主張しておった。ラカポシはほかの国に単独でやらさぬことにしている。パキスタンがどうしても登りたいから、それはリザーブしている、というのだ。それでラカポシならぜひやりたいということです。ところがぼくは、ジョイントでやるには、相手は弱いし、ラカポシはちょっと手ごわすぎると思っていた。ラカポシは一回では打てぬ。偵察と登攀と二年がかりになるとぼくは思った。こちらからは、一年で一ぺんに成功できる山をえらびたいということを持ち出した。それにはチョゴリザがいいといった。ところがむこうは、チョゴリザは遠いから、費用がかかって行けぬという。費用折半で行こうという考えだったから。それで、そんならせっかくだがジョイントはあきらめようということになり、こちらだけ単独のアプリケーションを、パキスタン政府に出すことになった。

それからあと、この計画は非常によろめくのです。最後までたいへんなよろめきで、それを詳しくいうていても始まらぬし、それは省略しましょう。一つには、パキスタン政府からのパーミッションが待てどくらせど来ない。それからもう一つは、リーダーがなかなか決まらなんだ。

加藤　たしか八月のときには、リーダーは私ということになった。ところがそこで私が病気したのですよ。

今西　チョゴリザは許可も来ないし、これはしようがないから、いちばんしまいには、川喜田隊と合流させようか、というようなお話にまでなった。ちょうど西ネパールの学術探検をやろうとしていた川喜田隊の計画が、これもゆき悩んでいたので、これにAACのKの隊を登山班として合流させて、一転してネパール・ヒマラヤのカンジロバ・ヒマールをやったらどうか、こういうところまで来ていたのだ。そうしたら飄然とパーミッションが舞い込んで来た。あれにはぼくらもちょっとびっくりした。

近藤　パーミッションの来たのは、五八年の一月十五日です。

今西　ちょうどそのとき、川喜田隊に合併の話をしているときだった。それで、川喜田、すまんが、これはあかん。(笑声)

四手井(英)　川喜田は完全に肩すかしを食ったのだな……。

今西　それからぼくは、二月のはじめにはアフリカに出発しなければならぬし、最後の切札は桑原君に出てもらうより以外にないというので、頼みに行ったのは一月三十一日ぎりぎりや。

チョゴリザをなぜえらんだか

今西　それでは、なぜチョゴリザをえらんだかということですが、それはやはり、一九五五年のバルトロ入りのときにはるかに見てきたからだ。今度、みなさんバルトロへお行きになって、きっとチョゴリザとバルトロ・カンリという二つの山がとくに目についたに相違ないと思う。これは昔でもそうであったとみえて、アブルッジもコンウェイも、この二つの山のどっちかにかじりついている。このごろの若い人は、目のつけどころが違うて、あんなのはベッピンでないということになるかもしれないけれども、ぼくは古いタイプだから、やはり五五年に行ったときにこれはよい山だと思った。外国人の見る目も、わしらと変りはないと思った。そのほかヒスパーやビアフォも歩いてみたけれども、これというものはないのですよ。それでいまの話で、がんばれば必ず登れる山という一つの条件をつけた場合に、カラコラムではチョゴリザ以外にない。

ハラモシュも考えてみたけれども、ハラモシュについてはチョゴリザほどデータがそろわない。それでぐずぐずすると一年目は偵察に終るかもわからぬ。それでひたすらチョゴリザへばく進したわけです。

そこでぼくとしては、今度は登頂間違いなしという確信は持っておったのです。しかし、逆に、みんなが帰って来たときには、〝せっかく行ったのに、山がやさしすぎた、あんなやさしい山をなぜえらんだといって、怒られはせぬかとそれを心配していたのです。しかし、みなさん帰って来てからの話を聞くと、これはやはりいい山だったと思っています。

桑原　ちょっと質問。ぼくもバルトロへ入ってみて、ぼくは美人の好みがもっと悪いかもしれないけれども、バルトロ・カンリとチョゴリザに引かれた。君はそのとき、見えないからだろうが、ガッシャーブルムなんかは初めからおとしたのですか。

今西　ガッシャーブルムは好きになれぬのです。ブロード・ピークというのはごつい山でちょっとほれますけれども。

梅棹　それはどうして。

今西　ぼくはガッシャーブルムを一気に登ってこいといって、皆さんが登れるかどうかということに、いささか心配があったな。ブロードというのはごつい山だ。

加藤　いや、ブロードは登りやすい山です。チョゴリザはやさしいといわれたけれども、あれはむつかしい山です。というのは、アイス・フォールの問題とか、頂上付近の問題でなくて、アイス・フォールから稜線に出る間の内院がものすごく広かった。こういうのはぜんぜん経験したことがない。若い連中はもちろん、藤平にしても私にしても、経験がまったくない。新しいケースでびっくりした。でかい山だという気がした。アプローチはマナスルより大きい

のじゃないかな。

今西　マナスルはまことに優美な山で、下からずっとわかりますな。

加藤　今度は見えないところがいっぱいある。

隊長がきまるまで

梅棹　うつべき対象がきまり、つぎは隊員の決定ですが、まず、隊長がきまるまでの事情をお話していただきましょう。これは、隊長の桑原さんご自身におねがいします。

桑原　ごく大筋だけ話します。ちょうどそのころ、今西君はアフリカへゴリラ探検に行く、その出発の直前だった。今西君が京都を出発したのは何日でしたかネ。

近藤　二月二日です。

桑原　その出発の前々日だった。今西君から「いよいよ出発するので話がある」という電話がかかってきた。えらいよい調子の電話だと思っていたら、しばらくして今西君が伊谷君をつれて、上機嫌でやって来た。はじめは、ぼくのほうの研究所でやっている共同研究の話だとか、分担原稿を書かないで出発するのは相すまぬとか、そういう殊勝な話がだいぶんあって、十一時ごろになると、「ときに今度は君が遠征隊長や」という。なんの話かこっちはわからなかったのです。そしたらチョゴリザだという。びっくりしてしまった。AACKの委員会で、君に隊長をやってもらいたい、ということに決まったというのです。

話はさかのぼるが、木原さんが京大をやめるとともに、AACKも会長なしになった。そのあと、今西君が委員長ということでやって来たのですが、それではまずい、会長を置かなければならぬというので、ぼくに、会長になれ、という。いろいろなことは省略しますけれども、四手井（綱彦）君、今西君、そのほかから勧められて、私は引き受けたのです。ちょうど私は、別府の日教組の教研集会へオブザーバーとして行っておったのですが、その間に私が会長になるということが合法的に成立していた。

その後まもなく、パキスタン政府のほうから、チョゴリザ登山を許可するという通知が着きました。そこで委員会をひらいて、私は不在のままですけれども、桑原を隊長としたらいいだろうということに決まった。それは形式論的に、会長みずから出馬すべしというのが一つの理由になっておったようであります。

桑原会長の考え

桑原　さて、今西からこの話を聞いて、私はもちろん、体力の不足とか、しばらく山から遠ざかっているなどの理由をあげて、固辞しました。しかし今西がいうには、AACKで長年いっしょにやってきて、みんながこうして頼んでいるのに、ここで引き受けぬのは、水くさい――そんなエゲツナイ言葉ではなかったけれども、そういう意味で強く押してくる。私は、いずれみんなと相談した上で、確答するというと、今西は、わしが出発する前に決めてくれぬと、わしは安心してアフリカへ行けぬ、というセリフです。うちの女房はそんなむつかしい話になっているとは知らないから、ビールをもってくると、かれはグイグイ飲んで、ますます調子がついてきた。

そのとき私は、体力的にいって、上のほうのキャンプまではとても行けないと思った。そういうと今西は、「それはそうや。都合で君はカラチで帰ってもええ」などという。もちろん、できればスカルドまで行ってもらいたい。そこまでは飛行機が行く。アスコーレ、さらにベース・キャンプまで行ってもらえばいちばんいいけれども、それはそのときの調子でよいがな。今西は、女のことは知らぬが、男をくどく技術では定評がある。強引さと人情の二刀流です。あとで出発前に、ベース・キャンプまでは行くが万一そのときからだの調子が悪くてみなのめいわくになりそうなら、一人で引きかえすといってやったら、今西がアフリカから、戦闘開始をまえにして帰る気になれるか、といってきたのです。カラチ説はとっくに忘れている。私もスカルドですむとは思わなかったけれども、引き受けなければならぬのじゃないか、自分にできるだけのことはやってみよう、という気持になってきたのです。

それが、スカルドまでどころの話ではなくなってきたのは、のちに、新聞社とかそのほかへ資金をたのみに行くと、「先生はいったいどこまで行くのですか」ということをいちばん大きな問題としてきかれた。「ベース・キャンプまでは行きます」という返事をしているうちに、それが確定的事実になって、なかには、頂上まで行くといわぬのは怠慢だというような顔をする人まであらわれた。

副隊長問題

梅棹　隊員選考の事情に入りましょうか。とくに、副隊長の問題ですが。

桑原　今西が私をひっぱり出しに来たときに、すでに副隊長の問題が出ているのです。

ぼくのような隊長をかついだ場合は、副隊長がよほどしっかりしていなければ困る。そういう話はぼくもしたし、かれからも出たわけです。そこで加藤泰安を第一に考えた。ただぼくが心配したのは、病後のかれの健康のことだった。

ところで今西は、このときもう一つ、土倉九三君を候補にもちだして、若手をよく掌握しているといって、相当強く推せんした。ぼくも土倉はたいへんよく知っているが、しかし、これはたいへん重要な問題である。それで今西君が出発する前に、副隊長のこともフェアーに決めておいてほしい、今西君とぼくの間の話ではなしに、AACKのみんなが諒承したという形で決めておいてほしい、ということをいったわけです。しかしこれは決まらずじまいで、副隊長の問題はペンディングのまま今西君は出発してしまった。

私のメモでは、桑原さんのところへ隊長を持っていく前に委員会がありまして、いろいろの案が出たわけです。隊員は隊長が決まってからだ。まず隊長、副隊長を決めようというので、いろいろ議論があった。A案として桑原、加藤、脇坂。つまり桑原さんが隊長で、加藤さんが副隊長。隊長は山へ登らんでもよろしい、副隊長が山へ登る。それから脇坂……。それからB案は、今西寿雄さんが行けたらというので、今西、脇坂、こういう案です。しかし、AACKとしては、やはり京大教授の隊長が望ましい。それで桑原さんのところへ頼みに行ったわけです。ですから、委員会では、加藤さんは副隊長というのが、なかば自動的に決まっていたような形です。

桑原　そこで私は加藤にすぐ京都へきてもらった。元気そうだし、本人も冬休みに富士山をやったりしてじゅうぶん自信があるという。それで副隊長が決まりました。

隊員の選考

桑原　隊員の選考事情は、長くなりますから、かんたんにいい

ます。隊員は、選考委員会でえらんだ。わたしと加藤、それからこの計画のはじめからの推進役であった脇坂と山口が自動的に入り、あとは今西（寿）、四手井（彦）、四手井（英）、近藤、それから酒戸、そういうところでだいたい選考することになった。

いちばんさきに医者を連れるか連れぬかということで、だいぶん議論があった。諸事切りつめてやるのだから、医者なしで辛抱しようという意見も出たのですけれども、私は強硬に医者を入れることを主張した。医者がいたら当然助かるようなことでへバるものが出て、登頂ができないということになったら、ほかの山岳団体ならいざしらず、科学的登山をたてまえとするＡＡＣＫとしては、それは困る。そこで医者を入れるという原則が決まった。人選ということになると、中島というのは、四手井が登攀者として推していた。登攀者ではあるけれども、中島を医者として採る。これがいちばんさきに異論なしに決まった。それから脇坂と山口が決まった。その次にいろいろ候補者が出て、平井、高村をとった。その辺で、加藤のほうから、とにかく五〇〇〇メートル以上に登った人間が少なすぎては困る、という意見が出た。脇坂のほかにもう一人というわけで、岩坪を入れることに決まった。

それから学習院の問題は、はじめに加藤君から話があったが、やがて学習院の山桜会会長松方三郎という名前で、ＡＡＣＫ会長桑原武夫殿という公式文書が来ました。学習院と京大との歴史的因縁を説いて……。

梅棹　名前は書いてありましたか。

桑原　書いてない。それは芳賀に決まった。

こうして相当進んだときに、主として今西寿雄から、このパーティでは弱いという意見が強く出てきた。これは藤平を入れなければもちませんぜ、ということをだいぶんきつくいって、私も加藤君もそういう気になった。藤平はなかなかふんぎりがつかなかったのですけれども、最後は虎ノ門のそばの洋食屋へ今西寿雄、加藤、桑原三人が藤平を呼び出してそこでだいたいハラをくくらしたと思っております。それは私が加藤君と外務省へ行ったときの帰りでした。

予　算

梅棹　それでは、資金の関係のことを少し話していただきましょう。近藤さんにお願いします。

近藤　募金と会計のことをいっしょに申します。まず最初に予算のこと。さっき今西さんから、チョゴリザ計画はアプリケーションを出してからあとで、ひじょうによろめいた、というお話があったのですが、予算のほうも、ひじょうによろめいているわけです。アプリケーションを出す当時は、隊員五名、だいたい六百万円程度の案だったわけですが、秋ごろになると、そういうことではスポンサーがつかないだろうというので、隊員も五名、五百万円というようなことになった。それから、さっきも話の出た川喜田隊との合同というときには、三百万くらいでいこうじゃないか、というところまで来た。

ところが、パキスタン政府からパーミッションが来て、桑原さんが隊長に決まりますと、桑原さんが出るのなら大きなパーティを作れる、ということになって、朝日新聞社へもって行ったときは、五百五十万、八人ということだったのです。その予算でやれるかどうか、いろいろ検討いたしました。三月一日楽友会館でやって、最終的に決まったのは、八百六十万。

桑原　そのとき何人でしたか。

近藤　九人です。

加藤　十人でしょう。

近藤　藤平が入って十人。

桑原　朝日へは八人案で出したわけですね。

近藤　そうです。あとは実際の行動に移っていくわけですけれども、会計のほうからさきに申しますと、実際ふたを開けてみると、予算よりだいぶんふえてくるわけです。なぜふえたかというと、装備がいちばん大幅にふえた。だいたい百万円くらいふえております。

加藤　けっきょく八百九十万くらいかかったのですか。

近藤　いや九百五十万くらいかかっております。

加藤　これをここでもう一ぺん分析してみて、もう少し節約すればどれくらいでやれるのか、それを出していただきたい。

募　金

近藤　募金のことですが、初めは不景気なんで、あまり集まらないだろうと思って悲観的でした。しかしとにかく集めないことには遠征隊は出ないので、三月一日に募金計画を立てました。そのときは朝日が決まっておりまして、朝日が百五十万、日映が百五十万、学習院参加料が百万、個人負担が五十万、そのほかに大阪で三百万、東京で百万くらい集める、こういう計画でした。募金をあつかう後援会の会長は鳥養利三郎先生、顧問は平沢学長になってもらう。副会長として豊崎先生、松方さん、それから募金の委員は四手井（彦）、酒戸、多田、芦田、今西（寿）、滝川、西堀というような方々にやってもらいました。

募金の作戦ですが、三月一日に豊崎先生に相談に乗っていただきまして、前の五三年のアンナプルナとか五五年のカラコラム・ヒンズークシ、それからスワートとかバンジャブの募金のデータを整理して、それでいろいろ具体的に計画を立てた。このデータはひじょうに役に立ちました。募金のすべり出しはひじょうによかったのですから、隊が出発して一カ月くらいのうちには支払をぜんぶすますというようなところが予算がふえてくる。それで端境期を切り抜けられるかどうか心配しましたが、みなさんにがんばっていただいて、なんとか切り抜けたというわけです。

梅棹　募金の実際面については、エピソードとしてもおもしろいのがあるだろうけれども、公表をはばかるものも多いと思うので、別の機会にいたしましょう。

第二章　スカルド集結

船便をさがす

梅棹　いよいよ出発、ということになるわけですが、はじめに、パキスタンへゆくまでの交通機関の問題、たとえば、船便と飛行機のわりふりなどの点を、説明してもらいましょう。

桑原　原則は、いうまでもなく予算が少ないので船便を主とする。隊長、副隊長、カメラマンは飛行機ということに決まっていた。藤平が入れば、これは銀行勤務の関係があって、もちろん飛行機でなければだめだ。それで、飛行機は四人、あとの七人は船ということになった。

ところが、なかなか船がないわけです。そこでたいへん苦心をした。

近藤　いろいろな船会社を調査して、けっきょく、山下汽船の山下丸に三名、三井船舶の天城山丸に二名、それから飯野海運の若島丸に二名、乗せてもらえることになった。

これでだいたい七名決まったわけですけれども、いちばん最初に出るのが天城山丸ですから、これになるべくたくさん荷物を積む。最後の若島丸がひじょうに遅れれば、ボンベイからカラチまで飛行機で飛ばす。これはあまり荷物を乗せない。そういう方針でやった。

動乱のコロンボ

桑原　ところが出帆したら、若島丸がどんどん遅れ、ほかの二隻が早く行ってしまった。若島丸の平井、芳賀は最初ボンベイから飛行機でカラチに飛ぶ予定だったが、ボンベイの沖待ちがたいへん長いので遅れる。うっかりすると、さきに着いた隊員と、カラチで二週間の開きを生ずる。季節が遅れてはまずい。ボンベイはだめということになった。それでコロンボで乗り換えさせようという方針にした。

ところが、そう決めたあとで、またやっかいなことになった。たまたまコロンボで内乱が起って、戒厳令がしかれた。セイロン政府は、近海を通っている船を片っぱしから徴用するという、むちゃくちゃなことをやり出した。それで、船が徴用されてしまいはせぬかということで、その晩は近藤君とぼくは寝なかった。（笑声）

電報でいろいろ指令を出すわけですが、これは少し文句をいえば、いつコロンボに着くかと聞くと、平井から電報で、「二九ヒコロック」といってくる。「コロ」というのはコロンボのコロか、頃のコロか、さっぱりわからない。腹を立てたが、電報の打ち方は研究する必要がある。

平井　じっさいいいますと、船がコロンボに寄るか、インドの南西端にあるコーチンという港に着くか、コロンボへ着く日までわからなかった。じっさいわかったのは六月二日で、じつは電報を打ちましたのは五月三十一日でした。「二日ヒルコロック」と打ったのですけれども。

桑原　シンガポールのことはシンと打ってくる。ムダ使いするなという命令を厳守したのか、やたらに省略するので、電文判読に困った。コロンボの大使館へ学長から電報を打ってもらった。

平井　けっきょく六月二日の午後に、船はやっとコロンボにゆくことに決まり、その夜、コロンボ港外に到着しました。

ところが動乱のため入港できない。京都からは、コロンボで飛行機にのりかえよ、という指令がきているが、コロンボ上陸は予定外だから、ビザがないのです。それで、コロンボの日本大使館に電報で援助をもとめ、どうやら上陸でき、ぎりぎりで、六月五日のKLMでカラチへとぶことができました。

船賃論

中尾　船の話は、おもしろいけれども、エクスペディションとしては、はなはだジジムサイ話だと思うのです。どうしてこんなまずいことになっているのか。すべて日本の旗を立てた船の上のできごとが、どうも日本の国でないみたいな話ばかりで……。いま日本で定期客船が全然ないというのは致命的なんだね。

加藤　さしあげるものをさしあげれば乗れるのだけれども、タダ同様で乗ろうとするから、だいぶんジジムサイことになる。

中尾　客船がないでしょう。

山口　外国船ならあったのです。予算の関係で日本の船にしたわけです。

藤平　日本山岳会の連中に聞くと、英国船に乗って行きますね。あれは安くする道があるとかいっていましたね。くわしいことは聞いていないですけれども、決して三百何十ドルという公定の金は払っていないわけです。安いほうで行っているのです。

中尾　やはり客船に乗って、荷物もいっしょに持って行くというのが標準的なやり方でしょう。

藤平　それだったら全隊員がいっしょに乗れるし、途中でやきもきすることはないと思う。

中尾　すべて話がややこしすぎる。

藤平　日本の東南アジアの船というのは、船客は乗せないという協定みたいなものがあるらしいのですよ。それで要するに今度も船客扱いにせずに、船員扱いでつれて行ってもらったわけです。船員扱いなら、一日の食費も三百円くらいの負担ですむわけなんです。これからはそういうふうにやると、手間もかかるだろうし、隊員の数によって船が何バイにも分れるだろうし、外国船を安くしてもらう方法をいまのうちに見つけておくべきだと思う。

中尾　ぼくはなにをいっているかというと、日本の定期客船がカラチまで通っていないのが情ない。

加藤　なんだ、お国の話か。お国のために憂えている。（笑声）

中尾　だいたい一万円や二万円で船に乗るというのが、ぼくから見るとはなはだインチキなやり方だと思う。ちゃんと船賃を払っているでもなし、全然タダでもなし。

加藤　おかしいけれども、安いほうがいいじゃないか。

中尾　安いというけれども、けっきょく、むこうに無理をかけることで……。

桑原　それは原理論だな。スマートにやったほうがいいに決ま

っているけれども、エクスペディションには金がいる。こういうことも、どこかで少しでも節約したいということから来ているわけだ。今後はそうでないことを望むけれど。

藤平先発隊

梅棹　それでは次は、舞台がカラチに移るわけですが、はじめに桑原さん。

桑原　桑原、加藤、藤平、潮田は飛行機で船の着くころに行く予定だったのだが、船やいろいろなことがゴタついてきたので、どうしても一人さきに行って準備しなければならぬ。それで、急に藤平に五月二十七日に出発してもらうことにした。藤平に電話をかけたのは二日前だったね。

藤平　ひどいですな、じっさい。（笑声）

桑原　たしかにひどかった。藤平は「それはむちゃです」といったけれども、かれが早く行ったので、諸事うまくいったと思う。

藤平　わたしは最初、六月十日に四人で飛ぶつもりでのんびりかまえておったら、五月の二十九日にしろということで、二十九日の切符を買った。こんどは二十五日になって二十七日に飛べということで、だいぶんアワをくったわけです。

梅棹　それでは、藤平さんから、カラチにおける先発員の活動をうかがいましょう。

藤平　ともかく二十七日に乗って、二十八日の晩の六時ごろに飛行機はカラチに着きました。カラチにおける私の仕事の一つは、船で来る荷物と隊員をスムースに受け入れるということにあった。それでさっそく、大使館へ行って手つづきをしらべました。

三十日には山下丸が着いて、山口、脇坂、中島が来ました。荷物もかんたんにおろした。

二日には、天城山丸が入ってきます。この天城山丸には手こずりました。カラチの港は三年ごしかなにかで大修理をしている。一日に二ハイしか荷物をおろす能力がない。沖待ちがだいたい二十バイもいることがわかった。二十バイとすれば、あと十日間待たなければならない。こんなところでじだんだ踏んでも仕方がないというので、今川君と二人でかけずりまわって交渉した結果、沖積みをやるということに決めたわけです。じつは沖待ちというのは、ぼくは港のすぐそばにいるのかと思ったら、はるか水平線のかなたです。天気の悪い日で、波が猛烈に大きい。水平線の左のはしから右のはしまで船が並んでいる。その中を、やっとのことで天城山丸を見つけました。すでに夜になり、海面はもうまっ暗だったのですが、ウィンチでおろすのは危いというので、船員総出で、ロープで一つずつ荷物をおろす。サーチライトで海面を照らしてもらって、だいたい八時半ごろにおろしたのじゃないかと思います。船の人たちにはじつによく協力してもらいました。

とにかく二日に天城山丸の上陸を終ったのですが、のこる心配は、若島丸です。これは日程がぜんぜんわからない。いくらやきもきしてもしようがないので、若島丸に向けて、とにかくコロンボでもどこでもよいから、飛行機をつかまえて乗れということだけは電報を打ったと思います。そして、本隊との連絡のために、高村君を残して、とにかく六月四日のチェナブ・エキスプレスに山口、脇坂、中島、岩坪、今川と乗って、ビンディへ向ったわけです。

ラクダに乗らなかった話

藤平　カラチでは、こういうことがあった。六月一日は日曜

で、仕事がないので、一日遊びまわりました。海岸へ遊びに行ったのですが、ラクダがいる。金をいくらか払えば、日本の貸馬みたいにボコボコ乗せてくれる。みな乗りたがったのですけれども、私はとめたのです。こんなところで変なものに乗って、足を折ったりしたらたいへんだ、というわけで。

中尾　一九五五年のときには、ぼくは乗ったよ。

藤平　山が終って帰りだったらなにをしてもいいだろう。道ばたに売っているものを買って食ってもいい。山へ行くまえにへんなことがあったら名折れだと思って厳禁した。これにはだいぶん怒られた。タマゴを食いたいというのもいたし、ラクダにどうしても乗りたいといってがんばるのもいたが、それはやらせないようにした。

中尾　やはり登山隊と探検隊のちがいだな。探検だったら、なるべくむこうのいろいろなものを経験するために、ラクダがおれば積極的に乗ってみるし、町にあるものは、食べたかったらどんどん食べてみる。

今西　しかし、探検でも、からだをこわしたらいかんよ。

藤平　船に乗って来たものは運動不足になっている。私は飛行機で飛んで、風土に慣れていない。好奇心を満足させたいことはやまやまだけれども、へんに小さな好奇心を満足させて、失敗するようなことはいけない、と思った。

大使館員・今川君

近藤　今川君のことをちょっと話して下さいませんか。

桑原　今川君はカラチの大使館員ですが、このまえのスワートの松下隊がたいへん世話になった。それで、その隊員の岩坪君なんかは、ごく親しくなっていたわけです。私が今川君の名まえを聞いたのは、ちょうど隊長に決まったころだったと思いますが、岩坪がこんども隊員にきまったので、かれから今川君に手紙を出していろいろ援助方を求めた。できるだけ援助しますという返事が来たが、それと同時に、今川君も隊に入ってもらったらどうかという話が起ってきたのです。このまえバルトロに入った今西隊では、いろいろなトラブルがあった。けっきょく言葉の問題がたいへん重要だ。本人がきわめて弱い人なら問題外だが、スワートのときの情報を聞けば、たいへんしっかりした人物である、語学もよくできる。これは入ってもらったらよかろうということになった。外務省へ外貨のことで行ったときに、ちょうど大使の会議があって、パキスタン大使の成田さんが見えていたので、エクスペディションのことについて、お頼みしたら、自分としてはできるだけ援助すると、たいへん好意的なお返事だったのです。ついでに、今川君の話をきり出した。それはたいへん結構だ、本人の会話の勉強にもなるので、桑原さんが必要と思われる期間だけ自由におつれ下さいと、こういわれた。それを今川君に通知すると、かれもたいへんよろこんだ。かれ自身、参加を希望していたわけです。

それからは、かれを通じて、現地の情報をどんどん送ってもらった。たとえば、バルトロのイカダの問題とか、上のほうのつり橋の今年の状態とか、スカルドおよびアスコーレの食糧補給事情とか、飛行機のこととかを聞いてやったわけです。また、パキスタン側の連絡将校にワジー大尉が決まったので、今川君にさっそく会いに行ってもらった。

今度のパーティの成功は、かれに負うところが相当ある。言葉ができるので、クーリーたちがいろいろのことをいっているのがよくわかる。

連絡将校ワジー大尉

梅棹　パキスタン側のリエゾン・オフィサーについて、話して下さい。

桑原　むこうから、ワジー大尉というのを連絡将校に任命する、といってきたので、すぐ今川君に連絡した。今川君はワジーに会いに行きました。そのときの報告によると、カチカチのマホメット教徒で、たいへん弱々しい人間だということだった。たいへん心配していたのですが、行ってみると、ボテボテに太っている。今川君が会ったときは、ちょうどマホメット教の断食の最中で、それでやせ衰えていたらしい。

政府か軍かで募集――というとおかしいけれども、こういう件があるが、希望者はないかというらしい。そのときにワジーは手を挙げたわけです。かれは、リエゾンに決まると、日本のことを知りたいという手紙をぼくのところへよこして、日本語のカンバセーションの本を送ってくれといってきたから、送った。ぼくが行くまでに少しは覚えているかと思ったが、カタコトも覚えていなかった。

梅棹　これは軍人ですか。

桑原　戦車隊の隊長で陸軍の大尉。戦車二十九台率いている。

梅棹　ゴツイな。

桑原　いくらか融通のきかぬところがある。人夫が騒ぎ出すと、道徳訓話をするクセがある。出発のまえの日にみんなで話し合ったときに、かれはこういった。自分は努力する、しかし自分が失敗しても、自分の失敗はワジーの失敗であって、それはパキスタン軍ならびにパキスタン国の欠点ではない。それはよく了解してくれということをくどくどいくらいいいましたね。そういう愛国者であるのは、はじめ人夫の要求とか人夫使用規程というようなものをたいへん重視して、人夫のいわば味方をするような態度であった。のちには、そういうこともなくなったけれど。

カラチでの交渉

梅棹　隊長がカラチに到着されてからのことを、かんたんに。

桑原　まず大使館へあいさつをしました。大使館では、われわれのためにパーティをしてくれました。それから前田一等書記官の案内で、東亜局長、文部省の体育次長に会いました。それから地図の交渉、これは、軍でもらえというアドバイスを得ました。それから天気予報の放送、これは外務省へ頼んだがたいへん好意的であった。それから考古学局のキュリエルという人に、来年の京大水野隊のことで話に行きました。

梅棹　その人には前のカラコラムのときになんべんも会って、岡崎君なんかもたいへん世話になりました。

中尾　カラチの大使館はじつによくやってくれる。ぼくは、日本の在外公館のうち、カラチの大使館ほどエクスペディションの世話をよくしてくれるところはないと思う。

梅棹　ぼくの経験からいうと、タイのバンコックの大使館なんかも、じつに献身的にやってくれた。

中尾　けっきょく、エクスペディションのために大使館が払うエネルギーは莫大だな。

藤平　たとえばカラチあたりでは大使館にひじょうに世話にならなければならないのだが、ただ一片のよろしく頼むという抽象的な文書がいっているだけなんです。こういうことはやはり今後、考えるべきじゃないかと思うのです。

チェナブ急行

梅棹　さらに舞台が北にうつって、こんどはラワルピンディですね。

桑原　私たちがカラチにつくと、藤平らの先発隊は、出発している。用事をすませて私と高村は、ベッグ教授に会うためにラホールを経由して飛行機で行った。ほかの者は節約という意味で汽車にした。加藤、平井、芳賀、潮田はチェナブ・エキスプレスという列車で行った。これがエゲツナイ汽車でね。

今西　何等に乗ったの。

桑原　一等と二等があって、はじめ節約主義で二等にしようと思った。ところが二等ではアカンというので、ぜんぶ一等でした。

今西　カラチで暑気に悩まされて、汽車に乗ったら冷房で、やれやれ救われたという気持がしなかったか。

山口　いや、冷房車の切符が取れなかったのです。

桑原　チェナブには冷房がついてなかった。

今西　冷房がなかったら、大きな氷柱を持って来ないか。

藤平　氷柱という説もありましたが、いろいろ聞いてみると、氷柱を立てて窓をしめきると、湿気があがってかえってつらいということを聞いたのです。

山口　去年のスワート隊があれでこりたらしいです。

藤平　それで氷柱を持ちこまなかった。

中尾　ぼくらのときは氷柱でらくだった。

桑原　山口は、窓を開けずに毛布をかぶったら涼しかったという。

藤平　ぼくらはそうです。

桑原　ところが加藤部隊は暑いというので窓を開けた。(笑声)

芳賀　いや、最後は閉めました。

平井　これは、サイエンスの問題です。(笑声)

芳賀　汽車の中でおもしろいことがあります。車室に荷物をいっぱいつみこんだら、車掌が来てエクセス・チャージの荷物の代金というのです。一〇〇ルピー取るというのです。加藤さんがぼくに安く交渉せよというので、一八〇ルピーでどうだという。加藤さんはかげで手まねで、一六〇ルピー、まだ高い、一五〇、まだ高い、一三〇ルピーで手を打った。一〇ルピーのボクシス(チップ)をやって、けっきょく二〇〇ルピーを八〇ルピーにねぎった。(笑声)　中尾さんにしかられるかもしれないが、汽車賃はそんな調子で、安くゆきました。

副隊長の病気

桑原　汽車を使うことに問題があるのは、泰安が病気になった。汽車の暑さでヘバったのだと思う。ピンディへ着いて、グランド・ホテルというのに泊ったが、これはありがたいホテルではなかった。

今西　ぼくらの泊ったのはフラッシュマン・ホテル。

桑原　フラッシュマンは高いというのでね。(笑声)　ぼくが行くと、泰安がアーム・チェアにすわっている。「来たよ」といったら、泰安は「はア」といったきりで腰も上げないで、黙想にふけっている。顔色がひどく悪い。これはえらいことになった。泰安にヘバられたらしようがない。ぼくはまさにガッカリしたね。

今西　いちばんやられたのはどこの暑さだ、ラホールか。

加藤　汽車です。

梅棹　窓を開けっぱなしにしたので……。

芳賀　ラワルピンディに着くまえですね。

加藤　その五分か十分くらいまえまではどうもなかった。着く直前にがぜんおかしくなって、それっきり。

桑原　だいぶんひどかった。ぼくは口にいわなかったけれども、このエクスペディションで泰安をつれて行けぬことになったらえらいことだと心に思って、見ているがよくならぬので、翌日、冷房装置のあるところへ移そうと思ってフラッシュマンに電話をかけたら、冷房装置はないが、涼しい部屋があるというので、そこへぼくと泰安だけ移った。扇風機が動いているし、バスがあり、多少涼しい。それでよくなったのか、どうか——自然によくなったのだと思うけれども。

今西　ラワルピンディはそう悪いところではない。

加藤　いや、いや。

桑原　悪かったな。

今西　飛行機で日本からカラチへバッと着いたら、ものすごく、暑いという感じはしないか。

桑原　暑かった。

加藤　暑いけれども、カラチには冷房があるでしょう。メトロポール・ホテルだ。

中尾　ああいうところで冷房装置は、あながちぜいたくでないということになりますね。あそこでからだをつぶしたら、とんでもない損害ですから。

桑原　ぼくはあとで自責しましたが、副隊長は年齢が上だから、当然、飛行機に乗るということを本人もいうべきであったし、隊員もいうべきであったと思います。

ラワルピンディにて

梅棹　ピンディでの仕事は。

桑原　ピンディに着くと、副隊長がアウト状態だったので、ぼくも暑さでいささか参っていたけれども、岩坪がとにかくきょう中にまわってもらわぬと困りますというので、あちこちまわった。

岩坪　カシミール省とGHQ、体育協会、それからエア・トランスポート・オフィサー。

桑原　そのあとメテオロジカル・オフィサー（気象担当士官）。ラジオ・パキスタン。その日、ぼくは奔走しすぎてちょっとヘバリかけた。行くさきざきで、茶を出すというのですが、いうてから出るまでにたいへん時間がかかる。もう一つ、つらかったのは、放送だ。

梅棹　天気予報ですか。

桑原　ええ。局長さんはそれは快諾したが、なぜチョゴリザへ行くのか、どういう装備であるか、などをラジオで放送してくれということです。これは断れない。英語だから弱った。（笑声）　さいわいどこか歓迎会でやらなければならぬだろうと思って、テーブル・スピーチの原稿は用意してきていたので、「ご招待にあずかりまして……」というようなところをぬかして、流用した。文章はうまいひとに書いてもらったので上等の英語です。成功して帰りも放送したが、今度はぼくの作文で、遠征疲れで英語がへたになったと思ったからだろう。発音は、泰安が京都弁の英語というたけれども。（笑声）　ともかく百十度以上のところで、練習を四、五へんやらされてはたまらない。

梅棹　地図はうまく手に入りましたか。

芳賀　地図をもらうのに、はじめGHQ、それからマリ！という町のサーベイ・オブ・パキスタンというところに行きました。

梅棹　GHQというのは……。

高村　パキスタン軍の総司令部です。

平井　ラワルピンディのGHQの体育総合本部コントロール・コミッティですか、それが遠征関係の実権を握っているわけです。軍の体育協会みたいなものです。

芳賀　サフラーズ大尉というのがその主任なんです。ところがサフラーズには地図をわたす権利はないらしい。かれが認めると、紹介状をくれる。それをもって測量部の地図の関係の、名を忘れましたが、やはり大尉に会って、許可証をもらいまして、それからマリーのサーベイ・オブ・パキスタンへ行きまして、地図をもらったわけです。

藤平　補足しますけれども、ラワルピンディにもサーベイ・オブ・パキスタンの出張所みたいなものがあるのです。ここへ私とワジーが行ったのですが、売れるもので私らの要求するような地図はないのです。どうしてもマリーへ行ってもらわなければならぬということでしたが、私らは飛行機をつかまえるのにやっきだったから、あとは本隊にまかすということで出発したのですが、そういう地図がほんとうにあったのかどうか疑問ですね。

今西　あっても、バルトロあたりはそう役に立たないでしょう。

山口　氷河に入ると役に立ちません。

スカルドへ飛ぶ

梅棹　ラワルピンディからスカルドへは、全員飛行機でしょう。

桑原　飛行機は、PIA（パキスタン・インターナショナル・エアウェイ）が経営していて、金もそこで払うのですけれども、実権はATO（エアー・トランスポート・オフィサー）というのが握っている。そこのナシームという中佐……。

岩坪　退役軍人です。

桑原　それが実権を握っている。

この飛行機のとっつかまえ方はたいへんむつかしいので

岩坪　退

桑原　そ

藤平　こ

す。わたしのときは、二回ほど空振りをしたあげく、きょうはつかまえたと思った日に、スカルドのP・A（執政官）のおくさんが割り込んで来た。これはしようがないから譲ろうということで、その飛行機には私らの荷物だけを乗せ、人間はあしたということでゆずった。これがP・Aにたいへん好感を与えたようで、ひじょうによかったらしい。飛行機は八座席です。

桑原　飛行機はなるべく早く、みんないっしょに飛びたいのだけれども、そうはいかぬので、まず隊長、副隊長、平井、それからカメラマン、これだけさきに行き、岩坪、高村、芳賀を残したわけです。天気が悪ければ飛べぬということで、イタリア隊は二週間待たされたが、ぼくらはわりあい早く飛べたのです。しかしスカルドへ着いてから、高村以下がなかなか着かないので、あとになればった四日のことだが、たいへん気をもんだ。

ナンガ・パルバットの威容

中尾　カラチやラホールの暑いところにおって、早く雪の山にとっつきたいという気持じゃなかったかと思いますが、ピンディの飛行場やマリーからはじめて白い山を見たとき、どういう気がしましたか。ナンガ・パルバットの横を飛んだときはどうでした。

藤平　私が最初に見たわけですが、朝五時にピンディを飛び立つと、三十分ほどして見えます。操縦士がこのパーティのリーダーはだれかというから、ぼくだといったら、お前だけ来いということで、操縦室へ入れてもらって、まずうしろから見たわけです。やがて百八十度転回すると、目の前にナンガ・パルバットがある。じっさいすごい。どぎもを抜かれる。立派なものです。すれすれに飛んで行く。桑原さん宛に手紙を出したが、信用しなかった。

中尾　高さはマナスルとおなじだけれども、どう思いました。

藤平　はるかに立派ですな。私は、八〇〇〇メートル級の山は、見ていないのは二つ三つばかりで、たいてい見ていると思うのですが、ナンガほどの立派な山はないのじゃないかと思った。

スカルドでの仕事

梅棹　スカルドでの仕事について。先発隊から。

藤平　スカルドではいろいろなことをやれという指令がありましたが、じっさいにやったことを簡単にいいますと、第一に、スコロ・ラ越えの可能性を調べること。これはまずだめだ、ということがわかった。雪が深いのです。それからバルトロの雪のコンディションがひじょうに悪い。ひじょうに深くて、ウルドカスあたりでは腰までもぐるということをイタリア隊のポーターが帰って来ていっている。これはひじょうに心配した。しかし、まあ行ってみなければわからぬことだし、とりごし苦労をしてもしようがない。

第二に、人夫集めの手配です。じつは、アスコーレでは人夫はいくらでもすぐ集まるから心配するな、ハイ・ポーターはいちばんよいのが残してある——これは外交辞令なんですが、そういうP・Aのいい草なんです。じっさいはいちばん悪いポーターしか残っていなかったのですが、そういうことで、これもあまり心配しなかった。

第三は、食糧の調達ですが、私のやった仕事のなかではこれがいちばんむつかしかった。バルトロのベース・キャンプまでの食糧を一度にスカルドで買い込むとすると、途中のトランスポートの人数がふえてくる。それでアスコーレでなにほどか買うということを予想していったほうがいいのじゃないか。ところがアスコーレで買えるかどうか予想がたたない。アメリカ隊が二百五十人のポーターをつれて入って行ったし、イタリア隊は四百人で、だいぶん買っていったらしい。はたしてアスコーレという小さい村で、まだそれだけの余裕があるだろうか、警察のチーフみたいなボスがいて、アスコーレの部落では日本隊のためにちゃんと用意しておけという指令がしてあるから、大丈夫だという。ところが実際そういうところまで威令が行き届くかどうかわからない。まあだいぶんヤマをかけて、四十マウンドくらいは買えるだろうといって、その分をスカルドで買わずに行ったわけです。だいたいその分は調達できておった。

今西　品質はどうですか。

藤平　悪いです。アタ（粗製小麦粉）は砂まじりが多かった。FSDのパーミッションはもらえましたか。

中尾　FSDのパーミッションはもらいました。ピンディでもらいました。

梅棹　FSDというのは……。

中尾　フード・サプライ・デパートメント、軍の物資補給廠です。

梅棹　それはたいへん役に立ちますか。

藤平　立ちますな。それに書いてある以外のものはやはり購入できないです。

中尾　それにたよらないと、燃料から食糧から莫大な違いを生ずる。

藤平　だいたい市価の三分の一程度で融通してもらえます。アタ、たばこ、砂糖、塩、ミルクなど。

芳賀　アメリカ隊はケロシン（軽油）なんかはぜんぶスカルドでFSDから手に入れている。日本隊がケロシンを運んだといったら、アメリカ隊は驚いていました。

事情は変った

中尾　スカルドの空気はどうですか。五五年に私が行ったときは、あそこはインドとの戦闘直後でひじょうに緊張していたのですが。

藤平　緊迫した感じはぜんぜんなかった。

桑原　ただ、中島が岩山へロック・クライミングの遊びに行った。そしておりて来たところで捕縛されるという事件があった。（笑声）

梅棹　それで、どうしましたか。

加藤　連隊長のところへ行ったら、高級軍医がいて、すぐわかって、かれはたちまちお客さんになった。

藤平　しかし心配だった。晩めしになっても帰って来ないので、どうしたのかと思った。

今西　五五年にわれわれがスカルドに行ったとき、バルチスタン・マウンテニーア・クラブというものがあって、その連中が訪問して来たけれども。

藤平　はじめにどうしてもそのバルチスタン山岳会にあいさつしておこうというので、ほうぼうで聞いてみたのですけれども、そんな名前は聞いたことがない。あるのかどうか知らぬということです。いろいろ内地で聞いてきたことと考え合わせてみると、どうも飛行場周辺にいる将校の間のものらしい。

中尾　カーン少佐はおりましたか。

藤平　いや、ぜんぜん会わなかった。飛行場でいちばんサジェストやサポートを受けるのは、人夫の雇用条件についてだろうと思ったが、P・Aのところでは、人夫の雇用条件についてちゃんと書いたものがありますし、ほとんどP・Aを介してできるので……。

今西　事情は変ったな。

中尾　ギルギットからスカルドまでジープの道ができてますか。

藤平　いい道がついてますよ。

中尾　ピンディのほうからスカルドまで自動車で入れるのですか。

芳賀　ピンディからは入れません。

中尾　ギルギットまではバブサル峠越えで入れますね。

P・Aとラジャー

梅棹　スカルドでは、もっぱらP・Aを介して交渉をすすめたのでしょう。P・Aについて話して下さい。

桑原　P・Aというのは、ポリティカル・エージェント、いわば総督みたいなもので、これがこの地域一帯の政治的権力をにぎっている。その下に、A・P・A（アシスタント・ポリティカル・エージェント）というのがいる。副官です。

スカルドのP・Aは、戦争中インド独立国民軍にいて、チャンドラ・ボースの幕僚長をしていた。たいへん日本びいきだ。日本へ二度きたので「サヨナラ」とか「オハヨウ」というような多少の日本語はわかる。熱海とか箱根をなつかしがっていた。なにかをたのむと、やってあげましょう、なにしろお互にいっしょに戦った仲ではないか、といって大きな身ぶりをする。親切で、ジープをあんなに出してくれたのは日本隊だけでしょうね。

今西　バルチスタンというところの一般的な事情はどうなのですか。

脇坂　ここの住民は、バルチスタン人という意識がひじょうに強い。パキスタン政府は、バルチスタンに対して、しきりに学校をつくってやる。たとえば、シガールの学校はいままでほんの小さい掘立小屋でしたが、それを立派なものにし、スカルドの学校にしてもなかなか立派なものを建てている。教育の面からパキスタン人としての意識を植えつけようとしているように思うのです。

加藤　行政官としてのP・Aも、まだ総選挙で任命されるわけでもないし、権力の性質からいうと、まだかなりラジャー（土侯）的な色彩がつよい。しかしこれは、権力の交代するときにおこる現象であって、ネパールにおけるチベッタンに比べると、かなり中央の威令はバルチスタンに浸透しているというふうにぼくは見て来た。

桑原　紙幣がどんな奥地へ行っても通用するというのが一つの現われだと思う。

梅棹　ラジャーはまだいるのですか。

加藤　昔のラジャーの大きなものになると、これはかなり大事にされている。しかし、小さいのは没落したのがたくさんいる。

桑原　シガールのポロ・グラウンドでキャンプしたら、紳士があいさつに来た。アブルッジ公が来たとき、歓迎会をひらいたラジャーの息子さんに当るという。われわれの歓迎会をするどころか、P・Aの役所の事務員をしている。これが明確な象徴です。

マネージメントと教育

今西　ちょっといいたいのだが、スカルドまでのことで、今後こうしたらよかろうという話がいくつか出たけれども、もう一つ根本的な問題として、スカルドまでのこのスケジュールが、これがはたして理想的なものであったかどうか、という点はどうだろうか。もちろん、お金の問題と常に関連してくることだ。たとえば幾隊にも分れてばらばらで行ったというようなこと、こういうほうが能率的であったのかどうか、やはり少々金がかかっても、中尾がいったように外国船に乗って、かたまって行く。そうすればスカルドまでに要する日数をもっと短縮できたのではないか。そういうことについてなにか代案がありますか。これ以外にはやり方がないですか。

桑原　弁解めくけれども、あのときとしては、あのやり方しかなかったと思う。結果論になるけれども、ビンディからの飛行機は、最高八人しかのれない。全員そろって行っても、飛行機待ちに何日かかかる。さきへ行けるものがさきへスムーズに行っていたということは、かえって時間の短縮とも考えられる。だいたいぼくらがスカルドへ集結したのは最初の予定より何日か早かった。

加藤　一週間早い。

今西　そういうことはあるとしても、たとえばカラチ、ビンディの仕事を、有能なマネージャーがいて一人で片づけるとか、――そういうやり方はないのか。

桑原　それは片づかぬと思う。各方面に折衝せねばならないから。

藤平　それはやはり人手がいります。ご承知のとおり、あそこの官庁はすごくスロー・モーションで。

高村　時間の問題がありますね。昼の時間にひっかかると、休み時間が非常に長くて、日本のようにすぐやってくれるということはない。しかも金曜日は休みだということになっておりますから、そういう点でやはり手分けして、時間をかけてやらないとだめだという感じはしました。

今西　こんどの隊には、たとえば、アンナプルナやマナスルへ行った経験者がおりますが、そういう前のエクスペディションにくらべて、今度手分けしてやったということによって、うまくなっておりますか、どうですか。

加藤　それはネパールやインドとパキスタンとは国情がひじょうに違うのでいちがいにはいえません。しかし、私はこう思っております。やはり手分けしてばらばら行ったことはよかった。うまくなったというよりは、それに当った各人にひじょうにプラスになったと思う。なにもかも桑原さん一人にやってもらって、あとは金魚のウンコのようにつながってついて行くということではなく、今度は若い連中が一人一人ひじょうによくやった。このやり方は決して悪いやり方ではないと思う。

梅棹　それ自体一種の教育的効果があるというわけだな。

中尾　ぼくはちょっと意見が違うのですが。どうもエクスペディションのやり方が、すべてにわたって、必要以上に繁雑すぎると思う。もっとコンタクトの幅を狭めていいと思うのだな。

加藤　中尾みたいに、エクスペディションずれしたものなら、それはできる。しかし若僧ばかりでやるとなると、そうはいかぬ。今度はひじょうに努力をしたが、この次はもっとうまくなる。いわば徒弟時代で、これに限るとはいわないけれども、これも一つの方法だと思う。

梅棹　しかしエクスペディションは常に徒弟をたくさん抱えて行くのでしょう。だからやり方として常にこういうことになる。

加藤　ぼくはそうなると思うな。その間にチーフが上手になって、上手に動かすということになってくると思う。

梅棹　とにかく徒弟時代を経てきてない人はやれぬわけですな。チーフとしてのマネージはやれぬわけですね。中尾君なんかいつもちょっとと行き方が違うから。

加藤　個人プレーをしているから。

桑原　中尾みたいなズルイというか、（笑声）実力のある人物も、トレーニングの機会があったればこそできたわけだ。しかし、泰安や藤平が仕事をぜんぶやるとなると、若いもののトレーニングの機会をうばうことになる。つまり中尾みたいな人物も途絶えてしまうことになる。

藤平　結論的には、AACKのベースを広げるというかぎりにおいては、これは避けられないのじゃないか。だからある程度やはり日数をみて行くよりほかないと思います。

第三章　キャラバン

インダス渡河

中島　六月二十一日の朝、スカルドを出発して、いよいよキャラバンがはじまります。いきなりインダス河を渡るのです。古めかしい、昔のノアの洪水があったときに用いられたかと思われるような、まっ四角の箱舟で、アレキサンダー大王がここへ東征してきたときに乗ったとか、残して行ったとかいう伝説のある舟です。これに乗って渡るのですが、カイが一つだけついていて、一人の船頭がギコギコやる。あとは、こぎ手が八人ほどいて、これがただの棒のカイで、こぐ。流れがきついものですから、はじめにいったん、ずっと川上のほうまで岸に沿って引っぱって行って出発し、五〇〇メートルほど下流に流されて渡り着く。そういうことをやっておりますので、総勢二〇〇人ほどのものが渡り切るまでに三時間くらいかかっております。

このへんの旅は、キャラバンする村はシガール、それからコシュマール、デュッソーとだいたい決まっておるのですね。ところがシガールとコシュマールの間はひじょうに長い旅で、日がカンカン照りで、この日はみんなちょっと弱りました。デュッソーのザーク（皮袋）の渡しのところまでは、隊長と副隊長はボニーに乗っても部落まで、前日に人を走らせて、交渉をさせました。

桑原　ザークの持ち主がコシュマールのキャンプ・サイトのところに来ました。これだけの用意をしておいたので、ザークで渡るときはたいへん手配よくいきました。アメリカのK2の隊などを見ると、そこでたいへんもたついておりますが、こちらはあらかじめ値段もきめておいたから、スッと行けたわけです。今後あそこを渡るときには、この経験はたいへん生きてくると思います。

はじめて氷河を見る

山口　二十六日にアスコーレに到着、二十七日は一日滞在して、食糧を買ったり、クーリーを雇ったり、もう一度予算をたてなおしたり、そういうことをやりました。

梅棹　クーリーの雇いかえなど、問題が多かったと思います が、クーリー論はあとでまとめてやってもらうことにして、さきへ進んで下さい。

山口　二十八日にアスコーレを出発してコロファンまでゆきます。

そこまでの間で、ビアフォ氷河の上を渡るでしょう。生れて初めて氷河を見る人もおったと思うのですけれども、感想はどうですか。思っていたようなものでしたか。

山口　氷河というものは聞きしにまさる汚いものだと思いました。（笑声）

今西　汚いか。あそこに池がありませんでしたか。あそこはちょっといいでしょう。

山口　そうですね。（笑声）

中尾　気のない返事だな。（笑声）

梅棹　教養の問題かな。（笑声）

脇坂　そのときぼくは、平井、芳賀といっしょに歩いていたわけですが、二人がいうことには、「氷河々々というけれども、ただの雪渓の大きなものやないか、雪のかたまりやないか」という。こんな大氷河を見て、なんということをいう、教養のないやつだなと思った。（笑声）

岩坪　あのスケールの中におったら、そういうふうに思うのは当然で、いたずらに感激するほうが、かえっておかしいのじゃないですか。あれだったら、あれくらいの大きさでちょうどマッチしている。剣岳へあれを持ってきたら、それはびっくりするでしょうが、あそこではすこしも驚異ではない。

芳賀　氷河なんて、ただの雪のかたまりじゃないか、といっていたのですが、モレーンの上からひょっとのぞくと、青々した氷が見えた。氷河というものはやっぱり氷なんだなと思った。（笑声）

高村　見えるものはまっ黒けの砂ばかりなんです。ツンゲというのは、こういうものかと思って歩いていた。実は一回、斜面で足を滑らせたのですが、そのあとを見ると、底から黒い氷がニュッと出ていた。なるほど、これが氷河か、とはじめて思いました。

野生のネギ

山口　三十日にはバルデュマルからバイジュです。この間で、はじめてバルトロ氷河が見えます。アブルッジの記録には、ここからK2が見えると書いていますので、楽しみにしていたのですが、奥のほうは雲がかかっていて、けっきょくなにも見えませんでした。

リリゴを経て、七月二日にウルドカスに着きます。一日滞在して、四日にはビアンジェです。ここを越えると、コンコルディアまでつつぬけになっていて、マッシャーブルムとか、ガッシャーブルムⅣとか、そういうきれいな山のすばらしい姿が見えてきます。ようやく、氷河の上を歩いているという感じがしてきます。

ビアンジェのつぎはゴレ・バロですが、ここで野生のネギを発見しました。これは加藤さんのヒットだと思います。私たちは、新鮮な野菜がひじょうに欠乏していたのです。加藤さんの命令で、野生のネギをベース・キャンプ用の生鮮食糧にするというので、数人に取りに行ってもらいました。

加藤　ネギの話ですが、ぼくの見つけたのはバイジュのちょっと上だけれども、それはネギじゃない、行者ネブカだな。

中尾　幅のせまいのですか、へん平の……。

加藤　そうです。それはビアンジェにある。下のはノビルみたいなもので、下が白のあれになっている。行者ネブカ。

今西　行者ネブカは葉が広い。

加藤　ノビルみたいで、下に広いものが巻いている。

脇坂　私、採集しておりますけれども。

中尾　標本があるでしょう。

（堆石）と黒いモレーンがあるわけです。アメリカ隊、イタリア隊は赤いモレーンのほうをのぼって行って、南ガッシャーブルム氷河の出合いのモレーンにベース・キャンプをつくった。要するに氷河の右岸です。ところが、チョゴリザへは左岸を行かなければならぬのです。左岸なら黒いモレーンを伝わって行く。それをボーターが踏みあとがあるからコンコルディアのスタートに間違って赤いモレーンのところを行った。私たちもそれを改めさせずにいて、途中でふうに安易に考えていた。途中で何度トラバースを試みても、どうしてもできない。できるところがあってもクーリーを通すには危い。ついついどんづまりまで行って、平坦なところでトラバースしたが、だいぶんしょっぱかった。これはものすごいラッセルとパルの突込みでしてね。

ベース・キャンプへ

山口　七月六日にコンコルディア、八日にベース・キャンプです。

藤平　コンコルディアまでは、一九五五年の藤田さんのつくったスケッチ・マップがあって、これはひじょうに正確なもので、おかげさまで助かりました。ただし一、二カ所、ちょっと訂正を加えました。だいたいはいいけれども、距離は信用してくれるなということでしたが、距離感はほとんど合っていたのじゃないかと思います。おおいに助かりました。

ところが、コンコルディアからさきは、さっそく間違えてしまいました。バルトロ氷河というのは、ご承知のとおり赤いモレーンのほうをのぼって行って、南ガッシャーブルム氷河の出合いのモレーンにベース・キャンプをつくった。要するに氷河の右岸です。ところが、チョゴリザへは左岸を行かなければならぬのです。左岸なら黒いモレーンを伝わって行く。それをボーターが踏みあとがあるからコンコルディアのスタートに間違って赤いモレーンのところを行った。私たちもそれを改めさせずにいて、途中でふうに安易に考えていた。途中で何度トラバースを試みても、どうしてもできない。できるところがあってもクーリーを通すには危い。ついついどんづまりまで行って、平坦なところでトラバースしたが、だいぶんしょっぱかった。これはものすごいラッセルとパルの突込みでしてね。

山口　積雪はどのくらいあった。

脇坂　いちばんひどいところで腰の線まできました。

藤平　腰まで埋まったのです。ひじょうに重い雪で、足の抜きさしがたいへんです。それでトラバースして、ベース・キャンプのテント場のモレーンの下で、あきらめかかったボーターを、だましだましつれて行ったわけです。あれをクーリー連が、よくも文句もいわずに通ったものと感心します。

脇坂　そのときは藤平さんとぼくと中島と三人、先発隊で行ったのです。トラバースにかかったら、とても悪い。これではまた人夫が騒動を起すだろうと思ったけれども、とにかくトラバースしなければベース・キャンプ地に着けません。ある程度やりかけたら、ボーターたちがサーブ（旦那）たちはさきへ行け、わしらはよう行かぬというのです。仕方がないので三人がずっと先頭で道をつけて行った。とにかくあのモレーンの上まで行かなければ、ベース・キャンプがつくれぬというので、ジャンジャン行くわけですよ。うしろからボーターが、「サーブ、そんなに歩いたら人夫がへたばるし、またボクシス（チップ）をよこせといって騒動を起すから、この辺でベース・キャンプをつくれ」というのです。そんな低いところにつくったらいつ川になるかわかりませんし、もうちょっと、もうちょっととごまかして、とうとう目的地へつれて行きましたが、相当やはりこたえたと思うのですよ。

藤田　けっきょく初めのスタートの間違いだね。

山口　モレーンを間違えたということが大きかったのですね。

藤田　川は相当流れていましたか。

藤平　途中に二つくらい流れております。

藤田　だいたいあのスケッチ・マップの位置で流れていますか。位置はあまり変っておりませんか。

藤平　ほとんど変ってないようです。

桑原　帰りはベース・キャンプのモレーンを、そのままずっと伝わっておりてきたわけです。ですからトラバースはない。

なくなってゆくタキギ

梅棹　いちおうベース・キャンプまでたどりついたわけですが、ここで一度、いままでのところをふりかえって、問題となるような点をとりあげて見たいと思います。どなたからでも、問題を提出していただきます。

今西　毎年、大きな隊が四隊も五隊もバルトロに入る。そしてみんなタキギをとって荒していくわけだ。昔は十年に一回くらい入ったのだが、このごろのようになると、マキなんか一ぺんになくなる。あの辺のきれいな花でも踏みつけられてくる。そういうことについてどう思いますか。ぼくはこれはプロテクトしなければいかぬと思っているが。

岩坪　タキギ類はたしかにだんだんへっているようです。バイジュで上のほうへ行きましても、だいぶん切ったあとがありました。しかしかん木の類は、あとにどんどんみずみずしい葉をもったものがあります。ことしは私たちの隊がウルドカスに入った最後のパーティだと思いますが、このようすなら、あのまま続くのじゃないかという気がします。

今西　しかしアブルッジの紀行と比べたら、ヤナギの林なんかものすごく少なくなっている。

山口　バイジュに着いたときに、ボーターが、「ウルドカスにはマキがない、クーリーのチャパティを焼くのに燃料不足だから、マキはバイジュから切ってあげないとできない」というので、五人ほど帰らせられるクーリーを残して、バイジュからマキを持ってあがったのです。ところが、けっきょくそれでも足らなくて、クーリーたちはウルドカスの上のほうへ行って、ヤナギなんかを切って来て、マキに使っていたようです。

たとえ各遠征隊で申し合わせて、バイジュくらいからマキをあげるということにしても、クーリー自身までそういう統制を守らせることができるかどうかということになると、ちょっと無理じゃないかと思います。

今西　結論的にいうたら、だんだんと荒されていって、キャンプ地なんかはあきカンがごろごろしていて、せっかくバルトロに入っても、もうひとつ気持がよくないというようなことになる。

脇坂　幅の広いものはビアンジェにあります。ムスターグ・タワーに登ったフランス隊が取ってきて、しょっちゅう食べていた。

中尾　野生のネギは、はっぱを食べたほうが安全だね。白いところを食べようとすると、しばしばかたい。青いところを食べたほうが安全だ。

山口　それからゴレ・パロで初めてパキスタン放送の天気予報をキャッチした。

キャンプ・サイトをえらぶには

加藤　キャンプ・サイトの問題については、いいたいことがある。若い人はじつに無頓着なのだ。

休憩するときとか、朝めし、昼めしを食うときに、よい場所を選択するというよりも、ただ腹さえふくれればよいという考え方がある。（笑声）　キャラバンしている間は、景色のよいところでゆっくりめしを食うのが楽しみの一つだけれども、それを腹さえふくれればいいというようにやられると、はなはだおもしろくない。

桑原　やはり年よりグループと若い者との間で、たいへん感覚の相違がある。芳賀の受持だったときに、なんとかいう村のどまん中にシートを敷いてめしの用意がしてあった。そこへぼくらがあとから着いた。そしたら泰安が着くなりカミナリを落した。「こんな汚いところでメシが食えるか」と怒った。「これが今西さんだったら、二つ三つなぐられているぞ。（笑声）　今度の隊長はおとなしいからなぐらないけれど」というようなことだった。芳賀はキョトンとして、「なんでこんなことで怒られるのかいな」というような感じがしただろうと思うけれども、そこに感覚の違うところがあったと思う。けっきょく、一町くらい離れた、村はずれのクワの大きな木の下に移転した。泰安が捜しまわって、見つけてきたのです。これはたいへん快適な場所だった。

梅棹　今西さんはひどいのですよ。とにかくいっしょに歩いて、テントを張ってちょっと向きが気に入らぬと、もうイカン。初めからぜんぶやり直し。これはちょっと極端ですがね。

今西　しかし、それは教養の問題だと思う。（笑声）

梅棹　そうだ。ぼくもそうだと思う。たしかに教養の問題だ。

今西　若い者は山へ登るけれども、教養が足らぬと思う。

中尾　それはね、教養というよりも、若い人と年よりとではどうしても違ってくる事情があると思う。若い者は初年兵として仕事をしているから、少しでも能率があがれば、という考えで仕事をしているから、少しでも能率があがれば、という考えで仕事をめやすい。ところが、年をとってくると、能率よりも趣味が前面に押し出されてくる。

趣味と能率は適当に調整していかなければならぬ。食べ物でもそういう問題が起るはずだと思うのだけれども、これはまた、あとでやりましょう。

汚いキャンプ地

高村　今西先生の本『カラコラム』に、ウルドカスにはトイレット・ペーパーがうずまいていて、それを人夫に掃除させたというようなことが書いてある。これはゆううつなことになっているな、と思っていた。便所の問題だけを考えても、これだけの人数が毎年通ったら、たいへんなことになって、もう十年もしたらクソの山になるのじゃないかという気もしておりましたが、行き帰りに見ていますと、クーリーはペーパーを使わないし、みんなアタばかりのさっくりしたクソですから、すぐ風化して目立たなくなっておりました。けっきょく文明国から持って来た腐食しないカンづめのカンですね、ああいうものがぼくらの気持を害するいちばん大きなものになるのじゃないかと思います。

今西　そういう点で日本の登山家もシツケが悪いかもしれないけれども、外国から来た連中はいっこうあと始末はよくないな。あれはどうもおかしい。

脇坂　ウルドカスに着いたときに、平井と私とが行ったら、キャンプ地のどまん中の、下の段のところに、カンづめのあきカンがいっぱいころがっていました。これはなるほど今西さんの書かれたとおりだと思って、ポーターとぼくらとでさっそく掃除して、相当きれいにしたのです。ですから、あとから着いた人にはあまり目立たなかったのじゃないかと思います。

桑原　ぼくは最後だったが、なにかにつけて今西君の紀行文が頭にあるから、わりあいきれいじゃないかといったら、あたりまえです。われわれが掃除したのです、と。（笑声）

芳賀　落書がだいぶん多かった。

岩坪　われわれは落書はしない。カンづめはもともと持ってないから散らさない。ほかの隊は、残留物を見ると、どこの隊が通ったかすぐわかる。

脇坂　カンづめのレッテルはちらかすし、むちゃくちゃです。

芳賀　ところが、それを集める人もいたし。（笑声）

加藤　拾って高く売るやつもいるし、買うやつもいる。（笑声）

脇坂　平井がカンづめのレッテルを集めるのです。

梅棹　なににするの。

脇坂　各国のエクスペディションのコレクションです。

岩坪　これはディーレンフルト隊のカンづめ、これはだれそれが持って来たカンづめ、などというと、そのレッテルを買いよる。（笑声）

桑原　カラチで「エベレスト」というあまり上等でないたばこがあった。それを岩坪が買うてのむと、その紙箱を平井が買う。（笑声）

岩坪　代金はうどん二十五はいというのがあった。帰ってから、学生食堂でおごるという約束なんです。

梅棹　ほんとにディーレンフルトのがあったの。

岩坪　ぼくがぜんぶ勝手にそうするのです。

脇坂　たとえばカン切りが落ちていますね。「これは去年ヘルマン・ブールが落したカン切りやぜ」というわけです。そうすると平井が買いよる。

加藤　帰り道にバルトロで石をひろうことがはやり出して、赤とか青とかきれいな石をひろって、晩にテントへ着くと品評会が始まる。ひじょうにみなの趣味がよくわかる。桑原さんなんかはだいぶん渋いやつだ。中島は少女趣味だな。

クツとマメ

藤平　二日目でしたが、コシュマールのキャンプで、若い連中に気合いを入れたことがあります。だいたい、キャラバンというものに対する心がけが悪いと思うのです。一日目か二日目で、足じゅうマメをでかしてびっこをひいて来る。なんということですか。キャラバン・シューズが実にでたらめな配り方なのです。ぼくの足が十文半から十文七分の足なんですよ。ところが十一文三分というくつが入っていた。こういうことはじつに心がけが悪いと思うのだな。

桑原　それは装備の準備の問題と関係する。

山口　ぼくのなんか最初マメができかかったので、別のくつにはきかえましたが、これは心がけの問題もありますけれども、くつ自身が問題だったと思います。

梅棹　どうしてそういうバカなことになったの。

山口　けっきょく、キャラバン・シューズのメーカーが、ことしスタイルをかえたのです。外見はものすごくスマートになっていた。そのよさそうなくつをもらったり買ったりしたわけです。ところがじっさいには幅が狭くて上の厚みが足らなくて、上と両側がつ

かえるのです。サイズはだいたい合っていても、そのつかえのためにマメをこしらえた。

藤平　私は山口君の反論にかかわらず、やはりそれには賛成できないのですよ。というのは、スカルドを出るときに、みんなのくつを見ている。私は、こんな大きなものははけない。だれか合う人のととりかえてやるぞといった。それにかかわらず、みんな合わないままはいて行って、マメをこしらえた。そういうことになるのは、やはり心がけが悪いのじゃないかと思うのだね。

高村　スカルドからちょっとした砂漠状のところを歩いた。あのときに、これも心がけの問題かも知れませんが、浅いほうのくつはよく砂が入った。休憩のときにはたきますけれども、くつはいいのですが、カネカロンのくつ下をはいていたので、これは小さい砂がくっついて落ちないのです。砂がざらざらしていて気持が悪い。そのうちに足の裏をやられましたが、これは砂が媒介していると思います。

梅棹　藤平君が、心がけが悪いというのは、若い人たちがキャラバンの行進をなめていたのだ、というように解してよろしいか。

藤平　乾燥地帯だから化膿することはなかったが、ネパールなんかであれをやられたら、たいへんだと思う。

岩坪　藤平さんが心がけの問題だといわれたのに対しては、やはり異論があります。なんといってもこれは、第一次的には、くつやくつ下がよくなかったからと考えなければならない。こういう乾燥地帯では、この型のくつはダメだから、次のときにはこんなものにしよう。というふうに考えるのが、科学的かつ建設的な考え方じゃないですか。なんでも心がけの問題にされるのは不満だ。

今西　一言いいたいことがある。このごろエクスペディションは、お仕着せの品物を現地へ行ってから受領するという習慣になっ

ている。こっちにいるときに箱に詰めてしまって、はいてみようともしない。ほんとうは、登山ぐつにしてもキャラバン・シューズにしても、こっちで一、二回はいてみて、これならよし、というところで箱につめるようにするべきだ。そういうところまで心をこまかくくばらないといけないと思う。

朝食ぬきの行進

梅棹　キャラバン中の隊の運営について、問題はありませんか。

藤平　第一日に、いきなりエラーをやってしまった。それは昼食があたらなかったのです。私も悪かったのですが。

人夫をさきに渡河させて、そこで掌握するということばかり考えていて、昼めしの問題はついつい忘れてしまった。食糧係がうまくやっているだろうと思っていたら、ボーターたちは自分らがかついでいるチャパティを自分らのものだと思って食ってしまって、こちらはアウト。（笑声）　これは、出発の前に、どういうキャラバンの組織で、昼めしの食い方、朝めしの食い方はどうするかというようなことを、がっちり決めておくべきだった。あの辺のコック・ボーターはネパールのシェルパと大違いです。シェルパなら、ほっておいてもやるはずなんですが、そういうことがカラコラムではぜんぜんできない。

毎日の行進のやり方としては、朝は朝食を食わずに出発する。途中でいい場所を見つけて食う、というようにやっていたのですが、このやり方には、ある程度批判も出るのじゃないかと思うのです。

中尾　朝食を食わずに朝早く出る、それはイギリスの隊がしょっちゅうやっておるやり方でしょう。藤平さんはネパールを歩いて

いるし、それと両方比較してどうですか、ひじょうに興味を持っておりますけれども。

藤平　これはひとつはポーターの質の問題によるのじゃないのですか。たとえば、ネパールではシェルパにやらせる。シェルパのコックの気のきいたものは実に要領よくやってくれる。めしをたくにしても早い。ところがこちらのコックとなると、てんで能なしで、だいたい朝めしのしたくをしろというので本隊から一時間ほど早く出してやらしても、いつまでたってもやらない。タキギがないという。そこらのをかきむしってきても火はたけるのですよ。それをいつまでもテンとしておる。こっちがタキギを与えるまでなにもやらない。これは、あとで気合いを入れられてだいぶん是正されましたけれども。

中尾　手順がうまくいくとか、いかぬとか、途中で火をおこすとか、よい場所を捜すとか、そういう問題は解決したとしても、われわれの生活習慣として、なんともないですか。

藤平　かえって朝食をあとにしたほうがよいのじゃないかな。たとえば、あそこは猛烈に暑いところです。朝の涼しいうちにできるだけかせいでしまったほうがよいのじゃないか。

中尾　五時半に起きて、六時までにめしをすますようにしたら……。

桑原　四時半には起きた。

中尾　六時かそこらに歩き出せば、相当早くその日のうちに歩ける。

桑原　初めのうちは五時半にはもう歩いていたよ。

加藤　たいがい五時ですよ。涼しいうちに歩き出して相当かせげるのと、キャンプ・サイトはだいたい決まっていて、部落のようなところであまりいいところじゃない。こぎたないので、なにかよい場所があると非常に朝めしは気持がよい。ただ困るのは、九時ごろになる。まずくゆくと十時ごろになってしまう。そうすると、着くころに昼めしを食うか食わないかということになる。毛唐はビスケットをちょっと食うくらいで、昼めしは食わない。

藤平　それはぬいてもよい。

加藤　ぬいて出ると、キャンプへ着いてから夕飯まで、腹がへってしかたがない。

中尾　朝食を食う食わぬというのは、一時間とは差がないということでしょう。

加藤　めしを食うためには、隊員がぜんぶそろわなければならぬ。そうすると、出発するために、クーリーを部署につけるのにたいへん時間がかかる。バラバラになる。

藤平　朝早いと寒いですよ。そうするとテントの中で食うということになる。できれば設営用の物資を持った者を、さきへ出したい。さきへ出て早くキャンプ・サイトへつかしたい。テントをいかげん張ったころに本隊がやって来るという形に持っていきたい。そうすると、どうしても、われわれの食っているところのテントをさきに持って行ってもらわなければならない。

中尾　一般原則としてやると困るのは、天気の悪いときは困ると思う。あの歩き方が一般的にいいものかどうかというのは、ぼくはひじょうに興味を持っているけれども。

桑原　今度はしかし、キャラバン中に雨が降ったということはなかったのです。

加藤　第一日だけだった。

脇坂　その問題は、やはり、若いものと年とったものと違いがある。ぼくは中間ですから、ぼくはよかったのです。しかし、若い腹のへる人には、相当意見があるだろうと思います。

藤平　それから、毎日先発隊を出しています。ずっとさきにやって、キャンプ・サイトを捜させる。このやり方も、はたしてよいかどうか。とくに若い人たちの間に意見があるのじゃないか。

脇坂　宿場の決まっているときは必要ないだろうが、決まっていないとき、あれはよい方法だと思う。

山口　トップを歩くのが好きな人はトップをいき、あとを歩くのがよい人はあとからゆく、それでよいと思う。高所ポーターより何時間早く着いたか、ということに興味があればいくらとばしてもかまわないが、それを人に強要するのはどうかと思う。

近藤　トップ・マネージメント批判になったな。

山口　それからキャンプ地での夜の睡眠時間ですけれども、けっきょく今度感じたことは、若い連中はキャンプ地へ着いても雑用がいろいろ多かったり、そういうことがあるわけですね。それと桑原先生とか加藤さんはお年のかげんで、少しくらい睡眠時間が少なくてもあまりこたえない、そういうふうに思われるのです。ところが晩めしがコックの不手ぎわでいつも遅くなったりして、それからあとよくだべっていたわけですが、それで寝るのが十時ごろになったり、十時すぎることがあったわけです。そういうことでだいぶん若い連中は睡眠不足ということを訴えて、早く寝たいという希望があったわけです。

ポーター採用

梅棹　それではいよいよ、ポーターおよびクーリー論に入りましょう。名にしおうカラコラムのクーリーのこと、今度もずいぶんなやまされたようだが、最初にその採用の事情について、加藤さんにお願いします。まず、ポーターの採用について。

加藤　ここのポーターというのは、ネパールのシェルパに当るわけで、役をするはずなのだが、じっさいはシェルパのように組織されたり、訓練されたりしているものではぜんぜんない。前のエクスペディションについて行ったときの証明書を持ってくるが、それを信用するしか方法はありません。証明書といっても、もちろん写真ははっていないし、ほんものかニセモノか、かいもくわからない。現にわれわれの隊にも二人ほどニセモノが入っておりました。証明書が三十ルピーとかで売買されているらしい。私のところへ来た二十三歳の者が、一九二三年の証明書を持っている。（笑声）とくにわれわれが行ったときには、イタリア隊やアメリカ隊にいいポーターをとられてしまって、ろくな者は残っていない。これにはのちのちまでひじょうに苦労をした。

藤平　最初から証明書がでたらめだということがわかっておれば、もっと選考のしようもあったのですが、いちおうそれを信用した。ただし、警察の立合いをもとめたのです。すると警察官がこういうことをいう。証明書よりも人間だという。それは証明書が売買されておるということを暗にいったつもりなんですけれども、まさかそれまでわれわれは考えなかった。それで警官に聞くわけなんです。すると、あれは前科がある。どろぼうだという。それでベケに奨するというのです。二回目にもう一ぺん聞くと、あやふやな返事で、ぜったい推奨したのがぜったいでもないというような口ぶりになってくる。警察官自身がはっきりしないのですね。けっきょく警察官のアドバイスは、あってもなくてもおなじようなことです。

加藤　だいたい警察であれはいいというのがいちばん悪かった。いちばん危くて警戒しろというのがいちばんよかった。

藤平　けっきょく警察官にもつけとどけがいっておるのじゃないかと思う。

加藤　おそらくそうだろうと思うし、いちばんよかったのは、やはり山に近い部落の者だ。スカルドの近辺でうろうろしておるようなものが、いちばん悪いのじゃないかな。

藤平　いちばん高所ポーターの志願者の多いのは、あの辺ではサトパラという湖のあるサトパラ部落と、それからもう一つ、ハブールの連中、サトパラの連中とハブールの連中で一つのチームを作ったのだな。

ポーター論

桑原　私がスカルドのキャンプへ着いて二日目だったかな。数人のポーターがやってきて、それがイタリア隊の隊長のカシンの手紙を持って来た。それによると、「当方は十五人のポーターをつれてウルドカスまで来たが、事情によってそんなにいらぬということになってきたので、ここで七名解雇したが、みな優秀なポーターだと私は考えているから、できればご採用願いたい、よろしく」という。ウルドカスからスカルドまで、日本隊が出発しないうちに飛び込んで使ってもらおうというので、あの間を四日間、昼夜兼行で走ってきよった。（笑声）

藤平　猛烈なスピードです。ちょっとかなわない。

桑原　しかし、それをそのまま採用するわけにはいかぬ。あしたポーターの選考をするから、そのときに出て来いといって帰した。選考のときに、その連中も来ました。そのうちからも選んだわけです。

平井　高地用のポーターをスカルドでたくさん雇いすぎたのじゃないかと思います。クーリーの中に非常に優秀なのがおりますから、そういうのをピック・アップして、ベース・キャンプで採用したほうがよいのじゃないかと思います。というのは装備を与えてしまいますから、キャラバン中、こいつは悪いということがわかってもなかなか解雇できないわけです。

今西　それは、ぼくはアドバイスしておいたと思うのだけれども。

山口　そういうことをじつは聞いていまして、最初の計画ではクーリーの中から優秀な者を選んで、ベース・キャンプで高所ポーターを決めるというつもりでいったのです。ところがスカルドへ着いたそのときに、P・Aからポーターとかクーリーの雇用条件を書いた書類を渡されたのです。相当詳しいものですけれども、それを見ると、いちおう高所ポーターなんかのリストが挙げてあって、これは何年どこどこへ行ったと、そんなことまで書いてあるのです。だいぶんネパールのシェルパなんかの採用と形式的には似ているのです。そういう連中のなかでちょっと聞いてみても、ぼくらが予測していたよりもうんと高所ポーター制というのは確立されている。そういうふうに感じとったわけなんです。それでスカルドでぜんぶの高所ポーターを決めてしまったわけです。ところが実際問題としてそういうことをしたのがまずかったというわけです。

梅棹　ポーターもクーリーも大して変らないのか。

高村　みんな外国の遠征隊が残していった赤や黄色の衣類を着て、ファッション・ショーのようなかっこうをして、わしをポーターに雇ってくれといって来るわけです。採用者と非採用者とはすぐ決まったのですが、その非採用者たちは、たちまちいままで着ていたセーターを脱ぎ捨てて、ドンゴロスのような着物を着て、クーリーの群に入って、クーリーに雇われようとしてじっとすわっておりました。あれはおもしろかった。

藤田　身分的な差はないのだね。

今西　ないようです。しかしボーターに採用されるものは日当をよけいもらえるでしょう。

藤平　じっさいは権威はないのです。シェルパだったら、カチッとクーリーを押さえますけれども。

藤田　フンザなんかでは、ボーターとクーリーの間に身分的な差があるのじゃないのですか。

今西　フンザでもあやしいな。

中尾　相違はなさそうだな。

桑原　コックは、警察が日本隊について行ったのがいるというので、それを採用したわけですが、これはなるほど今西隊について行っていたのです。ところがそのときはコックじゃなくてクーリーとして行っている。（笑声）　コックのいない日はめしがうまい、というようなコックだった。

加藤　ベース・キャンプでベーキング・パウダーがあったので、それでパンを作らそうと思って、使い方を知っているかというと、イエスというて持って行った。やがて、鍋いっぱい、ミルクでベーキング・パウダーを溶かして砂糖をぶちこんだ汁を得意になって持って現われた。そういうコックなんだよ。

今西　英語はコックの英語だからたいしたことはないにしても、むこうはわからなんだらノーといったらいいのだけれども、なんでもイエス、イエスというから、わかったのだとこっちは思ってしまうのだ。

中尾　そのクーリーやボーターはぜんぶバルティですか。

岩坪　コックだけはナギール出身です。

中尾　回教の宗派はぜんぶおなじ宗派の連中ばかりですか。

脇坂　よくわかりません。クーリーは名前のバラエティがひじょうに少ない。十種類か、せいぜい二十種類くらいで、一人呼ぶと二十人くらいんとんでくるというので、おやじの名前から呼ばなければいかぬというようなことでした。ネパールのボーターに比べてひじょうに勘定高くて、かなりことあげする。これはたいへん近代的でして、なんでも不審があるとやる。それからどろぼうはたいへんなものです。雇う場合には大げんかが数回起りました。ネパールではそういうことが一回もなかったのですけれども、物がなくなるとけんかの多いことはたいへんです。

梅棹　けんかというのはクーリー同士ですか。

加藤　クーリー同士でなぐりあいです。

クーリーの要求

梅棹　クーリーの採用についてはたいして問題はなかったのですか。

山口　スカルドでは、一五二人を採用したのですが、A・P・Aと警察立会いで、たいして問題はなかったのです。アスコーレで雇った。滞在の日の昼から雇う人夫を決めたわけなんですが、それを決めるのがたいへんで、昼から晩の十時ごろまでかかってやっと百人だけ決めた。あとは翌日まわし。せっかくの一日滞在で、みんな休養を楽しみにしていたわけですが、ふつうの動いている日のほうがずっとらくでした。

アスコーレのクーリーになりますと、がぜん今までと状態がちがって、たちが悪くなってきた。この連中は欲ばかり深くて、数の計算とか自分の名前すら覚えていないのに、給料とかそういうことだけはひじょうに抜け目がない。アスコーレからコロファンへ出発し

たとたんに、ぼくらはクーリーに一発、活を入れられた。部落を出はずれたばかりのところで、まず第一の要求を出してきたわけです。ヤギの正月とかなんとか理由をつけてボクシスをよこせという。これを手はじめにして、クーリーのさまざまの要求が出はじめるわけです。

梅棹　実例をすこし話して下さい。

山口　クーリーの要求が出るのは、毎日なんです。毎宿泊場なんです。キャンプ地以外でも、ことあるごとに要求を出す。たとえば、デュモルド川の渡渉のときは、渡渉賃として、クーリー一人一ルピーずつ取られた。また、ゴレ・パロではクーリーたちに貸してやるキャンバス・シートのことでトラブルがありました。夜になると一グループ三十人のクーリーに三枚のシートを貸してやるわけですが、けっきょく強いやつが、二、三人で一枚を取ってしまう。けんかの弱い者には当らぬ。それでシートが足らんとぼくらのところに苦情をいってくるわけです。それからコンコルディアを発つときに、いつものように、食糧の配給とか、たばこの配給とおなじようにメートに一括して雪メガネを渡せばよかったのですが、朝だちを早くするために、ついうっかりクーリーたちに出発した者から順番に渡していった。ところが、連中は全く統制をみだし、荷物を持つ者も持たぬ者も一挙に配給係をとりかこみ、一人で二つも三つも取る。けっきょく足りるはずの絶対数が足らなくなって、不足分は金でとられ大損害をした。

藤平　デュモルド川の渡渉をめぐって、クーリーの間で派閥あらそいが持ちあがったのです。アスコーレ派とスカルド派の間でいがみあいがある。それからアスコーレ派の中にも派があるわけです。ぼくらの雇った高所ポーターの派と反対派がある。その反対派の連中が、どうしても渡渉はできぬから遠回りしよう、つり橋を渡ろうという。むこうの者はぼくらのところに暮夜ひそかに訪れて来て、あすはなんとか川を渡るようにする、自分らの仲間で渡ってみせるという。それがひじょうに苦心さんたんして渡渉点を捜してきた。われわれは渡渉できないと思ってほとんどあきらめかかったときに、人夫の一人が渡渉に成功して、やっと渡れた。この辺に人夫の使い方に微妙な問題が出てくるだろうと思うのです。

梅棹　その二つの派というのは。

藤平　要するに日ごろ仲が悪いということだね。

梅棹　宗教的なものではなしに。

藤平　仲の悪いのがひどかったらしいのだな。

桑原　あれは宗教とは違うな。

藤平　あいつの首を切ってくれ、というようなことをいってくる。

梅棹　おなじ部落のもの同士で……。

藤平　おなじ部落で家対家のいがみ合いが先代からあるらしい。相当深刻なものがあるらしい。ひょっとすると、つり橋を渡らなければならぬかも知れないと思った。それでアスコーレの村からたけれども、ほとんど修理はしていなかったようですな、帰りに見たら。

梅棹　修理料を取られたの。

藤平　取られました。

梅棹　いくら取られたの。

加藤　五十ルピー。

クーリーの統制

梅棹　クーリーたちには組織はないのですか。たとえば、クーリー頭というような。

山口　それはあります。クーリーの親玉みたいなものが三十人に一人の割合でいる。メートというのですが、それにぜんぶクーリーの食糧の配給とかそういうことをさせます。たばこの配給、それからクーリーのこちらへの要求、そうしたことをぜんぶメートがやるわけです。

加藤　執行部だ。

山口　ところがメート自身が数の勘定ができない。自分のグループの人間の顔を覚えてないし、クーリーの中でアタマのいいものはメートをごまかして、二人分の食糧を取るやつがでてくる。けっきょく、最後はこっちの配給が足らないといって、こっちにもちこんでくる。バイジュでアタの分配をめぐって、そういうトラブルがありました。

これは連中だけのトラブルで、ぼくらには関係ないのですが、結果としてはストライキになる。われわれは今川さんがおったから事情がわかっていますが、もし言葉のわかる者がおらなかった場合には、前の今西さんの隊のようにわけのわからぬままにストライキが起った、（笑声）ということになる。それから、クーリー統制のために、スカルドから巡査をつれていった。これがまたアスコーレ・クーリーとの間で問題をおこした。リリゴまでの途中でクーリーがあまりにもサボタージュして、ゆっくりしているので、巡査がなぐったのです。この事件もぼくらとは関係がないのですが、リリゴに着いたときにクーリーたちがもめ出して、巡査をここから帰さなければおれたちはぜんぶアスコーレへ帰ってしまうという。これも情報が今川さんを通ってすぐにこちらに入ってくる。けっきょく、巡査とワジーとそれからアスコーレの村長のむすこと、そういう連中だけで解決させた。

労力か費用か

平井　キャラバンちゅう、アスコーレを過ぎますと、クーリーに食事を渡さなければならぬので、毎日テント地に着くと、アタとギー（ヒツジのバター）とナマク、これは岩塩ですけれども、それからボーターにはアタとギーとダルと岩塩……。

梅棹　ダルというのはなんですか。

平井　大豆です。それからときどき紅茶とミルクを渡さなければなりません。毎日それを食糧係がやる。

一人にギーが八分の一ポンドですけれども、八分の一掛ける何人分かを渡すわけです。それがクーリーなら三十人ひとかたまりですから、それをいちいちはかって渡す。今西さんの隊では、リエゾン・オフィサーがその仕事をやったそうですが、われわれの場合はリエゾン・オフィサーが遊んで、なぜわれわれ隊員がそれをやらなければならないか。（笑声）

加藤　それは今川君が有能で、すっかりやってしまった。あれはもう少し早く気がついてやめさせればよかったのです。

岩坪　もう一つは、今西さんの隊は偉い先生ばかりで、こっちは若い者で、こっち側に働かなければならぬという気があるものだから、それでやった。（笑声）

桑原　それはそうや。今西君のときは大将と佐官ばかりだったから。

平井　今西隊では、リエゾン・オフィサーはいちばん階級が下だったからだ。今度はリエゾン・オフィサーの階級がずっと上にあがってしまった。

中尾　カラコラム学術探検のときは、ぼくが今西隊でだいぶんやったのだが、じつはなんにもやらなかった。やったというのは人に押しつけることをやったのです。

梅棹　君は中佐くらいだからな。（笑声）

中尾　リエゾン・オフィサー、それからナギールの世話方のサリムなんというような教育のある人間が通訳でついてきておる。みんなそれにおっかぶせて、なるだけそういう仕事には手をくださないというやり方でやった。そこのところがたいへん違っております。

今西　クーリーたちがストライキを起して逃げていきよったときにも、わしらは見ているのや。（笑声）　それはリエゾン・オフィサーの仕事や。

藤田　こんどはリエゾン・オフィサーはなにも仕事がなかったのですか。

山口　今度のリエゾン・オフィサーはスカルドのP・Aの書類を金科玉条にしている。それには与えるものがみな書いてあるというわけだ。それを見ると、クーリーなんかにしても、ミルクから茶から、ものすごくぜいたくなものがいっぱい書いてある。その規則どおりにやられたら、こっちの予算がとてももたない。それでやはり今川さんを通してその量を適当になんとか減らすとかしてもらわなければならない。ぼくらはほとんど準備してないのですから、ないものは金で払ってやる。その金の換算なんかでも、スカルドの食糧倉庫での値段なみに見積って払う。アスコーレの値段なんかにくらべると、ずっと安いのです。こういう点は、今川さんがやってくれたおかげでずいぶん安くなったといえる。

高村　労力と費用の考え方ですが、二つ行き方があると思います。少々ぼられても、少々ロスがあっても、こっちの労力をずっと削減して、むこうに適当にやらせる方法と、こっちでがっちり押さえてとことんまでこっちの監督下で配給する方法とがある。今度はその後者を取ったと思いますが。

梅棹　中尾は前者だな。

高村　たとえば、われわれが食糧係の手伝いをやってはかる場合でも、日本人の隊員にさらに監督がついておりましたね。（笑声）バターとか豆なんかをちょっとでもサービスしてやるつもりでよけい目にすると、あかん、あかん。（笑声）　そういうことで、食糧係が奮闘したので、ご苦労だったと思いますけれども。

今西　だれが監督や。

高村　おもに平井です。岩坪が技術のほうをやって、少し足らぬ目にはかっておいて、これはボクシスだからといってちょっと出すれば食糧の方から話があるでしょうけれども、そういう建前でいったから、けっきょく相当アルバイトがかかってきたのじゃないかと思いますけれども。あれでほかの植物調査とかそういうのだったら、労力さえいとわなかったら、安あがりのエクスペディションにとっては、いい行き方でなかったかと思います。

岩坪　そこがぼくらの弱みでして、中尾さんなんかの場合は、中尾さんの学問的な仕事があるわけです。こっちは食糧で働くことをやらなかったら、こういうことをやったといっていばれるところがないものですから。（笑声）

梅棹　なるほど。（笑声）

岩坪　つい弱みが出る。

第四章　攻撃・登頂

チョゴリザ見ゆ

梅棹　はじめてチョゴリザの姿が見えたのは、どこですか。

高村　コンコルディアの次の日です。その泊まり場から、はじめてチョゴリザが見えました。あのときは、どれが頂上かというので、だいぶんもめました。頂上はあの岩峰のさらに奥にあるという説と、あの岩峰付近が頂上だというのとに分れた。ちょうどガスがかかっていたせいもあります。それからアイス・フォールが見えていたわけですが、それまでにも一つの景観としては見ていたけれども、いざ自分が登るルートとしてみると、このアイス・フォールというやつは、ほんとに登れるのかな、と心配になるほどゴツゴツしている。あの日はそういう意味で、なかなか印象に残る日でした。

アイス・フォールに登路を求めて

梅棹　いよいよチョゴリザが出てきたから、このへんで、ベース・キャンプからの登りにかかったらどうですか。作戦、戦術も含めて、加藤さん、やって下さい。

加藤　十八日間も歩いたので、ベース・キャンプについてから数日は休みたかったけれども、とにかく到着の時期がおくれている。われわれは一カ月遅かったかと思います。これは今度のいちばん初めのつまずきだと思うけれども、とにかく天気がここらあたりからくずれてきそうだというので、一日休んだきりで、すぐ偵察に出て行ったわけです。そのとき、作戦の第一期は、第二キャンプを当時日本で考えていたチョゴリザ・サドルというところ、要するにベース・キャンプから見えたアイス・フォールを越えたさきのところにつくり、それをつくるのを第一期とする。それからさきはアブルッジの報告もヘルマン・ブールの報告もあまり的確でないので、現場を見た上で作戦を立てようというのです。

それでチョゴリザの左のアイス・フォールを登るわけなんですが、これを登るのに、アブルッジはひじょうに苦労しております。数日かかっているけれども、われわれは幸いにして一日でこれをのり切れたのです。これはやはり人数が多かったということだと思います。

要するに三隊一度に偵察隊が出て行った。一つはバルトロ・カンリよりのいちばん左側の氷河の右岸を登る。これがバルトロ・カンリから出てくるデブリでクレバスがかなり埋められている可能性がある。これに脇坂隊が出て行った。それからまん中の、最もアイス・フォールの荒れたところが、これもやはりクレバスが埋められているのじゃないかというので、これに中島隊。それから二つ氷河が出ているまん中にインゼルがありますが、これにとっつけば氷河のアイス・フォールの迷路に入らないで、いきなりスノー・ドームの下まで行けるのじゃないか、というので、これに藤平隊を出して、それで三隊が出たわけです。

だんだんやっているうちに、脇坂隊も中島隊も、ひじょうに氷河が悪くて登れなかった。最後に藤平隊のインゼルも登れないでいたところが、そのわきがちょうど開いているので、それを行ってみたら行けた。この道が、氷河の中の唯一の登路であったといまでも考えております。これもかなり悪いので、どこかもっとよいルートがないかと思って捜してみたけれども、けっきょくこのルート一つしかなかった。

第二キャンプへ

加藤　一日でアイス・フォールをのり切れたのは、ひじょうに幸運でした。その翌日からすぐにトランス・ポートが始まって、第一キャンプが建てられたわけです。

このころから天候がだんだんくずれてきて、雪が降り出してきました。このバルトロ氷河の気象は、チョゴリザがいちばん南側になるために、南からあがってきた影響を、いちばん初めに受けているようです。そのためにバルトロの天気は必ずチョゴリザから変っていく。これはあとでわかったのですけれども、チョゴリザがひじょうに雪で美しい、まっ白な「ブライド・ピーク」、花嫁の峰といわれるゆえんで、それがまた、われわれがひじょうな深雪で苦しんだゆえんでもある。いずれも、チョゴリザがいちばんバルトロの南にあるというその位置がさせたわざだと、私はいま思っております。

第二キャンプに行くときに、ここでちょっとつまずきがあったわけです。第一キャンプの付近から見た第二キャンプまでのセラックはそう悪く見えなかったために、主力隊をここで休養させて、トランス・ポートをさきにやらせる、そのさきの偵察は若手にやらせるというふうにして、これは高村と岩坪、この二人を偵察に出したわけです。芳賀も行ったかな。

芳賀　一回目はデポの地点まで。

加藤　これはいま若い人を前において悪いけれども、ちょっとまずかったと思うのです。あとでだんだん調べてみると、ひじょうにそのルートが左へ、バルトロ・カンリよりにすっかり流されておる。これはあとで調べてみると、もっと右よりに行けるルートがたくさんあったと思うのです。氷河の経験という点では、藤平にしろ、私にしろ、氷河をそれほどたくさん歩いているわけではないので、これは必ずしも氷河の経験の多少ではない。これはたいへんはっきりいってお気の毒だけれども、まだいまの若い人たちが、ふつうの日本の山でのルート・ファインディングというものの修練がつんでない証拠ではないか。（笑声）　これでたしかに一日くらいはかせげたはずです。私なり藤平君がうんと登っていれば、これを是正できたと思うけれども、とにかく天気が悪いので、登れ、登れで、とにかく第二キャンプに荷物をどんどん運んでしまった。

これでひじょうに損な道を取ることになってしまった。この損な道を取ったことが、ただ日数の損だけでなく、高度があがらないし、頂上が遠くなるというので、ここでさらに焦燥感をうんだ。それで、その次の第三キャンプを建てる場合に、私がいちばん初めに予定して、また藤平君も予定していたところよりも一歩さき、要するにアイス・ドームの肩まで駆けあがってしまった。この辺では、まだみんな、かなり強かったので、そういうことが可能だったので

すが、これはいまから考えるとちょっと無理だったと思います。私自身がそのときも無理だと思った。

だいたい、ヒマラヤで高所障害というのはマナスルであった。それからアンナプルナでも今西（寿雄）隊があっているし、カラコラムの今西（錦司）隊もあっている。それはだいたい五〇〇〇メートル付近で第一回の障害が出てくる。それから六千五、六百のところでまた障害が出てくる。ところが今回はバルトロ氷河をひじょうにゆっくりあがってきて、ベース・キャンプがほぼ五〇〇〇に近いところにきたので、高所障害というものがはっきり出てこなかったのです。それもあったので、かなり慎重を欠いた登高を続けてしまったわけです。

しゃにむにの登行

加藤　そこで六七〇〇メートルのアイス・ドームの肩まで登ったところが、そこにヘルマン・ブールのテントがあった。そうなると、藤平君以下若い連中はどうしてもヘルマン・ブールと一騎打ちをしようという気持になったわけです。この日に私は第一キャンプにおって無電で聞いて、登路をこれに決定するという話を聞いた。それはちょっと待ってくれ。私ははじめ、六四〇〇のところにテントを張って、それから前のアブルッジのルートをもう一ぺん偵察してみて、どっちをとるかを決めたいと考えていた。ところが全員とにかく「おのれ、ブール」というのでいきり立ってしまった。（笑声）　私はこのときに、登攀のいちばんの責任者としては、まことになっておらぬ素質を暴露したので、それに完全に負けたわけです。

それには条件は出しました。第三キャンプをつくり、それからコルまでもう一つのテントを出すという条件はつけたのですが、けっきょくは心ならずもやはり若い連中に引きずられた。この辺が天気が悪いし、いきりたっているので、かなり無理な動きを始める。そのために第三キャンプを建て、上に登る間に、若い連中がここでばたばたと倒れたわけです。

まず第一に高村が倒れる、これはケロシンの生ガスをかいでぐりがえった。（笑声）　これはちょっと心配しました。私が第三キャンプに登るときに、朝の無電で、「高村が意識不明になってわごとをいう、憂慮すべき状態である」という。（笑声）

桑原　ぼくはそのときの無電はベース・キャンプで聞いていたが、「憂慮すべき状態」だと平井がいう。ぼくは憂慮という言葉で危いのじゃないかという印象を受けた。なにをぼやぼやしているか、早く医者をなんとかせぬかといって怒ったのだが、平井の日本語では、憂慮すべきというのは、たいへん困ったことになった、という意味だったらしい。（笑声）

山口　しかし、ガス中毒というのは、ほんとうにやられたら危いのです。そういううわごとをいうくらいだったら、ぼくはほんとに憂慮すべき状態だと思います。

加藤　途中でそれを聞いてさっそく、中島と山口とを第四キャンプにあげて、潮田を第二にさげて、医療用の酸素を持ち上げて第三キャンプで待っていると、高村がよろよろとおりて来た。まあ憂慮すべき状態ではなかったようでした。そのときは元気で、ただ足がきかなくて、ひじょうに残念そうにしていたくらいのことだった。それからその翌日に藤平、平井は第四キャンプから直接、頂上攻撃を試みた。このときにはすでにサポートする隊がかなり疲労しておりました。かれらは、もともと強いところへもってきて、かなりこの間には休ましてあったと思います。この間の力の差はひじょうに

ここでついていたようです。しかしじっさいにそこから攻撃しようとしても、無理だったので、さらに第五キャンプを六九五〇メートルにつくり、ここから本格的に攻撃をかけた。しかしそこからさきの尾根の状態は決してよくはなかった。藤平も平井も快調だったのですが、第五キャンプを出発してからコルまでつづくナイフ・リッジをおりるのに七時間かかったので、頂上近くで四時すぎになり、ついに引返したのです。ここで、このルートからの攻撃は敗退するに至ったわけです。

転進ルートの発見

加藤　この敗退をするときに、往きとおなじ道をとらずに、アイス・ドームの南側の雪原を通って第三キャンプにおりてきた。これはひじょうにヒットです。もちろん上からよく見えていたのだろうけれども、とにかく初めてのルートをおりて来た。これは、この二人にして初めてよくなしとげ得たことであると思います。これがすぐに転進のルートに変ってくる。これはあのとき、日にちを倹約するということについては、たいへんなヒットだったと思います。

ここで、脇坂、芳賀、岩坪が完全に高所障害を起した。というよりは、あるいは私がここでかれらを使いつぶしたというべきかもしれない。（笑声）　これは気の毒だったけれども、あのように、天候がひじょうにさしせまっているし、ことに私は、いまでも考えているのですが、第一のルートをとったのがやはり失敗だったと思います。それがためにこの三人は使いつぶしてしまった。途中で藤平と話したのですが、これは使いつぶすしか仕方がないという覚悟はしました。（笑声）

第四キャンプにあがって行ったら、芳賀と岩坪がまるでタヌキのおたふくかぜ（笑声）というか、どうにもこうにもひどい顔をしている。ようです。ところが当人たちは鏡はないし、そう気がついていなかった。食欲がないので、私はひじょうに心配したのですが、脇坂はこの山での再起はむつかしいと思ったのです。

私がこのとき、第四にあがっていったのは、藤平たちが南側をおりてしまって、第四、五によらずにおりて来たから、その撤収の指示を与えるためだったのです。あがってみると、みんなこういう状態です。これでは上のテントを撤収できるかどうかと思って、いろいろ聞いてみたのですが、やりますという。かれらが飯を食うのを見ていると、活動写真のスロー・モーション・ピクチュアみたいな食い方をしている。しかもそれだけ顔がふくらんでいるくせに、食うことはたいへんなものです。これは大丈夫だろうと思って見ているうちにだんだん腹が立ってきて、君たちはいったい行くのか行かないのかといったら、「行きます」。（笑声）　ところが、出かけて五〇メートルほど行くと、今度は芳賀は十分も大クソをたれてなかなか出てこない。やっと第五キャンプに着いて、上にサポートに出ていた中島と山口のテントを撤収してきたわけです。

その前の日は中島、山口というのは夜中まで大変な雪稜を登りおりして、藤平、平井を待っていて、その日も下までおりてくるというような奮闘をしたあとだ。かわいそうに芳賀と岩坪はあがって行くなり、いきなり怒られた。二人とも目をパチクリしていた、そういうことでした。

それでいちおう第三キャンプまで撤収して、それでいよいよアブルッジの道を行くというふうに決定をしたのですが、すでにそのときに脇坂、芳賀、岩坪というのは戦列から離れて、戦闘力はかなり憂慮すべき状態であったのですが、幸いにして高村が回復して、戦

列に加わった。この際、かれが戦列に加わってくれたことはひじょうに力強かった。

登頂前後

加藤　全員、一日完全に休養をして、今度はアブルッジの道を通って再び攻撃を開始したわけです。そのときは八月三日に第三キャンプを出まして、四日にコルまでテントをあげる。五日に攻撃をする。こういう約束で出て行った。

その前に第一回の攻撃をするときに、例の無電がこわれました。これは私には、たいへんうれしいことだった。ああいうものは大きらい。（笑声）　あんなものがあるからとにかく登山者はみなバカになってしまう。これはたいへんうれしいことでした。上のキャンプの連中も私のやかましい声が聞こえなくなってたいへんうれしいことだったろうと思う。（笑声）　各人の自主的な行動というものが、ここで初めてフルに発揮できることになったと、私は思っております。

それで三日に出発をして、かなり時間はかかると思っていたが、ひじょうに早く最後のキャンプ地に着いた。ちょうどその日に、私は潮田、今川をつれてコンダス・ピークに向った。コンダス・ピークにこの日とくに登ったというわけは、今度やりそこなうかどうかということがひじょうに問題で、とにかく今度のルートを完全に見通せるのがコンダス・ピークである、これに登って自分の覚悟を決めなければならぬというのが第一です。第二は上に登頂して帰ってきたら、なかなか自由がきかないだろう、この一日はひまがあるので、コンダス・ピークからコンダス・サドルとコンウェイ・サドルの南側を見おろして、シアチェン氷河におりる道があるならば、あとでバルトロ・カンリを撃つ隊を出すのといっしょに、これをおりる隊を出して、サルトロ・カンリ方面の偵察をしたいということが、私の目的だったのです。この日、出かけて行きましたが、とにかく平らなところでスタスタ歩いて行けば完全に登れる山だった。ただ最後のところがひじょうに大きな雪庇でした。あと二人は完全なビギナーだったので、わたしはちょっと弱りました。（笑声）　しかし、それでも頂上に立ちました。なんとかかんとかいうけれども、要するに登山技術なんていうものは、いいかげんなものだということなんです。だれでも足があって歩いて行けば登れるということなんです。（笑声）

このとき私はひじょうにびっくりしたのですが、帰りがけに南のほうを見ると、すごい雲の前線が、ずっとむこうにならんでいて、そのときの雲の早さから勘定すると、五日の午前中にはどうしてもチョゴリザの上に来る。これは一大事というので、とにかく第三キャンプまで帰ってきて、上の連中に一日攻撃をくり上げるように連絡しようと思ったのですが、午後になると雪がくさって、キャンプに帰ったのが七時ごろになってしまった。コンダス・ピークの往復に十二時間ほどかかったわけです。

たいへん心配したのですが、幸い藤平君もこの雲を見落していなかった。それで攻撃を一日くり上げる。このときも私はやはりラジオがなくても無電がなくても、実力あるものは自主的に判断を誤らない。（笑声）　それで四日に藤平君らは頂上に登った。そのときの最後のテントは六八〇〇メートル。そこから七六五四メートルの頂上まで九〇〇メートル弱の上下を、十八時間でやっている。藤平君、平井君はひじょうに強かった。二人のほかに、中島君もひじょうに強かったのですけれども、彼は医者としての任務があるから、登頂隊に入らないということは初めから決まっていた。中島君もこれは自分の任務をよく知ってあきらめ、サポートに回ってくれた。やはり山登りのなんたるかを知ったお医者さんである、というふうに私は解釈しております。（笑声）

ところがここで許せないのは、この隊の幹部であるところの私と藤平である。とにかく最後に十八時間を使って登る、しかも九〇〇メートルの上下をしたということは、作戦としてはこれは下の下です。こういうのはやはりまずいと思います。天候悪化をおそれたのが第一の原因なんですけれども、やはり、出発前の問題をうまく処理して、もっと早く現地に到着して、ゆうゆう天候の余裕を見てやるということが第一である。しかも一回目の攻撃をアブルッジ・ルートと両方見比べてからなかったということは、軽率である。幸い登れたから、この山登りの点数をつけてもらえば及第点はもらえるが、まず六十二、三点だと思います。（笑声）

ベース・キャンプ集結

加藤　登頂の翌日、中島、山口、高村は、カベリ・ピークに登りました。そして、第四bキャンプを撤収して、第三に帰ってきました。そのあくる日から完全に雪に突入しております。

藤平　五日の午後四時ごろからです。

加藤　五日の午後から完全に雪に突入しております。六日に降っている雪は今までとはまったく違う、ひじょうに大きなボタン雪で、水けの多い条件の悪い雪になってきておりました。五日の午後、六日、七日と雪が降り続いて、七日に第三キャンプを撤収した。

このときまで、帰りになんとかバルトロ・カンリを打とうと考えていたのですが、とにかくひじょうに雪が深くなるし、みんなもかなり疲労している。それから第二キャンプ付近に帰ってくると、その辺のセラックの状態が、登ったときとは見違えるように変ってきている、そうすると、下のアイス・フォールがどんなに変ってしまっているかが、たいへん心配になってきたわけです。これ以上アイス・フォールの上にがんばることができるかどうか、自信が持てなくなった。

いちおうベース・キャンプにおりて、天候がよければもういっぺんあがってくる。こんどはラッセルしてあるから、らくに行けるだろうと考え、バルトロ・カンリを継続攻撃することを、一たん中止して、ベース・キャンプにおりたわけです。

驚いたことには、第一キャンプのところはアイス・フォールの上の非常に広いプラトーでして、ここにテントを張ったら完全に間違いないと思った。ところがおりるときには、二列に張ったサーブのテントとポーター用のテントの間に二メートル五〇におよぶひじょうに大きなクレバスが開いている。（笑声）　それからその辺はハチの巣のようなクレバスになっておりました。それから、下のアイス・フォールは、みんなでんぐりがえっておる。テントのロープはふっ飛んでしまっているし、ルートを示す赤旗の標識は、たいがいがどこかへ持って行かれてしまっているというような具合で、だいたいこの辺の氷河は一日に一〇センチくらいの早さで動いていたのじゃないかと思います。

八日に山口と高村を残したほかの全員は、ベース・キャンプにおりてきて、翌々日にこの二人がまたテントに着く。これでいちおうベース・キャンプに集結したわけです。それ以後十日間というものはずっと天候が悪くて、雪が降り続いておりました。こうしてバルトロ・カンリはついに放棄することになりました。

ヘルマン・ブールのルート

梅棹　続いて藤平さんに登頂記をひとつ。

藤平　登頂記ですが、これは新聞に書いたとおりです。たいしたことはありません。いってみれば、とにかく平井君という猛烈に強い人がおって、おかげさまで登れたというところです。戦術論になりますが、たしかにブール・ルートを取ったというのは、加藤さんの失敗でなくて、完全に私の失敗です。私はしゃにむにこれを押したものですから、加藤さんもついつい根負けしたというような状態です。

加藤　気の弱い仏の泰安や。（笑声）

藤平　これは、焦燥感のなせるわざというのが第一、それから体力の過信ということがあったのじゃないかと思う。

私はとにかく第一、第二キャンプをつくるときに、おれはいちばん弱いのじゃないかというように自分で思っていた。私は、ウルドカスで、四〇〇〇メートルで頭痛を感じている。ベース・キャンプ付近になったらやはり息切れをするようになってきた。とてももちそうもないと思って歩いていた。ところが、聞いてみると、みんな頭は痛くないし、息切れもしていない。私一人だ。これはみんなぜったい強いだろうと思っていた。偵察をやったときに第三、第四キャンプ、六七〇〇まで脇坂と平井をつれて行ってきた。このとき、おれでさえ行ってくるのだから、ほかのものは大丈夫だろう、まあやれるだろうというふうに思ったのです。みんな焦燥感があるし、一日のトランス・ポートはきついかも知れないけれども、ここで二、三人をつぶして、とにかく上にキャンプをあげれば、あと一発かけられる、こういう気になったわけです。

もう一つは私自身の不勉強のせいなんで、アブルッジの通ったところをよく知らなかった。（笑声）　アブルッジの本はキャラバン中に、二、三ページ読んでみて、あとばかばかしくて読まなかった。この三つがブール・ルートをとることを決定させたのじゃないか。私自身もブールと一騎打ちをしようという気はなかったのだけれども、ブールがやれたのならおれにもやれるだろうというずうずうしさというのですか、そういうきらいがあった。ところがやってみて、あのルートを取る限りは、ぜったい頂上にはとどかないということを、アタックしてひしひしと感じた。それで一も二もなくシャッポを脱ぐということで、加藤さんがコースを変えろということも、はいはい、わかりましたといった。

最前進キャンプの位置

藤平　第一回のアタックの帰りに、私と平井が南面の氷河をくだって来た。それが夜の夜中だったにもかかわらず、相当もぐっている。予定を変更して、このルートをとるとすれば、これはやはりそうとうもぐるだろう。もぐれば一日で六九〇〇のコルまではキャンプはあげられないのじゃないか。ひょっとするとアタックの余力を残すためになお二日使わなければならないのじゃないか。そういうわけで、八月五日というのをアタック日に予定した。もちろん、最終アタック・キャンプの食糧なんかは、二日分しか持っていない。極力制限して、個人装備は十キロにとどめる。私のかついだのは、七キロくらいしかなかったのじゃないか。切りつめるものは極力切りつめる。だいたい、第一回アタック前後から天候はもち直して、四、五日好天候が続いているし、もうそろそろ崩れる時分じゃなかろうかと思っているやさき、加藤さんがいまいったように、南のほうを見ると、あまりかんばしからざる雲がある。それと六七〇〇のコルの下の台地へ来たときに、ポーターたちはここから帰らせてくれといい出したわけです。とすると、ここからぼくと平井もアタック・キャンプ用の荷をかついで登らなければならぬかと思って、ちょっとゲッソリしたのです。これはよしたほうがよかろうと思った。はじめのアタックの結果によって、はたしてあのコルにテントを張ることがよいかどうか、ぼくはひじょうに疑問に思っていた。写真で見ると、平ったいところではありますけれども、じっさいに行ってみると、ハチの巣のようにクレバスがあいている。一歩足を抜きあげると、次にまた腰までコトンと落ちる。わずかに稜線の岩がボコボコ出ている。あの広いように見える雪面も、稜線のガリガリ岩の出ているような悪いところなんです。はたしてうまくテントを張れるかどうか。また、そこまでは約二〇〇メートルの登りで、これは決してらくではない。さきの攻撃の帰りに、ぼくと平井とで半分ずり落ちるようにすべって来たところですが、そこを相当の荷物をかついでステップを切らなければならない。これがとてもきついのじゃないか。この二つのこととさらに天候の三つがキャンプ・サイトをきめるときに問題だったのです。もう一つ、キャンプ・サイトの問題についていえば、キャンプ・サイトとしてコルというものが決してよくないということは、日本の内地でもわかると思うのです。吹雪が来たときには風の通り道になる。そうすると、八月三日の日のうちに、サポート隊にご苦労であるけれども、コルまで道を切り直してもらう。それを朝のクラストしている間に登りきってしまえば、コルの下の台地から出発したとしてもそんなに負担にならないのじゃないか。しかも天候もあすはもつだろう。これくらいの理由で、頂上攻撃予定の五日を四日に変更した。一〇〇〇メートル近い高度差がたいへんなものであることはわかっている。けれども、じっさい山を眺めた感じでは、あれは大丈夫いける。私らのキャンプから頂上までの状況を眺めると、往復できぬコースではない。いってみれば、相当自信があったことはあったわけです。

頂上攻撃と酸素

藤平　四日の朝、アタック・キャンプを出たのが四時五十分です。考えてみればすこし遅いのですが、そういう時間にスタートしたのも、自信というか、そういうものがあったからです。出るときに、きょうはいただいた、ほとんど一〇〇パーセント頂戴した、という気で出かけて行ったのです。だいたいぼくは自信が強すぎるのです。（笑声）　悪いクセです。ひじょうに山を甘く見るクセがある。ぼくのルート判断とか時間の見当なんかは、あまりアテにしてもらわぬほうがよい。五時間で行けるというと、八時間はかかる。ところが平井君は猛烈に強いので、実はこちらも呆れはてて、後からフラフラついて行った。

コルから酸素を使った。酸素のボンベ三本のほかに、荷物をなんだかんだとかつぐと、やはり二〇キロくらいになる。第一回のアタックのときは、ライトはもたず、羽毛服のズボンもツェルトもテントの中へほうりっ放しにしてもっていかなかったので、中島君などはいったい登る気があるのかといって怒ったらしいのですが、荷物が重くなることを恐れたのです。夜は月が出るだろうというので、ライトは一つにした。平井君には羽毛服のズボンを持って行けといったが、大丈夫ですといって持って行かなかった。酸素の問題なんですが、酸素がなくなってもよく登れたなといわれるのですが、だいたい、七〇〇〇メートル台の山でそんなに酸素に頼らなければならぬ必要があるかどうか、ということがはじめに問題になるのじゃ

ないか。たとえばシプトンなどという連中は、エベレストで酸素なしで八〇〇〇メートル以上を登っている。なしで登るのがあたりまえじゃないか。

ぼくは初め第四キャンプをつくるときに立てたプランは、アタック・メンバー二人として二パーティ分用意する。しかし第一回の攻撃は酸素なしでやる。それで失敗すれば、第二回はありとあらゆる手段を使う。酸素をふんだんに使って押し上げようという考えだった。それで加藤さんと無電ですったもんだのいい合いをしたのですが、それでは仕方がないから、初めから酸素を使いましょうということでやったわけなんです。酸素なしではたしてあの場合登れたかどうか、ということなんですが、これは使わなかったら、きつかっただろうと思います。しかし、時間は一、二時間遅れるかもしれませんけれども、登ったことは登っただろうと思います。

あの日の距離の錯覚というものは、これは初めから終りまでつきまとった。コルを出発して、平井と、カケをしようじゃないか、昼までに登れるか登れないか。(笑声)　平井は昼までに登れますよという。それじゃこっちもおなじことだから、カケはやめようといった。(笑声)　それくらい錯覚をしたということです。途中の岩場を乗り切って、あと頂上に続くスノー・スロープにかかったときが、すでに一時。完全にこれはいけません。あといったい何時間かかるだろうということを二人でいったことがありますが、いや、時間を考えることはよしましょう、考えても、どうせ間違えますからということで登って行った。

帰りには、問題になった岩場の降りなんですが、七五〇〇メートルくらいにあるあれを、いったい陽のある間に降れるかどうかということは、頂上にいた三十分の間にもひじょうに心配しておったわけです。もしあの上で日が暮れきったら——午後七時で完全に暮れます。月の昇るのは九時半ごろですが、その間まで待つか、一晩ビバークするかということだった。もし少しでもあかりがあれば、思いきっておりてしまうという二通りのことを考えておりて来たわけです。運よくおりきってしばらくしたら、日が暮れたわけです。登りのほうはえらいおっかない気がしたけれども、帰りはあまりおっかないことはなかったです。

頂上での行動

林　頂上での行動について説明して下さい。

藤平　頂上におってなにをしたかというのですが、たいしたことはしていないのです。三十分の間、したことというと、写真にとるためにピッケルを立てようと思ったら、立てる場所がない。それでピッケルを手に持って、旗をひろげてとったのですが、バキスタンの国旗が逆になっていた。新月が下になっていたので、あわてて つけ直して、十六ミリをまわして、それで終った。そんなものです。あと石を拾ったり……。

林　南峰が高く見えたとか……。

藤平　七五五〇の例の第二峰というのですが、はじめここよりむこうが高いのじゃないかというような気がした。あれをやったらどうかという気になったけれども、それはナイフ・リッジで、その上、雪がもぐりそうな感じで、遠くでもあるし、こっちが高いことにしておこう。地図でもこっちが高いことになっているのだから、こっちにしておこうということでおりたのです。

平井　頂上で、十六ミリのカメラをまわし始めたのですが、フィルムがまわっていないことがわかりました。五〇フィートのインディケーターが、まわると、四〇、三〇となるわけです。それを見ると、まわっていないことがわかりました。それであわててフィルムを出し、さしかえました。それでだいぶん時間がかかったわけです。それから私は、私のカメラに行きしなずっとカラー・フィルムを入れておりまして、頂上で黒白フィルムに入れかえた。そしてお互に頂上に立ちまして、旗を持って写真をとるわけですが、頂上がせまいので、行ったり来たりするのに慎重にやらないと、ザイルにひっかかったりするわけで、そういうことでだいぶん時間をとったと思います。ほとんどカメラをまわしただけで……。

藤平　けっきょく考えてみると、朝からの行動でまともに休んだという時間がひじょうに少なかったと思います。頂上の三十分というのは、ぜんぜん腰をおろしていない、立ったきりです。途中の昼めしといっても、そんなに休んでいない。せいぜい五分か十分の休憩です。三十分くらいはワン・ピッチで歩ける。内地の山とおなじスピードですよ。また雪が深かったので、内地の冬山のラッセルのように二、三回ヒザで雪を押して、それから一歩出す。これでやっていったわけです。それで三歩行ったら一息ついて、また出すという格好です。とにかく平井君が初めから終りまでラッセルやっているので、ぼくはそのあとを、ボコボコ行ったというだけです。

ヘルマン・プールの亡霊

平井　登頂の前夜、藤平さんは十二時までに寝られた。起きたのは三時です。私はその晩、悪夢を見ました。夢の中にヘルマン・プールの亡霊が出て来ました。実は目ざましがなかったので、十二時、二時と二時間おきくらいに目を覚ましておりましたが、そのとき、夢かうつつか知りませんが、これはほんとうの十二時ではなき、あるいは二時ではない、ということをささやくわけです。奇々怪々です。

今西　それはヘルマン・プールという名がこじつけでなしに、夢の中でそう思ったのか。

平井　名前はむこうは名乗りませんでしたけれども。(笑声)　オーストリアのアルピニストだといった。

今西　亡霊かもわからぬな。

桑原　どういう格好や。

平井　足がなかったです。(笑声)　モヤモヤしたもので、起きたときにちょっとボーッとしておりました。三時に起きて、時計をこすって、ほんとうにほっぺたつねったくらいボヤッとしておりました。

今西　けっきょく、こっちに味方してくれているのやな。

藤平　しかし、平井はよく眠っていた。グウグウ寝ているものだから、ぼくはしゃくにさわって二回ほどけとばした。(笑声)

芳賀　藤平さんが寝られないというのはおかしいですよ。いつもいちばん最初にいびきをかく。

藤平　あの晩はほとんど眠っていないね。

隊長の苦心

梅棹　ここで、隊長の感想をいうていただいて、それを中心に、頂上攻撃についての批判なり反省をやっていただいたらどうでしょう。

桑原　隊長のことは私の紀行文に書きましたから、プライベートな感想はいう必要がないのじゃないかと思います。

ベース・キャンプから上の攻撃については、加藤君に一任したわけです。もちろんみなと相談するわけですけれども、泰安にしっか

りやってくれということでまかせた。もっとも最初のうちは、加藤のきらいな無線電話があった。上のほうで、加藤と藤平がやり合っているのが聞える。「とにかく相談するからいっぺんおりて来い」「それではおりるかおりぬか、十五分間たってから返事します」(笑声)「ばかぬかせ」——そういうことがみな聞えるので、たいへんおもしろかった。(笑声)　それから、さっきの「憂慮すべき状態」というのは、あのときぼくはちょっとがく然とした。一同元気という手紙をポーターがついさっき持ってきたばかりなのに、すでに憂慮すべき状態におちいっているというので、あわくって、思わず大きな声を出した。あの時はだれが出ていたかな。

芳賀　ぼくが出て、先生は怒ったのです。なにをボサボサしているか、と。

桑原　無電については加藤君と意見が反対になりますが、あれはたいせつなものです。あれがなくなってからは、こちらはまことに困った。二十九日からあと、こちらはなんにもわからない。

ときどき、下におりる隊員に託して、加藤から手紙がくる。七月十九日、第二芸術ご紹介といって、へたな俳句を書いて来たりしている。(笑声)　このころは元気でした。このときすでに「若手三名は登頂準備のため、かわいそうですが、いっぱいに働いてもらう」といって、つぶすという思想はちゃんとあった。(笑声)　そして藤平、脇坂、中島、平井を温存するというふうに書いてある。それから第一回の攻撃に失敗して、そのときによこした手紙はここにあって、なかなかおもしろいのですが、『チョゴリザ登頂』に入れてあるので読みません。第一回は失敗したけれども、加藤君の手紙も藤平君の手紙もたいへん元気で、この分なら、大丈夫やるという気がしたわけです。無電が切れてなにもわからぬのにキナキナしても仕方がない。そういう意味で落着いていました。

梅棹　成功の知らせは……。

桑原　二十九日からは、上のことはなにもわからない。前の手紙で日数を勘定すると、五日に攻撃するはずだと思ったわけです。こちらではまだ天候はくずれてきませんし、四日にやったということはわからないし、四日には、下には脇坂と芳賀と岩坪とぼくと四人いたわけです。藤平、平井が一生懸命やっている時分には、こちらはトランプの「ナポレオン」をやっておりました。そしてあくる五日は、緊張して稜線を望遠鏡で見ているが、なにも見えない。そうすると、午後三時ごろに今川がおりて来て、やりましたというので、びっくりして、喜ぶまでにひまがかかった。

脇坂がおりて来たときには、だいぶん憔悴しているので、心配しました。その次に岩坪と芳賀がおりて来たとき、だれかおりて来るというので、望遠鏡で見ると、二人なんですが、足取りがフラフラしているし、だいぶん具合が悪いのじゃないかと思った。脇坂が食事の用意をしましょうかというから、あの調子では、物はよう食わぬだろうから、着いてからにしようじゃないか、紅茶だけわかしておこうといった。そのうち、モレーンをだんだんあがって来る。岩坪はいつもじゃまくさそうな歩き方をするので、それは驚かなかったが、芳賀までおなじような歩き方をしているので、これはえらいことになったと思った。そして近づくと、顔が汚れたお月さまみたい。(笑声)　テントの中へ座らしたら、芳賀が「今晩のおかずはなんですか」(笑声)　という。これなら大丈夫だ、心配して損をしたと思った。モリモリ食うし、おしっこをたくさんする。

心臓障害か栄養失調か

途中でつぶれた若手の問題だが、さっきの、「タヌキのおたふくかぜ」になったというのは、顔だけふくれたのか、からだじゅうか。

桑原　手にもむくみが来ていた。医者の話では、心臓障害じゃないかといっておりますが。

中島　一過性の心臓衰弱だろうと。

今西　腎臓から来たものか。

桑原　腎臓障害というより心臓障害だよ。

今西　心臓から来たのか。

加藤　小便たれて、手足がしびれるのなら、腎臓じゃないかな。

中島　やはり心臓と思います。

高村　ちょっと聞いたのですけれども、塩分がひじょうに不足した場合、なにかそれが間接的な原因になって、ひじょうにむくみの来ることがあるということです。

中島　そうです。しかし、けっきょく想像論なんです。ああいうところで尿の中の塩分を調べたり、血量の塩分を調べたりするわけにいきませんので、けっきょく想像論なんですが、一時的な疲労の蓄積による心臓衰弱ではないか。上では疲労が回復しきれないうちにあくる日を迎える、また疲労が加わるというわけで、心臓が衰弱していく。それに対する自覚症状というものはあまりないわけですが、下に降ってゆっくり休むと、とたんに回復してしもうて、心臓も回復し、全身の血行がよくなると、腎臓のほうも血行がよい。そこへまわって腎臓の濾過が速いものですから、小便がたくさんたまって、たくさん出る。

桑原　ともかく芳賀は朝の三時から七時までに十七回小便に行ったのだから。(笑声)

芳賀　一回目の攻撃に失敗したあと、ぼくは痔になった。それで休ましてくれというと、ドクターは、痔くらいがんばったらなんでもない、と。第五キャンプですか、あそこへ行こうとして、途中で帰らしてもらったら、今度はからだの調子が悪く、それに目のほうが、ものを見ておりますと、黒点が見える。はじめはドクターは目にゴミが入ったのじゃないかといっておりましたが、景色の中に黒点が見える。ドクターに目ぐすりをもらったのですが、それでもなおらない。しばらくしておりて来ますと、黒点がだんだん小さくなって、しまいになくなった。考えてみれば、あれはエサが悪かったのじゃないか。(笑声)

桑原　ぜんぜんはれなかったのもいるけれども。

加藤　藤平とぼくだけがふくらまなかった。

桑原　ふくらまなかったどころか、加藤はやせて、みんなそろってテントへおりて来たとき、ぼくは加藤を見てギョッとした。ところがほかの者は丸こい顔をしている。

加藤　山口なんかしわが多いけれども、しわがなくなって美少年になっている。(笑声)

桑原　中島もちょっと肥えたね。

林　それは栄養的なアンバランスというか……。

桑原　今後の問題があるし、医学的に究明しておいてほしい。加藤はだんだんやせて、藤平はあまり変化がない。ぼくはじっとしていてやせた。

藤平　高度影響の問題なんですが、ほんとうに高度でやられたのか、過労なのかといったら、ケジメがはっきりしないのだよ。

林　さっきのむくみが心臓から来たという説には、わたしは賛成しかねる。いわゆる疲労こんぱいというのは、一種の栄養障害状態なんです。戦争中栄養失調というものがありましたが、これはみな全身浮腫が起る。そういうものの一種と解釈したほうがぼくはよ

いと思う。

藤平　栄養失調だな。（笑声）

加藤　栄養がそんなに悪いはずはないな。

中島　そんなに悪いことはないですね。

加藤　まずいけれども、悪いことはない。

芳賀　しかし、ぼくの目がそういうふうになったのは、完全にエサが悪かったのです。

林　疲労こんぱいの状態にはそういうバランスがとれていない。だから血管から水分が体の組織内に吸収されて蓄積するのです。これは栄養障害から起る血行内の塩分のアンバランス、そういうものから浮腫が起ってくる。そう解釈したほうがぼくはいいと思う。

桑原　やはり栄養失調型ですか。

今西　食いものが悪かったのか。

林　悪いのじゃなくて、食っても吸収されないということです。

今西　そうすると、オーバー・ワークか。

林　オーバー・ワークです。吸収されないということによって失調になる。

今西　そうすると、よく働いたものが早く顔がふくれたということか。

加藤　これはたしかにぼくはそうだと思う。さっきいい忘れたけれども、第二キャンプを立てたら、一ぺん全部ベース・キャンプへおりるつもりでいた。ところがずっと左へまわって高度があがらないので、そのままコルまでの突っこみをやったわけだ。それまで一回、休ませなければならないほど若い連中を働かしたわけだ。

桑原　ぼくは泰安に、一ぺんおろしたらどうか、と手紙をもたせてやったら、その返事に若手を使いつぶすより手がない、と書いてきた。

高度影響

今西　高度の影響ということですがね、これはわれわれがカラコラムに行ったときには、バルトロをあがって行くのとおなじようにだんだん高度を少しずつあげていっているわけですね。それで人によって違うけれども、四五〇〇から四八〇〇か九〇〇までの間に、「いま高度を感じているな」というときが来ます。しかしそれで別に寝なければならぬというのとは違います。ただ単にその高さを経過しているということがわかって、それからあとは出ない。そういうことをたいていの人は感じてもよいと思う。今度、行った連中は、ぜんぜんそういうことはなかったですか。

加藤　これは山の形というものもちょっと問題になるかもしれないとぼくは思う。今度はぜんぜん感じなかった。前にマナスルへ行ったとき、七〇〇〇メートル付近まで行ったときは、五十歩くらいしか歩けなかった。今度は一時間くらい歩いてもなんともない。その間にぼくは年を取っているし、酒もよくのんでいるし、（笑声）強くなっているはずはない。かなり前の経験がきいているかもしれないけれども、少し症状があっていいと思う。みんなにそれを聞いたけれども、だれもそういうことはいわなかったね。

山口　ある程度、隊員の負けおしみといいますか、そういうものもあったのじゃないかと思うのですよ。じっさいに、最初岩坪や高村なんかが第二キャンプにあがったときに、そこでやはり頭痛がするとか視力がどうということをいっているわけですよ。

今西　第二キャンプはだいぶん高いでしょう。

山口　六〇〇〇近いです。

桑原　ベース・キャンプがすでに五〇〇〇でしょう。藤平がさきにウルドカスでどうとかいったけれども……。

今西　ウルドカスあたりで出なければならぬ。

桑原　それがだれも出ない。ぼくはもちろんデュッソーからの登りでアゴを出したりしたけれども、それはただピッチを上げすぎてアゴを出したということで、高度ではないと思う。それからあと、チョンゴへ着く日とベース・キャンプに着く日がしんどかったけれども、それは自分のからだが弱くてへバったと思っただけで、高度影響とは感じなかった。それから第一キャンプが五五〇〇です。これに登ったとき、もちろんしんどかったけれども、これもそういうものとは違うと、本人は思いこんでいた。アルプスで、フィンステラール・ホルンへ登ったときは、四〇〇〇に達したときにフラフラとして座り込んだことがありますが、それは五分ほど休んだらなおった。これはあとで西堀君なんかに話していたら、高度影響の明確な現われだというておりましたけれども、今度はそういうことは一度もなかった。頭痛は一回もない。

中尾　私は五〇〇〇へ登るときには、一カ月おいたら、二回目でも、もうまた出るのです。

藤平　もつのは二週間くらいが限度でしょう。

中尾　ぼくはいつもあまり高いところへ登ることはないけれども、五〇〇〇に登る手前にたいてい出る。あるいはその晩に、たいしてひどくはないけれども、ちょっと頭痛が出る。

今西　一時間くらい頭痛がするのだろう。

林　頭痛圏は四五〇〇メートルくらいだ。

今西　四五〇〇から八〇〇までにある。

二度目の高度影響

今西　その次にもういっぺん、五五〇〇くらいで出るというセオリーがある。これはどうも成り立たぬように思いますが、ほんとうに二回出ますか。

林　もういっぺん出ますな。

今西　出るなら、もっと高いところと違いますか。

加藤　ぼくのマナスルでの経験では、五〇〇〇で約三時間コキッというほどやられました。その次は六五〇〇でやられた。これは頭痛でなくて異質のものです。心悸亢進というか、そういうようなものです。なにかひじょうに気持が悪い。これはマナスルのとき、みんなおなじ状態だった。

林　そのときしびれてはきませんか。

加藤　しびれはしない。朝起きたときは放心状態になるな。なにもできないで、ボーッとして、暁に祈るといった形で。（笑声）

藤平　それはちょっとわからないけれども、たとえば五三年のアンナプルナのとき、四八〇〇くらいのナムン・バンジャンでコンコテンにやられた。あれは猛烈にひどかった。あんなきついことはなかった。

梅棹　あのときは、みんなやられたらしいね。

藤平　それからあと、北面からアンナプルナにかかったでしょう。ずっと来て六八〇〇から七〇〇〇まではほとんど感じない。一気に登って行く。七〇〇〇から上でコキンと来るね。きても放心状態にはならぬ。ただピッチが遅くなってくる。からだにこたえる。

加藤　放心状態になるというのは、ほんの朝ボーッとするだけ。シェルパの一人は完全に頭にきたのか、一日ゲートルを巻いた

りといたり、巻いたりといたり。（笑声）　こういう者もいた。

平井　今度の場合、若い三人は別として、みんないっぺん偵察に行って、ある高度に達してすぐ日帰りしてきて、下のテントに泊まる。したがって自分にとっては新しい高度で寝るという機会が少なかったわけです。ぼくの場合は、一度もない。たとえば六九五〇の第五キャンプへ行ったときでも、その前の日に七〇〇〇いくらか偵察に行って帰って、六七〇〇で寝ております。そういうことがあまりこたえなかった原因じゃないかと思うのです。

山口　そういう高度影響と、今度のベース・キャンプから上の隊員の労働量といいますか、それをちょっと調べてみたのですけれども、それを見ますと、だいたい藤平、平井、中島、山口というのは、最初は半日くらいの差はありますけれども、あまり変らないのです。ところが脇坂、高村、岩坪、芳賀というのは、それより一日ないし一日半多いのです。それに六七〇〇という高いところにばかりあがっていたのです。そういう人がいちおうあとでそういう故障が出てきたというのは、やはり高度の影響があったのじゃないかと思います。

林　貴重なデータだな。

山口　だいたい藤平、平井は二、三日動いて一日か二日休む、そういうテンポでいっているのです。その間に一日十八時間とか十七時間という重労働を二回もやっております。それでもぜんぜんどうもない。それは個人的にもひじょうに強いということはありますけれども、やはりそういう点で高地順応は相当できていたのではないかと思います。ぼくと中島の場合は、最初から新しいトレースを行ったことがないのです。だいたいだれかが偵察したところを行って、引き返してボッカをやっている。中島なんかを調べてみますと、一日に二、三時間、半日くらいの労働のときもありますけれども、だいたい六〇〇〇以上で連続十三日動いているのです。ぼくもだいたい九日連続で動いて、一日休んで三日動いている。それでも重労働をした夕方くらいは一時間ほど頭痛という程度で、それと息切れを除けば、高さの影響はあまり感じてないのです。それはやはりあとからジクジク登って行く、そういうこともあるのだろうと思うのです。

ポーターは必要か

今西　一つ根本問題があるのだけれども、いまかりに若手隊員をもう二、三人ふやして、その代りポーターは使わぬということにしたらどうだろうか。これは前からぼくは考えていることなのだけれども、それについて諸君の考えはどうですか。やはりああいい加減な連中でも、現地人の労働力を使わなければやれぬかどうか。たとえばイタリアのK2のときなんか、ほとんど現地人を使わないでやった。今度のイタリア隊はどういうふうか知らぬけれども。

芳賀　こんどのイタリア隊は、六人使っておりました。しかし私は、帰りに、P・Aに招待されてアルバムを見たら、昨年のヘルマン・ブールのブロード・ピークは、ノー・オキシゲン、ノー・ポーターと書いてある。八〇〇〇メートルの山がそのやり方で登られているのを見まして、カラコラムでは高所ポーターをあてにするより、われわれ隊員が力を合わせて登ったほうがいいのじゃないか、そういうような感じがしました。

高村　高所ポーターの食生活という問題が入ってくると思いますが、たとえばネパールのシェルパだったら、わりあい食糧の形をあらかじめキャッチしやすいと思います。ところが今度の場合、カラコラムの高地ポーターは、悪くいえばない物ねだりといいますか、なにか自分が行動したくないときには、食糧の問題を持ち出して、わしは米が食いたいけれども、米がないから動けぬ、チャパティがないから動けぬとか、そういうことがおこるのです。個人的にも食事の習慣がばらばらで、食糧計画では、ひじょうに不安定な計画しか立てられないのじゃないか、そういう感じがするのです。そういう意味では、あんな荷揚げ能力もあまりないような連中を使うよりは、こちらの隊員を多くして行くほうが、もっとスムーズに計画も立てられて、行動できるのじゃないかという気がしました。

梅棹　こういうことはどうですか、たとえばP・Aにこちからそういう成績を知らして、これではだめなんだ、シェルパとはうていおなじようにはいかないという実情を伝えて、むこうでなんらか改善方策をとってもらうということは不可能ですか。

今西　それは不可能だな。

桑原　他人の証明書を買ったりするのはよくないことだが、P・Aにその名前をいうと、厳罰に処せられたりするから、そこまでかわいそうなことはやらなかった。ワジー大尉も最初はだいぶん現地人の味方をしていたけれども、しまいには、わかってきて、憤慨しはじめた。そして自分はP・Aならびにパキスタンのカシミール省に長文の建白書を出すといっていた。

ポーターの利点

平井　ぜんぜん高所ポーターを廃止するということはまた問題があります。たとえばテント地の整備とか、またクーリーとの間の調整とか、ベース・キャンプまでは高所ポーターも役に立つわけです。だから高地用として考えずに、そういうものとして二、三人はやはり雇うべきじゃないかと思います。上のほうではわれわれだけでかつぐというシステムがいいと思います。

桑原　ポーターのことは、ぼくは上のほうの様子はわかりませんけれども、だいたい平井説に近い。今度のイスマイルとかハサンとか二、三のものは、上のほうでも相当荷物も持ったらしいし、人間もしっかりしていてクーリーの監督もできる、それから氷河の上のルート・ファインディングなんか、イスマイルでないと、とうていこちらの隊員はおよびません。踏みあともはっきりしたものならわかるけれども、ちょっといっぺんくつがさわったような石でも、かれは見つけます。それを利用しないというのは、また逆の意味においてマイナスになる。

岩坪　ぼくは桑原先生や平井さんの意見に賛成で、もう少しポーターの役に立ったことを考えるべきじゃないかと思うのです。というのは、たしかにポーターがいなくて隊員だけでやったら、気分的にはいいわけです。しかしこれがいなかったら、今度の場合でも、ポーターのかつぎ揚げた分と隊員の揚げた分を考えてみたら、上のほうではどうか知りませんが、下のほうではほとんどポーターがかつぎ揚げているわけです。それからポーターというのは、隊員のように上に行くことを欲しない。名誉心がぜんぜんない。自分は第何キャンプまで行きたいとか、できれば頂上まで行きたいというようなことはぜんぜん考えていない。上のキャンプまで運んでいって、すぐ下へおりてじっとしている。その間の往復ばかりしていても文句をいわない。そういう便利な人間はいないと思う。

桑原　いまのとおりだと思う。たとえば若い隊員をつれて行くでしょう。そしてお前はベース・キャンプまでだとか、せいぜい第二キャンプどまりだとかいうことなら、ムクレてきますよ。シュールなんかベースと第一キャンプの往復専用だったけれども、不満はないどころか、らくでよろこんでいるわけなんだから。それか

ら、今度イタリア隊とかアメリカ隊がさきに行って、いいポーターが残っていなかったという説があったけれども、それもぼくはわからんね。しかしわれわれの隊でも、二人は確実にいいのがおった。名前もわかっているから、あとはクーリーの中から適当なものを選び出すということにして、この次もああいうのは若干つれていかぬとまずいな、いまの段階では。

ポーターとシェルパ

今西　シェルパをつれてネパールの山へ行っても、現地人は何人か残すのです。だからぼくにいわしたら、足ごしらえをやらしても、これはクーリーの延長です。ぼくが五五年にニュージーランド隊に会ったときに、マッシャーブルムを来年もやるかと聞いたら、今度でこりた。ポーターが悪い、ポーターがよくなるまでは、やってもつまらぬという。それではいつになったらカラコラムのポーターがシェルパなみになるかといったら、十年は待たんならぬという。しかしぼくは十年でも怪しいと思う。なぜかというと、シェルパはダージリンで生活して、それだけアカルチュレートしている。ところがカラコラムの連中はときどきエクスペディションについて行って、なんでも盗んだりもらったりしている。一方的なものでだめだ。シェルパはだいたいサーバントとしての訓練を受けているわけだ。ダージリンにいるときでも、プランテーションで働いている。サーバント的なものを持っているわけです。ですから初期のエベレストあたりだったら、サーブに一人ずつサーバントとしてシェルパがついている。それが土台になってずっとシェルパになった。そういうのと、なにかわけがわからぬけれども、ポーターという名前をもらって、クーリーでもどっちでもできるという、そういうものとはまるきり違う。だから、さっきの話のようにお前らはこういう荷かつぎだ、お前はテントの掃除をする役だというふうに雇いあげていったほうがいいわけだ。サーバントとしてどうしても教育はできないわけだ。サーバントだったらものすごく主従関係ができるから、物をとったりできぬわけだ。

第五章　帰　途

ベース・キャンプ集結

梅棹　それでは山口君から帰路について。

山口　八月十日に全員ベース・キャンプに集結しました。その前日にクーリーを呼びにポーターをアスコーレまでやったわけです。それでクーリー待ちを十日間ほどやりました。そのあいだに平井らのビアンジェの隊が出たわけです。やっと十九日に五十三人のクーリーがベース・キャンプに来ました。それで翌二十日出発しました。

桑原　十日に山をおりてきて、二十日までなにをしていたか、もったいないじゃないかという批判が当然あると思います。登頂が成功して、ベース・キャンプにいる私のところへ報告が入ったのは五日、すぐポーターを下へ走らせてクーリーをよびにやるというのが最初のプランだったのです。ところが上から来た泰安の手紙は、バルトロ・カンリの問題とか、よそへまわるという問題が決まっていないので、自分たちがベース・キャンプに帰るまで、ポーターを走らせるのはおやめ願いたい、ということであった。それでおくらしていたわけです。泰安がおりてきたのは八日だったかな。

山口　八日です。

桑原　八日すぎということだったけれども、あと二日だから待とうということになって、そこでポーターが来るまで、おそく着いたものでも完全に十日間の休養をとる。なにか時間がむだになったようですけれども、そういうことです。

今西　その十日間なにもしなかったのか。

脇坂　天気が悪かったのです。

今西　それでなにもしなかったの。

桑原　ただたいくつしておりました。

脇坂　映画のロケーションが二回、それからポーターを迎えるための準備、それで一日半か二日ほどかかりました。あとは休養です。

外国隊

梅棹　ベース・キャンプで、おなじバルトロに入っている外国隊と、つきあいがあったように聞いています。外国隊のことを、すこし話していただきましょう。

桑原　一九五八年にバルトロに入ったのは、日本隊のほかにイタリア隊とアメリカ隊。イタリア隊が私たちのだいたい二週間ほどまえ、アメリカ隊は一カ月ほどまえです。両方ともヒドンの下のほうの、われわれのベース・キャンプから、一日足らずの行程のとこ

ろに、二〇〇メートルの間隔を置いて、まあ並んでベース・キャンプをつくっていた。

今西　こちらのベースから見えておりますか。

桑原　望遠鏡でなら見えます。アメリカ隊は早く七月五日に成功したので、イタリア隊は焦燥感にかられたにちがいない。イタリア隊はあまり長くなるので、登れる登れないにかかわらず八月の十日に人夫をあげて十一日に降るということを、登頂せぬさきに決めて、人夫を呼びにやったわけです。そうして六日にやっと登って、そしてわれわれのところに十二日によって帰った。それは副隊長のフォスコ・マライーニと、頂上に行ったボナッティと、医者一人。

それからアメリカ隊のほうは、下のほうでコンコルディアに着くまえに登頂成功を聞いたので、お祝いの手紙を書きまして、それを持たしてやったわけです。その答礼として七月九日、つまりこちらが着いた翌日、荷物を整理しているところにショーニングというのがパキスタンの隊員――なんとかいった……。

加藤　リズビ。

桑原　それをつれてやって来ました。日本隊の装備を見て、おおいに安くてけっこうだといっておりました。そして無電はなにを使っているかというから、これだといったら、おれのところといっしょだ、これはおれのところではいっぺんも動かなかった。アメリカ製品が日本隊ではファンクションすることを希望するといって笑っておりましたが、だいたいむこうの装備はアメリカ製品は少ないので、フランス品、スイス品なんかを使っていたようです。

今西　ガッシャーブルムⅣに八月六日登ったというが、天気はどういう天気でした。

藤平　それがひじょうに奇々怪々なんで、ほんとうに八月六日に登ったことを疑いたくなるような天気です。八月六日、私どもは第三キャンプでも叩かれどおしに叩かれていた。ともかく例のカマボコ・テントは雪の下に埋まった。その日にどうして登ったか不思議でしょうがない。

梅棹　最後のキャンプは。

芳賀　七五〇〇になったのです。

桑原　最後の登りは四〇〇くらいでしょう。

藤平　これはひじょうにむつかしい登りだった。第五級の岩場だという。どうもおかしくてしようがない。

加藤　一日間違えているのじゃないかな。八月六日というのはおかしい。

桑原　アメリカ隊は一日間違えていた。かれらは、七月四日登頂と電報を打ったが、本当は五日で、六月が三十日しかないことを忘れていた。（笑声）　ウルドカスあたりまで帰ってから気がついた、報告に隊長が書いている。

藤平　ぼくら八日の晩、ベースに来たときに、むこうのキャンプにのろしが上がりましたね。それでやったという。いや、やってないのだというものもおったのだけれども、やったのだということですね。タイミングから見たら、八日にバッとのろしを上げたら、六日に登ったらしいということは見当がつくけれども、六日の天候そのものが疑問だ。あの雪はチョゴリザだけの雪か、それがわからないのだ。

加藤　ベース・キャンプも降っていた。これは必ずぶつかっている。すでに下からこっちへ来ているのだから。

藤平　あの天候の中であれをちょっと登れるとは思われない。

加藤　夜中からかけての吹雪ですからね。

オーストリア隊

桑原　そのほかの外国隊としては、イギリスとパキスタンの軍人の連合がラカポシをやって、成功しました。これはわれわれとまったく関係がないので、どういう状況であったかよく知りません。それからオーストリア隊、これは気の毒なことをしました。前年にヘルマン・ブールのことがあったので、チョゴリザをやるつもりで来た。しかし日本隊のほうが申込みが早く、日本隊が許可されたので、オーストリア隊は、目標をハラモシュにかえたわけです。そして成功した。

この隊には、帰りにぼくと泰安だけが会いました。二人がいちばんさきに飛行機でビンディについて、フラッシュマン・ホテルに入ると、パキスタン・タイムスのひとがわれわれのことを聞きにきた。そのとき、オーストリア隊がいるということを聞いて、訪問しようとしたら、むこうから隊長が迎えに来た。かれは午後出発するというので、わずか一時間ほどでしたが、歓談しました。英語はわれわれ程度の英語で、泰安も安心しておおいにしゃべった。むこうは、チョゴリザの絵葉書などをこしらえて来ていましたから、チョゴリザへ行きたかったのだろうと思います。しかしわれわれの成功をたいへん喜んでくれました。気持のいい山男たちです。

ビアンジェ行

梅棹　つぎにビアンジェ行について、まず加藤さんから意図を説明していただけませんか。

加藤　ビアンジェへどうして寄ったかということなんです。さきほどいったように、バルトロ・カンリをやろうと思ったのが、天候が悪くてどうしてもやれない。しかし、とにかくどこかもう一つやらなければ、せっかくこうした軽装備隊として気がすまぬというので、いろいろ相談したのです。もう南のコンダス氷河のほうは見うを見たいというのが第一の案だった。そうするとこんど見られるのはフーシェの氷河、シャクスガムの氷河、この二つが残るわけで、それでいっぺんシャクスガムのほうを出すつもりだった。ところが脇坂はからだの調子が悪い。

桑原　カベリ・ビークおよびコンダス・ビークは登ったが、脇坂と芳賀と岩坪は、どこにもビークにのぼっていない。そういう意味もあって、そこへ行ってもらおうというのが第一の案だった。

加藤　ところが岩坪は、ウルドゥ語ができるから、ベース・キャンプに人足があがって来るので、かわいそうだが動かせない。脇坂はからだの具合が悪いというので、平井、芳賀を出したわけです。二人で登れる山というのは、ずっと捜したところ、あそこのビアンジェを登っていったステステ・サドルのところにあるステテ・ビーク、六九八〇いくらかの山、これなら登れるだろう、ここでひとつビーク・ハンティングをさせようというねらいがあったわけです。ところが行った連中が欲をかいて、高いところにかかって、これはやりそこなったのですが、シャクスガムのほうは十分見て、写真をとってきた。

今西　シャクスガムは見てきたのか。

加藤　見てきております。

平井　私がだいたいビアンジェ行のことをまとめて話します。ベース・キャンプを出ましたのが八月十五日。その当初の目的は、ステステ・サドルまで行って、シャクスガム川をのぞいてきたら大成功ということでありました。そこでバクリー（羊）というアダ名

の優秀なポーターをつれて三人で行きました。もちろん隊員、ポーターともに二十キロから二十五キロかついでおります。だいたいバルトロ氷河の横断に時間を食いまして、ビアンジェ氷河の上のほうまでは悪くなかったのですが、一カ所アイス・フォールの中にクレバスのひじょうに大きいところがありまして、そこを巻くのに時間をとりました。八月十五日、小雪の中をベース・キャンプを出て、十七日に五四〇〇メートルのところにテントを張りました。そうしてステステ・サドルを見ますと、近く見えます。事実ステステ・サドルそのものが五八〇〇ですから、近く見えるわけですけれども、そのつぎの日に一〇〇メートルばかり高度をかせぎまして、そこへテントを置いて、それからから身でステステ・サドルを往復しました。ポーターはテント地に番をさせておいて、私と芳賀と二人で往復しました。これはけっきょく一日かかりました。というのは雪がひじょうにもぐったので、ステステ・サドルに着いたのは三時ごろであります。これでまず当初の目的は達したわけです。

シャクスガムをのぞく

今西　どんなところや。

平井　ここからはシャクスガムは見えません。見えたのは、ピラミッド・ピークが正面にバンとありまして、それだけでした。それからムスターグ・タワーの西尾根ですか、それが見えておりまして、ほとんど期待していたものは一つも見えなかったわけです。それで次の日にどこのピークへ行こうかと考えたわけですけれども、さっき加藤さんがおっしゃいましたステステ・ピークと申しますのは、この辺の地図が間違っていまして、マウント・ステステというのはひじょうに急なピークで、登ることは不可能なのです。この辺の山としましては二つあります。六九七二という山と七一七〇の山と二つあったのですけれども、六九七二はわりあいむつかしい山でしたので、七一七〇の山をねらったわけです。八月十九日はテントを出発して、横のピークから見てだいたい七〇〇〇メートルくらいまで達したと思われます。このピークは七一七〇ですけれども、稜線の部分がひじょうに長くて、岩の尾根なのです。したがって七〇〇〇まで行ったときに十二時ですが、これ以上とうていピークにはとどかないと、見切りをつけておりたわけです。その登るところは、六五〇〇メートルからひじょうな岩尾根でして、逆層の岩場です。日本でいいますと、ちょっとむつかしいようなルートです。そこを芳賀と二人で登りました。そしてそこをまたお互にジッヘルしながらおりたわけです。そこで七〇〇〇メートルのところから望むと、シャクスガム川流域はすっかり見えまして、中央アジアの辺の山がぜんぶ見えたわけです。

今西　山は茶色か。

平井　そうです。雪は消えておりまして、むこうはぜんぶ茶色です。その日はそれでテントへ戻って来ました。これでだいたいわれわれにまかされておりました日時はぜんぶ、使ってしまいましたので、次の日におりたわけです。

われわれが日本から持って来た食糧は、だいたいチョゴリザでぜんぶ使い果してしまいましたので、ビアンジェはぜんぶ、現地食で行きました。乾パンだけは残っていましたので、昼は乾パンでやりましたけれども、朝と晩は全部チャパティかバラエと申しまして、要するにアタのおかゆです。ノリみたいなものですけれども、それでやりました。それでけっこうエネルギーも出ましたし、少しも抵抗を感じないで食べることができました。

今西　平井はなんでも食う見本やということだが。（笑声）

芳賀　現地食で十日間ほど生活しましたが、ぜんぜん苦にならなかった。七〇〇〇メートルくらいの山なら、現地食でいけるという感じがしました。

それから、もう一つ重要な経験は、六五〇〇メートルから七〇〇〇メートルまでは、ひじょうに急な岩と氷の壁でしたが、その岩登りがぜんぜん呼吸困難を感じないでできたということであります。高度馴化ができておりますと、かなりのロック・クライミングができるのじゃないかということを体験しました。

帰　途

梅棹　帰り道のことを、ごく簡単に。

山口　帰りの道は、クーリーの状態なんかもかなりわかっていたので、ちょっと急いだというかっこうです。往路はアスコーレからベース・キャンプまで十一日かかりましたが、帰りはウルドカスの滞在はしませんから、十日でよい。それで、十日分の日当を払うからできるだけ早く行けということにしたわけです。結果からいえば、そのほうがクーリーに食糧を与えなくてもよいし、いろいろな点でこちら側が得になるわけです。それで二日行程とか一日半の行程を帰りにはだいたい一日の行程にとったわけです。

八月二十二日、ウルドカスでビアンジェ行の二人に合流、二十七日アスコーレ、三十一日にはスカルドに到着しました。

加藤　最後に、景色の話をしたいのですがね。デュッソーからあとは、岩坪、高村が人足をひきつれて陸路をとった。あとの本隊は、ザークにのって、ゴラプールというところで泊まった。このゴラプールというところのキャンプは、これは全行程のキャンプの中でいちばんすばらしいキャンプだった。とにかく人足がそばにいないことがありがたい。それからちょうど河原で、はるかに部落を離れていて、すぐ川のそば。

桑原　きれいな砂浜でね。

加藤　満月ときている。マキはリンゴの木の乾いたすばらしいもので、これはじつに忘れられないキャンプだった。

桑原　まったくよかったね。もう一つは、デュッソーでもどこでも泊まると、村民がアンズやらちょっとしたものを持って来て、ボクシスをくれという。ところが、ゴラプールでは、お盆の上にくだものをきれいに配列して、まん中にバラですか、花をそえて持って来た。花を添えぬでもくだものは食えるわけですが、とにかく、バルチスタンというところには美的感覚のある人間がいったいおるのかと思っていたが、あそこへ来てはじめて、美的なセンチメントがこの部落にはあるのじゃないかと思った。

それに全体的にこちらの気持がよかったのだ。脇坂も完全に元気になったし、仕事は完全に終って、いよいよあしたは根拠地の町へ出る。そういう心理的な要素も加わって気分がよく、おそくまで歌をうたったり、キャンプ・ファイアーを楽しんだりしたものだった。

第六章　装備の検討

登頂用の装備

梅棹　行程順の報告が、ほぼ終ったようですから、これから、各項目別に、いわば技術的諸問題の検討に入りたいと思います。まず装備の問題からはじめましょう。

準備の方針そのほか、一般論がたくさんあると思いますが、いきなり、クライマックスのところ、登頂用の装備から話をはじめていただきましょうか。

林　登頂のとき、ザイルなんかは使わなかったの。

藤平　ザイルは二〇メートルのを一本もっていた。四〇メートル・ザイルをナイフで半分にちょん切って、二〇メートル・ザイルにした。

林　コンティニュアスかなにか……。

藤平　ほとんどコンティニュアスだ。岩場の登りだけは、ワン・アト・ア・タイム。

林　岩登りの用具はぜんぜん持っていってなかったの。

藤平　カラビナは持って行ったけれども、ハーケンは持って行かなかったね。

林　それはどういう見とおしで……。

藤平　けっきょく使う必要がないと思って。岩は出ているけれども、ぶっそうな感じがしないし、前のアブルッジはたしかに岩でなにも使っていないらしい。昔の人が使わないで登ったのなら、われわれも使うことはないだろうと思って……。

梅棹　いい度胸だ。第四キャンプaに帰りついたのは、ずいぶんおそくなってからだろう。

藤平　九時半だったかな、中島君に会ったのは。

中島　八時です。いっしょにテントに帰りついたのが十時半でした。

梅棹　ヘッド・ライトは一つしかなかったのだろう。

平井　一つです。慎重なコンティニュアスでおりながら、後から照らした。照らす範囲がせまいから、よく見えない。二人とも疲れているし、ひじょうに急なので、あまりよい気持がしなかった。奈落の底にすいこまれてゆくような感じだった。急な雪面が無限につづいているように感じられました。

藤平　はじめのうちは、電池の節約ということで、ライトをつけずに、無理して足場を捜しながらおりてきた。二人ともちょっと片足を踏みはずしたりしたので、これは危いから電気をつけようとしたとき、ちょうど第四キャンプで三人のライトが見えた。盛んにコールをかけている。こっちもコールをかけるのだけれども、わからないのか、いつまでたってもうるさいくらいかけている。ぼくらくてしようがない。あれをかつぐと、まったくよけいな重量をかついでいるようなものだから、ショイコにキスリングをしばりつけてのままかついだほうがらくじゃないか。キスリングはかつぎよいし、背中にピタッと当ってくる。

林　装備の成績調査表を見ますとキスリングを使ったのはあなただけ。あとはたいがいがショイコを使っている。

藤平　アタックのとき、ショイコにキスリングをしばりつけて行ったのですが、キスリングだけの目方と、ショイコの目方とをくらべてみて、なんでこんな軽いものをかつぐのに、こんな重いしかけをつかわなければならぬのかと思った。（笑声）

歩いているうちに、だんだん腹が立ってきて、しまいには、八時ごろ中島君らと会う直前には、怒り心頭に発する状態になっていた。こんな重たいものは、おれはどうしても谷へけおとしてやると……。

脇坂　あのショイコは、体格によって背負いにくいのです。ぼくなんかショイコを背負うと、首を前に曲げなければならぬのです。それが場合によってはひじょうなしゃくのタネになる。不自然な格好になって……。

加藤　だいたいあれは重たいです。あれは孫子の代から数代あとまで使える。一つのエクスペディションで、あんな子々孫々使えるような丈夫なものを持って行くのはおかしい。もっと軽い細いものでいいと思う。

脇坂　もっと軽くならないものですか。ベニヤとか、ファイバーとかが使用できないですか。

高村　鋼鉄線製のものもあります。

岩坪　あれはあかん。すぐひしゃげてもとにもどらない。

高村　今度のものは、作らせた工作所も悪かった。金属材料が

の姿が見えないから心配なんだろう。それでライトをつけたら、コールはやめた。

林　高度計は持って行かなかったのですか。

藤平　あんな重たいものは……。

山口　ぼくがコルまで持って行っただけです。

ハシゴとショイコ

梅棹　こんどはハシゴをつくってもって行ったでしょう。

高村　ナワバシゴとジュラルミンのハシゴを準備しました。ジュラルミンのハシゴというのは、三つにおれるもので、一つが二メートルくらい。そうとう重いです。二〇キロくらいあります。

桑原　みなさんにおおいにがんばってつくってもらったし、現地まで持ってゆくのに、コロンボから飛行機に積むのに、平井らがずいぶん骨をおったのですけれども、けっきょくスカルドに残してしまった。クーリーの費用節約のためです。帰りには、これはP・Aにやりました。P・Aはたいへん喜んで、サッと伸ばしてアンズを取ってみたりして、たいへんありがたいといっておりました。今度行って使うことがあれば、借りるようにはなっておりますけれども。

高村　けっきょく使わなかったけれど、結果からいうと、氷河というものの性格からして、一本のハシゴがなかったためにどうしてもクレバスがわたれない、あるいはアイス・フォールが乗り越せないということは、ないように思います。多くは固定ロープを確実にとりつけるだけで、ハシゴはいらないのじゃないですか。

藤平　じつはぼくがひじょうにしゃくにさわったのは、ショイコの重いことです。ぼくはショイコというのは大嫌いだ。かつぎにく

悪く、ジュラルミンというよりあれはアルミというべき品物です。また網をかけるフックがグラグラで、これも改良せねばならない。

岩坪　型は底部が三本脚になっているのが便利だ。荷物をつくったあと、地面に立てておけるからな。

中島　ショイコは、藤平さんにはたいへん評判がわるいですが、なんといってもあれは、手当りしだいに荷物をつけられるのが、大きな利点です。キスリングなら、いちばん底になにをつめ、その上になにを、というように、考えてパッキングせねばならない。

岩坪　ふつうの内地での山歩きには、運搬中に内容物をとり出せないのが欠点です。しかし、ポーラー・システムのボッカ用には最適だと思います。

酸素ボンベとマスク

藤平　重いという点では、酸素のボンベもシャクにさわった。一刻も早くほうり出したくなる。ところが、装備係からの注文によれば、ボンベは必ず回収してほしい、内地へ運賃をかけて送っても、まだもうかるという。こんなものはけおとすといったら、そんなにいうのだったら私がかつぎますと平井がいう。（笑声）　しょうがないから、ブツブツいってかついで来たが、ボンベは一本だけほって来ました。

平井　いや、ボンベはぜんぶ捨ててきたのです。

山口　アタックのときは、ボンベは捨ててこられました。

藤平　そうだったかな。

松浦　ショイコが具合わるいとおっしゃいましたが、酸素用ショイコの場合、かつぎ具合のどういうところがいちばん気になりましたか。

藤平　もともと、さっきいったように、ショイコ自体、あれは本当に好きじゃないな。しかし、とくに酸素のショイコについていうと、まずエコノマイザー、これが頭につかえる。アタックの場合、ルート・ファインディングはひじょうに必要になるわけだな。肉体的にちょっとでも不快だとおもうと、それが最後まで頭にこびりつくものだ。できるだけこれはらくにしておきたい。

脇坂　あのエコノマイザーは改良せねばならぬ。いつもうつむいていなければならない。エコノマイザーの件は日本でテストしたときから指摘していたのだが。

松浦　ボンベを横むきにつけて、エコノマイザーの位置もかえればどうだろう。

脇坂　エコノマイザーを取付ける小さなネジはじつに具合わるい。高所でとりつけたときフウフウいった。

松浦　それから、酸素のボンベをかつぐ場合に、ショイコ以外のものでかつぐとすれば、どういうものがよいとお考えですか。

藤平　これはまあ仕方がないと思った。ショイコしかないんだから。（笑声）　ショイコのかつぎ具合をもう少しうまくできないかということだ。

松浦　というのはエコノマイザー以外ではどういうところを……。

藤平　背負い具合と肩にかかり具合。なにか肩にばかりかかる気がする。

松浦　たしかに肩にかかりすぎるということはありますね。腰が痛いことはなかったですか。

藤平　それはなかった。それから、もう少し軽量にしたらどうかな。

加藤　太すぎるね。パイプが。

松浦　あれでもマナスルで使ったのよりは軽いのですよ。

藤平　それはわかるけども、もっと軽くらくなものはないかということだ。

高村　もっと時間をかけると軽くなったんだが。

中島　袋にするという考え方もあると思うな。

松浦　マスクの具合は。

藤平　マスクか。けっこういいんだけども、上にかける紐ざ、これが両方ともはずれるんだ。一方を固定することはできないか。あれは気がついてみると落してなくなってたんだ。テープを出してしばったんだが、ぜんぜんしばり具合がわるくてね、第一回のアタックのときにはね、酸素のマスクをぶら下げて歩いてた。（笑声）

松浦　マスクの内側にビロードをはっておいたんですが、あれはどうでした。

藤平　あれはいいんじゃないですか。

松浦　雪がつくということはなかったですか。

藤平　なかったな。しかし、ビロードがはってなかった場合というのはやってみなくちゃわからんがね。あのあたりだったら、あろうとなかろうとたいしたことはなかったと思う。暖かいんだから。

高村　マスクのことですが、あれにはゴムくささがあったでしょう。あれを長時間使っていて、気になるということはなかったですか。

平井　むしろ、ええにおいでした。

藤平　うん。別に気にならなかったな。

松浦　ゲージの位置が自分で読めないというのは決定的に悪いですか。

藤平　そんなことはないだろう。要するに、途中しばしば休憩することはわかり切っているんだから、目の前にゲージがこうぶら下がっていてもしようがないだろう。（笑声）　いつもかも針がちょっと動いたということを見てもはじまらないな。一分これだけ出せばなん時間ぐらいつづくかということは、最初からわかりきってるんだ。だいたい頭で考えた時間と合ってることを確認しておけばいいんだろう。

酸素使用法

松浦　流量ですが、だいたいどのくらいにして使われましたか。

藤平　一分間二リットル。

平井　はじめの攻撃のときは一・五リットル。

松浦　それよりも多くする必要があるとか、少なくてもよいとか思われますか。

藤平　必要はないと思います。

平井　二リットルでよろしい。

藤平　やってもやれないことはない。一・五リットルでも。

松浦　平井さんの記録に、外気といっしょに吸ったほうがよいというようなことがあったんですが、これはどういうことですか。

藤平　これには曰く因縁があるんでね、ぼくは酸素に対するアクリマティゼーションがひじょうに悪いんだよ。（笑声）　平井は最初から調子がいいんだ。ところがぼくは何回やっても息が苦しくなってマスクをむしり取ってしまうんだ。これはないほうがいいかなと思ったんだ。ところが第二回のアタックのときのラストあたりから酸素になれてきた。

林　というと、けっきょく人によっては、練習用としても、ある程度の量の酸素を持って行く必要があるというわけですか。

藤平　あると思う。それでそのときに途中で、外気といっしょに吸えば、もうちょっとらくでいいという説が出たんだ。アタックのときは完全に密着さしてしまった。

松浦　そのときはもうなれておられたわけですか。

藤平　うん、なれていた。苦しくない。外気というのはマスクをブランブランさせてうんと息をらくにできるようにすることだ。

林　それは酸素の問題よりもマスクに対するなれの問題じゃないですか。口腔の面積とか排気量とか……。

藤平　まあ、兵隊のときにおれはガス・マスクをかぶって走っていたからね。こいつはなれやすいと思ってたら違うんだな。

林　それはガスをケチりすぎてるんじゃないですか。なれがおそいというのは。

藤平　酸素の量か。それはやっぱり二リットル。

加藤　顔の辺にゴチャゴチャ食っついてんのがシャクにさわって来るんだよ。

藤平　自分の呼吸を酸素の流量に合わせて調整するような気になってくるんだね。それがひじょうにめんどくさくなってくるんだね。それで息が切れて、フースカフースカいって、「こんなもの」ということになっちゃうんだね。

松浦　それでは次の問題にうつります。純粋の酸素だけではのどがかわくかもわからんというので、炭酸ガスを混合した酸素を用意したんですけど、それの使用は……。

藤平　あれは入ってたのか。そんなもの。

松浦　ええ入ってます。CO_2と書いてあったのが、入ってます。

脇坂　使わないで、またベース・キャンプまでおろして来たんですわ。

藤平　あんまりのどはかわかなかったぜ。

中島　けっきょくそういう区別をしなかった。使用のときにね。

藤平　ともかくね、アタックしたときにね、テルモス一本ずつ持って行ってたしか残ったと思うんだよ。おれは。テルモスからそんなにガブ飲みはしなかったね。それほどのどはかわかなかった。

平井　そうです。

松浦　次に、不凍液というのをつけときましたが、あれを塗る場合に筆と吹きつけるやつと、ふたつつけときましたがあれは……。

藤平　いや、僕は塗らなかった。だれか塗ってくれたんだろう。

中島　あれは最初、ベースで塗ったな。

松浦　それから、藤平さんはなさったかどうかしりませんが、テスト用の圧力計を持って行ったんですが、山で使う場合、そのオペレーションが簡単であったかどうか。お気付きになりませんでしたか。

山口　それはぼくだけが使った。

松浦　そしたらあとで聞きます。ボンベ不良のため、酸素損失をしたということはなかったですか。

藤平　そんなことはなかった。

松浦　それ以外で、酸素でお気付きになったことは。

藤平　いやあ、僕はもう研究心が旺盛じゃないんで。（笑声）

松浦　じゃあそれで、けっこうです。

酸素の量

松浦　酸素の必要量について、質問します。今度のチョゴリザの場合は、だいたいアタック用として二回分、救急用と就寝用に八本、全部で二十本持って行ってもらったんですが、平井さんの記録をみますと、十本だけ上へ持ってあがっている。あとは残して行ったという。今後、酸素の使用量を決める場合どういう基準でやればよいかという点でお気付きになったことを……。

藤平　酸素は、八〇〇〇メートルの山ならいざ知らず、七〇〇〇台の山だったら、アタック用だけでいいんじゃないか。

松浦　就寝用には、いらないですか。

藤平　いらないと思います。

林　それには異論があると思うな。就寝用に使うと、ひじょうによく寝られる。それから顔がふくれた者にね、酸素を嗅がして寝さしたら、ずいぶん挽回が早かったろうと思いますよ。

加藤　それはたしかに、効果はあるだろうよ。ぼくは第三キャンプで酸素があまっていたので、夜ちょっといたずらしてみた。どんな気持かな、と思って、酸素を吸ってみたんだが、五秒とは起きていなかったのじゃないかな。そのままグッスリ寝て、朝まで知らない。それくらいよい気持だった。

それはそうなんだが、だから酸素を持ってゆけ、というのは、冷蔵庫をかついで行ったら、うまいものが食えるぞと主張するのと、おなじことだよ。トランス・ボートがたいへんだ。

末包　顔がふくれることと酸素と関係があるんですか。

林　そりゃ疲労の回復がうんと違う。

藤平　あればあるにこしたことはないと思う。だが程度問題だ。けっきょく自分のからだをそこまできたえてゆくというのが、さきの問題じゃないかな。

加藤　きたえるのじゃないな。あれは先天的なものだな。

藤平　それからね、アタックのときの酸素の量ですが、まああれ以上かつげといってもかつげないだろう。

梅棹　重量はどれだけか。

松浦　酸素が入っていないとき、ボンベ一本二・七キロ、入れて三・一キロです。付属品としてマスク、エコノマイザー、ゲージなどで一・五キロ、酸素ボンベ三本とこれら付属品をつけたショイコともで一三キロが一人当りの重量となります。

藤平　まあまあれでせいいっぱいだな。あれでも重いやと思ったね。これかついでゆくより、から身で行ったほうが早いんじゃないかと思った。

高村　第一回アタックでどれぐらい使い、どれぐらい残っていたかということを聞いておきたいのですが。

藤平　それ、よくわからないんだ。メーターの読み方なんか平井にまかしてあったんで……。

だいたい半分ぐらい使ったんだろう。

酸素はほんとに必要か

脇坂　だいたい七六五四メートルの山で、ほんとうに酸素が必要なんですか。それが問題だ。

松浦　あなたは、ネパールのときは、六六〇〇メートルぐらいから必要だといっていたのじゃないか。

脇坂　それは、ネパールでは高所滞在が長く、消耗がはげしいので、その辺で酸素を吸って体力をつけておいて、その後、一挙に登ろうという考えだ。

松浦　六七〇〇メートルぐらいで、酸素の有無で二〇数パーセント能率が違うという結果が報告されている。

高村　チョオユーでも、六、七〇〇〇で胸苦しくなったと書いている。ぼくらの場合は、それまでの高所順応がよかったのでどう

もなかったが、今後どの山でも今回のような好条件下で順応できるとはかぎらない。それまでの順応の仕方により、酸素吸入による能率増進の程度は変わるだろう。

脇坂　アンナプルナのナムン・バンジャン越えでは、一日目にドカッと高度の影響が来た。そのくせ、翌日の峠越えは、十貫目背負ってどうもなかった。急に高度があがった場合と、漸次高くなるときはまったく異なるのだ。それに、カラコラムでは、ポーターが使えないから、酸素の荷上げは隊員がせねばならない。その点を考えにいれると、酸素の威力は、カラコラムとネパールではひじょうにちがう。

梅棹　イタリア隊やアメリカ隊はどうしていましたか。

桑原　イタリア隊は、今度は酸素を使ってないだろう。アメリカ隊は何本使ったのかな。

藤平　猛烈に使ってます。

桑原　片一方は八〇〇〇ちょっと出ているし、一方は八〇〇〇ちょっと欠けている。そして、一方は使っていない。

梅棹　どうやら、どっちでもよい、ということになりそうですな。けっきょく、チョゴリザも、酸素なしでもよかった、ということになりますか。

平井　酸素がなかったら登れていないとはいわないが、かなり苦しい登攀になっただろうということはいえる。一分間二リットルの酸素を吸って、なおかつ午後四時半の頂上だったのだから。

梅棹　酸素をつけるとひじょうにらくか。

平井　別にひじょうにらくとは感じなかった。途中で（午後一時）完全になくなったのだが、それからもそう息苦しくはなかった。しかし、あとでスピードをわり出してみると、酸素があるときのほうが倍くらい早く登っているな。もっともこれは、疲労のせいでスピードがおちたとも考えられるが、いちおうのデータにはなる。

藤平　これは僕の個人的な意見だが、僕だったら、酸素はいらないと思う。

中島　せいぜい医療用として四本ぐらい持っていくことだな。

加藤　七〇〇〇メートル・クラスではまあいらない。今までの経験ではいらないわけだな。医療用としてなら、別だが。登攀用ならいらないね。

林　加藤泰安氏はですな、きらいならきらいでいいんですよ。だけどね、ぼくは科学的データをとることに対してですね、もっと協力的にやって欲しいと思うんです。七〇〇〇メートル級には、酸素はいらない、なんてきめつけられたら、もう若い者の科学に対する心はなくなるですよ。

加藤　あったほうがらくですよということはいってるよ。おれは。だけどなくなったって登れることは登れる。

中島　私もそう思いますね。私は七二〇〇ぐらいのところまで迎えに行っただけなんですけども、そこでぜんぜん息苦しいということはなかった。

藤平　なければどうしようもないというものではない。

林　それはそれでもいいんですよ。しかし、いらないならいらないということを、いい切ってしまわないで、いろいろ科学的に説明をしていただければいいわけなんです。表現の方法なんです。

加藤　ああそうか。これから美辞麗句を使うことにしよう。（笑声）

プロパン・ガス

梅棹　こんどの隊は、燃料としてプロパン・ガスを持って行きましたが、これは、世界ではじめての試みではないですか。

高村　いや。外国には、ブタンを使っている隊もありますが、プロパンもあります。

梅棹　使ってみて、成績はどうでしたか。

高村　スペアなどケロシンを使うものより操作がひじょうにらくで、六〇〇〇以上はプロパン万万歳だ。しかし、キャラバン中は砂ぼこりの多いところを行くのでノズルが故障しやすい。最もこれはブロパンにかぎらず、ケロシン・ストーブもおなじだ。マンドリンの使用ができない構造も一考を要する。また私たちが経験したところでは、ガス量調節のコックをいっぱいに開いておいても、自然にガス噴出量がすくなくなってゆくようでした。

梅棹　いずれも、このような新しい器械は、前もって使用法を訓練しておかねばだめだ。

高村　今回は、大ボンベをベース・キャンプにおいて補給用にし、小型を各キャンプに配置した。しかし、中型ボンベを準備しておけば、さらに高所に補給用のプロパン・ガス・スタンドを設置することができて便利だったでしょうね。大ボンベは風袋だけで一〇キログラムもあり、これは取扱いに不便でした。

松浦　トラベル中は大ボンベ、登攀中は小ボンベが好ましいのではないか。

高村　プロパンの性質については、最高所キャンプでも問題なく使用できて大いに威力を発揮しました。これで容器のボンベがもっと軽くなれば申し分ありません。

岩坪　ガソリンとプロパンを比べると、ガソリンのほうが火事の危険が大きい。プロパンの大きな長所として、点火の操作がじつに簡単で、そのうえ火力調節を行い易いことが挙げられる。ガソリンでは少し火力を小さくするとすぐ消える。

松浦　プロパン使用についての問題は、ボンベの重量をはからないと、内容の残量をしることができないという点ですね。これが目盛かなにかですぐにわかるようになればひじょうに便利だ。

高村　ケロシン・ストーブは、パッキング部分が不完全なものが多く、ずいぶん修理しましたが、高所に行くと、だいたい六〇〇〇メートルあたりから、メタを下の火皿で燃しつづけておかないと不調なものが出てきました。しかし、七〇〇〇メートル近くでもけっこう使えました。今回は、手がまわらなかったのですが、当然、ノズルの太さのちがったものも準備して、高いところでも、もっとらくに使えるようにしたいものです。

ケロシンの使用量は、登山期間中も、ポーターたちは焼くのにひじょうに時間のかかるチャパティを主食にするわけですから、予定していたよりもさらにたくさん必要のようでした。

無電とラジオ

梅棹　無電のことを聞いておいたらどうですか。

藤平　どうもそういうサイエンティフィックな問題は、もうかなわん。

加藤　おれはきらいなんだ。あの無電というやつは。早くこわれてしまえばよいと思っていたら、幸いこわれてくれた。

梅棹　無電担当の平井君に一般的説明を。

平井　持参したのはナショナルＥＰ―一五〇―六型携帯無線機と、米軍放出品のＰＲＣ―6型携帯用無線機三台で、おもに後者をよく使った。この後者の規格は次のようなものです。

周波数　五五・一メガサイクル

出力　〇・二五ワット

最大到達距離　一・六キロ
重量（電池共）　三キロ
電池寿命　約二〇時間

出力と最大到達距離がやや小さいように思われるが、じっさい使用した結果では、見通し直線距離は約七キロメートル（ベース・キャンプと第四キャンプ間）が最大距離であったが、感度は明瞭であった。

配置は原則としてベース・キャンプに一台、あと二台は適当にハイ・キャンプで使った。

松浦　こわれたそうですが……。

平井　ベース・キャンプを出て二十日間は働いたが、以後は一台を除いてあとは故障した。故障原因は湿気と振動による絶縁不良と真空管不良だと思います。

松浦　電池の消費量は。

平井　二十日に一回かえる程度で十分だった。

松浦　ラジオは。

平井　次の三台をもって行った。

ナショナル　トランジスター　オール・ウェーブ（五五〇―一五一〇キロサイクル　4―10メガサイクル）
同右　電池管式　同右
ソニー　トランジスター　同右

いずれも優秀であったが、少し重かった。感度は、電池管式のラジオが優っています。トラスジスターの寒さによる障害はほとんどなかったようです。

脇坂　あの無電機は、あれ以上軽くならないだろうか。

松浦　トランジスターが低温でも安定に働くようになれば、うんと軽くできるが、真空管式ではあまり軽くできない。

田附　発信を受けたか否かを、モールスで返答できるような、片通話式無電は軽くできないだろうか。

松浦　信号だけでも送れる発信機をつければ、片通話も両通話もあまり重量変らず、いっそ両通話にしてしまったほうがよい。

高村　あの無電機には、ケースはなかったのか。テントの隅においておくと、冷えて働かない。暖めてやらねばならなかった。アタ袋に入れていたが、保温性のあるケースがほしいところだ。

松浦　あの無電機は、だいたいケースなしで使用するものだ。少々、水にぬれても大丈夫なようにできている。

中島　PRC―6型は、アメリカ隊もイタリア隊もおなじ器械を使っていたのはおもしろかった。イタリア隊の電波が混信して聞えたことがあった。

山口　途中で故障したけれども、あれだけ使用できればけっこうだ。これからの遠征には不可欠だ。

岩坪　しかし、時として無電に追いかけられているような気がした。三十分ごとに、無電連絡で現在位置を問われると、追い立てられて、ゆっくりめしも食っていられない。やはり無電連絡の間隔など、使い方になれることが必要だ。

松浦　今はもう、無線の使用の可否より、いかにして無線を上手に使うかということを論議する時期になっているのではないか。

中島　三台といわず、もっとたくさんあってもよかった。全員が取扱いになれねばならない。今度の故障も、加藤さんのように、日ごろから無電みたいなじゃまくさいものは早くなくなればよいと考えている人がいるから、こわれたんでしょうよ。（笑声）　こういう人は、文科系にえてして多いものだがね。

桑原　冗談いっちゃいけない。ぼくは大好きさ。

第七章　装備の検討（つづき）

テント

梅棹　機械・器具類はそれくらいにして、つぎは、繊維製品を主とした装備の話に移ります。はじめに、テント。どんなテントをもってゆきましたか。

高村　ベース・キャンプ以上で使用するテントとして、十六張を準備しました。原則として、下のキャンプ地で用いたテントのうち、一部を必要に応じて上のキャンプ地に張りかえるという方法をとりましたので、比較的少ないテントで計画を完遂することができたと思います。テントの布地としては、紫外線に対してナイロンよりも強いといわれるテトロンの平織、およびテトロンと綿糸を一本ずつ交互に組み合わせた交織、それにナイロン、ビニロンを用いました。構造について、とくに申すこともありませんが、出入口は吹流し式で、内張りはすべて絹を用いました。大きさは極力無駄をなくするように設計しましたが、ただ入口近くにだけ、わりあいゆとりをみておいたので炊事、物置きなどにおおいに便利をしました。

なお、グランド・シートは、氷河上のキャラバン中にクーリーに貸すためのもので、かれらは一枚のシートの下に十名ぐらいがもぐり込んで寝ます。もっとたくさん貸してやることができれば、もちろんそれにこしたことはありません。

個人装備

梅棹　ついでに、個人装備といいますか、各人が身につけていたものについて。

高村　衣類の基本として、下から網シャツ、薄い毛のシャツ、カッター・シャツ、スウェーター、羽毛服と重ねてゆき、スウェーターと羽毛服の組み合わせを時に応じてかえることにより、気温の変化に対処する、という方針をとりました。また薄い毛のシャツをふつうは一枚、必要によっては二枚とすることも考えました。基本的な考えはこれで正しかったと自負していますが、スウェーターがあまりに厚すぎたため、主として羽毛服のみを常用する結果になりました。

羽毛服は、ごく薄手のナイロンでつくりました。すこし生地が薄すぎたようで、羽毛が抜けて出てきます。それを防ぐために、特殊加工を施す必要がありました。

防風衣には、テトロンの平織、およびナイロン・綿の交織の、二種類の布地をつかいました。テトロン平織の布地は、防風性がよいようです。

それから、手袋とくつ下ですが、これはとくに申し上げることは

ありません。皮のオーバー手袋がたいへん評判がよかったようです。

梅棹　寝袋は。

高村　寝袋はやはり羽毛服とおなじ生地です。ごく薄いナイロン地でつくりました。第四キャンプと第五キャンプでは、寝袋を二重にして使うつもりでいましたので、外側用の寝袋というのを用意したのですが、じっさいは使いませんでした。それは、すこしでも荷上げの重量を減らす、という意味からです。羽毛の量をあんまり少なくしたので、すこし寒い感じをうけたひともあるようです。

それから、くつのことをいっておきます。高所用の登山ぐつとして、外皮をボックス、つぎにモルトプレン、それからナイロンで包んだ羽毛の層をつくり、最内側はボアーをはったものをつくりました。底は合成ゴムです。重量がかるく、保温性は優秀であったと思います。

梅棹　着物ではないけれど、ついでにピッケルやアイゼンのことを。

高村　ピッケルもアイゼンも、国産品です。軽い特殊鋼のものです。それから、高所ポーターには、アイゼンをやったのですが、かれらはアイゼンはぜんぜん慣れていないので、ほとんど使っておりません。

軽量化と強度

梅棹　個々の装備についても、あるいはまた全体の方針についても、いろいろ批判があると思いますが、まず、装備をととのえるときの、基本方針について、話して下さい。

今度の装備の係長はだれがやっていたのですか。

四手井(英)　高村だ。

高村　けっきょく、根本方針としては、当然のことですが、軽量化の方向をとる。人数の上からは、かなり大きなエクスペディションになっているけれども、基本方針としてはできるだけライト・エクスペディションの線をとろうと考えました。それから予算不足ということも考えられるから、できるだけメーカーの寄贈に期待しようということで準備にかかりました。その結果はどうかというと、けっきょく軽量化の方向をとったにもかかわらず、今度は繊維のほうにちょっと力をとられすぎまして、装備全体の軽量化という大きな観点から見ますと、まず失敗だったと思います。たとえば繊維の軽量化ということを一生懸命考えている一方で、テントのポールの軽量化において十分な考慮が払われていないとか、そういった問題がしょっちゅう起ったわけです。

梅棹　軽量化はよいとしても、ヒマラヤ装備の場合は、強さの問題があるでしょう。その点はどうだった。

高村　たとえば繊維の場合は、これもまた一つの大きな失敗だったのですが、丈夫なものを作ることばかり考えておりましたので、いざテントを縫いにかかってみますと、針がひじょうに通りにくいわけです。おなじスピードでミシンをかけますと、針が過熱して糸が切れるという問題が起ってきたのです。これは繊維を担当していたひとも、あまり予期していなかったことらしいのです。そういう意味で、繊維の布地自体はひじょうによかったけれども、縫目の強さという点では戦々兢々としながら行ったという、これは内輪話ですけれども、そういう状態なんです。

これは、テントだけでなしにあらゆる装備についていえることです。各部分のバランスがとれていない。今後はその点十分、各パートの連絡と、それからいろいろな角度から考えるという意味で、いろいろな専門の人とのディスカッションを、もう少し余裕をもって

やっておくべきだったと思います。

岩坪　強度ということについてですが、いままでずっと、ヒマラヤの装備は、いつもあらゆる強風に耐えること、あらゆる寒さに耐えること、というような、強いことばかり――もちろん軽いことを前提にしてですけれども――考えていたと思うんです。しかし、だんだん経験を重ねて、よく考えてみると、どうもネパール・ヒマラヤでは、ブレ・モンスーンはあまり寒くならぬらしい。それからチョゴリザなんかも、K2なんかは、ふぶかれているけれども、それもよく見ると、ときどき、たまにふぶかれているだけで、ボスト・モンスーンのアンナプルナ隊があったような、あんな強風にはあっていない。そういうことを考えると、これは作戦計画にも関係してきますけれども、あんまりテント生地の強さのことなどには、力を注ぐ必要はなかったのじゃないかと思います。

高村　ある意味で、そういう考え方もとり入れてやっていくことは必要だと思いますが、しかし、やっぱりそこまで踏み切ることはひじょうにむつかしいだろうと思います。

山口　けっきょく予算との関係もあるわけです。ぜんぜんいままでの既製品のまま使うとすると、それはぜんぶ、買わなければならぬということになる。その点で、なにか目新しいもの、しかもとくに優秀なものがあれば、それはほとんど寄付してもらえるというふうなこともあるわけです。今度の場合も、テトロンを大量に使ったのは、強度の問題のほかに、こういう事情もあったと思います。テトロンは、とにかく新しい製品ですから。

テトロン

林　今度の装備の特色の一つは、テトロンをおおいに使ってみたことにあると思いますが、結論として、どうですか。テトロンは必ずしもよくなかった、ということになりますか。

高村　テトロンについては、十分考えて使わなければいかぬと思います。いまそれをいいましょうか。

林　テトロンというのは大きな問題ですから。具体的に話して下さい。

田附　はじめに、テトロンの性質を検討するときに、実験室だけのデータにたよったという点がひじょうにあったと思います。使いやすさとか、縫製とか、純技術面からの検討よりも、なにか実験室での、引っぱる試験とか、そういうデータにたよって選んだのじゃないかという気がするのです。さきほどの生地を厚くしすぎて縫製に困難を感じたというのは、テトロンだと思いますけれども、テトロンの場合、軽くて強いということで、薄くて打込み本数の多いような生地を使った場合には、ミシンの針の摩擦で糸がとけるわけです。そういうことは、じっさい実験室でやっていないのです。やってみると、一分間のミシンの回数があげられないから、縫製が遅れるということになるわけです。

今西　じっさい、山でどうだったのですか。性能上の問題は山でよかったのですか。

高村　具体的なことからいいましたら、光を通す率がよいので す。フィルムの中にいるような感じです。テントについていえば、テントの中がひじょうに明るくて、また綿みたいな吸水性がないものですから、テントの中の清潔感は綿のテントとは比べものにならない

ないほどなんです。

ただし、今度の山では、強風にあっていない。強風にさらされてどうかというデータは出ないわけで、あとは紫外線に対してどの程度の脆化をしたかということを実験的に調べてもらうより手はないのです。

欠点としては、どちらかというと、繊維が冷い感じがする。だから防風衣に使う場合には、着るときにちょっと抵抗を感ずる。それからすべりがよすぎて、オーバー・ズボンにした場合に、ちょっとおろすつもりが下までおりてしまう。(笑声)

山口　ナイロン・綿交ツイルのほうが肌ざわりがよい。それから、音がするんです。「絹ずれ」に対して「テトずれ」といいましょうか、絹よりはるかに大きい音で、あんまりけっこうなものではない。

田附　音をたてるのは樹脂加工のせいもあり、いちがいに繊維の性質と結びつけられない。織りかたも、綿交ツイルにして、裏(肌側)に綿が多く、表にテトロンなどが多く出るような織りかたにすれば、改善されると思います。

松浦　ザイルのケバ立ちはどうだったか。

高村　あまりたいしたことはなかった。

松浦　破れるとき、ビリッと破れるほうか、それともボツボツとすり切れ穴のあくほうか。

高村　かぎ裂きはあまりなかった。しかし織りかた、糸の太さにより異なるから、テトロン全体をあれでうんぬんできない。今後市価で買うとしましたら、これはとてもわれわれには買えない高価な繊維なんですけれども、だんだん量産化されるようになれば、やはりぼくらとしては注目していい繊維だと思います。紫外線の問題なんかでも、これは下のほうで、長い間張りっぱなしにしておいて、あとでモンスーンに襲われるという事態を考えれば、やはり実験上のデータのみならず、じっさいに使ってみて、いい特質を持ってすけれども、まあまあ今度に関しては、なんら支障を起ざないどころか、どちらかといえばよかったのじゃないか、そういう感じを持っておるわけです。

装備係の意見

高村　装備の実際的な準備を担当したものとして、いっておきたいことがあります。それは、計画が進行し、変化するにつれて、しょっちゅう装備のリストの提示を委員会から求められるわけです。マネージメントと労働力の点からいいまして、リストを書き直すということは、限られた時間内の準備の段階では、むしろエネルギーと時間のロスで、早くいい装備をつくるのにマイナスになるというような結果がひじょうに多かったと思うのです。今後やる場合、委員会のほうも、リストの作成などということは、極力、力を省いてやれる方法を考えるべきじゃないかと思います。

それから、登山道具を買うについても、今度、感じたのですけれども、既製品を買う場合でしたら、あらかじめ登山道具屋から明細な見積りをとると同時に、現物を持って来させて、ある一定の期間にみんながそれを検討して、その上で発注するというふうにしなければならない。これはふつうの会社関係なんかでは当然やっている方法ですけれども、われわれはとかくドロ縄式になりやすい。現物も見ないで発注することになる。そこで失敗する。これからは第一に、この原則を忘れぬようにしなければならないと思います。その場合も、基礎になりますのはけっきょく作戦計画でして、作戦計画が決まっておらないと、装備の準備ということはひじょうにやりにくいわけです。その点で今回はたいへんこまった。たとえばカメラマンはだれが行くかというようなこともなかなか決まらなかった。ポーターの人数も決まらなかったりということがあって、装備係としてはひじょうにやりにくかったわけです。そういう点も、今回は、事情が事情だといえばそれまでですけれども、とにかく作戦計画をもっと早い時期にがっちりしたものを立てたかったと思います。

加藤　今度は、いろいろの事情で、装備係はずいぶん苦労したと思うけれど、一ついえることは、なにからなにまで、装備のすべてについて、心をくだくというのは、むしろ必要のないことじゃないか。なにからなにまでということになったら、登山用具屋や運動具屋のものがずっとよく知っていますよ。各学校の注文したものをもって来て競争してやってますから。そういうものは一括してどこかの店にまかせて、装備係は、むしろ、この隊ではこればかりはウマいものだというようなものを、一つか二つ、一生懸命に考えてもいい。そして、とにかく三カ月間も、ひじょうに悪いところで生活するのだから、なによりも日常生活を主にして考えて、やってもらったらいいのじゃないかと思う。

高村　加藤さんのお話は、まったくごもっともです。テントのポールとかそういうものは、たしかに運動具屋の方がよく知っているという点はあったと思うのです。今度の場合、テントの大まかな設計はこちらが指示して作ってもらったわけですけれども、よく検討してみないと、まだ最終的のことはいえませんけれども、たしかにぼくらが見て、うまいことつくったなと思うようなテントをつくっているわけです。専門家が見ると、布地のとり方にはまだ問題があるそうですけれども、しかし縫う方法などは、力学的に見て、じつについいのじゃないかというようなテントをつくってくれたわけです。そうかじめ登山道具屋の現物について検討して、それから発注する、そういうシステムをとれば、いま加藤さんのいわれるような方法をとることになるわけで、そのほうが、じっさいぼくらとしてもほんとうに必要なものに力を注ぐことができて、方法としてはたしかにいいと思います。

バランスのとれた装備

桑原　さっき高村君が自分でもいっていたけれど、こんどの装備品を見ると、たしかにバランスがとれていないところがある。テントなんか、ひじょうによく考えて、いいものができているが、一方、キャラバンの途中でつかうズボンなんか、ずいぶんひどいシロモノだった。生地が悪くて破れやすい。ズボンは、衣類の中でいちばんよく使うものです。上着は脱いで歩くけれども、ズボンは毎日はいている。それがスカルドへ戻ってきたときはめちゃめちゃになっていた。しまいにはMのところが破れなかった人はまずないと思う。もっと力を入れて、慎重に設計し、いいものを準備するようにしてほしい。

加藤　ぼくはああいうものには金をかけていいと思う。

桑原　はじめにあのズボンをはいたときは、これでは寒いのじゃないか、これでがんばれるかとたいへん心配した。薄生地で裏打ちがしてないし……。こういうところは、金をかけて、もっと上等品にする。

それからくつズレの問題があったけれども、くつがたいへん悪かったということは事実だと思う。歩き方がまずいというより、若手

が全部マメができたというのは、くつが悪かった。そういうキャラバン・シューズを好んで選んだわけではないけれども、選ばれてしまったというところに問題がある。また、カネカロンのくつ下が悪かったというのは、これは隊員一致していると思うが、これが主力のくつ下として持ってこられた。だれもほとんど使わなかったでしょう。

高村　いや、そういう点はじつはわかっていたわけなんです。

桑原　これはやはり、準備段階におけるマネージメントのシステムの問題だと思う。全体を総括して気を配る人がいないといけない。たとえば、高村がかりにテントのほうをやっているとしたら、くつ下のほうはどうなっているか、そういうことをいつも気をつけて総ランしている人がいないといけない。自分が発注したり品物を見に行ったりはしないけれど、座って見ていて、総括的に全体のビルドをつかんでやってゆく人を置かないといけない。今度はじめに、土倉君が装備のことをやっていて、途中で倒れたという事情もあったからだが、この点はたしかに欠陥があった。

私自身は、ヒマラヤに経験もないし、ひじょうに忙しかったからできなかったが、これはなにも、隊員でなくてもよい。四手井(英)君なんかがやってくれてもよいのだが。四手井君にしても忙しいでしょう。あるところでは相談に乗って、たいへんいいアドバイスをしているけれども、全体を見ていない。はたしてバランスがとれていっているかどうかは見ていない。

四手井(英)　準備の途中で、私はこれはしまったと思った。というのは、装備の研究は、安田君に大半まかした。ところがかれは、繊維工学の専門家だ。そしたら、かれはテントとか羽毛服とかシュラーフとか、そういうものにひじょうに熱心にとりくんだ。それで最後の個人装備のほうには手がまわらない。いい加減なことになったのです。

桑原　安田君は熱心だったからね。

四手井(英)　それはたしかなんです。それからやはり、土倉君が退いてから、その結果どうにも収拾がつかなくなった。高村君がやりはじめても、どうにもわからなくなった。私も最初、全般的なことを知っていたのですが、そのうちになにがなにやらわからなくなった。最後は、山口らにまかすぞ、どうにもならん、といって投げ出したのです。くつ下とかズボンとかは、最後になってから、おそらくはたいしてよく考えもせずにかきあつめた。そこに大きな失敗があったと思います。

桑原　そういうことに関連してもう一つは、その係になった者に仕事取りが多いのだよ。山登りするときには、なにか責任を持たされたら、そのときはほかの隊員のだれを使ってもいいわけだ。それがリーダーなんです。これが準備のときでもなんでもそういうことをやらなければいかぬ。担当者をきめるね。きまったらその人は、その仕事に関しては、ほかの隊員全部を使っていいのだ。ところが、たいていはかれ自身が、目をつり上げて、仕事の中にもぐり込んでしまい、全体の見とおしと責任を忘れてしまう。

梅棹　それは未熟だな。

桑原　とにかくこんどは、そのために、装備のところで予算をべらぼうに超過してしまった。この次に出すときに、募金が必ずしもうまくいくかどうかわからないし、はじめの予算がこんなにふえるということだったら、エクスペディションがバテることがあるかもしれない。そのときには小さい委員会みたいなところで、これだけふえてきたからどうしよう、というようなことを考えて、緊縮できるようになっていないと、困るのじゃないかと思います。

下着論

加藤　さっき岩坪君がすこしふれた問題だが、じつはヒマラヤでのこれまでの経験で、われわれほかのものの報告を読んでみても、ブレ・モンスーンのヒマラヤは暖かい。寒さはそう問題にならないということを知っている。このことは、まず考えていいのじゃないかと思うのです。そうすると、ヒマラヤでは、防寒ということよりも、直接身につける下着類のことが、もっと考えられていいのじゃないか、その点、根本になる下着およびふつうのシャツ、ズボン、そういうものの工夫が足りなかったと思う。そういうものを完全にすれば、その上のものは、テトロンであろうとビニロンであろうとナイロンであろうと、そう致命的な違いはないと思う。温度の問題より、居住性および運動性を考えることのほうがもっとたいせつじゃないかと、今は考えております。

山口　いま加藤さんから、装備係は下着とかそういうものに力を注いだほうがよいというご意見がありましたけれども、ぼく自身は、必ずしもそうは思わないのです。下着とか常に身近かに着ているようなものは、個人々々の好みもありますし、それまでの習慣もありますから、やはり個人がいままで使いなれているものを準備するのがいちばんいいのじゃないかと思うのです。係がそれをぜんぶ準備するとなると、ぜんぶの隊員について、かゆいところまで手が届くようにする、というのは、ぼくは無理じゃないかと思います。あの準備のドサクサの中で、装備係に肌着の世話までさせるのは、ひどいと思います。

加藤　それはね、ほかのことはとてもおもしろいらしいのだよ。生地をもらって来たりなにかするのはうれしくて、ものすごい精力を使っている。そういうものをぜんぜんなしにしたら、こんなことはわけないですよ。

もちろん、下着とかシャツとかズボンとか上着は、個人が持って行くのがいちばんいいのだが、個人がいったいどれだけヒマラヤに経験があるかということを考えたら、やはりこれならヒマラヤでいいという標準的なものを示してもらって、それを着ていったほうがまあ間違いない。

今西　下着までそろえて買うてもらうと、大は小を兼ねるということで、若い者が着るようなものを着せられて、ああいうのは不愉快で着られない。

高村　その問題はたしかに大きさとか色によって、ひじょうにむつかしいのですけれども、よりよい下着の着方——好みはありますけれども、それでもやはりよりよい着方というものを、一本出すことはできると思うのです。ぼくの理想としては、そういうものをいちおうみんなに話して、みんながそれをしんしゃくした上で個人装備をそろえる、衣類、ズボンの下着は自分でそろえる、それがいちばんいいだろうということは間違いないと思います。

中島　重量だけ制限をつけて、衣類は個人にまかすのがよいと思いますが、ただ、共同購入すると安くなる、という利点はありますす。

それから、自宅にいる隊員はよいが、下宿している者は、じっさい買いに行くひまがないということがあります。

山口　ぼくなんか、出発前夜の一時ごろにやっと家に帰り、その日の朝、出発したようなありさまですから、自分のものを準備しているひまなんかほとんどなかった。

脇坂　許婚やらなにやら、身の回りの世話をしてくれる女のヒトのある場合はよろしいがね……。

山口　だいたい、ヒマラヤといっても、特別のものはいらんので、毛シャツなどは日本の冬山で使用しているものをもって行けばよいのじゃありませんか。

下着論（つづき）

加藤　わたしがいいたいのはね、個人でととのえるか、お仕着せか、ということより、こういう大事なものに安もの買いをしているのはいけないということなのだ。たとえば食糧なんかでも、おなじ佃煮を持って行くのに、田中市場で買う安ものの佃煮と、どこかちょっと行って一流品を買うのと、どれだけ費用が違うかというのだよ。（笑声）　それとおなじで、今度のシャツなんか、トラベルでボロボロになる、ズボンはぜんぶMが出る、そういうことでは困るのだ。そういうものはしょっちゅう身につけているもので、そういうところに親切にしてほしい。ウインド・ヤッケとか、テントとか、そういうものも問題だけれども、そういうものにはそうたいした違いはないのだよ。この間ぼくは、あるヒマラヤ装備のシンポジウムに出たけれども、重さが何グラムの差だとか、温度が何時間おいたらコンマ何度さがったとか、こんなことを重箱の隅を針でつつくようにして論じていながら、肝心なものをみなぬかしている。それは科学的におおいにやってもらうのもいいけれども、ほんとうの基本になる考え方は、そういうものじゃないと思うのだよ。

桑原　科学はよいけれども、その科学心というものがひと所に偏在してしまって、あとはパッとなっているところがある。

梅棹　そんなのは科学と違いますよ。

加藤　下着は自分自分で持っていっていいと思う。今度は網シャツをもらったが、あれはいいのかもしれないけれども、昔、車屋が着ていたようなもので、あれ、ぼくいやだよ。（笑声）

高村　これは科学じゃない。趣味の問題ですね。

加藤　趣味の問題なんだが、トラベルの途中で、あんな車屋に前後左右をウロチョロされては、気持が悪くてしようがない。

今西　ぼくも前に持って行ったけれども、ひとにやってしまった。

桑原　ぼくは使わなかったが、藤平以下にいわしたら、あれはすばらしいという。副隊長は毛嫌いして着ないけれども。

今西　食わず嫌いしていてはいかぬぞ。（笑声）

山口　あれのもとは西堀さんです。オーストラリアの南極探検隊であいうものを使っているということを聞いて来られた。それから進駐軍がやはり使っている。

平井　エベレストで使ったそうです。

山口　空気の層ができて暖かいとか、そういうことから来ているのです。

登山デザイン

梅棹　やはり趣味の問題ということになるかも知れませんが、たとえばテントの設計をする、というような場合に、なにかぜんぜん感覚的なものに対する考慮が欠けている、というようなことがありはしませんか。

生活デザインのアイディアが登山の設計全体に抜けている。これはよほど気をつけなければならぬと思う。テントのことなんかも、たしかに一種の技術トリビアリズムに陥っている傾向があると思う。これはひじょうに危いと思う。機能的であり、コンフォータブルにして、しかも感覚的にいいもの、そういうアイディアで全体を

設計することを、これからぼくはやっていかなければならぬと痛感している。

加藤　それはたしかにそうだ。たとえば合成繊維というものは、軽くて強くていいかもしれないけれども、あんなにいやらしいものはない。大好かぬものだ。（笑声）　ビタビタつくし、羽毛服にしろスリーピング・バッグにしろ、もぐり込んでちょっとさわっても冷いし、ああいうものは、合成繊維でなければならぬということをちょっと考え直したほうがいいな。

高村　それは合成繊維そのものの責任ではなしに、加工の問題がだいぶんあるのです。だからそれだけで合成繊維はだめだという論にすぐ持っていってもらったら、ちょっと困ると思うのです。

脇坂　それから経費的な問題もあるのです。寝袋を絹でつくったらいいことはわかっているけれども、あんなものを絹でつくったら何万円もかかるし……。

テントの色彩

梅棹　感覚的にみて、ふに落ちないのは、こんどのテントの色だ。カラー・スライドで見ると、なんともえげつない色をしているじゃないか。赤も、緑も、なにか解剖図の中につかってある色みたいで、生理的不快感をもよおす。どうしてあんなひどい色にしたんだ。

加藤　ほんとうだ。ぼくは装備係は色盲かと思った。

脇坂　あれだって、今度持っていったのは、無作為に染めだわけではないのですよ。ある考えをもって染めたんですけれども、それがある場合には完全にマイナスになったりしたのです。たとえば緑色のテントの中に入ると、ほら穴の中に入ったような気がすると

か……。

桑原　緑のテントは悪かったな。

脇坂　現代ではすでに、工場などでは、カラー・コンディショニングということをやかましくいっておりますけれども、ヒマラヤでの色彩調整なんて、どの本にも書いてないし、だれもいっていない。工場なんかでやっている調色の理論は、まわりが白一色のヒマラヤでは、当てはまらない。テントの色なんか、何色でもかまわんじゃないか、といってしまえば終りだが、あの色彩がやはり生活環境として大きく影響する。

山口　テントの色の問題も、今度はそういう色についての結論を出したいということもあって、あんないろいろな色彩のテントをつくったのですけれども。必ずしも結論が出たとはいえない。

林　合成繊維は染色の限定があるのじゃないですか。

脇坂　ありますけれども、合成繊維の染色できる範囲内で片づくのじゃないかと思うのです。

加藤　今度、まっ赤のテントがあったね。あんな腰巻みたいものの中で寝られるか、といっていたが、じっさいはあれがいちばんいいのだね。

四手井(英)　出発前にここの芝生で張って見て、テストをやったのです。そうしたら、そのときはまっ赤なテントはだめで、グリーンのほうがよい、ということだった。そのときは、まわりが柔らかいグリーンですから、グリーンの中にまっ赤はおかしい。かえってグリーンには目がなれていて、このほうがよいと思った。ところが、まっ白の中に入ると反対なんだな。

今西　グリーンとかブルーよりも、オレンジや赤のような暖かい色がいいということは、すでに結論が出ているのです。

加藤　オレンジは雪の中へ行くと、生地が薄いために、これは

白っぽくなっちゃう。テントの中にいても、自分の上にしっかり屋根があるという気がなくなって、これは具合が悪いのだ。ところが赤いほうは、今度はオレンジ色に見える。やはり屋根があるという感じがしてくる。

脇坂　色に対する感応度というものは、各人々々によって相当な差があるのですよ。だから加藤さんの意見に対して、一人々々みんなにいわしたら、違った意見が出るのじゃないかと思います。

高村　その際、考えていただきたいのは、色だけでなしに、材料の問題がひじょうに大きいということです。グリーンというのは、まっ白の中だから緑色がほしくなるのじゃないかと思って試みにやってみたのですが、ところが悪いことに綿とテトロンの交織のがグリーンだったのです。オレンジはオール・テトロンで、さっきいいました透光性の大きいものです。だから色がオレンジで、その上、光がよく入るから、明るい感じがする。グリーンの場合は綿であって、透光性がよくない。そういう意味で暗かったわけですけれども、もし透光性の大きいオール・テトロンをグリーンに染めていたらどうなったかということになると、またちょっと議論の余地があるので、今後は加藤さんの嫌いな合成繊維というものが入ってきますから、材料と色というふうに、組み合わせて考えていただいたほうがいいのじゃないか、色だけつかまえて話すのは、これからはちょっと危険じゃないかという気がするのです。

梅棹　工業デザインというものは、もともとそういうものをぜんぶ総合して、成立しているわけでしょう。われわれのほうも、機能を考えながら最も美しいものという考えで、材料も考えに入れながら、登山デザインというものを本気に考えなければならぬのですよ。

四手井(英)　その時期に来ておりますね。

桑原　それからまた趣味論ですけれども、現地ではよくわからなかったのですが、帰ってから写真を見ますと、ショーニング氏やマライーニ氏、ボナッティ氏が泰安などと対談している写真があるそれを見ると、泰安がじつにモッサリしていて情けないのですよ。ふとんみたいなものを着てね。(笑声)　日本人はからだつきが悪いのじゃないか、足が短いのじゃないかということもありますけれども、泰安はむしろ背は高い。ところがむこうはひどくスマートで、こっちの羽毛服はふとんを着ているみたい。これは登山の本質には関係しないけれども、ああいう写真がいろいろ世界に出ると、すれば、日本の登山家は、なにかものすごくモッサリしていることになる。

加藤　まったく敗残軍の捕虜みたいだ。

山口　西洋人でも、山へ入っているときは、エベレストの映画なんかを見ても、やはり羽毛服を着ていますよ。

桑原　いや、羽毛服がいけないというのではない。

山口　いやあれは、けっきょく、こっちはベース・キャンプにいて、テントでくつろいでいる。むこうはキャラバン中で、そうではない。

桑原　それはありますよ。今度は山口君はだれかの特殊配給でスマートなものを着ていたけれども。(笑声)　ほかの隊員、たとえば高村が、アメリカのベース・キャンプを訪問したとしても、むこうのほうが、おそらく、スマートに見えるのじゃないかということです。

梅棹　それは今あなたのいうたベース・キャンプに訪ねて来たというケースにかぎらぬのです。それは今までのエクスペディションでなんべんでも痛感している。そのときなにか寄せ集めて行くけれども、行ってみたらひどくみすぼらしい。カラコラム・ヒンズークシの映画を見てもわかる、貧弱でしょう。これは登山の本質に関係ないといわれたけれども、それではすまぬ問題があると思う。

今西　それはちょっと気取るような気持というか、そういうものがみなさんにはあまりにもなさすぎる。(笑声)

梅棹　それはどうかな。(笑声)　今西さんが今度アフリカへ着ていかれた服を見て、ガッカリしたな。(笑声)　あんまり気どってるとは思えない。

今西　一ぺん着てすぐ脱ぎ捨てた。あれも敗残兵型だ。

桑原　さっき泰安は、デザインの問題を合成繊維攻撃へもっていったけれども、合成繊維にはぼくはなにも反感を持っていない。ぼくはいま美的にだけいっているのですよ。ともかく日本隊が歩いていると、モッサリとみすぼらしいのです。それには、いかにもたのしみが少ない、というような印象がある。困苦欠乏というのとも違うけれど。

加藤　合成繊維嫌いといったのは、要するに強度とかそういうものばかりに追われて、居住性を忘れていることが嫌いだということなんです。居住性と運動性、それからもう一つ、ヒマラヤに大事なのはサーモ・スタットにおくこと、このためのデザイン、この三つが徹底的に解決されなければならぬと思うな。

梅棹　下着の問題なんかも含めて……。ですからぼくが思っているのは、ほんとうのデザイナーを引き入れなければならぬということです。素人考えでやってはあかんと思う。ファッション・デザイナーばかりでなく、ほんとうに機能的なものを考え、生地のこともよく知っている人がたくさんありますから、そういう服装デザイナーを仲間からつくるか、あるいはだれかそういう人を顧問に引き入れなければならぬと思う。

桑原　それを考えてほしいな。今度の京大隊は、記念撮影するときに、ちょっとスマートだというふうに……。

加藤　桑原　古い考えでいえば、国威発揚ということになりますけれども、国威発揚とばかりは思わない。外国の隊とまじって日本の隊はおなじ金をかけながらモッサリしているというのは好かぬな。

梅棹　よそへ行けば、エステティックだけじゃなしに、よその者が見て比べるわけでしょう。そうするとやはり差が出てきて、損をするということが起ってくる。

第八章　食糧論

食糧計画のプリンシプル

梅棹　つぎは、食糧の問題に入ります。食糧の係はだれですか。

桑原　平井だ。それから岩坪がたすけた。準備のときは酒井が手つだっている。

梅棹　平井君に、まず原則から話してもらいましょうか。

平井　食糧の計画をたてるに当って、全体を二つにわけて考えました。一つは、ベース・キャンプ以上の高所で消費する高地食で、もう一つは、ベース・キャンプをふくめて、トラベル中に消費する低地食です。

そして、準備の大原則として、高地食はすべて日本で準備するが低地食はおおむね現地食を採用する、ということにいたしました。低地食を現地食にしたのは、おもに費用の関係なのですが、これについては、のちに批判をおねがいします。

梅棹　さきに高地食について説明して下さい。

高地食の方針

平井　高地食を準備するに当って、とくに注意したのは、まず第一に、食品の種類を選択するに当って、内地の山で日ごろ食べなれている食糧を、そのままヒマラヤでも全面的に採用する、という原則であります。それから、第二に、その食品を配分するに当っては、毎日の食事が均一になることをできるだけ防ぐという方針でやりました。

第1表　隊員1人1日当りの基本食品

品名	重量	備考
アルファ米	160グラム	朝食はアルファ米とラーメンとビーフンの3交代
ラーメン	125 〃	
ビーフン	125 〃	
カンパン	100 〃	
バター	55 〃	
ジャム	15 〃	
マーマレード	15 〃	
乾燥リンゴ	20 〃	
〃 肉（ウシ、ブタ、レバー）	30 〃	もどりがわるい
〃 野菜（キャベツ、ニンジン、ホウレンソウ）	10 〃	
ドロップス	30 〃	
チョコレート	55 〃	高地でよろこばれない
砂糖	1/4ポンド	
塩	12.5グラム	
梅干または紅ショウガ	少量	好評
カレーの素 クリーム・スープの素 コンソメ・スープの素	25グラム	3交代
味の素	2 〃	
とろろコブ	20 〃	好評
干ダラ	20 〃	〃
でんぶ	10 〃	〃

隊員の一人一日当りの食糧の品名および重量をあげたのが第一表です。これが基本的食糧になる。これを三人二日分のラッションとし、この一単位をポリエチレンの袋に入れ、そのポリエチレンの袋を、二つずつカルトン・ボックスにつめました。そういうカルトン・ボックスを、三十六個用意しました。

梅棹　一箱の重量は。

平井　約十二キロ平均で、一人一日分が約一キロになります。

それから、この基本食のほかに、キャンプ食というのがあります。その内容は、第二表のようなものです。これは、各キャンプに配置して、基本食ラッションに変化とうるおいを与える目的でつくったものです。飲み物もこの中に入っています。

第2表　キャンプ食

品名	備考
紅茶	1人 30 グラム
粉ミルク	
チーズ	
レモン・パウダー	
かたくり粉	疲労時によい
ニシン甘煮	好評
焼ノリ	〃
ガリック・パウダー	〃
こしょう	
ふ	バッファーとした
するめ	
コブ茶	
緑茶	
ゴマ塩	
湯葉	
酢	
しょうゆ	
サケの切身（くんせいと天日乾燥）	
めざし	
ニシンのくんせい	

めざしと兵糧丸

林　この食品に対する隊員の感想をききたい。

岩坪　ラーメンとビーフンではバラエティにはならないです。ビーフンは汁がたくさん要り、あまり好評ではなかった。

平井　カンパン一〇〇グラムでは、第三キャンプまではややたらなかった。せめて一五〇グラムは要ります。

脇坂　ひどいやつになると、午前十時ごろまでにぜんぶ食ってたな。あとはチョコレートでごまかしていたが。

酒井　ひるの副食はどうでしたか。

平井　ジャムとマーマレード、ドロップス、チョコレート、乾燥リンゴ、といったものだ。乾燥リンゴはよかったが、あとはみな甘いものばかりで飽きた。

岩坪　オイル・サーディンのカンづめはうまかった。それからバターがあるが、これもよかった。

山口　乾燥肉は固くてまずかった。いちばんよかったのは干ダラでした。

高村　固形スープの素は好評だった。

岩坪　そうだ。あれはなんにでも入れられるからな。

酒井　キャンプ食のほうについてはどうでしたか。

平井　チーズは最高六五〇〇メートルでもうまかった。ともかく、今度の山ではなんでもともかくたべられた。

岩坪　ニシンの甘煮は、ニシンを砂糖と酢としょうゆでたいたもの、ニシンのくんせいはみがきニシンをおがくずでいぶした、どちらも自家製のものでしたが、なかなかうまかったですよ。

脇坂　キャンプ食をあけると、内地の山で食べてたのとまったくおなじものばかりだったな。

岩坪　めざしは、頭を切って天日乾燥したものだが、よくウジもわかなかったし、どうもなかった。サケの切身だって、あれは天日乾燥だけでしたが、ポリエチレンの包装だけでぜんぜん変質はし

なかった。しかし、レモン・パウダーが凝固したのはまずかった。酢としょうゆは少量だが、あってよかったものの一つでした。

林　くだもののカンづめはなかったの。

平井　重量の点から乾燥リンゴで我慢してもらった。全体としてアタック用と隊長用に二、三個準備しただけでした。第二回アタックのときに食べて、第三回アタックにはなかったが、別に欲しいとは思わなかった。

林　アタックの話が出たが、アタック食についてなにか準備したものはありますか。

平井　昼食だけをやや考慮したが、その朝と前夜はラッション・ボックスによった。原則としてカンパンだが、これがたべられないことも考えて、カステラ、ヒットビ、兵糧丸を準備しました。

梅棹　その兵糧丸とはなんですか。

岩坪　これは甲賀流忍術の秘伝の食糧という、曰く因縁のついたもので、キナコ、モチノコ、ハッタイコ、緑茶などをハチミツでねり固めたもので、大きさはたばこの箱の半分ぐらい。少々薬品のにおいとその味のために、試食のとき食べられなかったのが隊員の半分もいたが、アタックのときにこれを用いた平井の経験では、のどのかわきがとまり、エネルギーが無限に湧いてくる感じがするそうです。

平井　ヒットビよりははるかによかったですよ。それからカステラは、冷えてたべにくく、のどを通らなかった。

現地食

梅棹　高地食はそのくらいにして、低地食、つまりトラベル中およびベース・キャンプでの食糧について、のべてもらいたい。

岩坪　調味料、飲料、砂糖のほかは、トラベル中はほとんど現地食を採用しました。ベース・キャンプでは三日に一度だけアルファ米が食べられる以外は、ほとんどトラベル食とおなじです。もっとも隊長は別で、隊長には毎日アルファ米を配給しました。

梅棹　部落でなにが買えますか。

岩坪　トラベル中、部落ごとに調達できるのは肉、タマゴだった。野菜はない。またアタ（小麦粉）やギー（ヒツジのバター）は買えることは買えるが、スカルドで買ったほうがはるかに安くかつ良質なので、スカルドで一括購入しました。

酒井　すると、日本から主食を運んだ場合とあまり変らないのじゃないか。

平井　経費の点で、安いことは安いが、ムチャクチャに安いというわけにはゆかない。

林　どんなものを食べていたのですか。

平井　一例として、つぎのようなものがあります。

朝食　チャパティ三十六枚（一人当り二枚）
　ミルク紅茶
　いりたまご（タマゴ三ダース、五ルピー）

昼食　チャパティをギーで揚げたプラタ三十六枚（一人当り二枚）
　チーズ半ポンド（日本製）
　バター半ポンド（〃）

夕食　チャパティ三十六枚（一人当り二枚）
　ニワトリのスープ（ギー、トウガラシ入り――ニワトリ三羽、一〇・五ルピー）
　ミルク紅茶
　ウイスキー（一人グラス一ぱい）

するめ二枚
（ほかにタキギ代三〇ルピー）

加藤　チャパティはまずかったな。アスコーレで買ったのは、砂まじりなんだ。

林　スカルドで現地食を買ったそうですが……。

山口　スカルドにあるパキスタン陸軍のFSD（食糧供給所）で買ったのだが、ずっと市販のものより安くて良質でした。ただし、これを買うためには、特別許可がいります。値段は第三表のとおりです。またこれに比べて、バルトロ入りの場合、最奥の村、アスコーレでは第四表のとおり高くかつ質がわるい。しかし、高いといってもスカルドとアスコーレ間の運賃を考えると、アスコーレのほうがけっきょく安あがりになり、クーリー用のアタは、アスコーレで求めました。

第3表　スカルド FSD の物価

品名	値段	数量
アタ	16/—/— (ルピー アンナ パイス)	100ポンド当り
アギ	2/ 5/—	1 〃
岩塩	5/ 5/—	100 〃
ダル（豆）	22/14/—	100 〃
砂糖	68/15/—	100 〃
ミルク（液体）	1/—/—	1 〃
たばこ（クーリー用）	18/11/—	1000 〃

第4表　アスコーレの物価

品名	値段	数量
アタ	31/11/— (ルピー アンナ パイス)	100ポンド
アギ	3/12/—	1 〃
ヤギ	35～50ルピー	1匹
たまご		1ダース

現地食の是非――米とチャパティ

梅棹　これだけ大はばに現地食にたよるというゆき方は、かなり大胆な、思いきった試みだと思うが、いろいろ批判もあると思います。

中島　現地食是非論ということになりますが、帰路は現地食もよいが、往路は体力の消耗を防ぐ点から考えても、現地食に頼らないほうが得策ではないですか。おもに主食についての話ですが、副食もひっくるめて問題だと思う。

平井　ベース・キャンプまでは現地食を全面的に採用しましたが、その理由は、第一に経費の問題なんです。今度は、食糧の予算がひじょうに削られましたので、こうなった。しかし、そのために体力が落ちたという人はなかったと思います。そのために体力が落ちるということになるとまずいのですが、とにかく、現地食と、日本から持ってゆく食糧との経費の差は、だいたい三倍になりますから、現地食をやめるわけにはゆきません。

岩坪　経済面から考えて、現地食を廃止するわけにはいかない。どのように改良するかが問題なんです。イタリア隊のようにごっそりカンづめをもってゆくわけにはいかない。米やカンづめなどを持つよりミンチ機とかパン焼き機械とかをたずさえていくほうがよいのではないですか。

ミンチ機はいつも問題になるものの、重量のためはねられている。重いというのなら、たとえばジュラルミンでミンチ機をつくってはどうですか。ミンチ機があれば、もっと肉がうまく食えると思うんです。

脇坂　何トンという物質の中にミンチ機一つぐらいはたいした

ものではない。みんなの健康のためには持っていってよかろうと思う。

斎藤　現地の米とチャパティとでは、どちらがうまいか。

中島　それはチャパティよりも米のほうがうまい。

山口　チャパティは、これを食わないと体がもたないから、おしこんでも、という義務観念から食っていたような点もある。

岩坪　私はラワルピンディで最後までのこっていて、スカルドに着いてみると、とうてい口に入らないようなまずそうなものを、みんながうまそうにむしゃむしゃ食っているので驚いた。スカルドからは、ぐんと悪くなった。

脇坂　私は、チャパティがまったく食えなかったので、やせたトリなんかでも、天の恵みとばかり一生懸命に食った。

山口　トリのかたいのは、ぼくや平井のように歯の悪いものにはたまらなかったです。

斎藤　ホット・ケーキの素かなにかで、チャパティをなんとかすることはできないものか。

脇坂　そうだ。ナン（現地パン）などはけっこう食えた。

岩坪　米がえらく評判がよいが、アルファ米以外では、四二〇〇メートルあたりで一昨年、ふつうの炊き方でやったときには、食えたものではなかった。

中島　一つの方法として、濾過装置を持っていき、朝、出発のときに、アルファ米の袋に水を入れてもって歩くと、二時間くらいで食えるようになる。そこで朝めしにしたらよいだろう。

現地食の是非——ネパールとカラコラム

梅棹　キャラバン中の、毎日の食事の実情を報告して下さい。

岩坪　朝めしはチャパティと紅茶といりたまごです。昼のおかずは、初めジャムがありましたが、これはだんだんあきられまして、バターとかチーズ、そのほかみんなの機嫌のいいときは、ヒツジとかニワトリを朝、買っておいて、それをくさりにくいようにギーでから煮にする。晩はほとんど定食でして、チャパティと、ヒツジのごった煮や、ニワトリのごった煮。昼めし、朝めしは別としても、晩めしは早くできるのがたのしみで、ひじょうにうまかった。

梅棹　なかなかうまそうじゃないか。脇坂君は、現地食にだいぶん抵抗を感じたようだが、きみはもともと現地食主義者ではなかったですか。

脇坂　私はいままで、ネパールの経験から、現地食主義を極力となえてきたのですが、ネパールをキャラバンする場合の現地食というものと、カラコラムをキャラバンする場合の現地食とでは、ずいぶん様相が違うのですよ。

梅棹　それは米と麦の問題ですか。

加藤　材料入手の量が違う。

脇坂　ネパールだったら、米やチャパティのほかに、わりあい新鮮な野菜もたんまりあるし、肉もうまい。そういうものがキャラバンの最後まで手近に得られる。ところがカラコラムの場合は、バルチスタンというところは、食糧の材料がネパールに比して、まったく悪い。アタにしても、ネパールよりぐんと落ちる。だからパキスタンの場合では、現地食オンリーでいくのは問題だと思いま

あとでわかったことだが、スカルドの倉庫には、米があったようだ。だから軍に交渉すれば、現地でも米を買えたらしいが。

やはり、日本からも少しは補助食を持っていって欲しい

と思います。私はからだの調子が悪くて、食欲がまるでなかったので、チャパティからのデンプンの代りに砂糖で含水炭素をとるようにした。だからミルク紅茶を五杯も飲むようなことがあった。

山口　私もやはりサブリメンタリー・ボックスを持っていくのがよいように思います。まるきり現地食だけではどうも……。

現地食の是非——コックとサブリメンタリー・ボックス

岩坪　食糧係がなるだけ現地食に頼ろうとする原因の一つは、日本から持っていった食糧では、現地のコックが料理できないために、キャラバン中ずっと食糧係が食事の世話をせねばならなくなる、ということがあるでしょう。

山口　コックもへただった。最後にスカルドで、コックがうまそうなケーキをつくってきたので、こんな技術を持っていながら、なぜいままでつくらなかったのだろうか、といっていたら、あとでその代金を請求してきた。なんのことはない、彼はバザールで買ってきたのだ。

酒井　けっきょく、あの地方にまずいものしかなかったということ、よいコックを得られなかったということが、食事を悪くした大きな原因だったわけだね。

山口　このつぎは、コックのテストをしてはどうだろうか。

斎藤　けっきょく、調理法を変えれば、現地食でもじゅうぶん、食えるものになりますか。

山口　それは疑問だ。調理の方法だけでは片づかない。やはりそれだけでなく、日本からなにか持ってゆく必要があるのではないか。

中島　この問題は、隊員の中でも、賛否五分五分というところだろうな。

岩坪　その場合に、日本から、なにを持っていって、どういうふうにしたらよかったかということになりますと、やはりカンづめやなんか持って行くよりも、ニワトリやヒツジを現地で買ったほうがけっきょくいいと思う。野菜でも、日本から新鮮なものを持っていくということはできないわけです。そうすると、もう少し金をかけて、現地食のいいものを買うということ、いいコックをつれて行くということに改良点はありましても、現地食をやめて日本食をもっと入れようというのは、僕の考えとしては反対なんです。

山口　僕は、現地食がわるいとはぜんぜん思わないのです。ただある程度、バリエーションとして、少しくらい日本食のサブリメンタリー・ボックスを持っていってもよかったのじゃないかと思うのです。その程度で僕はいいと思います。

加藤　同感です。僕は今度の現地食で、キャラバンの間のものはまずいと思わなかった。ただ粉は悪かったけれども、まずいとは思わなかった。けっこうおいしかったよ。

岩坪　僕はうまいと思った。ただもう少し調味料に工夫すべき点はあったと思います。味の素を持って行くとか……。

今西　現地食で何日でも続けられるか。

加藤　じゅうぶんです。続けられます。トラベル中のものは、僕は今度のでいいと思います。問題はありません。

ポーター食糧の食いこみ

山口　じつは、サブリメンタリー・ボックス的なものは、かなりの分量を、スカルドまでは持って行ったのです。ところが、スカルドに着いて、ポーターとかクーリーのP・Aの採用条件を見たと

きに、ぼくらの考えていた予算とはガクンと違うことがわかった。ポーターとがクーリーの採用条件がすごくいいのです。

桑原　ということは、こちらに不利なんです。

山口　これではとても予定の人数をやとうことはできない。とにかく荷物を減らさなければいかぬということから、切りつめて、それが食糧にまでおよんだのです。このとき、そうとう分量を切りました。

平井　もう一つ悪かったのは、われわれの最初の計画としては、上でポーターにはぜんぶアタとギーだけでやるつもりだったのです。それがポーターに聞くと、わしらにラッションを与えてくれないと行かないという。それで、われわれサーブ用のアルファ米とか、そういうものを与えたわけです。

岩坪　それがひじょうに大きいのです。初めはポーターにはチャパティなどの現地食を食わすことになっておりましたが、それがポーターにもわれわれとおなじ米を食わさなければいかぬということになりました。米は初め隊員の分だけ四十五日分持って行ったのを、スカルドで三十日に減らしました。隊員の量が四十五から三十に減ったのでなくて、そこでポーターの三五〇人ですか、それがぜんぶ、食い込んできたわけです。

今西　その問題は、今後も出てくると思いますけれども、いかに間に合わぬポーターであろうとも、やはりそういうところで、お前らはチャパティを食え、雪の上で寝ろということで押せるか押せぬかだね。人道主義の問題になるけれども。

岩坪　はじめのうちは、今西先生のときのことを伺いまして、だいたいポーターとクーリーとはほとんど区別がないように思っていた。クーリーの中のよさそうなものを使う気でおりましたけれども、さて行ってみると、実質はともかく、形式的にはネパールのシェルパに勝るとも劣らぬような待遇の形がずっと決まっているわけです。ですから、それとおなじような待遇をしなければいかぬということが、そのときになってからわかった。

ポーターとクーリーの雇用条件

平井　第五表は、P・Aが定めた高所ポーター一人一日分の食糧給与表です。

第5表　P・Aによる高所ポーター1人1日の支給物基準量

品名	数量	
タ	1.5ポンド	
ア	0.5 〃	×
米	6オンス	
生肉（羊肉）	1/8ポンド	
ギ	1/4 〃	
砂糖	1/3オンス	
紅茶	4オンス	
カン入りミルク	1/6 〃	
塩	4 〃	
豆	1/4 〃	
乾燥タマネギ	1/6 〃	
トウガラシ	1錠	
総合ビタミン錠	5本	×
こチばたマッ	1箱	

×…与えなかったもの

これらはぜんぶスカルドに売っている。総合ビタミンは

山口　このうち乾燥タマネギは食べてみたけれどうまかった別だが……。

平井　こ

な。ギーと岩塩と乾燥タマネギとトウガラシさえあれば、すてきにうまい汁ができます。

梅棹　クーリー用の食糧は。

山口　これもおなじようにP・Aの定めた基準量があります。

第六表がそれです。

第6表　P・Aによるクーリー1人1日の支給物基準量

品名	数量	
タ	2ポンド	○
アギ	1/8 〃	○
砂糖	1/8 〃	×
紅茶	1/4オンス	×
カン入りミルク	2 〃	△
塩	1/4 〃	○
豆	2 〃	○
こチばたマッ	5本	○
	2箱（1週間に）	○

○…現物で与えたもの
×…半分を現物、半分を現金で与えた
△…ぜんぶ現金で与えた

山口　これをぜんぶ与えることは不可能だ。金で与えたものもあったが、かれらにしてはそのほうがうれしいし、われわれも助かる。

平井　ただアタとギーと岩塩は必需品だから当然だけれど、そのほかのものでは、紅茶にはクーリーがいやに執着したようだ。

梅棹　それは、どうしてそんな実情にそぐわない基準表なんかができたの。

岩坪　P・Aがカラコラムを世界の観光地にするために、そういう規則を作り出しているのだと思う。

桑原　それはP・Aにやや観念論があるのですよ。ネパールのことをいろいろ話に聞いたりして、ちゃんと登録したシェルパに当るものを持たなければならぬという考えがある。それで、形式だけは、シェルパとおなじにした。かれが帰りに装備を譲ってくれというのは、もちろん自分がかって使うということもあるけれども、今西君のときにはなかったバルチスタン・マウンテニーア・クラブというようなものをこしらえて、登山の訓練をしたいということはいっているわけです。

今西　それともう一つは、外国隊がやはりそういう習慣をつくっていったのだね。だから僕が五五年に行ったときにも、ポーターとクーリーの区別をして、ポーターには装備を持って来てくれという注文だった。それでくつからぜんぶ与えた。今度ももちろんそうしてやっているわけだね。それで向うにすれば、ラッションもサーブみたいなものをくれというのを、いかぬとはいえないな。

ポーターの食生活

桑原　ところがね、要求だけはサーブとおなじものを食いたいといってくるけれど、やはりしまいのころには、チャパティなどの現地食を食いたいといい出した。やっぱり、チャパティのほうがいいところがあるのですよ。

山口　アルファ米とかビスケットを最初やっておりましたが、しばらくたってくると、連中はそれをいやがって、チャパティがなかったら動けぬといい出した。第二キャンプでそれが下からあがってくるのを待つのに苦労したわけです。

脇坂　私はからだが悪くなって第二キャンプへおりましたが、第二キャンプで四、五日いたわけです。それでポーターたちはいったいなにを要求するか、どういうことを思って山へあがっているかと思って、ポーターなんかといろいろなことをしゃべってみたので す。そのとき、日本の食糧を与えているけれども、うまいかと聞いたら、うまくないという答です。米もやっているし、ビスケットもやっている。食っているだろうというと、いや、ビスケットは人によってぜんぜん食えないというのです。わしらがほしいのはチャパティだという。それで僕は、第一キャンプからベース・キャンプへおりて、さっそくチャパティをつくって揚げさしたのです。前後三べんくらい揚げたのですけれども、そのチャパティがたいへん喜ば

れたらしいのです。たしかに現状は、われわれの食っているものを与えても、かれらの嗜好には合っていない。

桑原　しかし、頭の中の思想としては、サーブたちとおなじものを食わなければならぬということがある。

脇坂　甘いものとか乾燥くだものとか、そういうものはわれわれとおなじものを要求しますし、うまく食えるわけです。

山口　甘いものは食うというけれども、ほんとうはそれもぜんぶは食わないのですよ。とにかく僕らからもらうと、それをストックしておいて、上のキャンプ地でも、ちゃんと自分の家族用に置いておくのです。

芳賀　ビアンジェのときは、平井と僕とバクリー・ポーターの三人だけでいっしょに生活したわけですが、見ていると、ぼくたちのやったラッションはほとんど食べない、砂糖をやって、お茶をいっしょに飲もうとしても、お茶に砂糖も入れない。かれらはぜんぶリュックサックへ入れまして、ぜんぶ持って帰る。与えたものはぜんぶ食べないということがはじめてわかった。いままで与えたものはどうしたかというと、自分の子供や女房のみやげに持って行く。米なんかもほとんど食べない。チャパティばかりを食べている。そういうものはおみやげになって、帰りの荷物は重たくなるという調子です。

桑原　めいめいにカギをくれ、ということを初めにいうのは、そういうこととも関係がある。

岩坪　問題はちょっと変りますけれども、そういうことをやってポーターの荷物はどんどんふえていったわけです。最後に身体検査をしなかったら、なにが入っているかぜんぜんわからぬわけです。砂糖からなんからぜんぶ入っている。どうにもしようがない。

桑原　砂糖は持って帰ってどうするのでしょう。

芳賀　お菓子です。角砂糖はいちばんのお菓子だといいました。

梅棹　それをそのままお菓子として食べるの。

芳賀　そうです。

桑原　撤収のときに第二キャンプでカンバンを捨ててしまったね。われわれカンカンになって怒ったことがあるが、かれらはカンバンには関心がないから。

山口　ぼくと高村が第二キャンプに残っているときに、最後の撤収にポーターがあがって来ました。そのときぼくらはめしを食い終って、跡片づけにテントにいたのです。ポーターが着いたらすぐ出発できるようにテントの前にカンバンなんかを置いておいたら、それが十箱ない。どうしたと聞くと、そんなものはなかったといいう。ポーターの顔色がだいぶん変ったから、どこかクレバスに捨てたのだろうと思ってムクレたのですけれども、そのときにあまりゴタゴタいっても仕方がないし、ポーターをとにかくおろしたので箱ごとちゃんとすてている。連中はまたそれを持っておりなければならぬ、それで自分らの荷物がふえる、そういう考えがあったわけなんです。

食糧管理

山口　少し問題は変るが、今度は食糧係の食糧管理能力が足らなかったのではないか。たとえば、砂糖をあるときは、さんざん使わせておいて、だれかが心配のあまり大丈夫かと聞くと、とたんにあわてて管制がはじまり、ぜんぜん使わせなかった、というようなことがあった。使用量は、まるで極大、極小の間をふらふらする振子運動のようだった。とくにベース・キャンプに着いてからがひどかった。

脇坂　ある晩はミルクも砂糖も足りないから飲むな、というかと思うと翌日は急に飲め、という調子だった。

酒井　食糧係の能力もあるが、多忙すぎたということも原因ではなかったか。人夫への食糧配分と管理、あるいは隊員の食糧管理の仕事の量はたいへんなものだろう。

山口　そのことはだれもおなじだから、仕方がないだろう。帰路における管理はとくに悪かった。

岩坪　しかし、たとえば、こじんまり制限してやっているときに、外国のお客などが来ると、隊長は、紅茶が足りないぞ、というようなことがあった。そんなときには、トップ・マネジャーの命令に応じていくより仕方がないじゃないですか。

高村　もっとも、そういうときには、隊員もお客をダシにして、飲み放題に飲んで、「おい食糧係、砂糖が足らんぞ」ということになるから、食糧係がこまるのも無理はないのです。

岩坪　食糧係にへそくりがあればよいのですが、平井は正直にへそくりをみなばらしてしまったから、けっきょく役に立たなかったんです。

中島　ラッション・システムについてはどうだろう。

山口　ラッションのやり方は、あれでよかったと思う。このテントで、この一パックで何日分としたのがよい。

岩坪　副食はラッションにすると困難がある。おかずを半分にするのは、むつかしいことがある。

中島　味の素と塩がラッションの中にまぎれてしまうことがあった。サブリメンタリー・ボックスにもっと多く入れてもよかっただろう。

高村　お盆にいろいろの調味料をのせたものをテントごとに置いたほうがよいだろう。

岩坪　今度はきびしいラッション・システムはとらなかった。ラッション・システム一本でいくと、どうしてもフレキシビリティに欠ける。しかし、一方、ラッション・システムをとらないと管理はひじょうにむつかしい立場に立たねばならない。だから主食だけはラッション・システムをとった。これは比較的よかったようだ。

脇坂　今度の食糧計画は、アンナプルナのときよりよかった。食糧管理は、ボスの計画立案につねに適応できるだけの柔軟性は必要だ。アンナプルナのときは、食糧係だった藤村の気質もあったが、あまりにきびしいラッション・システムを最初にとったため、このプリンシプルをこわしてはいけないという気持が多すぎ、柔軟性に欠け、あげくのはて、ナムン・バンジャン越えのときにラッション・システムはメチャメチャになってしまった。

岩坪　食糧係がとくに気をつけなければならないのは、トップ・マネジャーがどう計画を変えようとしているかに、つねづね気をつけ、それへの対応が迅速にできるようにしておくことだ。

味覚の差

梅棹　私が聞いたところでは、やはり食糧の問題で、隊員の間でひじょうに趣味の差があった。とくに若い人と年よりとでたいへん違う点があったということを聞いておりますが、その点はどうですか。

桑原　僕は年がいきすぎているので、標準にならぬかもしれないが、僕は道中のことは原則論的には現地食説に賛成です。しかし、「お前は？」ということになれば、毎日チャパティを食うの

は、僕はつらいな。一ぺんチョンゴへ越すときにヘバッて、そのとき特配でアルファ米を食わしてもらったが、その味が忘れられない。ベース・キャンプへ着いたら、京都で、いつも大学に昼食をもってくる出前持ちの顔を夢に見た。僕が見た夢はあの夢だけや。それが伝わって、かわいそうだというので、僕にはアルファ米が特別支給ということになったのですけれども、一日にアルファ米が一六〇グラム、一合です。しまいごろは腹を悪くして、それでじゅうぶんだった。僕はやはりめしに対する執着は個人的に強いのです。ことに腹がこわれかけたときに、砂まじりの小麦粉で焼いたチャパティが出かけたので、いまだにチャパティに楽しい思い出を持たぬ。泰安はもとからチャパティが好きで、米があっても米を食わぬから、(笑声)年は寄っていても、そこは趣味が違う。

副食品は、蛤のしぐれ煮はひどかった。これは蛤のしぐれ煮やで、と自分にいい聞かせて、観念で食わんならぬ。(笑声) 蛤のしぐれ煮は嫌いかといったら、僕は好きです。しかしその蛤のしぐれ煮が、どう考えてもちょっとまずい。もう一割うまかったら、エンジョイできるけれども。

梅棹　観念で食うのと感覚で食うのとの違いだな。

脇坂　それはたしかにありますよ。

桑原　だから、この次にパーティを出すときだったら、つくだ煮はぼくが引き受けると、イヤ味をいったのだ。

いまのは品質のことだけれども、味はこれは仕方がない。若い人はどうしても甘からいものが好きだ。僕は酒をそう飲みませんが、僕や泰安は酒飲みのおかずは好きだ。ものをたいて、平井に味はどうやと聞くと、味は完璧ですというが、僕や泰安は食えない。こんなまずいものをこしらえて、というと、平井は「すんまへん」といって頭をかいている。「砂糖が足りませんでしたか」という。とんでもない、甘すぎるのだ。そういうところに、趣味のちがいがはっきり現われている。

梅棹　加藤さん、なにかご意見がありますか。

加藤　味覚については、またなにをかいわんや、だ。(笑声)

趣味と年齢

岩坪　味覚の趣味の問題では、どうしても年上の人と年下のもののではちがうわけです。ところがそうなると、年上の人はこれは味覚の洗練とか、趣味の高尚とかにかかわるものだと考えられるので、どうしても若いものの味覚に対して批判的で、シュウトメ的なとして、アッサリしたものを食いたいと思っていやはるらしい。傾向が出てきます。中には小ジュウトメ的なものまで出てくる。しかしこれは、ひじょうに間違いだと思います。これはじつは、からだつきの問題だと思います。

今西　からだつきというと……。

岩坪　若い方と年とった方とで肉体的に違うというわけです。若い者は、趣味の問題でなく、生理的にコッテリとした油の多いものがほしいと思っているときに、お年よりはからだの中からの要求

梅棹　それは年齢層の違うものがパーティを組む場合に、趣味の問題も体質の問題も両方含めてそういう不一致が出てくると思うが、それをどう解決していくか、具体的方法はありませんか。

加藤　僕はまずいとかこごとを盛んにいったけれども、それはそれでけっこう食うのだよ。ただ、今度持って行った食糧にひじょうに中途はんぱということがあったね。高所で食うものはカンパンとかラーメンとかいろいろものがあるけれども、今度はほとんど米、アルファ米を持って行った。そうすると米のおかずとパン、洋食のおかずは、これはやはり違うものなんです。ところがパンと洋食的なものへもっていって、主力はお米でいったわけだ。あとで編成替えしたから、そこでチグハグがあるのだ。みなつくだ煮を出せば、目の色を変えて食うのだよ。みなうまがって食う。それを持っていけばいいのだ。お米というものは、高山食糧として僕は適当なものだと思っている。決定版だと思っている。そうするとお米のごはんに対するおかず、それがネーベンの主力になると思う。

今西　そういうことをいうのはすでに趣味であって、若い者は……。

加藤　若い者はつくだ煮とかなんとかいうと、われ先に食いますわ。それではもうひとつ栄養が足らぬというので別のものを持っていく。ところが別のものがすぐ主になっていくために、つくだ煮がひどい安ものに虐待される。こういうことになるのだな。

桑原　上のほうはわからぬが、トラベルやベース・キャンプで食いもの論争をやっていたのは、あれは一つの話題という意味もあったね。けっこう食いながら悪口いっているのだから。

第九章　健康管理と科学

病気と薬

梅棹　健康管理について、隊づきドクターの中島君にお話をおねがいします。だいたいだれも病気というほどのものはしなかっただろうが。

中島　隊員のみなさんの健康状態なんですが、これはいちおうよかったといえます。どういうわけか知りませんが、はじめにスカルドに到着したときに、ばたばたと病人が出た。山口と脇坂が腹具合が悪いので一日休んだ。山口は一日寝ておりました。それから飛行機で飛んで来られた加藤さんも腹具合が悪いということです。

加藤さんなんぞに至っては、一日に十三回下痢された。これは出発に当ってゆゆしき問題だと思って、(笑声) 私はひじょうに心配しました。それで一生懸命になって下痢どめを飲んでもらう、それからアクロマイシンを飲んでもらう。そうしたら、単純なものであ

ったらしく、二、三日で両人ともひじょうに元気を回復していただきました。それで私も医者としてほっと愁眉を開いたわけです。

今西　原因はなんや。

中島　原因は、加藤さんは汽車の中の暑気から衰弱、（笑声）それから胃腸障害ということです。

梅棹　薬はもちろん、じゅうぶんあったわけでしょう。

中島　いや、それが必ずしもじゅうぶんとはいえなかったのです。

伝染病

梅棹　伝染病の心配はなかったのですか。

中島　だいたい、スカルドから上は、心配ないと思います。あの地方には、いまはコレラ、チフスなどはないようです。

中尾　お医者さんがおられるので伺いたいけれども、この夏にブータンでやったやり方をちょっと批判してほしいのです。私は、エクスペディションにおいて、伝染病の系統のものは、いちばん身近に使っているサーバントからうつるチャンスがいちばん多いと思った。たとえば、茶わんなんかを持ってくるにも、汚い手でワシづかみにしてもってくる。これは危いとおもった。それで僕は、一日に一ぺんくらい、なにかにかこつけて、サーバントにオーレオマイシンを飲まして、身近にいるやつの掃除をやっていったのです。これはたいへん結果がよかったように思うのだけれども。

中島　それは林さん、どうでしょうか。そういった病気のあるところへ行かれた経験からいって。

林　その身近なものというのは、コックとかサーバントとかいうものですね。しかしそれはたいした散財ですな。

中尾　オーレオマイシン一粒飲ませるのですから。

林　一日一粒ですか。

中尾　そうです。

林　それはしかし疑問だと思いますな。一粒くらいのオーレオマイシンでは、腸内の掃除はできないと思いますな。

中尾　量をふやしたらどうでしょうか。

林　量をふやして二日三日続ければ、菌もいなくなるでしょうけれども。

中島　予防にはならないのですかね。

林　そういうことをやったからといって、やっぱりあなたにうつる。それは、日数に完全に比例することであって、一週間に二日やったら、あと三日はやはり中尾さんは細菌にしょっちゅう感染されることになるのじゃないかと思いますな。（笑声）それだけの薬の量を中尾さん自身に使ったらいいと思いますな。

中尾　その辺の批評が聞きたかったのです。

山口　中島ドクターに対する批判になりますが、今度の中島の健康管理は、隊員の指導という点では不足だ。伝染病の問題についても、われわれはたいへん心配した。飲料水について、なにも指示がない。ほんとに大丈夫かと思った。

中島　あの地方には伝染病がないことを確信していたんだ。

山口　しかし、君のその確信が、隊員にはよく徹底していない。

水

林　水の話が出ましたけれども、水はどうなんですか、だいたいどういうふうにとって、どういうふうに飲料に使ったか。

藤平　水は悪いな。

中島　スカルドから上のほうにはだいたい泉がありました。あるいは、ところどころ清流があるので、そういうところで飲む。私はほんとうは医者として生水を飲んではいけない、といいたかったのですけれども、あまりきれいな水ですから、きれいな水に限ってはよいとせんか、下痢が出るようだったら、そのときまた考えようと思っていた。幸いにして病人は出ませんでした。それ以後も出なかったのでよかったのですけれども、ほんとうはちょっとらんぼうだったかもしれない。

私がよい気になってそういいましたのは、水がほんとにきれいだったのと、もう一つは、スカルドから上には消化器性急性伝染病がないということを、スカルドの病院が保証した。私もおそらくそれはたしかだろうと思いましたので、かえっていろいろ心配してもらうほうが悪いという懸念がありましたので、私はこれは大丈夫といっておったのですが、内心ちょっと心配はありました。（笑声）

林　浄水剤は……。

今西　ほかの隊はどうしておりますか、アブルッジの隊なんかずっと煮沸したものを使っているね。あのころは、アスコーレ辺でコレラが発生しておりますがね。このごろはないかも知れないが……。ほかの隊はどういうふうにしておりますか。昔ならインドの中の旅行は、生水はけっして飲まぬということになっておったけれども。

中島　ほかの隊は浄水剤というようなものを持っているようには聞きませんでした。これは私の語学力の問題だったかも知れませんが。

林　ネパールでは、氷河からまっすぐ流れて来る濁った水は飲んでもよいけれども、谷川から流れて来る一見きれいな水は飲んだらいけないという、そういう区別があるのです。これは住民から教えられたのですが、そういうことはありませんでしたか。

藤田　私がまえにスワートに行ったときは、チョンゴで聞いたのです。僕が飲みかけたら、それは飲んだらいかぬという、見たところはきれいな水なんです。しかしまだ上のほうに人も住んでいるし、飲んだらいかぬ、泥水を飲みなさい、これを沸かして飲みなさいという。上にはヒツジを飼っておったりするので、やはりいけないというのです。

中尾　ブータンでは、もう一つ水を飲んで危い場合として、山ビルに気をつけなければいけない。山ビルのたくさん入っている水があるので、流れにいきなり口をつけてはいかぬ、手ですくって飲めといわれた。

梅棹　ヒルを飲み込むというわけですか。

中尾　口にヒルがつくとたいへん困るからという。

今西　胃まで入ればヒルも死ぬだろう。

中尾　腸まで入れば死ぬでしょうけれども。

林　胃で死んでしまうでしょう。

桑原　危険な水というけれども、デュッソーの泊まり場などは考えようによっては汚い水だったな。畑の間を流れて来た水で、あれしかなかったね。

藤平　上に人家があったし。

中島　けっきょく部落なんかの水というのは具合が悪いですね。

藤田　煮沸せずに飲むのですか。

中島　キャンプに着いたら水は飲まないのですけれども。

藤平　キャンプでは生水は飲まない。歩いている最中が生水が問題になる。

中尾　しかし、いちおう水筒を持っているでしょう。

藤平　だいたいきれいな水を詰めて歩いている。

桑原　いったい、健康保持という点からいえば、水はうんと飲んで下さいというドクターの話だったな。

中島　そうなんです。

桑原　僕は心配して相談したら、水は飲んだら疲労が回復するから、歩いているときは飲まないでよいけれども、休んだとき、あるいは着いてからでもガブガブ飲んでもよろしいということで、僕はだいたいその方針に従って生水をよく飲んだが、なんともなかったね。

それで、加藤君がはじめにへばったのは、カラチやビンディで水を飲まなさすぎたということが原因じゃないかと思う。そういうことはありませんか。

中島　飲みすぎたら下痢になりましょうけれども、飲まなければ、体の衰弱の原因にはなりますな。

桑原　ぼくはそれが衰弱の原因ではないかと思います。

中島　そういうこともあろうかと思います。とにかくひじょうな発汗量ですから。

ドクター批判

梅棹　さっき山口君から、中島ドクターの健康管理について、すこし批判が出ましたが、もっとほかに気のついたことはありませんか。

山口　ドクターに苦言を呈すると、もっと隊員を安心させるためのハッタリがあってもよかったのではないか。医者はわからないことでもわかった顔をしていてくれると患者は安心するものだ。なにか養生法を教えてもらおうとおもっているときに、医者から不節制を奨励するようなことをいわれてつき放されるのはこまる。

脇坂が体をこわしたことについても、少しは中島に責任があるだろうとおもう。たとえばこんなときも、少食、過食の注意やその他病気をなおすための処置だけでなく、ふだんの衛生観念に対する注意があればよかったのではないですか。

中島　たしかに山口のいうとおりだと思います。遠征については行く医者は、たしかに山口のいうことを心構えの根本にしなければならない。

山口　隊員も、健康管理に関しては、中島に絶対に信頼をおいてほしかった。

中島　病院の患者さんにはひじょうに信頼されているのだが、どうも遠征隊員は医学部の研究室の連中とおなじレベルに考えて、いわずもがなの裏話までしてしまうので、かえって信頼度が低くなり、わるかった。

斎藤　ぼくも医者だが、医者の不養生というくらいで、必ずしも医者に衛生観念があるとはかぎらないんだがな。

脇坂　若い医者にそこまで望むのは無理だろう。

岩坪　しかし、なんといっても医者がいるだけで、心強いものです。

脇坂　なにしろからだの調子のわるいときは無理しないことだ。私のばあい、今回は準備の初期はひまだったが、出発近くなって東京に一週間もカンづめにされ、京都に帰れない。自分の仕事もあるし、これではまったく人権無視ですわ。こうしてすでに出発前から食欲なく、からだが消耗していたらしい。

谷　出発前からの健康管理がとうぜん必要ですよ。

脇坂　私のばあい、からだはいくら酷使しても大丈夫というよ

うな自信があったが、やはり過信して酷使してはいけない。

山口　なんとしても出発間際の混乱は避けがたいだろうから、遠い目で見て生活を最も能率よく調整していくことがたいせつなのだ。

岩坪　私はもっと薬がほしかったと思います。一日にパンビタン一錠ずつ、といわれても、ほんまにこれで効くのかいなという気がします。

中島　薬品の予算が一万円で、ほとんど寄付にたよったので、じゅうぶんなことができなかったのです。

現地人の診療

梅棹　現地の人も診療したのですか。

中島　出るときにちょっと薬の用意のことで問題がありましたので、じゅうぶんな量はそろえることができなかったものですから、隊員およびポーターのためにはいちおう用意があったのですけれども、一般診療のためにはひじょうに乏しいものでした。それで、往路では不親切をきわめまして、（笑声）現住民がやってきましても、ほとんどまともにみなかったのです。これはひじょうに苦しゅうて苦しゅうて、こんなことなら医者をやめようかと思ったのですけれども、とにかく私の責任は隊員の健康管理というのが第一でありまして、途中の住民の診療は第二でありますので、これは心を鬼にしていなければいかぬと思いまして、空を向いて、患者に目をやらぬことにしておりました。

今西　どうして医者がいるということがわかるのですか。

桑原　エクスペディションのパーティが来れば、パーティにはドクターがついておるというのは常識です。

中島　クーリーが教えるのです。私が空を向いておっても、ドクター、ドクターといって来るわけです。わかるのですね。それで今度は言葉がわからぬふりをしてみたりして、苦しいものでした。帰りには薬がすこし余りましたので、みてやりました。ところがちょっとみておりますと、きりがありません。たとえば帰りの話なんですが、チョンゴに着きますと、そこへ遠くの部落からやって来たのが待っておるわけです。それで一人に注射してやったら、これがまた評判がよくて、次にわしもやってくれ、わしもやってくれというので、はてな、これだけの者に注射をやっておったら、注射液がなくなってしまうわいと思いまして、一本の注射液を三人くらいに分けて打つというような具合でした。

チャボの部落で、こういうことがありました。一人の男が、ドクターといってなにか手紙を出す。見たら、十日前に帰って行ったイタリア隊のドクターの紹介状みたいなものです。手紙によると、この男は一年半前にけがをした、ところがそのけががちょっともなおらないので、中に異物が入っておるかと思って切開したけれども、なにもなかった。それでペニシリンを打ってアクロマイシンを六日分だけやっておいた、あとのことはよろしく頼むという手紙なんです。（笑声）

林　薬をもらうための仮病はありませんか。

中島　それがわかりませんね。頭が痛いというのをゴーインソエット、腹が痛いのがペトミンツエットというのですが、ゴーインソエットとかペトミンツエットとかいうことを盛んにいって来るのです。それがほんとうに頭が痛いのか、薬がほしくて来るのか、そのところは区別がつきません。

林　診療の言葉の問題ですけれども、いつもリエゾン・オフィサーがよこにおって通訳してやるのでしょう。

桑原　今川君がやっておったのですから、日本隊の診療は、やるとすれば、いちばんかゆいところへ手が届くわけです。よそは言葉が通じないけれども、今川君が立会っておれば、はっきりわかりますから。

藤平　にせ患者の問題ですが、ネパールのときは、やはりにせ患者がたくさん来ました。これはマラリアの薬を取りに来るのです。おれはマラリアだといってキニーネを取りに来る。この薬はきついから、マラリアでないものがこれを飲んだら死ぬぞ、といったら、帰って行った。（笑声）

今西　それはうまい手だ。

梅棹　林君もいままでネパールでもずいぶんおなじような問題に悩んだと思うが、この機会に経験を出していただくと都合がよいな。

林　たいして経験はないのですけれども、ぼくはいちばん困ったというのはやはり言葉の問題でした。これはネパールのことですから、地域的に特殊事情がありまして、相手がチベット人の場合にひじょうに困った。というのは二段に通訳をたのまなければならぬ。チベット人はチベット語をネパール語に直す。そのネパール語を英語に訳したものを、われわれが聞いて日本語にするわけです。初めはチベット人にいちいち聞いておったのですけれども、めんどうくさくなって、最後には通訳をたのまなかった。それからおもしろかったのは、やはり薬をもらうために来るという患者がひじょうに多かった。

梅棹　もらいだめしておくわけですね。

林　そういうやつには、たいがいバンビタンの錠剤を一つずつくれてやったり、サロメチールくらいをちょっと一本そえてやったり、品物が余ってきたときはそういうことでした。

写　真

梅棹　写真のことはどうですか。写真については、それぞれだいぶんいいたいこともあるようだが、簡単にやってもらいましょう。

桑原　はじめに、写真をとるシステムをどうするか、ということについて議論があった。そのとき、土倉案というのがあった。それは、極端なもので、全隊員は、各自カラー用と黒白用と二個の写真機をぶら下げて歩かないといかんというのだ。そうして、がっちり記録をとれという。さもなければなんのための遠征かと。それをきいて、泰安はカンカンになって怒ってしまった。そんなことができるか、写真機なんかだれも持つな、ということになり、いろいろもめた。それでけっきょく、その中間をとって、隊としてのオフィシャル・レポーターをつくった。これに指名された人は、あらゆるうつすべきところをちゃんと写しておく。他の者は自由たるべし。そういう方針にしたわけです。持ちたくないものは、写真機を持たなくてもいい、ということだ。

ところが、だれをオフィシャル・レポーターにするか。正直にいって、私は諸君の写真の腕前を知らなかった。それで、委員会で脇坂、高村、芳賀をえらんだ。

脇坂をえらんだのは、植物などの学術的な写真についてはじつにうまいということだった。そういうことも必要だろうし、としかさでもあるので、かれを写真の班長にした。その下に芳賀もたいへん写真がうまいと、だれかの情報があったのでかれを入れた。高村は出発前に一日鞍馬へいっしょに行って、その写真を見て、これはまあ失格だと僕は思ってたんですが、ともかくかれも入れた。

それでやったところが、結果からいうと、この連中はまあだいたいみんな失格です。だいいち、必要な場面を写していない。たとえば、それは、隊長、副隊長がむこうの高官と会うときに、首から写真機をかけてむこうの顔を写しに行くことは、こちらの威厳にかかわる、それはまずい。そういう意味でぼくがそういう人と会見するときにはいちいち、オイ写真うつせよ、といわなくても写すようにと、これは厳重に決めて行ったんです。ところが、たとえばスカルドで、むこうのP・Aがわれわれをティー・パーティによんだ。カシミール省の次官、それからカシミール省のラワルピンディのレジデントとか、大ボスですね、それらのほかにお相伴として三十人ほど来ている。いろんな風俗をしている。それを今度の写真帳に使おうと思ったら、あのティー・パーティのときの写真は一枚もないのだ。高村に文句をいったら、いや、そのときは自分はまだスカルドに着いていません、という。なるほどそうや。芳賀もついていないんです。そのとき、脇坂は着いてたわけですが、脇坂もうつしていない。それで、あそこは風俗的な意味でも、ぜひともアルバムに使いたいのに使えないということになった。

とにかく、オフィシャル・レポーターがとくに他の人より写すべきところを写しているということが残念ながらいえないわけです。むしろ山口のような、山口というのは自分のテンボをどんなにいわれても変えない男ですから、これは割合、丹念に写している。これが柱になった。

林　これは、いうとみんなが文句をいうんだが、やっぱり数をこなしている点では平井がうまいね。見ますとね、平井の写真がいちばん光っていると思う。

加藤　おれもええのがあるぜ。

植物と昆虫

梅棹　今度はとくに学術班というものは設けてはいないが、ACKの伝統として、学術方面の仕事は、できるだけやる、というたてまえになっている。じっさい、今度の採集の結果を見ても、なかなかよくやってきたと思うのです。いずれ、専門的な報告は、学術雑誌に出されることになるだろうが、科学的な観察や採集について、脇坂君から簡単に話して下さい。

脇坂　今度は植物に関係している者がだいたい三人おったので、僕は花をやっております。花卉園芸です。高村は作物学で、岩坪は林学をやっているわけです。そこで、三人でおなじものを採集してもしようがないので、岩坪は樹木、僕は双子葉類の草本をやるという分担をきめました。それでお互にずっと採集して行ったわけです。

梅棹　胴乱は……。

脇坂　胴乱と根ほりを持って歩きました。ところが、持って行った根ほりがチャチで、長いのを起すとこわれる。それでときにはビッケルを使って採集したのです。ところが、もうひとつ、僕は双子葉の草本をやっておりますし、チョウと関係があるわけです。花を採っているとチョウがとんで来る。それを捕る。捕虫網は二人分持っていったのですが、好奇心のある人がおられたらチョウは捕ってもらう。花とチョウと両方とも一人で採集することは、この前ネパールでだいぶしんどいということを痛感しておりましたので、チョウはいちおう網は持って行くけれども捕らないでおこう、だれかってやろうという有志はいないかと思いましたが、あまりおいでに

ならなかった。しようがないから、けっきょく、僕が植物採集道具のほかに捕虫網を持って歩きました。

それからもう一つ、教養部の平野助教授から藻類を取ってきてくれと頼まれていたのです。あんな乾燥地に藻があるかと思ったのですが、とにかく道具は持って行ったわけです。行ってみると、やはりあります。そうなってきますと、とにかく忙しいのです。藻の道具をひっぱり出して、すくうのは手でやったわけですが、道具を出したり入れたりすると、ほかの人よりずっと遅れる。しかしいちおう引受けたことだし、やるだけはやりました。岩坪も一生懸命やっていたようです。

それからキャラバンの組織の中で、先発隊と称していちばんさきに出かけて、テントを張る役目の隊があるわけですが、高村は奇妙にその中によく入る。そうすると、やみくもに、さきにとっとと行かなければならぬ。それで採集どころでなくなるのです。ぼくは禾本科のあるものに興味があるので、それでお互に補ったりして、植物のほうはそういう具合にしてやりました。

梅棹　昆虫なんかは、一度だれかやってみると、こんなおもしろいものはないということになって、網を振りまわすものだけれども、やるまでは、かなわぬと思うからな。

脇坂　捕虫網を振りまわしていると、ふつうはボーターかだれかが一匹とらしてくれといって来るものですが、今度の隊にはそういう人はいなかったようです。

梅棹　ベース・キャンプに植物はぜんぜんないの。

加藤　ベース・キャンプから約一〇〇〇メートルくらい行ったところの南側の斜面に、撒収するときに緑の地帯が見えた。岩坪林学者は、はるかに望遠鏡で見た。しかし植物があったのは、五〇〇〇メートルから四九〇〇メートル付近の南側の斜面だ。

脇坂　岩壁の水気の多いところには必ずあるようです。

梅棹　木本か。

岩坪　草本だと思いますが、わからないのです。

脇坂　採りに行きたかったけれども。

桑原　行け行けといったけれども、行かなかったね。

岩坪　行く気になっていたのです。最後の撤収からおりて来て、次の日に行こうと思ったら、人夫があがって来た。

トリとケモノ

梅棹　動物については、あんがいナチュラリストの加藤副隊長がくわしいのではないですか。

加藤　動物――猛獣ではないが――だけは一生懸命見て来たが、けっきょく、ひじょうに少ないということだ。乾燥しているせいか、住む範囲がひじょうにせまい。トリで見たのは、スカルド付近でいちばんよくいるのがカササギ、それからカササギの類なんだろうけれども、灰色の頭をしたカラスのようなのがいる。それとヤツガシラ、これくらいしかほとんど見あたらない。

それから道を歩いていて気がつくことで、おもしろいのは、猛禽類がほとんどいない。ネパールあたりでは、ずいぶん見たけれど、ここではいない。タカ、トンビがいない。

梅棹　餌になるネズミなんかが少ないのかな。

中島　私はアスコーレでタカを見ました。

加藤　そうか。僕はずいぶん気をつけていたが、見なかった。大きいのかい。

中島　アスコーレのかみのほうです。ビアフォ氷河のツンゲからちょっと降ったところです。飛んでいたので、大きさはわからないが、けっきょく、住む範囲がひじょうにせまい。トリで見たのは、スカルド付近でいちばんよくいるのがカササギ、それからカササギの類なんだろうけれども、灰色の頭をしたカラスのようなのがいる。それとヤツガシラ、これくらいしかほとんど見あたらない。

それから道を歩いていて気がつくことで、おもしろいのは、猛禽類がほとんどいない。ネパールあたりでは、ずいぶん見たけれど、ここではいない。タカ、トンビがいない。

梅棹　餌になるネズミなんかが少ないのかな。

中島　私はアスコーレでタカを見ました。

加藤　そうか。僕はずいぶん気をつけていたが、見なかった。大きいのかい。

中島　アスコーレのかみのほうです。ビアフォ氷河のツンゲからちょっと降ったところです。飛んでいたので、大きさはわからないが、けっきょく、ひじょうに少ないということだ。乾燥しているせいか、住む範囲がひじょうにせまい。トリで見たのは、スカルド付近でいちばんよくいるのがカササギ、それからカササギの類なんだろうけれども、灰色の頭をしたカラスのようなのがいる。それとヤツガシラ、これくらいしかほとんど見あたらない。

それから道を歩いていて気がつくことで、おもしろいのは、猛禽類がほとんどいない。ネパールあたりでは、ずいぶん見たけれど、ここではいない。タカ、トンビがいない。

梅棹　餌になるネズミなんかが少ないのかな。

中島　私はアスコーレでタカを見ました。

加藤　そうか。僕はずいぶん気をつけていたが、見なかった。

いのですけれども、トビくらいなタカです。

加藤　僕はぜんぜん気がつかなかった。

桑原　平井は羽をひろって持っていたね。

平井　僕がひろった羽は三〇センチくらいありました。ワシかタカだと思います。

加藤　それから、カモの落ちついているものがいる。これはブラルド川で数回見た。

梅棹　トリはどのへんの高さまであがってきますか。

加藤　カラスはずいぶん上のテントまで来た。六七〇〇メートルのテントまで来た。

山口　七〇〇〇メートルまで来ました。

加藤　これはハシブトです。でかいやつで、これがだいたいあのへんに二つがい生きている。それからイタリア隊に一つがいいて、ビアンジェに一つがいいるらしい。トリはそれくらいしか見えないです。

梅棹　哺乳類はどうですか。なにかケモノがいましたか。

加藤　コシュマールで六〇〇〇メートルくらいさきのひじょうに高いところにクマが二匹いるのを見た。それからバルデュマルの手前でアイベックスを見た。

梅棹　一匹……。

加藤　ええ一匹。それからその付近から上でナキウサギをちょいちょい見た。

梅棹　捕らなかったの。

今西　ウルドカスにいたか。

加藤　ウルドカスでは私は見なかった。それだけです。

梅棹　今西さんのとき、ウルドカスにナキウサギはいましたか。

今西　おらぬ。アブルッジのときはいたようだ。ウルドカスにはうんといたが、おらぬようになったのは伝染病のせいらしい。

加藤　あそこには一匹もいない。

魚

梅棹　魚ですが、これも釣師泰安の独壇場ですな。

加藤　ブラルド川にしてもインダス川にしても、常時本流は変っているようです。帰りにはインダス川はあきらかに減水しており ました。だいたい一メートル六〇くらい減水していた。魚釣りのご料場がだいぶん変っていた。あそこの川には、むこうの連中の表現を借りると、小さくておいしい魚、それから力の強い魚、それから大きい魚、それから長い魚、これだけいるのです。長い魚というのはウナギです。これはネパールにいるのとおなじやつです。大きい魚というのはナマズです。これはべらぼうにでかいものがおりま す。

桑原　泰安の竿を折ったというのはそれですか。

加藤　それです。ぼくの強いのを折ったのはナマズです。それから小さくておいしい魚というのはドジョウです。ヒゲのあるやつで、これはなかなかおいしい。

桑原　バイジュで釣ったね。

加藤　バイジュで釣ったのもあるし、下でも釣れます。

芳賀　ウグイのようなものですね。

今西　バイジュにいるのはヒゲのあるもので、ウグイはヒゲがない。

加藤　それがドジョウで、それといっしょにウグイの子供がいるのです。

桑原　魚のいそうなところの大きな石に手ごろの石をバンとぶっつけると、しびれて浮いてくるのを取るという手がある。

加藤　インダスのあの辺の連中は、魚を食うことは食う。けれども食品として扱っていない。たのしみに釣って、釣れれば食べるという程度です。それからほかの連中に聞いても、これはなんだというと、これは魚だというだけの表現しかしない。ウルドゥ語ではマチリという。バルチ語ではニヤーという。かなり簡単な方法でたくさん釣れる。もう一つ、これはぼくが釣ったのではなくて、釣ったのを見たのは、マスが支流のところにおりて来ております。これはそのとき計ったら八ポンドくらい、かなり大きいものです。

登頂第一主義と学術

梅棹　純粋の学術探検とはちがって、登山隊における学術研究は、いろいろむつかしい問題をはらんでいるものです。今度の場合も、そういう点があったにちがいないと思う。今度の隊での、学術的な活動について、自由に批判をやって下さい。

酒井　AACKでは、学術調査は尊重するというたてまえはあるが、それとともに、登頂が第一目的であるというプリンシプルがある。その是非はともかく、チョゴリザ隊ではそのプリンシプルは厳存していたのだと思う。

山口　そうです。そのことはスカルド出発のときに隊長からいわたされたのです。一生懸命に調査や採集はやってもらいたいが、そのために登山隊の力をマイナスにしてはならないということだ。

梅棹　じっさいは、トラベル中の学術調査は、どんなふうにして、やったのですか。

脇坂　キャラバンの方法としては、二、三名が先発として先頭を歩き、キャンプの設営をする。隊長はまん中、後尾は数名の隊員、という布陣でした。学術班の三名もそのいずれかにそれぞれ入っている。

そして暇をみつけて採集をする。その日のディレクターおよびもろもろの仕事は、アトランダムに割当てられるので、学術調査はじゅうぶんにできなかったうらみがある。

中島　じっさい、行進中は、学術担当もなにも区別がないのです。トラベルで、トップを歩きたい人もあれば、うしろからついてゆくほうがつごうのよい人もある。それを機械的に、今日はだれとだれが先発、だれはしんがり、と決めたのだから、学術班もなにも区別はない。

それをうまく調整してくれたら、もすこし採集もたくさんできたと思うのだが。

梅棹　またトップ・マネージメントの批判になりそうだが、隊の上層部というか、年より組の方に、そういった調査や採集をうまくやれるようにしてやろう、という理解はあったのですか。

一同　いや、理解はあまりなかった。

脇坂　たとえば、植物などは、しんがりを歩く以外、調査、採集は不可能なのに、おかまいなしに先発をおおせつかったりする。しかしこれは、トップ・マネージメントのクラスばかりではない。隊員のだれでもが、学術担当以外のものでも、採集などにもっと協力してくれてもよかった。

山口　学術を尊重することはたてまえではあるが、この隊は登頂が第一目的であると釘をさされていたので、じゅうぶん協力することはできなかった。そのためにクライミングの力が弱くなりはせんかと心配だったのだ。

脇坂　とにかく、カラコラムでチョウをとるのはなかなかの苦痛なんだ。一日走りまわって二、三匹です。ネバールなどとちがって、それほど数が少ないところなので、あまりおもしろくない。それで、よしおれにとらせてくれと、手伝ってくれるものがなかった。しんがりの隊でチョウをとっていたら、キャンプにつくのが二時間半くらいおそくなる。

酒井　しかし、この問題は、理解ということだけでは片づかないのじゃないか。隊の行動の仕方そのものに関係するとおもう。あのスケジュールでトラベルする場合、学術調査に対する考慮がじゅうぶん払われていたとしたら、はたしてかなりの成果があがったかどうか。その点どう思いますか。

山口　それは、あまりたいしたことはできなかったと思う。あんなスピードでトラベルすると、体力的、時間的に無理になります。

谷　登頂のあと、帰りのキャラバンで、学術調査のため時間をさくことはできなかったのか。

脇坂　それは季節が変っているので具合が悪いんです。植物採集の鉄則は、見つけたときに直ぐとることだから。

学術尊重は観念論か

梅棹　そういうことのほかに、今度の場合、学術調査に当る人の側でも、研究のデザインができていなかった、ということがあるのじゃないですか。ばくぜんと、植物を採集しますとか、チョウをとります、ということではなしに、こういう理由にもとづき、こういう作戦で、こういう仕事をします、というデザインなんです。たとえば、われわれはすでに過去数次にわたって、カラコラム地域にエクスペディションを出してきた。その結果を関連づけながら、今度の場合は、こういう地域において、こういうメンバーだから、最小限これだけの学問的成果をコントリビュートすることができる、というふうに考えを進めてゆく。そのデザインのもとに、植物など、たとえばとくにキク科とか、昆虫ならチョウとかトビムシとか、はっきり重点的にテーマをきめることができるはずだと思う。

近藤　それができなかった。たしかに一般論として学術調査は尊重するという態度はとっているが、具体的になにをやることを課題とするかという方針はなかったのです。

谷　それからまた、われわれはなにをやりたいと思っているか、それをあらかじめ首脳部に通じておく、という面でもふじゅうぶんなところがあったのでしょう。

酒井　学術班がなにを調査するのか、そのテーマはいちおうそれぞれ決まっていたと思うのです。しかしそれをじっさいいかにやるかというプログラムはできていなかったんだ。その理由として、学術班員はみな装備・食糧などの係として、準備段階においてすでに目がまわるほど多忙であったことも、あげられると思う。学術は尊重するが、登頂が第一目的であるというプリンシプルは、この面でも影響していたといえる。

高村　はじめから調査のプログラムをつくり、それにもとづいた日程で歩くというのではなく、今度の場合、決められた日数で決められた行程を進み、その間にできる範囲内の調査をするということであった。しかし、その範囲内での調査の具体的なデザインはできていなかった。

岩坪　帰ってから文献を読んでみると、しまった、これをいく前に読んでいたら、現地でもっとじゅうぶんに調査の成果があがっただろうと思うことがしばしばある。

梅棹　それが必要なのだ。そういう準備ができていたら、じゅうぶんにそれをおえら方にPRして、少なくともこれだけは調査させてくれといって、ある程度強く主張できる。

脇坂　たしかにそういう欠点はあったと思います。

梅棹　そこでね、これはちょっとひどいいい方なんだが、AACKの伝統であるところの学術尊重ということも、実情かくのごとしであるならば、これはどうもたいへん観念的なものにすぎないじゃないですか。これはひとりチョゴリザ隊だけの問題ではありません。AACKの会自体の性格の問題として、まことに重要な問題です。アカデミックな山岳研究といったところで、一般論としての学術尊重の態度だけで、実質的なプランやデザインがないのなら、それはカラ念仏におわるおそれがある。それなら、どこかの隊のように、カンバンだけの学術探検とあまりちがわないではないか、ということさえもいえるわけです。これではなさけない。

近藤　そうだ。これはAACKの会全体の根本的な問題だ。

酒井　けっきょく、次の二つの結論をだすことになるのじゃないですか。いわゆるおえら方に対しては、学術尊重を、一般的なたてまえとしてでなく、観念としてでなく、実質的に守り通してもらうこと。われわれ自身としても、単にみせかけでなく、具体的な成果をあげることができるように反省し、研究を進め、トレーニングをするということ。この二つを認める必要があると思います。

第十章　これからの問題

バルトロ・カンリ

梅棹　チョゴリザ遠征については、これで一とおりの報告を終ったことになると思いますが、さらにつけくわえて、これから「今後の問題」について、検討を加えてみてはどうでしょうか。

最初にまず、私から問題を提出しますが、つぎにエクスペディションを出すとすれば、目標はどこになりますか。今度、バルトロ・カンリが残ったわけですが、バルトロ・カンリはどうですか。だいたい、なぜ残ってしまったのか……。

桑原　率直にいえば、みんなおりて来るまでに、バルトロ・カンリはだめだろうとぼくは思っていた。はたしておりて来たとき、ぼくの感じでは、早くバルトロ・カンリへかけあがってやらんならん、という顔をしているものは一人もいなかったな。口ではバルトロをやめようという人はいなかったけれども、隊長がなんといおうとおれはかけあがる、という感じはなかった。藤平でもホッとした顔だし、泰安は、率直にいってすっかり憔悴しているし。

脇坂　ベース・キャンプにいた三人は、なにか一発かけようという考えは強く持っていたんです。ところがおりて来た人の顔は、いまおっしゃったように……。

桑原　脇坂と芳賀と岩坪とは、じゅうぶん休養したし、その三人はピークに登っていない。ほかはぜんぶ登っている。それでこの三人でということを考えたけれども、またぜひ出てもらいたいと思ったけれども、ぼくの解釈ではまだ体力が完全に回復していない。トラベルは平気だけれども、七〇〇〇メートルというのを登ったら危いというのが直観だった。

今西　バルトロ・カンリというのはきのうから話が出ているけれども、食指の動く山か。

中島　すばらしいです。

桑原　今西君、あなたはコンコルディアから見たのでしょう。

今西　一九三四年に、バルトロ・カンリの五つのピークのうち、どのピークか知らぬが、ディーレンフルトの隊が二つあがっているね。その登ったピークと登らぬピークは、はっきりわかりますか。

桑原　登ったのは南のほうでしょう。

今西　だから第二キャンプくらいから行くというのでなくて、東方へ登ろうと思ったら、新しいコースをとらなければならぬと違うかな。

脇坂　第二キャンプからすぐ続いている。

桑原　第二キャンプが左寄りになったという非難があったが、バルトロ・カンリへ登ろうとすれば、たいへん都合のいいところへつくっているわけなんです。それから第一キャンプはガタガタになっていたけれども、第二だけはビリッともしていなかった。ですから第二からならやれたけれども、しかしそれには食糧の問題もあるでしょう。

山口　食糧がほとんどなかったです。

高村　装備のほうでも底をついておりました。

桑原　ですから、あれでは大きなところをやるということは、体力があっても無理ではないか。平井のように耐乏主義で、現地食でやれますという説もあるけれども、ぼくはちょっと無理だと思う。

ガッシャーブルム、パイジュ、トランゴ

今西　それからあの辺からというと、ガッシャーブルムのⅢというのがまだ残っておりますね。それはとっくり見てきてどうでしたか。

平井　イタリア隊がいうていたところによると、ひじょうにむつかしい。

今西　君らが見て、登りたくならぬような山か。

芳賀　ぼくがマライーニ氏に聞いたのでは逆だったのです。バルトロの山をこれからやるにはどこがよいか、ガッシャーブルムⅢというのはどうかといったら、ガッシャーブルムⅢは、イタリア隊の第五キャンプですか、七二〇〇からもう一発やれば登れる。それよりも山登りとしてのおもしろさはガッシャーブルムⅤとⅥで、七三〇〇か五〇〇くらいの山ですが、そのほうがガッシャーブルムⅢよりはおもしろいといっておりました。

今西　だいたい、ガッシャーブルムはどれもこれも痩せており

ますね。だからチョゴリザみたいな山が好きな人にはむかぬのです。それだけ若い人には、あんなのが好きだという人があるかもしれないけれども。

桑原　バルトロ・カンリはチョゴリザとタイプは似ておりますよ。

今西　似ておりますね。それから山のついでにもう一つ伺いたいのは、バイジュとかあの辺の岩峰、あれはなにも気が起らなかったか。

脇坂　バイジュは、ハウストンが手がけるそうですね。

桑原　あれはカムフラージュと違うか。はじめショーニングに聞いたら、来年はバイジュだといった。下でP・Aに聞いたら、いや、かれらにはマッシャーブルムの許可を与えているのだといった。マッシャーブルムというのがまずいから、バイジュといったのじゃないかと思ったけれども、それではあまり作戦的すぎると思う。とにかくバイジュといっていた。

脇坂　われわれもバイジュを見て、あれはどうだろうかと、討論したのですけれども。

山口　やはりなんといいますか、わざわざバイジュだけに登りに、日本から来るという気はぜんぜん起らなかったです。帰りにチョッカイかけて試みるとか、そういうことは考えたですけれども、なにかちょっともったいなすぎて……。

岩坪　あれは雪の調子がよかったし、こわいロック・クライミングをせんでも登れるのです。なだれの危険は少しあるかもしれないけれども、あれはアイゼンだけでガクガクと登れる。どこか登ったあとで、からだのよい場合、高度順応を相当やっておったら、帰りにチョッカイをかけて、わりあい簡単にいけるのじゃないかと思う。

今西　バルトロに入って、左に出てくるトランゴとか……。

高村　これはものすごいです。ビルディングの岩登りのような感じです。

岩坪　ロウソク岩みたいで。

山のきりょう

桑原　トランゴというのは、景観としてはいかにもバルトロ的で美しいけれども、登ろうという感じはしない。若かったら、ああいうものでも登ってやろうという気持になるのかもしれないけれども、いまだったら、バルトロ・カンリのような山が好きだ。

今西　日本で美人の標準というものも、徳川時代から明治、大正、昭和と変っておりますな。山登りする人にも、一種の好きな山のタイプがある。その標準が時代とともに変るのはわかるが、このごろはどんなのが好まれるのか。それとも、山を選ばないのか。

桑原　なんでもやったらよいという。（笑声）

今西　なんでもよいのか、やはりタイプがあるのか。どっちだ。

脇坂　トランゴ・タワーとかそのほかああいった山は、隊長がおっしゃったように、たしかにすばらしい景観なんですけれども、われわれも、それを登る対象にするということはぜんぜん考えなかったです。

桑原　トランゴというのは、あれだけのためにかけずりまわって募金するという気にはならないな。

脇坂　若い連中も、山が出てくるたびに、どうだろうかといおう議論してみましたけれども、トランゴ・タワーなんかは、ぜんぜん話が出なかったように思います。

高村　バイジュでも、あれはどうだろうというのは、たいていだ。

雪のついているルートを一生懸命捜していたような傾向がありますす。

今西　バイジュはアスコーレからずっと谷をあがっていくときに、正面に出てくるでしょう。景観はやはりいいものだけれども、ぼくらは登りたくならない。しかし、ヨーロッパからだったら、もうすぐバイジュやトランゴを見にくるものが出てくるのじゃないかな。

梅棹　バルトロ・カンリだったら、日本からエクスペディションを出して登りに行くという気はしますか。

山口　しかし、もう五つのビークのうち二つは登られておりますし、だいぶん荒されておりますから、あそこまで行く費用を考えると、まだシアチェン氷河のほうにぼくとしては食指が動きますね。

今西　当然だね。サルトロ・カンリがある。

桑原　姿からいうと、バルトロ・カンリは、コンコルディアを出てしばらく行ったところの景観は、まことに堂々という感じがする。

今西　今度チョゴリザを撃って帰ってきて、天候が悪かったというほかに、食糧その他においてすでに戦備が不足していたというのだけれども、今度のエクスペディションにおいてはもう少し余裕を持たして、一つの山だけ登って帰って来るというのでなくて、二つ三つくらい登って来るくらいで出したいね。ギリギリ一ぱいというのはちょっと……。

新しいヒマラヤの技術

今西　ここで一つ問題を提出したいのだがな。たしかにヒマラヤもつぎからつぎからと巨峰が落ちてですね、あとに残っている山は、おいおいむつかしい山ばかりになってくる。そういう事態に対して、はたしてAACKとしての心構えはできているだろうかという問題だ。

僕が五五年に行ったときにはですな、日本の実力ではガッシャーブルムⅣは手ごわいとおもった。あれをイタリアが登りに行きよるということを聞いて、イタリアはえらいむつかしい山をえらばはるなあと思った。

ところがそれをイタリアは登ってしまった。

これを見ると、もはや、われわれとは格段のテクニックの差があるのではないか。アルプスという本場をひかえてですね、しかもそこで、プロフェッショナルとして生活している連中だ。こんなのがどんどんヒマラヤに出てきよったら、これはAACKがさかだちしても、とてもかなわない。ヒマラヤがむつかしくなって、こんな連中でなければのぼれない、ということになれば、もはやわれわれが出ていっても、これはたいへん成功率がとぼしいのではないかという気がする。これは、わしが現在の第一線の人のテクニックを知らんから、自分たちの時代の水準で考えてるから、そんなに思ったのかも知らん。

藤平　たしかに、その問題は重要だと思うんです。これから残ったヒマラヤの山は相当、高度のテクニックを要する。ところが、もともと京都はエクスペディション派で、エクスペディションの運営技術は立派なものだが、登攀技術は二の次になるという傾向がひじょうに多い。それは考え直すべき時期にきているのではないかと思う。やっぱりある程度、登攀テクニックというものは考えなくてはいかんと思う。そうしないと、あとのヒマラヤの山というのは登れなくなる。ただバカスカ歩いておればすむという山ではない。も

うすでに相当に高度のテクニックが七〇〇〇メートルにおいても要求されてくる時代なんだ。

林　それは今西先生がいまは北山とかその辺りを歩いておられても、その昔、劔あたりに挑戦してずいぶん立派な記録を立てておられる。いまのものはそういうことを忘れて、技術を軽視する傾向がたしかにあると思う。

今西　しかし、もっとテクニックを稽古せえというても、たとえばオーバーハングになったところへピトンをうって登っていく稽古をしてやね、それではたして、いま残っているヒマラヤの大物に対する稽古になるかどうか、これは問題やね。岩登りにしても、なんにしても、いまヒマラヤあたりで、バリエーション・ルートもうなくなって、どうにもしようがないから、オーバーハングにでも登ろかとなってきてるのとは違う。ヒマラヤの場合は、そういうテクニックでやらんならんというのではないと思う。最後はそういうところへくるかも知らんけれどね。

マナー

梅棹　藤平君、もっといいたいことがありますか。(笑声)

藤平　もういいですよ。(笑声)　ついでにもう一つね、若い隊員について、感じたこと。なんというか、マナーがなっていないという感じがしたね。たとえば、テントの中の整理状況だとか、出発するときスッタモンダしているとかいうこと、これがひじょうに僕にはシャクにさわるわけなんだ。つい心ならずもどなり散らした場面があったんだね。だいぶんムチャクチャに気合いをいれられた人もあったはずだ。(笑声)　だいたい気が短いんだ、僕はね。

林　アンナプルナとくらべてどうですか。

藤平　似たようなもんではないか。グラシなくってしまりがない。はっきりいいますけど、これは関西の学校の特性ではないかと思うんだな。戦争中に京都に入った連中といっしょに山に行くと、じつはびっくりぎょうてんなんだな。テントの中を散らかすだけ散らかす。なにもかも手のとどくところにあるようにしておきたいんだね。まったくこれは言語道断だという気がしたことがある。僕だったら一日にまあ二回ぐらいは掃除しないと気がすまない。じつは、そういったところに気構えの問題がひとつあるんではないか、けっきょくそういったイージーな気持で山に登っているということだけで、やっぱりヘバリがはいるんではないか。(笑声)

加藤　私もだいたい藤平君のいったことはあたっていると思います。テントの中の汚いことはじっさい、裏長屋のようなもんだ。それから、出発、集合ね、これはみなメチャクチャに行儀が悪い。それはね、ミリタリズムの中に育ったか、デモクラシーの中にそだったかというちがいじゃないですか。

加藤　それはいきなり個性の問題だと思うんだ。

山口　それは関西の山岳部の連中がぜんぶダラシないんじゃなくて……。

加藤　いやちょっと待ってくれ。関西がダラシナイといってるんじゃないんだよ。

山口　いや、さっき藤平さんが……。

藤平　僕はいった。

加藤　そういう問題じゃなくて、けっきょく個人の問題じゃないですか。僕はそうだと思うんです。

山口　そうか。

藤平　いやそうじゃないと思うんだ。そういう雰囲気の中でトレーニングされてくると、自然そんなふうになってくるんじゃない

か。ぼくは直接、東京から来てポンとチョゴリザに行ったのでしょう。だからそう感ずるのかしらんけれど。

今西　テントの中の汚いというようなことは、決して自慢すべきことじゃないがね。

加藤　集合、解散のでたらめ、これもエエコッチャないですよ。これはもうあらためたほうがいいと思う。これは今度、つくづく感じたことです。

四手井(英)　だらしがないというのはね、あれは出発前の準備でも、僕は岩坪や脇坂にいったが、とにかくひじょうにだらしがない。整理整頓、それはたしかにない、ぜんぜん。紙はバーと投げて行くしね。

趣味とエチケット

梅棹　若い人の味方をするわけじゃないが、そういうことはあまりやかましくいうてもしょせん無意味なことではないかと私は思う。それはけっきょく趣味の問題だから。きれいなのが好きな人もいるけども、そうでない人もいる。そこで、一つの隊の中でそれを主張したら、しょせん上の人の趣味を下の者に押しつけるだけのことになる。それでみんなおるかというたら、ぼくは簡単になおるものではないと思う。

藤平　しかし、団体生活をきびしい条件の下でやって行くのに、他人に不快の念をもたせるのはこれはエチケットの問題でしょう。

梅棹　それはあるけどね、もう一ついうと、ぜんぜん逆のこともいえるんだ。それは、隊員にむかって、お前はマナーがなっていない、などということ自体が、他人にひじょうに不快感を与える。そうですよ。つまり、身のまわりにひとりずつテリトリーのひろがりがある。それを、どうせよこうせよと干渉することは、それこそエチケットに反する。趣味の押しつけなんだ。ちゃんと整頓するとかいうことは、善悪の問題でなくて、趣味の問題であることを、みんな自覚する必要があると思う。

山口　ところが、たとえば、ひとつの例をあげますけどね。バラテントといってひとつのテントに若い者が入っていた。そこで寝てたわけですよ。整理する者はするし、整頓の悪い者はほっ散らかしておく。それで問題がなにも出なければいいんですが、たとえばバラバラにしている者が自分の責任で物を失って、それを自分のせいと考えないで、他の者のせいにして、お前がどこかにやったんだろうと、そういうことをいわれるとひじょうに不愉快なんですよ。

谷　それに関係してこういうことはなかったですか。整頓するにもそれぞれの整頓方式がある。それが食い違うために、お互に意思の疎通ができない。それで若い者は遠慮してやらない。

加藤　そういうことはないで。

谷　あまりそういうことをきびしく組織してゆこうとする人がいた場合、ひじょうにいがみ合いが起こることがある。

梅棹　そういうことはよく起る。どういうふうにしてそれが解決されてゆくかというと、じっさいは、立場の上のほうの意見を、ひょいと肩すかしして流してしまうということで処理している。それがやはり実際的なやり方だ。

近藤　それは京都的というか、大阪的なやり方じゃないかと思う。

梅棹　そうかもしれん。

平井　個人が長い間、そのテントに泊まるのならいいですよ。しかし、その人がまた別のテントに行く場合、たとえばシュラーフ

がそのままになっているとか、コンロがどこいったとか、電池が水浸しになっているとかいった場合、そのテントにはいった人がそれから上に登る場合、なにがどこにあるかわからんとか、アルバイトがふえる。たとえば、おなじ趣味の問題だといってもですね。朝寝坊をしていたら山に登れんのとおなじで、山に登る資格が欠けているんじゃないですか。

中尾　実際上、害があるかどうかが問題で、それ以下やったらかまわんじゃないか。

年齢階級

梅棹　とにかく、五十何歳から二十二、三歳まで、倍以上の年齢の開きのある人たちが一つの隊の中にいるのだから、いろいろなこともでてきますわな。そういう隊員のあいだでの考え方や気持の調節ということは、こういう隊ではたいへんだいじのことですな。

藤平　その点についてちょっといわせて下さい。私はさっきからだいぶ悪口雑言たれたけどもね、ぼくは今度チョゴリザへ行って、じっさい自分の役割はどんなことかと考えてみたんです。年齢のことを考えると、泰安と若い連中とのあいだには、大きなギャップを感じるのじゃないかと思った。自分の弁解になりますけどね、それで、できるだけ怒るのは自分でやろう、泰安が怒りそうになったら自分が怒っちゃう、とそういう気でおったわけです。それで若い人にはひじょうに気の毒な結果をまねいたんじゃないかと思うんです。それは今ここで白状して、おわびしておきます。

加藤　それはおれがずるいんだ。おい藤平いえよ、というと藤平がカンカンというんだね。おれはまあ仏の性で、なかなかいえねえんだ。

藤平　仏の泰安、鬼の藤平というようなことになった。（笑声）やっぱり立場だな。藤平としてはギュウギュウ締めていかねばならん。

梅棹　若い人の意見はどうですか。カンカンといわれるばっかりか。

山口　いや、ぼくの考えをいいますとね、カンカンといわれても、それに対してこっちからガミガミと反対意見を吐いてもね、変ないろんなトラブルがおこるだけだ。そのときはそのままですましてですね、ぼくはぼくのベースで行けばいいと、そういうのがぼくの考えだったんですが。

高村　ぼくの場合、それが具体的に出て来たのは装備のことです。スカルドについたときに、藤平さんから荷物の削減を命ぜられた。リストを見て、これこれは多すぎると削除される、こちらがいちいち説明して、そのときぼくのいいたいことも通しましたし、また藤平さんの話も聞いたわけですが、どうしても数量的に折合いのつかない電池、ロウソクとかそういうものは、十個、二十個の問題で、ながながと議論をしてもはじまらないから、そういう場合はまあ、藤平さんの意見に従っておくのです。そしてじっさいは、電池なんか一割ぐらいそのときの協定量よりたくさん持って行ったわけです。ロウソクも一割よけいに持って行った。

テトロンのザイルはまだ性能がわからんから持って行くなというお達しだったんですが、一本入れておいてもいいだろうというわけで持って行ったわけです。これはレジスタンスといえばレジスタンスかも知れないですが、まあそんなかたちで解決することが多かったのではないでしょうか。

山口　だいたいね、そういうふうなことを議論する場合というのはね、まあひじょうに興奮するわけなんですよ。だからそういうときに反対意見をいってですね、自分の考えを押し通そうとしてもですね、混乱するだけでちっともプラスにならんのです。それよりもいちおう意見を入れといてですね、こっちの思うようにある程度やっとくと……。

加藤　東北の百姓みたいだな。

人の和

梅棹　若い隊員と年よりの隊員との問題をさっきから聞いてましたら、私の感想からいうとこういうことやな。両方とも実によく考えているんです。みんなそれぞれの場所で、それぞれの立場で、チャンと考えている。ひじょうに、実際的な判断を下していたように聞きましたがね。

藤平　これはずいぶんかばい合ったと思うんだね。

脇坂　今度の遠征は、上から下まで一貫して人間的関係がじつにうまくいったと思うんですよ。私、いまから思ってたいへん気持よかったと思います。

桑原　ぼくは第一キャンプに一度あがっただけで、それもすぐおりて来たので、それから上のことはわからんけれども、そこまでのトラベルとベース・キャンプのことから推測してですよ、今度の遠征は感情のしこりはなにもなかったと思うんだがね。

山口　そうですね。

桑原　趣味の相違ということは、これは仕方がないですね。しかし、そういうことでコミュニケーションが途絶しているとは思わない。ただ藤平が山登りしていた時代と、芳賀や高村が山登りしていた時代とは、日本そのものが変ってきているからね。それを反映して、考え方のちがいはあるんだね、そういうことはさけられないと思う。そのほかは和気あいあいと行っていたようにぼくは思ってますな。

今西　この前のアンナプルナのときにね、今西寿雄が出て、戦前派と戦後派というものにギャップがあってはいけない、それを一本にするということが、ひとつの問題だった。その時のギャップからすると、今日では割合、小さくなってきている。しかし、人間というものはだんだん欲が出て、チョゴリザが成功したにもかかわらず、さらに理想的なよい山登りがしたいと、みんなが熱心にそう思うているからこそ、こういういろんな議論が出てるんだ。これはひじょうに有難いことだ、ＡＡＣＫのために。

高村　人の和については、行く前から脇坂さんやら林さんからいろいろ注意されたわけなんですね。それでずいぶんおどかされたようなかたちで出て行ったわけです。ところが、ぜんぜんそういう危険を感じる事件とか人間関係がなかったですね。けっきょく桑原隊長という人間を中心にしたひとつのスムーズな系統みたいなものがはっきりあって、それでうまくいったのではないかと思うんですがね。ぼくは命令系統とかなんとかいったことすらも感じなかった。

選手制か同志的結合か

桑原　これは未来の問題だけれど、これからのエクスペディションを出す場合、連合軍というか選手制というか、あちこちの大学から強いものを選んで編成するというのと、一つの大学だけでやるというのと、二つのやり方の得失の問題はどうだろうか。

加藤　ほんとうをいうと、いろいろなところから選抜して来たのがいいのに決まっている。ところが、実情はそういう社会的訓練

を経ていないから無理なんだ。まあ常識的にいって、身近なものとやったほうがらくだということはいえると思うな。

桑原　よその国はだいたい選手制でしょう。アメリカのK2の紀行文を読むと、いままで知らなかったものと顔を合わしたけれども、スカルドからトラベルしているうちに気持は次第にとけ合っていったというような表現がある。スカルドで初めてぶつかっているようなものがいるわけですよ。それから、山と違うけれども、コンチキ号のエクスペディションなんか、やはりピック・アップ・チームでしょう。

梅棹　それはぜんぜん違います。コンチキ号はピック・アップ・チームと違う。

桑原　同志的なものですか。

梅棹　そうです。その問題については、私は意見があります。マナスルなんかが、そのピック・アップ・チームの典型だと思うのですが、ああいうやり方はやはり変則で、あれは今後はやめなければいかぬと思う。

桑原　ぼくの説は中間的になるかもしれないけれども、ふつうの純スポーツと違って、登山には生活という要素があるから、好みや美的感覚の問題なんかがかなり関係してくると思う。そうすると、いまの日本の登山界の現状では、あれは強い、これは強いということだけで、あっちこっちの大学の卒業生から集めてくるというのは、どうもまだやはり無理があるのじゃないかという感じがしますな。

梅棹　その説はぼくは反対です。まだ無理があるのじゃなくて、邪道なんだと思う。登山というようなことはまったく趣味的なもので、スポーツですよ。ナショナリズムの発揚とかそんなことは違うのだから、全国から選抜して編成するというようなことはいらぬことですよ。好きな仲間が、好きなことをやるというのがほんとうだと思う。さっきの例も、アメリカ隊はピック・アップ・チームみたいに見えるけれども、つてを求めて、あれはよいからというので友だちが推薦してやっているのです。コンチキ号なんかまさにそれで、同志的結合ですよ。そういうものであるべきで、マナスルなんかのやり方は、登山に選手制をもちこむもので、ぼくは間違っていると思う。

加藤　マナスルのときは、隊員個人の問題よりも、そのうしろに大学のせり合いがあったのじゃないか。今度のヒマル・チュリはそんなことはない。同志的な仲のよい連中が、山でよく知っているものが出ている。

高村　今度外国隊に会って、かれらの話を聞きましたら、登山道具屋もいるし、スキー学校の先生もいるし、学校の先生もいるということで一見あっちこっちからの人が集まっているような感じがしておりましたが、よく聞いてみると、けっきょくかれらも平常の社会生活の中での間接的直接的なつながりで山へ来ているようですね。その場合、違う点は、日本では学校山岳部というものが表面に浮んでおるわけで、むこうは社会人のそういう団体が表面に浮んでいる。しかし、やはり同志的結合というのですか、そういう社会の中で、日常生活をおなじくしているもの同士でいっしょに行っているように思うのです。けっきょく、われわれとおなじやり方じゃないでしょうか。

加藤　同志的結合というのがたいせつなんだよ。

カルチュアと仲間意識

桑原　そういう点からいうと、今度の京大隊は、ぼくにいわせれば、むしろマナスル的なんだ。おなじ京大でも、今度はじめて会った連中がたくさんいる。藤平にしてももちろんそうだ。

梅棹　僕はちょっと違うと思うな。

加藤　伝統があるとかいうけれども、ゼネレーションがうんと違うので……。

梅棹　知っているとか知っていないとかいうことと問題が違うと思う。これははじめから仲間として出発した一つの団体だ。

加藤　仲間というけれども、われわれは長年いるから仲間意識は強いけれども、そうでない人が今度は大部分じゃないのか。

梅棹　そんなことはないでしょう。みなＡＡＣＫですよ。

山口　僕も加藤さんのいわれるほどとは思わないのです。やはり加藤さんが仏のような人であることとか、そのほかある程度の性格もわかっておりますし、つき合いもありますし。

桑原　泰安はたいへん誇張していうている。お互に知らぬというけれど、個人と個人とはあるいはいっしょに酒を飲んだりしていないかもしれないが、今西錦司という話が出てきたら、解釈は違っても、ああ、あいつかとみな知っているわけだし、そういういろいろのカルチュアの重なりみたいなものがありますよ。

今西　それはやはりカルチュアがＡＡＣＫ的というか、京都的というか、一つのものがある。しかし、東京というところはなんでも均一化するところで、どの大学から集めようと、そんなにカルチュアの差はないかもわからぬとぼくは思う。それだから、わりあい東京だったらいっしょになるけれども、その中へ京都が一人はいったら、言葉からしてちがう。（笑声）

平井　こういうＡＡＣＫとしてのチームは、あたたかな命令系統がひじょうにはっきりしていて、意思がじつによく疎通するわけです。

梅棹　まださまざまな問題が論じつくされぬままで、残っているように思います。しかしもう、予定の時間はとっくに超過してしまいました。それぞれの職場に帰らなければなりません。あまりにも時間が短くて、問題提起だけに終ったような感じがしないでもありませんが、これはこれで、一つの経験とその批判の記録として、意味があろうかと思います。機会あるごとに、また討論をつづけていただくとして、きょうはこれで会を閉じたいと思います。長時間にわたり、ありがとうございました。

付・装備一覧表

A・個人装備

1、隊員用

	品名	数量	単重グラム	備考
	羽毛服（上・下）	一三	一、七〇〇	ナイロン・羽毛
	ウインド・ヤッケ	一六	四五〇	オールテリレンおよび
	ウインド・ズボン	一六	三〇〇	ナイロン・綿交織
	寝袋	一三	二、三〇〇	普通型
	〃	四	二、三〇〇	ダブル用封筒型
	オーバー・シューズ	一三	五〇〇	ビニロン、皮締具つき
	テント・シューズ	一三	八〇〇	ビニロン、内側カネカロン
	登山ぐつ	一三	一、一〇〇	ボアー、裏はナイロンシール
	〃	一三	二、二〇〇	高所用　ボックス皮、モルト
★				低所用　ブレン、ボアー
★	ビッケル	一三	三五〇	三合入り
	アイゼン	一六	七〇〇	五合入り
	〃	一三	一、〇〇〇	ビニロン
	手袋	一三	一五〇	キャンバス・バッグ
	〃	一三	一〇〇	ビニール
	〃	一三	一五〇	
	〃	一三	一五〇	
	〃	一三	一五〇	
	〃	一三	一、三〇〇	
	〃	一三	一、七〇〇	
	〃	一三	二、〇〇〇	
	〃	一三	二、二〇〇	
	〃	一三	二、四〇〇	
	〃	一三	二、六〇〇	
	〃	一三	二、八〇〇	
	〃	一三	三、〇〇〇	
	〃	一三	三、二〇〇	
	〃	一三	三、四〇〇	
	〃	一三	三、六〇〇	
	〃	一三	三、八〇〇	
	〃	一三	四、〇〇〇	
	〃	一三	四、二〇〇	
	〃	一三	四、四〇〇	
	〃	一三	四、六〇〇	
	〃	一三	四、八〇〇	
	〃	一三	五、〇〇〇	
	〃	一三	五、二〇〇	
	〃	一三	五、四〇〇	
	〃	一三	五、六〇〇	
	〃	一三	五、八〇〇	
	〃	一三	六、〇〇〇	
	〃	一三	六、二〇〇	
	〃	一三	六、四〇〇	
	〃	一三	六、六〇〇	
	〃	一三	六、八〇〇	
	〃	一三	七、〇〇〇	
	〃	一三	七、二〇〇	
	〃	一三	七、四〇〇	
	〃	一三	七、六〇〇	
	〃	一三	七、八〇〇	
	〃	一三	八、〇〇〇	
	〃	一三	八、二〇〇	
	〃	一三	八、四〇〇	
	〃	一三	八、六〇〇	
	〃	一三	八、八〇〇	
	〃	一三	九、〇〇〇	
	〃	一三	九、二〇〇	
	〃	一三	九、四〇〇	
	〃	一三	九、六〇〇	
	〃	一三	九、八〇〇	
	〃	一三	一〇、〇〇〇	
	〃	一三	一〇、二〇〇	
	〃	一三	一〇、四〇〇	
	〃	一三	一〇、六〇〇	
	〃	一三	一〇、八〇〇	
	〃	一三	一一、〇〇〇	
	〃	一三	一一、二〇〇	
	〃	一三	一一、四〇〇	
	〃	一三	一一、六〇〇	
	〃	一三	一一、八〇〇	
	〃	一三	一二、〇〇〇	
	〃	一三	一二、二〇〇	
	〃	一三	一二、四〇〇	
	〃	一三	一二、六〇〇	
	〃	一三	一二、八〇〇	
	〃	一三	一三、〇〇〇	
	〃	一三	一三、二〇〇	
	〃	一三	一三、四〇〇	
	〃	一三	一三、六〇〇	
	〃	一三	一三、八〇〇	
	〃	一三	一四、〇〇〇	
	〃	一三	一四、二〇〇	
	〃	一三	一四、四〇〇	
	〃	一三	一四、六〇〇	
	〃	一三	一四、八〇〇	
	〃	一三	一五、〇〇〇	
	〃	一三	一五、二〇〇	
	〃	一三	一五、四〇〇	
	〃	一三	一五、六〇〇	
	〃	一三	一五、八〇〇	
	〃	一三	一六、〇〇〇	
	〃	一三	一六、二〇〇	
	〃	一三	一六、四〇〇	
	〃	一三	一六、六〇〇	
	〃	一三	一六、八〇〇	
	〃	一三	一七、〇〇〇	
	〃	一三	一七、二〇〇	
	〃	一三	一七、四〇〇	
	〃	一三	一七、六〇〇	
	〃	一三	一七、八〇〇	
	〃	一三	一八、〇〇〇	
	〃	一三	一八、二〇〇	
	〃	一三	一八、四〇〇	
	〃	一三	一八、六〇〇	
	〃	一三	一八、八〇〇	
	〃	一三	一九、〇〇〇	
	〃	一三	一九、二〇〇	
	〃	一三	一九、四〇〇	
	〃	一三	一九、六〇〇	
	〃	一三	一九、八〇〇	
	〃	一三	二〇、〇〇〇	
	〃	一三	二〇、二〇〇	
	〃	一三	二〇、四〇〇	
	〃	一三	二〇、六〇〇	
	〃	一三	二〇、八〇〇	
	〃	一三	二一、〇〇〇	
	〃	一三	二一、二〇〇	
	〃	一三	二一、四〇〇	
	〃	一三	二一、六〇〇	
	〃	一三	二一、八〇〇	
	〃	一三	二二、〇〇〇	
	〃	一三	二二、二〇〇	
	〃	一三	二二、四〇〇	
	〃	一三	二二、六〇〇	
	〃	一三	二二、八〇〇	
	〃	一三	二三、〇〇〇	
	〃	一三	二三、二〇〇	
	〃	一三	二三、四〇〇	
	〃	一三	二三、六〇〇	
	〃	一三	二三、八〇〇	
	〃	一三	二四、〇〇〇	
	〃	一三	二四、二〇〇	
	〃	一三	二四、四〇〇	
	〃	一三	二四、六〇〇	
	〃	一三	二四、八〇〇	
	〃	一三	二五、〇〇〇	
	〃	一三	二五、二〇〇	
	〃	一三	二五、四〇〇	
	〃	一三	二五、六〇〇	
	〃	一三	二五、八〇〇	
	〃	一三	二六、〇〇〇	
	〃	一三	二六、二〇〇	
	〃	一三	二六、四〇〇	
	〃	一三	二六、六〇〇	
	〃	一三	二六、八〇〇	
	〃	一三	二七、〇〇〇	
	〃	一三	二七、二〇〇	
	〃	一三	二七、四〇〇	
	〃	一三	二七、六〇〇	
	〃	一三	二七、八〇〇	
	〃	一三	二八、〇〇〇	
	〃	一三	二八、二〇〇	
	〃	一三	二八、四〇〇	
	〃	一三	二八、六〇〇	
	〃	一三	二八、八〇〇	
	〃	一三	二九、〇〇〇	
	〃	一三	二九、二〇〇	
	〃	一三	二九、四〇〇	
	〃	一三	二九、六〇〇	
	〃	一三	二九、八〇〇	
	〃	一三	三〇、〇〇〇	
	〃	一三	三〇、二〇〇	
	〃	一三	三〇、四〇〇	
	〃	一三	三〇、六〇〇	
	〃	一三	三〇、八〇〇	
	〃	一三	三一、〇〇〇	
	〃	一三	三一、二〇〇	
	〃	一三	三一、四〇〇	
	〃	一三	三一、六〇〇	
	〃	一三	三一、八〇〇	
	〃	一三	三二、〇〇〇	
	〃	一三	三二、二〇〇	
	〃	一三	三二、四〇〇	
	〃	一三	三二、六〇〇	
	〃	一三	三二、八〇〇	
	〃	一三	三三、〇〇〇	
	〃	一三	三三、二〇〇	
	〃	一三	三三、四〇〇	
	〃	一三	三三、六〇〇	
	〃	一三	三三、八〇〇	
	〃	一三	三四、〇〇〇	
	〃	一三	三四、二〇〇	
	〃	一三	三四、四〇〇	
	〃	一三	三四、六〇〇	
	〃	一三	三四、八〇〇	
	〃	一三	三五、〇〇〇	
	〃	一三	三五、二〇〇	
	〃	一三	三五、四〇〇	
	〃	一三	三五、六〇〇	
	〃	一三	三五、八〇〇	
	〃	一三	三六、〇〇〇	
	〃	一三	三六、二〇〇	
	〃	一三	三六、四〇〇	
	〃	一三	三六、六〇〇	
	〃	一三	三六、八〇〇	
	〃	一三	三七、〇〇〇	
	〃	一三	三七、二〇〇	
	〃	一三	三七、四〇〇	
	〃	一三	三七、六〇〇	
	〃	一三	三七、八〇〇	
	〃	一三	三八、〇〇〇	
	〃	一三	三八、二〇〇	
	〃	一三	三八、四〇〇	
	〃	一三	三八、六〇〇	
	〃	一三	三八、八〇〇	
	〃	一三	三九、〇〇〇	
	〃	一三	三九、二〇〇	
	〃	一三	三九、四〇〇	
	〃	一三	三九、六〇〇	
	〃	一三	三九、八〇〇	
	〃	一三	四〇、〇〇〇	
	〃	一三	四〇、二〇〇	
	〃	一三	四〇、四〇〇	
	〃	一三	四〇、六〇〇	
	〃	一三	四〇、八〇〇	
	〃	一三	四一、〇〇〇	
	〃	一三	四一、二〇〇	
	〃	一三	四一、四〇〇	
	〃	一三	四一、六〇〇	
	〃	一三	四一、八〇〇	
	〃	一三	四二、〇〇〇	
	〃	一三	四二、二〇〇	
	〃	一三	四二、四〇〇	
	〃	一三	四二、六〇〇	
	〃	一三	四二、八〇〇	
	〃	一三	四三、〇〇〇	
	〃	一三	四三、二〇〇	
	〃	一三	四三、四〇〇	
	〃	一三	四三、六〇〇	
	〃	一三	四三、八〇〇	
	〃	一三	四四、〇〇〇	
	〃	一三	四四、二〇〇	
	〃	一三	四四、四〇〇	
	〃	一三	四四、六〇〇	
	〃	一三	四四、八〇〇	
	〃	一三	四五、〇〇〇	
	〃	一三	四五、二〇〇	
	〃	一三	四五、四〇〇	
	〃	一三	四五、六〇〇	
	〃	一三	四五、八〇〇	
	〃	一三	四六、〇〇〇	
	〃	一三	四六、二〇〇	
	〃	一三	四六、四〇〇	
	〃	一三	四六、六〇〇	
	〃	一三	四六、八〇〇	
	〃	一三	四七、〇〇〇	
	〃	一三	四七、二〇〇	
	〃	一三	四七、四〇〇	
	〃	一三	四七、六〇〇	
	〃	一三	四七、八〇〇	
	〃	一三	四八、〇〇〇	
	〃	一三	四八、二〇〇	
	〃	一三	四八、四〇〇	
	〃	一三	四八、六〇〇	
	〃	一三	四八、八〇〇	
	〃	一三	四九、〇〇〇	
	〃	一三	四九、二〇〇	
	〃	一三	四九、四〇〇	
	〃	一三	四九、六〇〇	
	〃	一三	四九、八〇〇	
	〃	一三	五〇、〇〇〇	
	〃	一三	五〇、二〇〇	
	〃	一三	五〇、四〇〇	
	〃	一三	五〇、六〇〇	
	〃	一三	五〇、八〇〇	
	〃	一三	五一、〇〇〇	
	〃	一三	五一、二〇〇	
	〃	一三	五一、四〇〇	
	〃	一三	五一、六〇〇	
	〃	一三	五一、八〇〇	
	〃	一三	五二、〇〇〇	
	〃	一三	五二、二〇〇	
	〃	一三	五二、四〇〇	
	〃	一三	五二、六〇〇	
	〃	一三	五二、八〇〇	
	〃	一三	五三、〇〇〇	
	〃	一三	五三、二〇〇	
	〃	一三	五三、四〇〇	
	〃	一三	五三、六〇〇	
	〃	一三	五三、八〇〇	
	〃	一三	五四、〇〇〇	
	〃	一三	五四、二〇〇	
	〃	一三	五四、四〇〇	
	〃	一三	五四、六〇〇	
	〃	一三	五四、八〇〇	
	〃	一三	五五、〇〇〇	
	〃	一三	五五、二〇〇	
	〃	一三	五五、四〇〇	
	〃	一三	五五、六〇〇	
	〃	一三	五五、八〇〇	
	〃	一三	五六、〇〇〇	
	〃	一三	五六、二〇〇	
	〃	一三	五六、四〇〇	
	〃	一三	五六、六〇〇	
	〃	一三	五六、八〇〇	
	〃	一三	五七、〇〇〇	
	〃	一三	五七、二〇〇	
	〃	一三	五七、四〇〇	
	〃	一三	五七、六〇〇	
	〃	一三	五七、八〇〇	
	〃	一三	五八、〇〇〇	
	〃	一三	五八、二〇〇	
	〃	一三	五八、四〇〇	
	〃	一三	五八、六〇〇	
	〃	一三	五八、八〇〇	
	〃	一三	五九、〇〇〇	
	〃	一三	五九、二〇〇	
	〃	一三	五九、四〇〇	
	〃	一三	五九、六〇〇	
	〃	一三	五九、八〇〇	
	〃	一三	六〇、〇〇〇	
	〃	一三	六〇、二〇〇	
	〃	一三	六〇、四〇〇	
	〃	一三	六〇、六〇〇	
	〃	一三	六〇、八〇〇	
	〃	一三	六一、〇〇〇	
	〃	一三	六一、二〇〇	
	〃	一三	六一、四〇〇	
	〃	一三	六一、六〇〇	
	〃	一三	六一、八〇〇	
	〃	一三	六二、〇〇〇	
	〃	一三	六二、二〇〇	
	〃	一三	六二、四〇〇	
	〃	一三	六二、六〇〇	
	〃	一三	六二、八〇〇	
	〃	一三	六三、〇〇〇	
	〃	一三	六三、二〇〇	
	〃	一三	六三、四〇〇	
	〃	一三	六三、六〇〇	
	〃	一三	六三、八〇〇	
	〃	一三	六四、〇〇〇	
	〃	一三	六四、二〇〇	
	〃	一三	六四、四〇〇	
	〃	一三	六四、六〇〇	
	〃	一三	六四、八〇〇	
	〃	一三	六五、〇〇〇	
	〃	一三	六五、二〇〇	
	〃	一三	六五、四〇〇	
	〃	一三	六五、六〇〇	
	〃	一三	六五、八〇〇	
	〃	一三	六六、〇〇〇	
	〃	一三	六六、二〇〇	
	〃	一三	六六、四〇〇	
	〃	一三	六六、六〇〇	
	〃	一三	六六、八〇〇	
	〃	一三	六七、〇〇〇	
	〃	一三	六七、二〇〇	
	〃	一三	六七、四〇〇	
	〃	一三	六七、六〇〇	
	〃	一三	六七、八〇〇	
	〃	一三	六八、〇〇〇	
	〃	一三	六八、二〇〇	
	〃	一三	六八、四〇〇	
	〃	一三	六八、六〇〇	
	〃	一三	六八、八〇〇	
	〃	一三	六九、〇〇〇	
	〃	一三	六九、二〇〇	
	〃	一三	六九、四〇〇	
	〃	一三	六九、六〇〇	
	〃	一三	六九、八〇〇	
	〃	一三	七〇、〇〇〇	
	〃	一三	七〇、二〇〇	
	〃	一三	七〇、四〇〇	
	〃	一三	七〇、六〇〇	
	〃	一三	七〇、八〇〇	
	〃	一三	七一、〇〇〇	
	〃	一三	七一、二〇〇	
	〃	一三	七一、四〇〇	
	〃	一三	七一、六〇〇	
	〃	一三	七一、八〇〇	
	〃	一三	七二、〇〇〇	
	〃	一三	七二、二〇〇	
	〃	一三	七二、四〇〇	
	〃	一三	七二、六〇〇	
	〃	一三	七二、八〇〇	
	〃	一三	七三、〇〇〇	
	〃	一三	七三、二〇〇	
	〃	一三	七三、四〇〇	
	〃	一三	七三、六〇〇	
	〃	一三	七三、八〇〇	
	〃	一三	七四、〇〇〇	
	〃	一三	七四、二〇〇	
	〃	一三	七四、四〇〇	
	〃	一三	七四、六〇〇	
	〃	一三	七四、八〇〇	
	〃	一三	七五、〇〇〇	
	〃	一三	七五、二〇〇	
	〃	一三	七五、四〇〇	
	〃	一三	七五、六〇〇	
	〃	一三	七五、八〇〇	
	〃	一三	七六、〇〇〇	
	〃	一三	七六、二〇〇	
	〃	一三	七六、四〇〇	
	〃	一三	七六、六〇〇	
	〃	一三	七六、八〇〇	
	〃	一三	七七、〇〇〇	
	〃	一三	七七、二〇〇	
	〃	一三	七七、四〇〇	
	〃	一三	七七、六〇〇	
	〃	一三	七七、八〇〇	
	〃	一三	七八、〇〇〇	
	〃	一三	七八、二〇〇	
	〃	一三	七八、四〇〇	
	〃	一三	七八、六〇〇	
	〃	一三	七八、八〇〇	
	〃	一三	七九、〇〇〇	
	〃	一三	七九、二〇〇	
	〃	一三	七九、四〇〇	
	〃	一三	七九、六〇〇	
	〃	一三	七九、八〇〇	
	〃	一三	八〇、〇〇〇	
	〃	一三	八〇、二〇〇	
	〃	一三	八〇、四〇〇	
	〃	一三	八〇、六〇〇	
	〃	一三	八〇、八〇〇	
	〃	一三	八一、〇〇〇	
	〃	一三	八一、二〇〇	
	〃	一三	八一、四〇〇	
	〃	一三	八一、六〇〇	
	〃	一三	八一、八〇〇	
	〃	一三	八二、〇〇〇	
	〃	一三	八二、二〇〇	
	〃	一三	八二、四〇〇	
	〃	一三	八二、六〇〇	
	〃	一三	八二、八〇〇	
	〃	一三	八三、〇〇〇	
	〃	一三	八三、二〇〇	
	〃	一三	八三、四〇〇	
	〃	一三	八三、六〇〇	
	〃	一三	八三、八〇〇	
	〃	一三	八四、〇〇〇	
	〃	一三	八四、二〇〇	
	〃	一三	八四、四〇〇	
	〃	一三	八四、六〇〇	
	〃	一三	八四、八〇〇	
	〃	一三	八五、〇〇〇	
	〃	一三	八五、二〇〇	
	〃	一三	八五、四〇〇	
	〃	一三	八五、六〇〇	
	〃	一三	八五、八〇〇	
	〃	一三	八六、〇〇〇	
	〃	一三	八六、二〇〇	
	〃	一三	八六、四〇〇	
	〃	一三	八六、六〇〇	
	〃	一三	八六、八〇〇	
	〃	一三	八七、〇〇〇	
	〃	一三	八七、二〇〇	
	〃	一三	八七、四〇〇	
	〃	一三	八七、六〇〇	
	〃	一三	八七、八〇〇	
	〃	一三	八八、〇〇〇	
	〃	一三	八八、二〇〇	
	〃	一三	八八、四〇〇	
	〃	一三	八八、六〇〇	
	〃	一三	八八、八〇〇	
	〃	一三	八九、〇〇〇	
	〃	一三	八九、二〇〇	
	〃	一三	八九、四〇〇	
	〃	一三	八九、六〇〇	
	〃	一三	八九、八〇〇	
	〃	一三	九〇、〇〇〇	
	〃	一三	九〇、二〇〇	
	〃	一三	九〇、四〇〇	
	〃	一三	九〇、六〇〇	
	〃	一三	九〇、八〇〇	
	〃	一三	九一、〇〇〇	
	〃	一三	九一、二〇〇	
	〃	一三	九一、四〇〇	
	〃	一三	九一、六〇〇	
	〃	一三	九一、八〇〇	
	〃	一三	九二、〇〇〇	
	〃	一三	九二、二〇〇	
	〃	一三	九二、四〇〇	
	〃	一三	九二、六〇〇	
	〃	一三	九二、八〇〇	
	〃	一三	九三、〇〇〇	
	〃	一三	九三、二〇〇	
	〃	一三	九三、四〇〇	
	〃	一三	九三、六〇〇	
	〃	一三	九三、八〇〇	
	〃	一三	九四、〇〇〇	
	〃	一三	九四、二〇〇	
	〃	一三	九四、四〇〇	
	〃	一三	九四、六〇〇	
	〃	一三	九四、八〇〇	
	〃	一三	九五、〇〇〇	
	〃	一三	九五、二〇〇	
	〃	一三	九五、四〇〇	
	〃	一三	九五、六〇〇	
	〃	一三	九五、八〇〇	
	〃	一三	九六、〇〇〇	
	〃	一三	九六、二〇〇	
	〃	一三	九六、四〇〇	
	〃	一三	九六、六〇〇	
	〃	一三	九六、八〇〇	
	〃	一三	九七、〇〇〇	
	〃	一三	九七、二〇〇	
	〃	一三	九七、四〇〇	
	〃	一三	九七、六〇〇	
	〃	一三	九七、八〇〇	
	〃	一三	九八、〇〇〇	
	〃	一三	九八、二〇〇	
	〃	一三	九八、四〇〇	
	〃	一三	九八、六〇〇	
	〃	一三	九八、八〇〇	
	〃	一三	九九、〇〇〇	
	〃	一三	九九、二〇〇	
	〃	一三	九九、四〇〇	
	〃	一三	九九、六〇〇	
	〃	一三	九九、八〇〇	
	〃	一三	一〇〇、〇〇〇	
	〃	一三	一〇〇、二〇〇	
	〃	一三	一〇〇、四〇〇	
	〃	一三	一〇〇、六〇〇	
	〃	一三	一〇〇、八〇〇	
	〃	一三	一〇一、〇〇〇	
	〃	一三	一〇一、二〇〇	
	〃	一三	一〇一、四〇〇	
	〃	一三	一〇一、六〇〇	
	〃	一三	一〇一、八〇〇	
	〃	一三	一〇二、〇〇〇	
	〃	一三	一〇二、二〇〇	
	〃	一三	一〇二、四〇〇	
	〃	一三	一〇二、六〇〇	
	〃	一三	一〇二、八〇〇	
	〃	一三	一〇三、〇〇〇	
	〃	一三	一〇三、二〇〇	
	〃	一三	一〇三、四〇〇	
	〃	一三	一〇三、六〇〇	
	〃	一三	一〇三、八〇〇	
	〃	一三	一〇四、〇〇〇	
	〃	一三	一〇四、二〇〇	
	〃	一三	一〇四、四〇〇	
	〃	一三	一〇四、六〇〇	
	〃	一三	一〇四、八〇〇	
	〃	一三	一〇五、〇〇〇	
	〃	一三	一〇五、二〇〇	
	〃	一三	一〇五、四〇〇	
	〃	一三	一〇五、六〇〇	
	〃	一三	一〇五、八〇〇	
	〃	一三	一〇六、〇〇〇	
	〃	一三	一〇六、二〇〇	
	〃	一三	一〇六、四〇〇	
	〃	一三	一〇六、六〇〇	
	〃	一三	一〇六、八〇〇	
	〃	一三	一〇七、〇〇〇	
	〃	一三	一〇七、二〇〇	
	〃	一三	一〇七、四〇〇	
	〃	一三	一〇七、六〇〇	
	〃	一三	一〇七、八〇〇	
	〃	一三	一〇八、〇〇〇	
	〃	一三	一〇八、二〇〇	
	〃	一三	一〇八、四〇〇	
	〃	一三	一〇八、六〇〇	
	〃	一三	一〇八、八〇〇	
	〃	一三	一〇九、〇〇〇	
	〃	一三	一〇九、二〇〇	
	〃	一三	一〇九、四〇〇	
	〃	一三	一〇九、六〇〇	
	〃	一三	一〇九、八〇〇	
	〃	一三	一一〇、〇〇〇	
	〃	一三	一一〇、二〇〇	
	〃	一三	一一〇、四〇〇	
	〃	一三	一一〇、六〇〇	
	〃	一三	一一〇、八〇〇	
	〃	一三	一一一、〇〇〇	
	〃	一三	一一一、二〇〇	
	〃	一三	一一一、四〇〇	
	〃	一三	一一一、六〇〇	
	〃	一三	一一一、八〇〇	
	〃	一三	一一二、〇〇〇	
	〃	一三	一一二、二〇〇	
	〃	一三	一一二、四〇〇	
	〃	一三	一一二、六〇〇	
	〃	一三	一一二、八〇〇	
	〃	一三	一一三、〇〇〇	
	〃	一三	一一三、二〇〇	
	〃	一三	一一三、四〇〇	
	〃	一三	一一三、六〇〇	
	〃	一三	一一三、八〇〇	
	〃	一三	一一四、〇〇〇	
	〃	一三	一一四、二〇〇	
	〃	一三	一一四、四〇〇	
	〃	一三	一一四、六〇〇	
	〃	一三	一一四、八〇〇	
	〃	一三	一一五、〇〇〇	
	〃	一三	一一五、二〇〇	
	〃	一三	一一五、四〇〇	
	〃	一三	一一五、六〇〇	
	〃	一三	一一五、八〇〇	
	〃	一三	一一六、〇〇〇	
	〃	一三	一一六、二〇〇	
	〃	一三	一一六、四〇〇	
	〃	一三	一一六、六〇〇	
	〃	一三	一一六、八〇〇	
	〃	一三	一一七、〇〇〇	
	〃	一三	一一七、二〇〇	
	〃	一三	一一七、四〇〇	
	〃	一三	一一七、六〇〇	
	〃	一三	一一七、八〇〇	
	〃	一三	一一八、〇〇〇	
	〃	一三	一一八、二〇〇	
	〃	一三	一一八、四〇〇	
	〃	一三	一一八、六〇〇	
	〃	一三	一一八、八〇〇	
	〃	一三	一一九、〇〇〇	
	〃	一三	一一九、二〇〇	
	〃	一三	一一九、四〇〇	
	〃	一三	一一九、六〇〇	
	〃	一三	一一九、八〇〇	
	〃	一三	一二〇、〇〇〇	
	〃	一三	一二〇、二〇〇	
	〃	一三	一二〇、四〇〇	
	〃	一三	一二〇、六〇〇	
	〃	一三	一二〇、八〇〇	
	〃	一三	一二一、〇〇〇	
	〃	一三	一二一、二〇〇	
	〃	一三	一二一、四〇〇	
	〃	一三	一二一、六〇〇	
	〃	一三	一二一、八〇〇	
	〃	一三	一二

C・炊事具および燃料

	品名	数量	単重グラム	備考
☆	ストーブ バーナー	八	一、四五〇	スペア中型
	〃 ボンベ	五	八〇〇	プリムス
	プロパン 〃	五	一、六三〇	プリムス#二〇〇五
	コンロ	八	三六、〇〇〇	一〇kg入り大型
	調整器	二	一、五〇〇	家庭用
	充塡器	三	六〇〇	
	メタクツカー	二	五五〇	
	ケロシン	二	一、〇〇〇	
	メタ	五	四、〇〇〇	一ガロンかん入り
	圧力ナベ（大）	五	二三五	
	〃（中）	五	一、二五〇	一、八l
	コッフェル	五	八一〇	一、〇八l
	ナベ（大）	二	一、〇〇〇	
	〃（中）	二	八〇〇	
	ヤカン（大）	一	八〇〇	
	〃（中）	二	六〇〇	
	ロウソク	二〇〇	五五	一五匁
	マッチ	二、〇〇〇		平型小箱
	布バケツ	四		
	ポリエチレン・バケツ	二		
	ポリエチレン・ボットル	五		二l
	ポリエチレン・ジョウゴ	五		
	庖丁	一		肉切用
	〃	二		野菜用
	ボール、皿	三五		プラスチック・ボールセット
	コップ	三〇		プラスチック・コーヒーカップ
	割り箸、塗り箸	四		

	品名	数量	単重グラム	備考
☆	スプーン、フォーク	各三〇		
	シャクシ	九		アルマイト、ステンレス
	玉子まぜ	二		
	フライ返し	二		ステンレス
	茶コシ	一〇		
	タワシ	一〇		
	かん切り	二		大 回転式
	〃	三〇		小
	拭布	一五		

D・登攀用具

	品名	数量	単重グラム	備考
	アイス・ピトン	五〇	一五〇	普通型
	〃	五〇	一八〇	パイプ型
	ロック・ピトン	一〇	一〇〇	
	ハンマー	三	四五〇	カシン製
	カラビナ	五〇	一三〇	O型
	〃	五〇	一三五	O型 安全装置付
	アイス・バイル	二	四五〇	
	ナイロン・ザイル	四	二、一〇〇	直径一〇㎜、三〇m
	〃	三	二、四〇〇	直径一〇㎜、四〇m
	テトロン・ザイル	二	二、一〇〇	直径一〇㎜、三〇m
	〃	一	二、四〇〇	直径一〇㎜、四〇m
	フィックス・ロープ	三〇〇m		ビニロン直径九㎜
	〃	四	七、三〇〇	ジュラルミン踏板つき
	なわバシゴ	四		ロープ九㎜（直径）×八m
	アブミ	一	三〇、〇〇〇	二段式
	ジュラルミンばしご	三	二、〇〇〇	二つ折り五・三m
	背負子	三	一、二〇〇	酸素ボンベ用
	〃	五	二、〇〇〇	
	キスリング・ザック			

E・調査用器具

	品名	数量	単重グラム	備考
	湿度計	二	二、〇〇〇	アスマン
	温度計	五	四〇	
	自記温度計	一	三、五〇〇	
	最高最低温度計	八	三〇〇	
	風力計	二	一、八〇〇	
	気圧高度計	二	一、五〇〇	
	顕微鏡	一	六、五〇〇	
	植物採集用器具	一三		
	昆虫 〃	一		
★	輪カンジキ	一〇	一、〇〇〇	
	スキー・ストック	一〇	一、〇〇〇	
	赤 旗	三〇〇		
	赤テープ	五		
	細竹	五〇		
	酸素ボンベ	三	三、〇五〇	二m
	酸素マスク	一〇	八〇〇	一七〇気圧、二l
	〃	三		登攀用
	無電器	三	八〇〇	睡眠用
	〃	二	一、六〇〇	PRC—六
	無電用電池	二	二、九〇〇	EP—一五〇—六
	〃	三〇	一〇〇	BL—一四五
	携帯ラジオ	一〇	一、三六〇	BA—二七〇U
	〃	二	一、〇〇〇	トランジスターオールウエーブ
		一	一、〇〇〇	オールウエーブ

F・雑品

	品名	数量	単重グラム	備考
	バネバカリ	二	一、一〇〇	
	大工道具	二	四、〇〇〇	
	番号札	一〇〇	一〇	クーリー用
	雪眼鏡	一五〇	三〇	クーリー用
	マジック・インク	三〇	五〇	
	材木チョーク	一〇	三〇	
	ビニール・テープ	一〇	三〇	
	隊旗	一〇	二〇	
	国旗	二	一五〇	
	ハサミ	二	一五〇	
	石けん	一〇	二〇	化粧石けん
	〃	八	八〇	洗たく石けん
		五	三〇〇	

日　誌

一九五八年五月二日～十二月四日

5・2　高村、岩坪―三井船舶の天城山丸にて神戸港出航。

5・3　山口、脇坂、中島―山下汽船の山下丸にて神戸港出航。

5・11　平井、芳賀―飯野海運の若島丸にて神戸港出航。

5・22　山口ら乗船の山下丸は予定の六月上旬より早くカラチ入港が確定したので、マドラス出港直後、京都・近藤宛、下記の電報を打つ。『フナニスクナク三〇ヒカラチツク」フジノツクヒシラセ』

5・23　折りかえし山下丸では、桑原隊長の下記電報を受取る。『フジヒラ三〇ヒヨルケイエルエムニテツク」カラチニテイマガワトコンタクトセヨ』。続いて『フジヒラ二八ヒカラチニカワツタ」クワ』。この旨および山下丸のカラチ入港予定を、天城山丸、若島丸に通知、互に状況交換を行う。

5・27　藤平―KLMにて羽田空港出発。

5・28　藤平―カラチ空港着。通関手続をすませ、江商バンガローの世話になる。

5・29　藤平―カラチ滞在。入国手続をすませ、大使館、カラチ日本人会などにあいさつ。今川―空路ラホールよりカラチへ。藤平と打合わせ。

5・30　藤平、今川―カラチ滞在。山下丸の三名を迎える。

5・31　山口、脇坂、中島―カラチ入港。通関手続完了。山口は大使館員高須氏宅に、脇坂、中島は江商バンガローにそれぞれ世話になる。

6・1　平井、芳賀―当時インド全土に港湾ストの指令が出ており、若島丸の二名は、桑原隊長より『セイロンヨリKLMニノリカエヨ……』なる電報を受ける。船がコロンボに寄港するかどうかは不明なので、次のように返電する『コロイマフメイ」コーチンニヨルココヨリエアニスルヨテイアトレン』再び隊長より『コロンボ五ヒハツKLMヨヤクシタ」クワ』なる電報を受ける。二人はおおいに気をもむが、本船はいずれの港につくかわからない。

6・2　藤平ら五名―カラチ滞在。大使館あいさつ。入国手続をすませ、三カ月の期間延長の許可をとる。午後、江商バンガローにて実行予算の再検討を行う。暑さがこたえる。

藤平ら五名―カラチ滞在。用件のすべての交渉に今川大活躍。

高村、岩坪―天城山丸はすでにカラチ沖着。しかし埠頭工事中のため、沖待ちの船多く、入港することができない。

藤平ら五名―カラチ滞在。藤平、今川は、高村、岩坪のカラチ上陸のために代理店、税関その他へ奔走。船は港へはいれないので、関係官庁の諒解を得て、小型ヨットで二人の上陸と荷下ろしを完了するのに夜までかかる。高村、岩坪は大使館前田氏宅に世話になる。

平井、芳賀―若島丸。午後、船がコロンボに寄港すること確定。この旨をコロンボ大使館に知らせる。夜、コロンボ沖停泊。(この前に、京都の桑原隊長よりコロ

ンボ大使館宛に隊員上陸の際の配慮方依頼がなされていた）

6・3　藤平ら七名―カラチ滞在。各界へのあいさつ。汽車の座席予約と荷物発送の交渉など。

平井、芳賀―若島丸、コロンボ沖。電報にてコロンボ日本大使館、飯野海運代理店に連絡をとり「四日下船せよ」との通達をうけ、一息つく。

6・4　藤平、山口、脇坂、中島、岩坪、今川―ラワルピンディに出発。

高村―後続隊との連絡のため、カラチ滞在。

午前中、脇坂、今川は荷物の（鉄道）発送のためシティー・ステーションへ。山口は前田一等書記官とともにまず外務省担当官のミアズール・ハサム氏訪問。入国のあいさつをし、頂上にかかげるべきパキスタン国旗の借用を申入れる。気象通報についての特別放送も依頼したが、これはラワルピンディで直接交渉してくれとのこと。ついで文部省のツァウディン氏訪問。われわれのリエゾン・オフィサーがアンワール・ワジー大尉であって、公式にみとめられていることを確認する。

午後、全員、成田大使の招待による午さん会に出席。

一九・〇〇、高村一人を残して、ほかはラワルピンディ向けチェナブ・エキスプレスに乗車。

平井、芳賀―コロンボ日本大使館の尽力により特別に上陸できる。大使館古田氏宅の世話になる。

6・5　藤平、山口、脇坂、中島、岩坪、今川―車中。車外で摂氏四十五度、車内で四十二度の暑さにみんな閉口する。

高村―カラチ滞在。

平井、芳賀―一四・四五、KLMにてコロンボ空港発、二〇・〇〇、カラチ空港着。大使館あいさつ。江商バンガローの世話になる。

6・6　藤平ら六名早朝、ラワルピンディ着。ワジー大尉の出迎えをうける。グランド・ホテル（三流クラス）に投宿。各班に分れ、カシミール省あいさつ。飛行機の交渉、放送局へ天気予報依頼、カラチへの電報、カラコラムの四マイル一インチ地図購入依頼（市販されていないが）などに走りまわる。飛行機は明七日一三・〇〇に出るとのこと。

平井、高村、芳賀―カラチ滞在。きのう到着の二人は入国手続をすませる。

6・7　桑原、加藤、潮田―KLMにて、羽田空港発。

藤平ら六名―ラワルピンディ滞在。午前中、藤平、脇坂、今川、ワジー大尉は、スポーツ・コントロール・センターおよびワジー大尉の直属上官へあいさつ。山口、中島、岩坪はATO（エア・トランスポート・オフィス）へ荷物の計量。

午後、スカルドへむけ出発予定のところ、天気悪くだめ。明朝八・〇〇と聞いてホテルへ帰る。夕方、ATOより電話あり、翌日も飛行機は出ないことを知る。夜は久方ぶりにみんなの気分も落着き歓談。

平井、高村、芳賀―カラチ滞在。平井ら二名は三カ月期間延長の許可をとる。

6・8　桑原以下三名―カラチ空港着。大使館前田、古川両氏、隊員平井らの出迎えをうけ、通関をすませる。成田大使にあいさつ。ホテル・メトロポールに入る。

平井ら三名―カラチ滞在。

藤平ら六名―ラワルピンディ滞在。飛行機待ち。（イタリア隊はここで二週間滞在したとのこと）

6・9　桑原ら六名―カラチ滞在。きのう到着の三名は入国手続をすませ、期間延長の許可をとったあと今後の打合わせをする。

ラホールにあるバンジャブ大学のベック

教授には、どうしても一度、会っておかなければならない。そこで桑原隊長と高村は飛行機でラホールに行き、ベック教授に会ったのち、ラワルピンディへ、加藤ら三名は直接汽車でラワルピンディにむかうことにする。さっそく座席の予約。午後、隊長は前田一等書記官に同行願って、外務省東亜局長、文部省体育次官などにあいさつまわり、天気予報放送依頼の件、地図下げ渡しの件、その他を折衝する。夜は大使公邸でレセプションがひらかれた。

藤平ら六名―ラワルピンディ滞在。六・〇〇、ATOより八・〇〇飛行機が出るとの電話を受ける。われわれは前日電話がなかったので、きょうもだめとタカをくくっていたのだ。さっそく、ATOへ行き、荷のトラック積みを確認、飛行場へ。ここでまた、パキスタン政府高官の家族が急にスカルドへ行くことになり、われわれの座席がなくなる。ケアニー大佐の尽力で、荷物だけはなんとか送り出すことができた。ケアニー氏はギルギットのP・Aの従弟で、元インド独立軍に所属していた関係で、ひじょうに親日的。暑い中を帰る。帰路、高村宛に電報をうってから、カシミール省に出頭する。最初は全員出頭しなくてもよいとのことだったので代表のみが行ったのだが、やはり全員出頭しておく方がよい。

6・10　午後、飛行場より電話あり、明早朝出発できることを知る。明日こそは可能性がありそうだ。

桑原、高村―カラチ滞在。

加藤、潮田、平井、芳賀―夕刻、チェナブ・エキスプレスでカラチ発、ラワルピンディへ。

桑原らは在カラチ日本商社へあいさつまわり、ピンディの先発隊より、早く来るようにとの電報受取る。カラチ京大会の人たちが歓送会をひらいて下さる。一九・〇〇、加藤ら四名は鉄路、ラワルピンディ向け出発。

藤平、山口、脇坂、中島、今川―空路、ラワルピンディよりスカルドへ。レスト・ハウスに泊まる。三・〇〇起床。五・一〇搭乗。快晴に、ナンガ・パルバットを中心としたパンジャブの山々の眺めをほしいままにする。六・三五、スカルド着。スカルドは標高二三〇〇、さすがに涼しい。ジープでレスト・ハウスへ。さっそくP・Aにあいさつ。ポーター、クーリーの詳細な雇用説明書を受取る。予想以上に費用がかかりそうなのに頭を悩ます。午後、砂嵐。高地ポーター志願者がさっそくあらわれる。

6・11　岩坪―後発隊との連絡のため、ラワルピンディ滞在。

桑原、高村―空路、カラチよりラホールへ。ファレッティス・ホテル泊。カラチ出発まえに、桑原は文部省考古学部長キュリエル氏訪問。これでカラチでの仕事はすべて完了。一八・三〇、カラチ発。二一・三〇、ラホール着。砂漠の中の新興都市カラチと違って、緑の多いラホールの街は、静かで古都の落着きがある。加藤ら四名―車中。熱風にくれた一日。

岩坪―ラワルピンディ滞在。後発隊のスカルド行飛行機を予約をする。

藤平ら五名―スカルド滞在。ワジー大尉スカルド到着。登攀計画再検討。夜はP・A邸でのわれわれのための盛大なパーティ。

6・12　桑原、高村―ラホール滞在。ベック教授らと一四・〇〇会うことを約して、それまでは市内見物。カラコラム・クラブの事務長H・A・カーン氏、ベック教授らと昼食をともにする。一九五五年以来のお礼をのべる。話題は一九五七年の日・パ合同学生探検隊のことにうつる。カラコラム地方の情報については、特別なニ

ュースもないようであった。ラワルピンディへ飛ぶ予定だったが、天候悪く明日に延期となる。

加藤ら四名―早朝、ラワルピンディ着。グランド・ホテルに泊まる。

6・14 岩坪―ラワルピンディ滞在。

到着の者はみんな暑さでゲッソリとやつれている。平井、岩坪、潮田はATOで体重と荷物の計量、切符購入。芳賀はワジー大尉の弟とともに、マリーにあるサーベイ・オブ・パキスタンへ地図購入に行く。午後は休養。

6・15 藤平ら六名―スカルド滞在。レスト・ハウスには本日カシミール省次官が来るので、われわれは横のグラウンドにテントを張る。藤平、山口、脇坂は実行予算と荷物縮小の打合わせ。今川、中島はトラックで飛行場においてある荷物を運ぶ。夜は、ワジー大尉とともに人夫雇用、スカルドでの軍食糧購入の打合わせ。

6・16 桑原、高村―早朝、空路、ラホールよりラワルピンディへ。

加藤ら五名―ラワルピンディ滞在。

桑原、岩坪は、直ちにあいさつまわり。

カシミール省支局、パキスタン陸軍体育協会、パキスタン空軍気象課に予報資料の提供を依頼し、快諾を得て、ラジオ・パキスタンに特別放送をたのむ。続いてスカルド方面航空輸送指揮官ナシーム氏訪問。加藤はひどい下痢に悩まされる。

6・17 藤平ら六名―スカルド滞在。ワジー大尉とともに軍隊食糧部より食糧購入。これはラワルピンディでワジー大尉を通して、依頼。許可をとっていたものである。

6・18 桑原ら七名―ラワルピンディ滞在。スカルド地方の天候悪く飛行機はとばない。それにひきかえラワルピンディは毎日快晴、カンカン照り。

藤平ら六名―スカルド滞在。後発隊到着までの用事は片付いたので、午後、スカルドの南方五マイルにあるサトパラ湖へ出かける。雪山を背景に、清く美しい湖だ。

6・19 高村、岩坪、芳賀―ラワルピンディ滞在。飛行機の座席なく三人残ることになる。

桑原、加藤、平井、潮田―空路、ラワルピンディよりスカルドへ。

藤平ら六名―スカルド滞在。藤平、今川は隊長らの出迎えに飛行場へ、脇坂、中島は酸素ボンベ、無電の再点検。山口は早朝よりひどい下痢に悩まされる。

6・20 桑原ら一〇名―スカルド滞在。カシミール省次官らとともにハイ・スクール見学。午後、われわれのために催してくれたポロ・ゲーム見物。豪快なスポーツである。

高村、岩坪、芳賀―ラワルピンディ滞在。飛行機待ち。

桑原ら一〇名―スカルド滞在。軍食糧庫およびバザールで現地食の追加購入をする。このところ、毎日のように午後天気がくずれ、砂嵐となる。イタリア隊に、途中のウルドカスで解雇された高地ポーターらが、隊長カシン氏の手紙を持って、われわれのキャンプにやってきて使ってくれという。後日選考することにして、ひきとらせる。

イシュナル・ポリティカル・エイジェント）ハビブ・ウル・レーマン・カーン氏招待のティー・パーティに出席。かれはチャンドラ・ボースの幕僚長をしており、日本にも二度来たことのある親日家。パーティにはカシミール省次官、ラワルピンディの同省の局長、ギルギットのP・A・ケアニー氏ら出席していた。加藤、山口、潮田らもやっと体をもちなおす。

6・21 高村、岩坪、芳賀―ラワルピンディ滞在。毎朝三・〇〇、タクシーで飛行場に向っては飛行中止となり、ホテルの仲間に笑われる。

高村、岩坪、芳賀―スカルド到着。全隊員一二名が内地出発以来はじめて集結した。スカルド出発は二十一日ときめ、荷物の再整理に忙殺される。最初は藤平以下の若い隊員は高度馴化を兼ね、スコロ・ラを越える予定だったが、ことしはひじょうに雪が多く、雪崩の危険もあるので、全員、シガール川に沿って行くことにきまる。脇坂は腹痛になやむ。

6・22 スカルド滞在。荷物の再整理完了。午後、APAと警察署長の立会いで高地ポーターの選定を行い、下記の九名を雇う。イスマイル、ハサン、フセン、モハメッド・アリ、フセイン、グラム・モハメッド、シュクール、ワカ(あだ名)、コック。二、三名を除いては、ネパールのシェルパほどに役に立ちそうなのはいない。しかし、われわれの最初の予測よりはよいのである。

隊長らは近くの石仏見学。

明日のインダス渡河には時間を要するので、中島の指揮により、荷の半分を本日中に対岸に渡し、これにはわれわれにつ

6・23 いて来る予定の警官に夜警させる。

晴。スカルドよりシガールへ。

九人の高地ポーターと一五二人のクーリーとともに出発。先発の中島、岩坪が出発したのは五・三〇だったが、インダス渡河の完了したのが一〇・三〇。これよりガラガラの石コロと砂の川原を歩くこと二時間。シガール川に入る峠を越したところで夕立にあう。とても寒く、さざきが思いやられる。ヤルボ・ツォという小さな湖でスカルドの農業技師より茶の接待をうける。

シガールのオアシスは大きい。部落に入り二キロほどの所にあるボロ・グラウンドでキャラバン最初の一夜をすごす。隊員のほとんどがこういう大部隊をひきいての行軍やキャンプ場設置がはじめてなので、だいぶんまごついた。

晴。シガールよりコシュマールへ。

きょうはキャラバン中のもっとも長い行程である。五・〇〇、起床。朝食ぬきで茶だけで六・三〇出発、適当の気温でオアシスの中の道はじつに気持がよい。ポプラ並木のむこうの白雪のコゼル・グンジュが美しい。スコロ・ラへの分れの手前で朝食。

三キロごとくらいに散らばっているオアシスの間の扇状地は、草一本はえぬガラガラの荒地。太陽の照りつけが強い。先発がさきをいそぎすぎたので、シルディで昼食をとったのは一四・三〇だった。このあたりアブルッジのころの写真とくらべてまったく変っていない。

一六・三〇、先発がコシュマールにつく。ここは水が悪い。キャンプ地は貧弱だが、木陰には芝生もあり眺めもよい。後発のついたのは一八・〇〇。どうしても先頭と後尾で一時間半くらいの差ができる。

中島ドクターにはソロソロ住民の患者がふえて来た。

晴。コシュマールよりデュッソーへ。

五・三〇、出発。タンダラで少憩。ここは水もよく、クワの実がうまい。マリチョでの朝食場の選択に、若い隊員が加藤副隊長にしかられる。

道はマンゴを通らずにずっと川原沿いに行く。ブラルドとバシャ両川の出合の州はとてつもなく大きい。ブラルド川に入り、その小分流を、みんな、隊長、副隊長の馬でわたる。水温五・五度でとても冷たく、そのままジャブジャブと渡るわけにはゆかないのだ。クーリーは危険を避けて高巻きの道を通る。

チグィスタンの対岸でザークによる渡河。クーリーぜんぶが渡河を完了するまでに四時間ばかりかかる。デュッソーのテント場はじつに感じがよいが、水が悪い。この裏山の岩峰にいた聖人への供養とかでボクシス二〇ルピー。

食糧やたばこの配給、テント地整備などに隊員もやっと馴れてくる。

6・24 晴。デュッソーよりチャボへ。

ここからさきブラルド川は両岸せまる。水量多く、川岸沿いには行けぬので、何度も高巻きを強いられる。これはアブルッジの通ったのとおなじ道である。

きょうはまったく暑い一日だった。チャボにはよい水の泉がある。野立ての抹茶とヨウカンにみんなの顔がやわらぐ。ワジー大尉も生れてはじめてのティー・セレモニーにかしこまって正座する。

6・25 晴時々曇。チャボよりチョンゴへ。キャラバン中いちばん道の悪い行程。

落石のある悪場を朝早いうちに通過せねばならぬので五・二〇、出発、川原沿いに急ぐ。悪場通過にはクーリーの一人が落石で川に落されたが、ちょっとしたケガでことなきを得た。八・三〇、全員この地を通過したが、その後も相変らずどこからでも石の落ちて来そうないやな道がつづく。途中、小さな石灰洞あり。最初の高巻きにかかる草場で一〇・〇〇、朝食。二度目の高巻きは予測してなかっただけにみんなアゴを出す。チョンゴ着一五・〇〇。隊長の疲労に中島看護。隊長ほか三名を除いて他の者は近くの温泉へ行く。

チョンゴよりアスコーレへ。

6・26 最も楽な行程。朝早いうちにアスコーレにつく。昔からどの隊にもなじみ深いキャンプ地だが、部落のド真中でさわがしい。

はじめての本格的な賃金支払い。クーリーたちの本質的な無統制さのために、全隊員総出で整理にあたったが、それでも二時間ばかり要した。

アスコーレよりさきでの日程に、われわれのたてていた予定とクーリーたちの慣習に大きな開きがあり、会計の山口と食糧の平井はテントの中でソロバンと計算尺片手に頭を悩ます。他の隊員は荷物の再整理と無統制なクーリーをテント地から追いはらうのに精根をすりへらす。

アスコーレまでとアスコーレからさきとではクーリーの性格、とくにそのズルサに格段の差があり、さきざきの多難を痛感する。

6・27 アスコーレ滞在。

午前中は、山口、平井は食糧の計算。岩坪は食糧の買付け。他の隊員は高村を中心に荷物の再整理。

午後、二〇〇人のクーリーの決定と荷物の分配を行う。自分の名も忘れているクーリーたちもいるのだからたいへんだ。夜の十時ごろまでかかってやっと一〇五人だけのクーリーが決定。今川隊員の奮闘は目ざましかった。

楽しみにしていた休養の一日だったが、じっさいは、これまでで最もアルバイトの多い一日だった。(スカルドよりわれわれとずっと前後して行動していたアメリカ隊の後発二名は早朝出発した)

6・28 朝早く小雨、のち晴。アスコーレよりコロフォンへ。

ここからさきはクーリーたちの食糧も支給せねばならない。クーリー総勢二〇〇人。六・二〇、出発。部落を出はずれた所でさっそくかれらの団体交渉がはじまる。「きょうはバクリード(ヒツジの正月)祭だからヒツジの肉をよこせ」というのだ。あとで金で支払うことにして、とにかく歩かせる。ビアフォ氷河のデルタのそばで朝食。ここより氷河舌端まで一時間。舌端のスケールの大きいのに感心する。

る。これを横切るだけで二時間以上かかるのだ。横切ったところが、アスコーレよりの最初の宿泊地コロフォン。到着は一三・〇〇過ぎ。

行程の短すぎるのはまったく不満なのだが、かれらの昔からの習慣とあれば仕方ない。午後、猛烈な砂嵐に見舞われる。水も悪い。

クーリーへの食糧配給にさっそく文句が出る。これは今後、毎日の行事となり、食糧係とそれの通訳の今川隊員の苦労はたいへんなものだった。

6・29 快晴。午後砂嵐。コロフォンよりバルデュマルへ。

へった食糧の分だけクーリー六名解雇。このためにクーリーたちの荷物の争奪戦が毎日の朝の出発のときおこる。装備係はそのたびにその整理に大ワラワ。出発後、一五分ほどで悪場のヘツリ。右岸から合するデュモルド川の水量が予想外に少ないので全員渡渉。これで上流つり橋への迂回をまぬがれ一日とくをする。

バルデュマルのさき、シンカン川を正面に見るところでテント。一二・四五。毎日毎日があまりにも短い行程なので、まるでサギにかかっているようだ。水は悪い。というより本流の泥だらけの水をそのまま使う。

6・30 晴。バルデュマルよりバイジュへ。

六・二〇、出発。クーリー九名解雇。荷物の分配に大混乱をきたす。川岸ギリギリの道を使う。途中右岸よりよい水が出ている。

一二・三〇、バイジュ着。ガラガラの荒地の中のオアシス。バラとヤナギの緑叢林が目の保養となる。クーリーへのアタ分配でまたまたトラブルだ。メートが頭のよいクーリーに量目をごまかされたのだ。

7・1 黒いバルトロ氷河の舌端も、ビアフォによりリリゴへ。

劣らず大きい。その奥には物すごいエギーユがそそり立っている。

晴のち曇。バイジュよりリリゴへ。

ウルドカスにはマキがないというので、ここからクーリーに運ばせるため、きょうは解雇者なし。いよいよ待望の舌端にとっつく。舌端の上まで高差一〇〇メートル強。それからは氷河のモレーンの上を行く。ちょうど荒涼のガラガラのところを登り降りするのとまったくおなじ。けっこう疲れる。途中氷河上に蟻地獄のような池がポツリポツリある。ルートはほとんどおなじだ。リリゴの手前より道は左岸のアブレーション・バレーに沿っている。

一四・〇〇前、リリゴ・テント地着。バルトロ氷河がちょうど真東へ方向を変える左岸の尾根の出っぱりの手前である。水は最悪。昼食時、日本から持って来たただ一つのキャラバン補給食ジャムに隊員の文句が出る。

スカルドからわれわれにズッとついて来た、ポリスとクーリーの間にトラブルあり。アスコーレ以遠はポリスの威光はないようだ。

7・2 曇ときどき晴間。リリゴからウルドカスへ。

六・〇〇、出発。クーリー二名解雇。左岸のアブレーション・バレーを行く。左岸より入るリリゴ氷河を渡ったさきの湖のはずれで朝食。相変らずのモレーン歩きに退屈する。一二・三〇、ウルドカス着。最後の緑地。他隊の残していったゴミさえ整理すれば、じつに気持のよいところだ。

ここでまた大幅にクーリーの解雇を行うのだが、賃金支払いでもめる。かれらはイタリア隊、アメリカ隊は四〇ルピー払ったというが、われわれより節約しているアメリカ隊がそんなに支払うはずもなく、けっきょく一人当り三四ルピー八ア

れで当然なのだろうけれど……。

7・4

快晴。ウルドカスよりビアンジェ・バロへ。

六・一五、出発。クーリー一七七人。リゴ以来、ボリスはまったくその威光を失い、かえってトラブルのもとにもなるのでここからかえす。アルプからアブレーション・バレーをわたってモレーンの上に立つと、真正面にガッシャーブルムIVとブロード・ピークが見える。すぐそのようだが、ここからは三日行程だ。ちょうど両側よりムスターグ氷河とマンデュ氷河の入って来るところで朝食。ガッシャーブルムが顔をのぞかせる。赤味を帯びた、その岩壁は物すごい。芳賀は朝より熱を出し不調。

氷河を横断気味に進む。グサグサのモレーンはまったく不快だが、まわりの景観がそれをつぐなう。モレーンの色の変るところで小憩。きょうの行程はたいしたことがないのか、クーリーはやたらに休憩をとる。習慣通りコンコルディアまで三日がけで歩こうとすれば、この程度の歩度でよいのだろう。ビアンジェ・バロへ。

7・5

七・二〇、出発。クーリー一七五人。大きなセラックがあらわれ、やっとバルトロも氷河らしくなる。きょうからモレーンは石コロの舗装道路のようになり歩きやすい。ビアンジェ氷河出合の中央あたりよりムスターグ・タワーの奇怪な、すごい岩峰があらわれだす。そのさきの最も眺めのよいところがゴレ・バロだ。先発は昼前につく。

バルトロ氷河右岸に野生のネギを発見、平井とシュクールが取って来る。思いもよらぬ新鮮な野菜にみんな歓声をあげる。

相変らず、きょうもキャンバス・シートのことでポーターとクーリーがもめている。弱肉強食、一〇人に一枚の割で与えておいても、けっきょく弱いクーリーにはあたらないのだ。

今夜、はじめてパキスタン放送の日本隊向け天気予報をキャッチ。一万六〇〇〇フィートで曇、ときどき雨とのこと。

7・6

快晴のち薄曇。ゴレ・バロよりコンコルディアへ。

七・四〇、出発。気温摂氏二度。朝の出発が遅くなる。ここまで来ると寒さでクーリーは朝早く出発をしたがらないのだ。約一カ月前のアメリカ隊は、このあ

たりで新雪と寒さで悩まされ、朝の出発は九時ごろになったようだ。きのうのキャプテンの訓示がきいたのか、クーリーの歩度は速い。一一・〇〇ごろ、アメリカ隊後発のクーリーの帰って来るのに出会う。ヒドン・ピーク登頂に成功したのを知る。

バルトロ・カンリがその真白の秀麗な姿を見せるころから、雪の上を歩く機会が多くなり、ラッセルとヒドン・クレバスに苦労する。K2が頭をのぞかせるころから、ブロード・ピークに薄雲がかかりはじめる。

一四・一五、コンコルディア着。一九五五年の今西隊は、ここまでやっとたどりついて、ひきかえしたのだが、われわれはまだベース・キャンプにもついていないのだ。感無量。先人の礎石の有難さをシミジミ感ずる。

7・7

晴。コンコルディアよりビニュー氷河出合へ。

朝の出発時、雪眼鏡の配給で大混乱。ちょっと方法をあやまるとこうなるのだ。これからさきはわれわれにとって未知なので、偵察も兼ね、藤平、脇坂、芳賀、中島に高地ポーターのアスコーレ、シュクールが先発する。出発後一時間ほどのところで、いままでのモレーンを左側にうつるため、氷河上の川を渡渉する。待望のチョゴリザは上部に雲がかかり、頂上はハッキリ見えない。一三・〇〇、モレーンの上にキャンプ。

ここまで来ると、数本あるモレーン間に断が困難となる。われわれはバルトロ本流につながるモレーンを伝ったため、ベース・キャンプ地へ行くために再び右側に横断せねばならない。そのルート偵察に脇坂、平井、シュクールの三人が昼食後出かける。

7・8

コックがまたたく間にプロパン・ボンベ一本をからにしてしまったので、燃料のための緊急会議をひらく。

快晴。キャンプ地よりベース・キャンプへ。

はじめてチョゴリザが全貌をあらわす。懸案のアイス・フォールは相当荒れているようだ。九・〇〇過ぎ、ヒドン・ピークが顔を出す。

バルトロ氷河が左手にゆるく曲る手前で先発隊が見つけた横断ルートをたどり、ベース・キャンプ地となる隣のモレーンへ向う。腐った雪のラッセルと、ヒドン・クレバスと、氷河上の川に悩まされ、クーリーがさわぎ出す。

一三・〇〇、難関を突破してベース・キャンプ着。バルトロ・カンリの岩壁より出ているモレーンの上である。

7・9

休憩の間もなく、一六六人のクーリーの賃金の交渉と支払いをすませ、テントを設置。クーリーたちがひきあげてホッとする。ベース・キャンプ以上で役に立ちそうにないポーターの中のワカを解雇し、あらたにクーリーの中よりマハン、小シュクール、グラムの三名をポーターに加える。

快晴。ベース・キャンプ滞在。

午前中、全員休養。午後は各係の荷物整理と、テント整備。

一七・〇〇ごろ、ヒドン・ピークに成功したアメリカ隊のショーニング氏ら来訪。

7・10

快晴。次の三隊に分れてC1へのルート偵察。

第一隊　脇坂、山口、平井
第二隊　中島、岩坪、今川
第三隊　藤平、高村、芳賀

加藤、潮田はあとで第三隊につく。

インゼルへの直登の偵察に行った第三隊が、その左手のアイス・フォール上にルートを見つけ、C1建設予定地を確認し

ュール変更。明日はB・C隊員もう一日休養となる。

7・13　快晴。高村、岩坪—C1以遠の偵察。ボーター八名—C1へ荷上げ往復。
他は休養。
高村らはアイス・フォールを突破。左へ寄りすぎたが、コンダス・サドル近くまでの偵察に成功。高度影響はまだ出ていないようだ。無電連絡は快調。
加藤、藤平は計画再検討の計算。午後、その詳細の通達あり。キャンプ三つ建設として一九、二〇日の二回攻撃の予定。明日より、ほとんど上に登るので夜はなかなかご馳走。

7・14　快晴、のち雲あらわれる。桑原、藤平、山口、脇坂、中島、平井、芳賀—B・CよりC1へ（泊）。

7・15　潮田、ワジ—大尉—B・CよりC1往復。
高村、岩坪—C1滞在（午後岩坪のみB・C へ降る）。
加藤、今川—B・C滞在。
曇のち小雨のち湿雪。桑原—C1より岩坪—B・CよりC1へ。
山口、中島—隊長についてB・Cに降り、B・Cの岩坪とともに再びC1へ。

7・16　加藤、潮田、今川、ボーター六名—B・CよりC1へ。

7・17　藤平、脇坂、平井、芳賀—C2デポまで荷上げのあと、C2へのルート偵察。六〇〇〇メートル近くまで。
高村—C1滞在。
山口らのC1帰着遅く（二〇・二〇）、C1ではちょっと心配する。きょうはじめて隊員の一部に高度影響あらわれたが、大したことなし。これにてC1への荷上げ、建設完了。
雨まじりの湿雪。全員休養。

7・18　小雪、ガス、晴間あり。今川を残して、C1の全員は、C2デポまで荷上げ。ガスの中の行進は蒸し風呂のように暑かった。
快晴、午後雲あり。高村、岩坪、芳賀—C1よりC2へ（泊）。
藤平、山口、脇坂、中島、平井—C1よりC2往復。
加藤、潮田、今川—C1滞在。
C2デポより上は悪場もなく、クレバスやヒドン・クレバスを避けて迂路をたどる。相変らず空身の降りに雪がもぐり、C1帰着組は相当疲れる。
C2泊まりの三人は頭痛を訴える。六〇〇〇メートル近くなると、いよいよ高度

影響が出て来るようだ。

7・19　雪。ごくマレに晴間あり。全員各キャンプで滞在。
昨夜来の雪で、コンコルディア付近まで真白となる。昨夜の天気予報では晴天とのことだったが、例によってまったくあたらない。スカルドまでしか測候の拠点がないのだから、あたらないのが当然なのだ。

7・20　晴。高村、岩坪、芳賀—C2よりC3へのルート偵察。ヌノビキの登りにかかるところまで。
藤平、山口、脇坂、中島、平井、イスマイル、ハサン—C1よりC2へ（泊）。藤平、平井、脇坂、ボーター二名はC2よりもう一度C2デポまで荷上げ往復。
加藤、潮田、今川—C1滞在。
これでC2建設完了。頂上攻撃への第一段階の態勢ととのう。この夜の各テント人員配置は次のごとし。
B・C—桑原、ワジ—大尉、両シェクール、チョビ、コック、コックのベアラー。
C1—加藤、潮田、今川、アスコーレ、バクリー、フセン、グラム、マハン。
C2—藤平、山口、脇坂、中島、平井、高村、岩坪、芳賀、イスマイル、ハサン。
山口胃痛に悩み、中島食欲なし。

7・21　快晴。藤平、脇坂、平井—ヌノビキ上までルート偵察。長距離と高度差八〇〇メートル余の登降に一三時間余を費し、疲労はげしい。帰路、脇坂調子悪し。
高村、岩坪、芳賀—C3デポ（ヌノビキの下、のちにC3となったので、今後はこれをC3と呼ぶ）まで荷上げ往復。
山口、中島、イスマイル、ハサン—C2デポの荷をC2まで荷上げ往復。
潮田、バクリー、フセン—C1よりC2へ（泊）。なお山口とボーター三名はもう一度C2デポの荷上げ。
アスコーレ、マハン—C1よりC2へ荷上げ往復。
加藤、今川—C1滞在。
この日夕方、C1加藤とC2藤平の無電交信後、頂上攻撃の計画発表あり。
1・ルートはヘルマン・ブールのをとる。
2・C2より直ちにヌノビキの上にC4を設営し、そこよりラッシュ攻撃を行う。
3・攻撃隊員は「藤平、平井」。
4・C4でのサポート隊は、脇坂、高村、芳賀、イスマイル、ハサン。
5・山口、中島、岩坪、フセンは、明日のサポート隊のC4建設の支援に全力を尽す。

7・22　明日よりの行動に、C2でのみんなの顔は緊張でひきしまる。この高度での長距離の八〇〇メートル余の高度差の行動はなみたいていのものではないのだ。
結果論だが、アメリカ隊の成功を知り、われわれの登高時期の遅いのに、相当なアセリが有ったのはいなめない。ここでジックリとアブルッジ・ルートも考えに入れておけば、登頂はもっとスムーズに行われていたであろう。
曇ときどき晴。脇坂、高村、芳賀、イスマイル、ハサン—C2よりC4へ。ヘルマン・ブールのテント発見、かたわらの台地にテント建設し、ここに泊まる。
山口、中島、岩坪、フセン—C2よりC4へ荷上げ往復。
二隊がC4建設予定地到着ごろより風が出、雪がちらつく。この高度と、連日の行動に全員疲労の色濃く、目つきがするどい。山口隊はC4に荷を置くと、早々にC2へ逃げ出すように降る。C2着、一九・四〇。
藤平、平井、潮田、ボーター二名—C3まで荷上げ往復。
加藤、今川—C1よりC2へ（泊）。
ともに早くC2に着いた加藤、藤平によ

りもう一度作戦を検討。さらにC5をドームとチョゴリザのコル近くにのばし、そこより攻撃隊を出すこととなる。ヘルマン・ブールのルートを取ることに変りはない。

二〇・〇〇、無電交信でC4の高村の胃痛と足のケイレンを知る。C2の中島ドクターよりさっそく指示。C4のポーター二名はまったく元気なし。

7・23 晴れたり曇ったり、ときどき小雪。脇坂、高村、芳賀—C4よりC3の荷を荷上げ往復。C4のポーターはまったくだめ。藤平、平井—C2よりC4へ（泊）。グラムはC3まで同行、C2にもどる。アスコーレ、マハン—C1・C2間荷上げ往復。

加藤、山口、中島、岩坪、潮田、今川、フセン、バクリー—C2滞在。

C4、C2ともにスペア・ストーブの不調にまったく悩まされる。昨夜C4泊まりの五人は疲労の色が濃い。C4より本格的な高度影響があらわれて来たようである。

7・24 C2では晴れたり曇ったり。C4では曇りのちガスと小雪。早朝よりC4の高村気分悪く、意識を失う。不調なスペア・ストーブよりの生ガスによる中毒のようだ。

脇坂、芳賀—C5へのルート偵察、一部荷上げ。各二〇キロ。

7・25 藤平、平井—C4で休養、高村を介抱。山口、中島、岩坪、フセン—C2よりC4往復。高村をC3までおろす。中島はC3に泊まる。

加藤—C2よりC3へ。テント設営、ここに泊まる。

潮田、今川、ハサン、グラム—C2よりC3へ荷上げ往復。

晴れたり曇ったり。藤平、脇坂、平井、芳賀—C5への荷上げとルート偵察。

中島—C4でへばった二名のポーターをC3までおろす。

加藤—C3滞在。

山口、岩坪、潮田、フセン、グラム—写真機材の荷上げにC3近くまで往復。途中、山口は上で不調となった高村と、ポーター二名をつれてC2にもどる。

高村、イスマイル、ハサン—C3よりC2へ（泊）。

7・26 曇のち湿雪。第一回攻撃失敗。

藤平、平井—四・三〇、酸素マスクをつけて一挙アタックに出発したが、藤平は酸素マスクに馴れず不調、また天候も悪化したのでドーム上部の急なトラバースにかかる手前でひきかえす。七・三〇、C4帰着。ここでC3の加藤と無電で激論の末、再挙を期して、風雪の中を脇坂、芳賀とともにC3に降る（泊）。

芳賀—C4よりC3へ（泊）、痔に苦しめられる。

脇坂—C4よりC3を経てC2へ（泊）。連日の行動と、高度影響により疲労はなはだしく、一時休養のためB・Cに降ることとなる。

中島—C3よりC2へ（泊）。脇坂のつきそいのため。

山口、岩坪、潮田—C2よりC3へ（泊）。新雪にシュプール消え、ラッセルに悩まされる。

加藤—C3滞在。

高村、今川—C2滞在。

グラム、フセン—C2、C3間荷上げ往復。

イスマイル、ハサン—C2よりC1へ。

かくして第一回攻撃は文句なしの失敗に終り、再挙の作戦がC3にて、たてられる。再びルートはヘルマン・ブールのをとる。攻撃隊員も藤平、平井。サポートは山口、中島、岩坪、芳賀があたり、ドームのできるだけチョゴリザとのコル寄りにC5を建設し、そこより攻撃をかけ

ることとなる。このための行動開始は28日とする。

この夜の人員テント配置は、

B・C—桑原、ワジー大尉。

C1—ポーターのみ。

C2—脇坂、中島、高村、今川、グラム、フセン。

C3—加藤、藤平、山口、平井、岩坪、芳賀、潮田。

7・27 晴のち雪。加藤、山口、岩坪、潮田—C4のヘルマン・ブールのテントへ遺品回収と撮影に行く。ラッセルは深い。

中島—明日からのサポートのためC2よりC3へ（泊）。

藤平、平井、芳賀—C3にて休養。

脇坂、高村、今川—C2にて休養。

本日より無電機故障のため、以後各キャンプ間の交信途絶。

7・28 晴、高曇、ガス。山口、中島、岩坪、芳賀—C3よりC4へ（泊）。昨日のシュプールが残っていて比較的らく。

加藤、藤平、平井、潮田—C3にて休養。

脇坂、高村、今川—C2にて休養。

7・29 午前中晴、午後雪。夕立再び晴。山口、中島、岩坪、芳賀—C4よりC5往復。

攻撃隊のためのC5建設に向ったが、スネまでのラッセルと連日行動の疲労、途中天候悪化のため、予定のコル近くまで達することができず、第一次のデポ近くの露岩にC5を建設し、C4へ降る。藤平、平井—C3よりC4を経てC5へ（泊）。サポート隊のトレースを伝って、快調なスピードでC5へ。不本意ながら上記場所にテント設営。泊まる。

7・30 脇坂、今川—C2にて休養。泊まる。

加藤、潮田—C3にて休養。

高村—C2よりB・Cへ（泊）。久方ぶりに桑原隊長とあい、高所キャンプの模様を報告。

晴、ときどきガス、風相当あり。藤平、平井—C3滞在。早朝四・〇〇ごろ、天候不良と判断し、滞在ときめる。

山口、中島、岩坪—C4よりC5往復。六・〇〇、外を見るとよい天気だ。攻撃隊は出発しているものと考えて、一二・〇〇、C4出発。C5についたら攻撃隊は早朝天候不良と判断して滞在していたのにガッカリ。少憩後、C4に降る。

芳賀—C4にて休養。

加藤、潮田—C3滞在。

脇坂—C2休養。

今川—C2・C3間往復。

高村—B・CよりC2に登る。

快晴無風、午後すこし雲出る。

7・31 第二回攻撃失敗。

藤平、平井—三・〇〇、頂上攻撃に出発。ドームよりコルへの降りが予想外に悪く、物すごいナイフ・リッジの連続に精根を費し、コル着一〇・〇〇。頂上に続く稜線を伝ったが、一五・〇〇になるも頂上—コル間の三分の一ぐらいまでしか達せず、引返す。帰りは、ドームへの登りがあまりにも悪いため、コルより南側の斜面を降り、ドーム南面にある雪原を伝って直接C3に帰る。二一・一〇着。

山口、中島—C4よりC5へ（泊）。午後攻撃隊のサポートのためC5に行ったが、夜になっても帰って来ない。月明を利して、夜遅くまでドームのコルの見えるあたりまで行って捜したがわからず、C5に帰る。

岩坪、芳賀—C4にて休養。

加藤、潮田—C3滞在。夜、攻撃隊の二名帰着。再挙をねる。

高村、今川—C2よりC3往復。

脇坂—C2よりB・Cへ。以後B・Cにて休養。

8・1 快晴無風。山口、中島—C5より上部を捜索後C4を経てC3へ（泊）。早朝とひるごろの二回にわたり、攻撃隊員の捜索を行ったが果さず、C5に帰ったとき、

八月五日に頂上攻撃を行うことに決定。
頂上攻撃隊―藤平、平井。
サポート隊―山口、中島、高村、ポーター四名。
荷物は攻撃隊を除き各人一五キロ。攻撃隊は個人装備のみ、七キロ程度。加藤、潮田、今川はC3に待機し、できればコンダス・ピークをねらう。
右のようなものであったが、じっさいには、C3以上には攻撃のためにはキャンプ一つとなり八月四日に攻撃が行われた。この夜の各キャンプ人員配置は、B・C―桑原、脇坂、ワジー大尉、ポーターたち。
C2―岩坪、芳賀、バクリー、グラム。
C3―加藤、藤平、山口、中島、平井、高村、今川、潮田、ポーター四名。
快晴無風。コンダス・ピーク初登頂成功。
加藤、潮田、今川―C3よりラッセルに悩まされながらも広い雪原を乗りきって、頂上直下が悪かったが、コンダス・ピーク初登頂に成功する。
藤平、平井―C3よりC4aへ（泊）。
山口、中島、高村―C3よりC4a建設後、コルまでラッセル往復C4bへ（泊）。
ポーター、イスマイルほか三名―C3よりC4a往復。
岩坪、芳賀―C2よりB・Cへ降る。以後B・Cにて休養。
南方に立ちこめる暗雲などより、前述の予定を変更、C4aより明四日攻撃を行うこととなり、サポート隊は、成功後にカベリ・ピークをねらうためにC4b泊まりとなる。

8・4
快晴無風。チョゴリザ初登頂成功。
藤平、平井―C4aより頂上往復。四・五〇、出発。コルより酸素をつけ、快調なピッチで進む。頂上への中程にある岩稜の悪場をのりきったところで酸素をつかいきる。雪がくさりラッセルに悩まされながら、一歩一歩高度をかせぐ。頂上直下の岩稜着一六・〇〇。それより岩稜を伝って一六・三〇頂上に立つ。記念撮影などに三〇分費し、一七・〇〇下降開始。薄明のあるうちに岩稜の悪場を通過し、以後ライトとシュプールをたよりに降る。二一・三〇、出迎えの中島、高村と握手。二二・三〇、C4a帰着。
山口、中島、高村―頂上攻撃隊サポート。C4bにて攻撃隊の行動を見守り、その成功を知る。一七・〇〇サポートのためC4b発。C4aより中島、高村が二〇・〇〇出迎えに出発。山口はC4a

岩坪、芳賀より実情を知りC5を撤収してC3へ降る。
岩坪、芳賀―C4よりC5往復後C3へ。C3より登って来た加藤らにより、攻撃隊の二人が直接C3に降ったのを知り、疲労をむちうちC5へ登り、山口らに伝え、テントを撤収してC3へ降る。
加藤、潮田―C3よりC4往復。攻撃隊C3帰着の通達とC4、C5撤収のため往復する。
藤平、平井―C3にて休養。
高村―C2よりC3へ（泊）。まったく体力回復し、攻撃のサポートに加わる。
今川―C2よりC3往復。

8・2
快晴無風。岩坪、芳賀―C3よりC2へ（泊）。高所での連日の行動に二人の疲労はなはだしく、休養のため下へ降る。
中島―C3よりC2を往復。岩坪、芳賀のつきそい。
加藤、藤平、山口、平井、高村、潮田―C3にて休養。
今川、イスマイル、ハサン、フセン、マハン―C2よりC3へ（泊）。
かくして第三回頂上攻撃の作戦がねられ、アブルッジ・ルートをとり、ドーム南面の雪原を伝ってコルまでにC4を、コルないしコルより上にC5を建設し、

8・3
加藤、潮田、今川―C3よりラッセルに悩まされながらも広い雪原を乗りきって、頂上直下が悪かったが、コンダス・ピーク初登頂に成功する。
藤平、平井―C3よりC4aへ（泊）。
山口、中島、高村―C3よりC4a建設後、コルまでラッセル往復C4bへ（泊）。
ポーター、イスマイルほか三名―C3よりC4a往復。
岩坪、芳賀―C2よりB・Cへ降る。以後B・Cにて休養。
南方に立ちこめる暗雲などより、前述の予定を変更、C4aより明四日攻撃を行うこととなり、サポート隊は、成功後にカベリ・ピークをねらうためにC4b泊まりとなる。

8・4
快晴無風。チョゴリザ初登頂成功。
藤平、平井―C4aより頂上往復。四・五〇、出発。コルより酸素をつけ、快調なピッチで進む。頂上への中程にある岩稜の悪場をのりきったところで酸素をつかいきる。雪がくさりラッセルに悩まされながら、一歩一歩高度をかせぐ。頂上直下の岩稜着一六・〇〇。それより岩稜を伝って一六・三〇頂上に立つ。記念撮影などに三〇分費し、一七・〇〇下降開始。薄明のあるうちに岩稜の悪場を通過し、以後ライトとシュプールをたよりに降る。二一・三〇、出迎えの中島、高村と握手。二二・三〇、C4a帰着。
山口、中島、高村―頂上攻撃隊サポート。C4bにて攻撃隊の行動を見守り、その成功を知る。一七・〇〇サポートのためC4b発。C4aより中島、高村が二〇・〇〇出迎えに出発。山口はC4aにて待機。攻撃隊C4a帰着歓談後、C4bへ降る。二四・〇〇。

8・5
加藤、潮田、今川―C3待機。初登頂成功を五〇〇ミリ望遠レンズにて知る。潮田はこの模様をシネにとる。
桑原、脇坂、岩坪、芳賀―B・Cで休養。晴のち曇のち雪。カベリ・ピーク初登頂成功。
山口、中島、高村―C4bよりカベリ・ピーク登頂後C3へ（泊）。三キロ余の雪原を横断して、ピーク基部に達し、そこより右手、カベリ氷河側に切れ込んだ露岩と雪の界線の急坂を伝って頂上に達す。
藤平、平井―C4aよりC3へ（泊）。
加藤、潮田―C3滞在。
今川―C3よりC2、C1を経てB・Cに降り、隊長らに登頂の成功を知らせる。
ポーター、イスマイルら四名―C3よりC4a、C4bを撤収に往復。
バクリー、グラム―C2よりC3へ（泊）。
隊長ら四人―B・Cにて夕方今川の伝達により登頂成功を知る。
かくして、C4のすべての荷を撤収して、C3に集結。互に登頂成功を喜びあう。

8・6
終日雪。C3の隊員七名、ポーター六名は吹雪のため滞在。

8・7
終日湿雪。まれにガス薄くなる。C3の全員、吹雪とガスの中をC3よりC2へ（泊）。

8・8
快晴。山口、高村―C2滞在。後始末と荷物撤収のポーター監督のため。
加藤、藤平、中島、平井、潮田―C2滞在。ポーターB・Cへ。深雪のラッセルと、崩壊はげしいアイス・フォールに悩まされながら降る。C1にて脇坂らの出迎えとC1まで降る。夕刻B・C着。隊長と感激の握手をかわす。

8・9
脇坂、岩坪、芳賀―B・CよりC1往復。加藤らパーティの出迎えとC1までのルート整備のため。
ポーター、イスマイルら六名―C2よりC1へ（泊）。
快晴無風。山口、高村―C2滞在。ポーターたちの荷物撤収の監督。
ポーター四名―C1よりC2往復。荷物撤収。
岩坪、芳賀―B・CよりC1往復。荷物撤収と、激変したアイス・フォールのルート確保のため。
他の隊員はすべてB・Cにて休養。

8・10
晴のち曇。山口、高村―C2よりC1を経てB・Cへ。
ポーター四名―C1よりC2往復後B・Cへ。
他の隊員―B・C休養。

8・11
本日にて全員無事ベース・キャンプ帰着。あと一度C1へ荷下ろしに行けば撤収完了となる。食糧その他の状態よりバルトロ・カンリの攻撃はとりやめとなり、シュクールとチョビをポスト・ランナーとしてスカルドへ発たせ、小シュクールをアスコーレへやって五人のクーリーをできるだけ早急にここにあげさせることにする。
夜ふけまで大コンパ。

8・12
終日雪。B・C。全員休養。
本を読むもの。ためておいた日記を書くもの。歌をうたうもの。トランプに興ずるもの。みんな本当にフリーな気持で思う存分休養をとる。
終日、断続的に小雪。C1の荷の撤収予定だったが明日に延期。
ひる前、イタリア隊のフォスコ・マライーニ氏ら四人がわれわれのベース・キャンプ訪問。彼らは八月六日、ガッシャーブルムⅣに初登頂成功したとのこと。互に祝福のことばをかわし、歓談する。桑原隊長より、ヘルマン・ブールの遺品を

手渡し、その遺族にとどけてもらうこととする。

8・13 曇ときどき小雪。脇坂、平井、岩坪、ポーター六名—最後の荷下ろしにC1へ往復。これにて完全に撤収を終了。
他は休養。

8・14 午前中晴、午後薄曇。バルトロ・カンリは放棄したので、これにかわるものとして、一部隊員による小旅行が計画され、目標はビアンジェ氷河よりステステ・サドルに達し、付近の小ピークを手がけるとともにシャクスガム流域を観察することとなる。パーティは平井、芳賀、バクリーと決定。

8・15 曇ときどき小雪。平井、芳賀、バクリー—B・Cよりゴレ・パロへ。七・三〇、小雪のちらつく中を出発。単調なモレーン歩きののち、一五・四五、ゴレ・パロ着（泊）。
他の隊員—B・C滞在。

8・16 曇ときどき小雪。B・C—相変らずの滞在。ポーターの計算では、十八日にクーリーが来るとのこと。
ビアンジェ隊—ゴレ・パロよりビアンジェ氷河上のキャンプへ。バルトロ氷河の横断にやや手間どり、ビアンジェ氷河に入ってからは左岸のアブレーション・バレーを行く。一カ月ぶりの緑の草、野菊の黄色に心のやわらぎをおぼえる。ムスターグ・タワーの正面、乾いた砂地の上にテントを張る。

8・17 晴ときどき曇、一時雪。B・C—午前中は撮影のためにアイス・フォールまで。午後は荷物の整理。夜、ひじょうに冷える。ビアンジェ隊—テント地よりビアンジェ氷河、モレーン上約五四〇〇メートル地点まで（泊）。ムスターグ・タワーの尾根の出っぱり付近より、アイス・フォールとなる。左岸の岩壁の下を忠実にたどり、適当な所でアイス・フォールの上のモレーンに移る。氷河上部は再び傾斜ゆるくなり、なんら危険性なし。一五・〇〇過ぎ、吹雪となり、ここに幕営。ステステ・サドルは案外低く見える。

8・18 快晴。B・C—久しぶりに、チョゴリザ、ヒドン・ピーク、ムスターグ・タワーが顔を出す。クーリーは来ない。帰途のキャラバンのため梱包完了。
ビアンジェ隊—テント地よりステステ・サドル往復。テントをさらに氷河上一時間ばかりさきまであげ、バクリーをそこに残して、二人はステステ・サドルにむかう。雪が重くてラッセルに苦労する。サドル着一二・〇〇、三〇分ばかり周囲の景観を望見後降る。

8・19 快晴。B・C—一一・〇〇ごろ、小シュクールがクーリー五三人とアスコーレ村長の息子をつれて到着。B・Cはがぜんやかましくなる。夜はいらなくなったワイヤバンド・ボックスをたいて豪勢なファイヤー・ストーム。
ビアンジェ隊—テント地より七一七〇峰試登。右氷河のモレーンを伝ってから、ダイレクトに右の雪の斜面を登り、その後、急なルンゼにとっつく。雪と岩、その岩は大まかな逆層。稜線に向って急な壁を直登。雪崩の危険をさけて左よりにリッジに出たが、それよりさきは鋸歯状の岩稜となり行きづまる。高度約七〇〇〇メートル。頂上まではまだ遠く、帰りの時間と悪場を思って退却とする。シャクスガム流域、ヒスパー周辺の山々が素晴らしい。帰りはワン・アット・ア・タイムで慎重におりる。ルンゼ状の悪場は通らず、よいルートを見つけて降った。

8・20 晴。本隊—B・Cよりコンコルディアへ。またまたいやな出発時の混乱の生活がはじまる。B・Cを張っていたモレーンの上、またはモレーン沿いの氷の上を歩く。久しぶりの行動にみんなだいぶん

疲れたようだ。支氷河やミートル・ピークの雪のいちじるしく減退しているのに驚く。一七・〇〇、コンコルディア着。
ビアンジェ隊—テントよりビアンジェ氷河をくだり、バルトロ氷河上にキャンプ。右岸のモレーンを伝ってビアンジェ氷河をくだる。こちら側のほうが歩きやすい。バルトロに入り、その褐色モレーンの横断にだいぶんエネルギーを費す。イエルマネンドウ氷河の正面にあたるところで、石をならしてテントをはる。

8・21 曇。本隊—コンコルディアよりビアンジェ氷河出合へ。途中、イタリア隊のB・Cへ残物をとりに行くクーリーたちにあい、ビアンジェ隊が無事ウルドカスにきょうついていることを知る。
ビアンジェ隊—前日キャンプ地よりウルドカスへ。

8・22 晴ときどき曇。本隊—前日キャンプ地よりウルドカスへ。昨夜中にビース一〇〇〇本ぬすまれる。ちょっとの油断もならない。いままでのモレーンより分れて、ウルドカスのある左岸へと氷河を横断気味にくだる。途中、一カ所幅一〇メートルくらいの氷河上の川を徒渉。往路にはなかったものである。徒河の様子も道も変化している。久方ぶりのグリーン。

8・23 ビアンジェ隊—ウルドカス滞在。本隊到着までにテント地清掃。イタリア隊の残していったかんづめをみつけ、かくして再び全隊員合流。
曇。ウルドカスよりリリゴのさきへ。七・三〇出発。往路とだいたいおなじふみあとを伝う。高山植物があらわれはじめ、植物班の脇坂らはいそがしい。リリゴ氷河は増水し、徒渉に手間どる。きょうはバイジュまでの予定だったが、リリゴから往路と分れ、左岸のアブレーション・バレーを約一時間くだって、バルトロ氷河右岸への横断にかかるところで泊まる。一四・四〇。まったく殺風景なところ。ここもリリゴとおなじく水が悪い。相変らずの砂まじりのアスコーレのアタにみんな閉口する。

8・24 曇のち雨のち晴。無名のパロ（泊場）よりバイジュへ。
バイジュとバルデュマルの中間までの予定だったが、氷河舌端に達する手前より雨、本格的な土砂降りとなったので、議論の末、きょうはバイジュ泊まりとなる。夕食は加藤の釣って来た魚の塩焼にみんな舌つづみをうつ。

8・25 晴のち曇、夕立あり。バイジュよりジュラ・パロへ。

8・26 六・四五、出発。いよいよバルトロとも別れだ。ツンゲに何度も名残りを惜しむ。バイジュより一時間ほど進んだ扇状地からK2が頭をのぞかせていた。ひる過ぎ、例の砂嵐に見舞われる。デュモルド川出合のすこし手前でここに泊まるべきか、つり橋まで行くべきかで、ちょっと停滞。けっきょくポーターの食糧不足のため、強行することになる。一七・四五、つり橋手前のジュラ・パロ着。ウルドカスで逃げたヤギ二ひきをクーリーたちが見つけ、とらえて来る。ボクシスは一〇ルピー。久しぶりのバクリー（ヤギ）のショルバー（スープ）は独得の臭気も気にならず、好評。
曇のち晴、夕立あり。ジュラ・パロよりコロフォンを経てアスコーレへ。
きょうはどうしてもアスコーレまで行かねばならぬので、五・四五出発。さっそく、つり橋わたりにかかる。全員完了は七・三〇。早朝より脇坂の胃が急激に悪くなり、中島ドクター看護にあたる。クーリーの言に反して、デュモルド右岸のヘツリは道がよく、案外簡単に通過。かえって往路にも通った合流点とコロフォンの間のヘツリのほうが遙かに悪い。平井が、医療器具をとるために、先頭のク

ーリーを追ったが、その後、脇坂の調子案外よく、一八・〇〇、全員アスコーレ着。途中、砂嵐と夕立に見舞われる。アスコーレのテント場は例によって混乱をきわめ、久しぶりの人家にもちっともうれしくない。

帰路の途中で、スコロ・ラ越えの計画が出ていたが、天候不良、その他の理由でとりやめとなる。

8・27 天候、きのうとおなじ。アスコーレよりチョンゴへ。

朝の賃金支払いには例によって妥結までに暇がかかる。途中みんな二カ月ぶりに天然泉の野天風呂で汗と垢を流す。ソバの花が美しい。

8・28 曇ときどき小雨。チョンゴよりチャボへ。

早朝、マハンとバクリーの二名を、デュッソーでの渡河および川下りのためのザーク交渉にユノーまで先発させる。往路の落石の悪場はやはり気持のよいものではなかった。その後の道程の、思ったより長いのにみんなウンザリする。チャボの部落に入るころから、よく実ったアンズの木があらわれる。久しぶりの新鮮なくだものに、みんな夢中になってむさぼり食う。

8・29 晴。チャボよりデュッソーへ。

高度も低くなり、そろそろ暑くなって来たので、高巻きの上でみんな半ズボンにはきかえる。対岸のオアシスから出ているヤギ放牧の通路がきれいな直角でジグザグの図をえがいている。デュッソーではドクターが押寄せる患者に悲鳴をあげる。往路とおなじく聖者への貢をとられる。アンズとリンゴがうまい。

8・30 晴。本隊—デュッソーよりザークにのってゴラブールへ（泊）。出発前に、村長からこの地方のいろいろの習慣、農法などを聞きとる。一〇・〇〇ごろより二時間半ばかりかかって全員渡河。ここから陸路隊と分れて、三そうのザークに分乗、ブラルド川をくだる。バシャ川との出合の大きな州までの間は流れも早く、みんな大いにキモをひやす。シガール川となってからはノンビリとした川下り。チョゴルンマの雪をいただいた山がうつくしい。ゴラブール着、一七・〇〇。ここはシガール川の右岸にあり、草地のキャンプ・サイトは部落とも適当な距離にあり、じつに感じのよいところ。ただし、住民はエクスペディションずれし、物価は高い。

陸路隊—デュッソーよりユノーへ（泊）。

岩坪、高村、ワジー大尉とポーター、クリーは陸路を伝う。ザーク渡河後は本隊と分れ、炎天干しの川原をユノーまで。

8・31 快晴。本隊—ゴラブールよりザークに乗ってスカルドへ。八・二〇、出発。ところどころに瀬があるものの、流れはゆるやかで、きのうのようなスリル感もなく、のんびりとまわりの山を眺めながらくだる。往路に比し、山の雪はいちじるしく少ない。シガールで撮影隊と分れ、先行する。インダス本流に入るころ、猛烈な砂嵐に見舞われる。スカルド着、一六・〇〇。P・Aの訪問をうける。レスト・ハウスでひさしぶりにベッドの上にねる。

撮影隊—ゴラブールよりシガールへ（泊）。脇坂、平井、今川、潮田は、P・Aより要請されていたシガールの小学校撮影のため、一一・〇〇、シガール上陸。さっそく撮影ののち、本隊を追う予定のところ、本日は日曜で撮影不能。仕方なく民家の二階に泊まる。

陸路隊—ユノーよりシガールへ（泊）。

日程の都合で、きょう中にどうしてもシガールに着かねばならぬので、四・〇〇、まだ暗い中を出発。クーリーにはボクシスをはずむことにしてがんばらせる。炎暑の中の一九マイルの行軍は相当なもの

だった。シガールで脇坂隊と合流する。

9・1 晴。本隊—スカルド滞在。APAあいさつ、荷物の受取りと整理。郵便物の受取りにポスト・オフィスへ。中島は、陸路隊出迎えにアレキサンダー渡しまで行く。かれらの到着後、クーリー賃金支払いをすませてしまう。

陸路隊—シガールよりスカルドへ。早朝出発。中島の出迎えをうけて、案外早く、一三・三〇、スカルド着。荷物の整理。

撮影隊—シガールで小学校撮影後、ザークにのってスカルドへ。午前中で用件をすませる予定のところ、スカルドのP・Aが早朝馬をとばして到着し、大がかりな催しとなり、夜遅くスカルドに帰着。これにて六月二十一日当地出発以来、二カ月半ぶりに全員スカルド帰着。

9・2 全員スカルド滞在。

すべての荷物の整理を行い、不要のものはポーターたちに与える。

夜はP・Aの招待により、スキヤキ・パーティ。

9・3 桑原、加藤、ワジー大尉、荷物の一部—第一便でスカルドよりラワルピンディへ。カシミール省、放送局、その他訪問。

オーストリアのハラモシュ隊と交歓。フラッシュマン・ホテル泊まり。

午後、天候悪くなり、他の者はスカルド滞在。

9・4 桑原、加藤—ラワルピンディ滞在。タキシラの遺跡訪問。

藤平、潮田、岩坪、平井—第二便でラワルピンディへ。

脇坂、高村—第三便でラワルピンディへ。いずれもグランド・ホテル泊まり。

別の輸送機で二回目の荷物を運ぶ。

山口、中島、芳賀、今川、—今日はこれ以上飛行機がとばないので、スカルド滞在。

9・5 山口ら四名—第一便でスカルドよりラワルピンディへ。グランド・ホテル泊まり。

他はラワルピンディ滞在。午前中、カシミール省出頭。午後は荷物の汽車輸送の交渉。夜はワジー大尉の招待によるレセプションに全員出席。

9・6 藤平、岩坪—空路、ラワルピンディよりカラチへ。大使館、古川氏夫妻の出迎えを受け、以後、同家のお世話になる。

他はラワルピンディ滞在。隊長以外はタキシラ遺跡見学。

9・7 藤平、岩坪—カラチ滞在。

脇坂、高村—バスにてラワルピンディよりペシャワールへ。

他—ラワルピンディ滞在。

9・8 藤平、岩坪—カラチ滞在。大阪商船ぼんべい丸に四名便乗可能となり、ラホールの山口ら四名に電報をうつ。

脇坂、高村—ペシャワール滞在。農業試験場見学。

9・9 山口、中島、平井、芳賀—鉄路、ラワルピンディよりラホールへ。プラガンザ・ホテル泊まり。

桑原、加藤、潮田、今川—ラワルピンディ滞在。カシミール省、軍部訪問。

藤平、岩坪—カラチ滞在。大阪商船代理店交渉。

桑原、加藤、潮田—空路ラワルピンディよりカラチへ。高須、古川両氏の出迎えを受け、報告とお礼のため大使館訪問。メトロポール・ホテルに泊まる。

9・10 山口ら四人—ラホール滞在。モスク、旧宮殿などを見学。

今川—空路、ラワルピンディよりラホールへ（泊）。

脇坂、高村—ペシャワールよりカイバル・パス往復後、ラワルピンディへ（泊）。

桑原ら五人—カラチ滞在。

山口ら四人—早朝、藤平よりのぼんべい丸に関する電報を受取る。バンジャブ大

学訪問。カラコラム・クラブのベック教授訪問。夜、空路ラホールよりカラチへ。高須、古川両氏の出迎えをうけ、それぞれ両家にお世話になる。

9・15　今川―ラホール滞在。
脇坂、高村―バスにてラワルピンディよりラホールへ。ブラガンザ・ホテル泊まり。ちょうどカラチへ向け出発せんとする山口らを見送る。

9・11　脇坂、高村―ラホール滞在。近郊のカラシャカク国立農場で日本式農法を指導している邦人宿舎泊まり。

9・12　今川―空路ラホールよりカラチへ。
桑原ら九名―カラチ滞在。各界お礼の訪問。
脇坂、高村―カラシャカク滞在。
桑原ほか―カラチ滞在。

9・13　桑原、加藤、藤平、潮田―空路カラチ出発。
山口、中島、平井―出国手続をすませ、夕方、大阪商船ぼんべい丸に乗船。
脇坂、高村―カラシャカク滞在。

9・14　桑原ほか―カラチ滞在。カラシャカク滞在。大使館の歓迎会に桑原以下一〇名出席。オーストリア公使より、ヘルマン・ブールの件につきお礼をいわれる。

9・16　山口、中島、平井―出国手続をすませ、夕方、大阪商船ぼんべい丸に乗船。
脇坂、高村―カラシャカク滞在。
桑原ほか―カラチ滞在。

9・17　桑原、加藤、藤平、潮田―空路カラチ出発。
山口、中島、平井―ぼんべい丸、カラチ港出航。
脇坂、高村―カラシャカク滞在。

9・15　桑原ら四名―羽田空港着。
脇坂、高村―ラホール出発、以後、カラシャカクの邦人と行をともにする。

9・16　岩坪、芳賀―カラチ滞在。
脇坂、高村―サッカ・ダム、モヘンジョダロ見学。ドクリ農業試験場泊まり。

9・17　脇坂、高村―カラチ到着。
岩坪、芳賀―カラチ滞在。
船便なく、これより脇坂ら四名の長いカラチ滞在がはじまる。

10・9　岩坪、芳賀―日産汽船、日産丸にてカラチ港出航。

10・11　山口、中島、平井―大阪商船、ぼんべい丸にて神戸入港。

10・22　脇坂、高村―三井船舶、天城山丸にてカラチ港出航。

11・19　岩坪、芳賀―日産汽船、日産丸にて神戸入港。

12・4　脇坂、高村―三井船舶、天城山丸にて釜石入港。
かくして全隊員無事帰国。

（山口　克）

遠征援助の法人および個人

愛知機械工業KK　愛知トマトKK　朝日放送KK　安宅産業KK　東化工KK　飯野海運KK　イーグルマホービンKK　伊藤忠商事KK　伊東栄養食品工業KK　岩井産業KK　岩谷産業KK　大阪瓦斯KK　大阪市　大阪繊維工業指導所　大阪証券取引所　大阪商船KK　大阪建物KK　大阪府　大阪窯業セメントKK　王子製紙工業KK　鬼塚KK　オリンパス光学KK　化繊検査協会　鐘淵化学工業KK　鐘淵紡績KK　兼松KK　京都科学標本KK　川崎汽船KK　川崎重工業KK　川崎車輛KK　川崎製鉄KK　関西電力KK　京都市　京都市食肉協同組合　近畿日本鉄道KK　KK熊谷組　倉敷レーヨンKK　クロバー乳業KK　黒部川電力KK　京阪神急行電鉄KK　京阪電気鉄道KK　江商KK　鉱業六社（住友金属鉱山KK、同和鉱業KK、日本鉱業KK、古河鉱業KK、三井金属鉱業KK、三菱金属鉱業KK）KK神戸製鋼所　KK寿屋　三共KK　KK三和銀行　三和梱包KK　三洋油脂KK　KK進々堂　KK島津製作所　塩野義製薬KK　KK資生堂　新三菱重工業KK神戸造船所　駿河屋　KK住友銀行　住友機械工業KK　住友金属工業KK　住友電気工業KK　住友化学工業KK　住友商事KK　KK住友信託銀行　住友生命保険　住友石炭鉱業KK　住友ベークライトKK　精工舎KK　積水化学工業KK　全国通信工事協会東海支部　ソニーKK　第一製薬KK　大都魚類KK　大日本製薬KK　大日本セロファンKK　大洋漁業KK　KK大和銀行　台湾製糖KK　KK滝平　武田薬品工業KK　田辺製薬KK　中央公論社　中部電力KK　千代田光学KK　帝国人造絹糸KK　東亜合成化学工業KK　東京海上火災保険　東京銀行協会　東京樹脂工業KK　富山協同自家発電KK　東洋繊詰専修学校　東洋棉花KK　東洋レーヨンKK　中村合板KK　名古屋鉄道KK　南海電気鉄道KK　日産汽船KK　日商KK　日本板硝子KK　日本織物加工KK　日本火災海上保険　日本カーバイド工業KK　日本化薬KK　日本毛織KK　日本クロス工業KK　日本鋼管KK　日本光学工業KK　日本証券金融KK　日本新薬KK　日本生命保険　日本電池KK　日本電話施設KK　日本陶業KK　日本ペイントKK　日本レーヨンKK　日棉実業KK　花木酒造KK　阪神電気鉄道KK　KK播磨造船所　百貨店協会（大阪）　万有製薬KK　ビール協会　藤沢製薬工業KK　富士製鉄KK　富士電機製造KK　富士写真フイルムKK　紡績協会　北越パルプKK　松下電器産業KK　松下通信工業KK　丸善石油KK　丸紅飯田KK　三井船舶KK　三井不動産KK　三菱電機KK神戸工場　武庫川学院女子大　明治製菓KK　明治乳業KK　明治商事KK　KK明治屋京都支店　山下汽船KK　八幡製鉄KK　ヤンマーディーゼルKK　湯浅電池KK

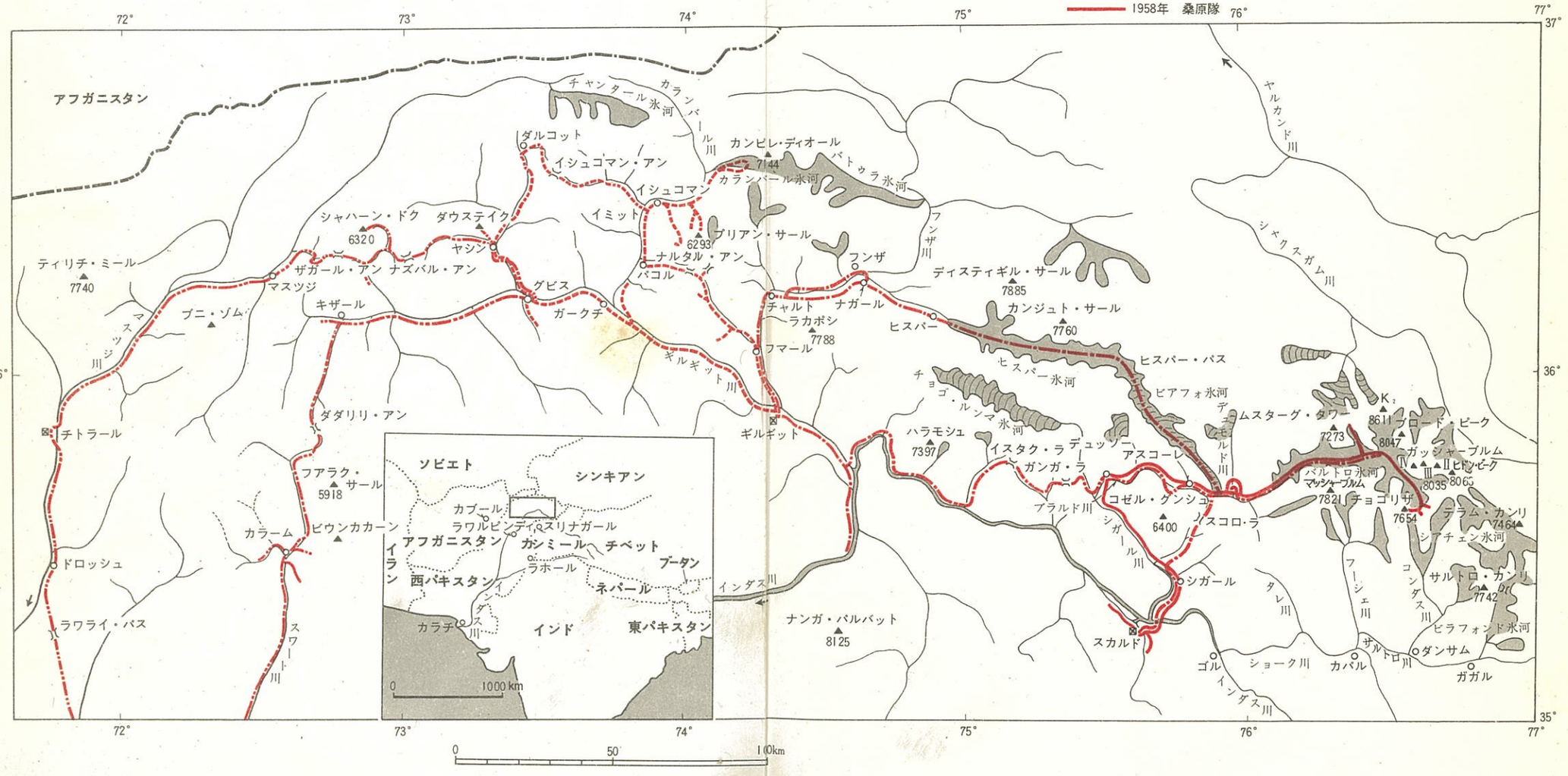
黒船堂（御影）　多田道子　丹　信実　富田健一　原　昌三　藤本国夫　古村弥太朗

（アイウエオ順）

パキスタン北部地方

京都大学遠征隊の踏査ルート

1955年　今西隊
1956年　藤田隊
1957年　松下隊
1958年　桑原隊



5 4 3 2 1 0 5 10 Miles
5 0 5 10 15 Km

77° 15′ 30′ 45′ 36°

45′

30′

15′

サルホラッコ氷河
ステステ・サドル
ステステ
K₂ 8611
ムスターグ・タワー
7273
7170
ブロード・ピーク
8047
ガッシャーブルム氷河
ウルドック氷河
トランゴ・タワー
6257
ガッシャーブルム
IV 7980
III
II 8035
南ガッシャーブルム氷河
ヒドン・ピーク
8068
コンコルディア
ゴレ
6010
ミートル・ピーク
ウルドック・ピークI
アブルッジ氷河
アブルッジ・サドル
B.C.
バルトロ・カンリ
7312
コンウエイ・サドル
シア・カンリ
7600
マッシャーブルム
7821
チョゴリザ
7654
コンダス・サドル
コンダス・ピーク
6758
カベリ・ピーク
6950
シア・ラ
シアチェン氷河
ステラム・カンリ
7464
7400
ゲント
Rk33
7120
サルトロ氷河
サルトロ・カンリ
7742
ビラフォンド・ラ
ビラフォンド氷河
アリプランザ
ナラム
フーシェ
ドガニ
フルディ
コンダス
ダンサム
ギャリ
チュミク氷河
ゴムパカン
ガガル
カバル
ルギョン氷河

チョゴリザ登頂ルート図

SKETCH MAP SHOWING THE ROUTE OF MT CHOGOLISA

バルトロ氷河
Baltoro Glacier

BC 5000m

I
バルトロ・カンリ
Baltoro Kangri
II 7312
III

C1
5500
6363

C2
5900

C3
6400

コンダス・サドル
Kondus Saddle

チョゴリザ
CHOGOLISA
7654

C4
6700

コンダス・ピーク
Kondus Pk
6758

C5
6950

C4-a
6800

C4-b
6650

チョゴリザ・サドル
Chogolisa Saddle

カベリ・サドル
Kaberi Saddle

カベリ・ピーク
Kaberi Pk
6950

コンダス氷河
Kondus Glacier

カベリ氷河
Kaberi Glacier

SCALE
0 1 2 3 4KM

バルドロ氷河周辺図

Miles
Km
チョクト氷河
ホー・ルンマ
デュッソー
チグスタン
渡場
ブラルド川
チャポ
チョンゴ
ホト
トングノール
アスコーレ
3050
コロファン
3100
吊橋
シュラ
パイジュ・ピーク
6600
ステステ
サーコル・ダース
5800
バルデュマル
タンダラ
ユーノー
コゼル・グンジュ
6400
コシュマール
シルディ
ゴラプール
ダルタンボーレ・ルンマ
アチュリ
スコロ・ルンマ
スコロ
ツンモ
マンゴ・グソール
6288
スコロ・ラ
5070
バウマハレル・ルンマ
タレ・ラ
4880
シムシャーク
5510
シガール
マルシャーカーラ
5150
スカルド飛行場
スカルド
2700
渡場
ヤルバ湖
サトパラ湖
サトパラ
タランカ
5133
バームチュ
4860
キリス
ゴル
ドガニ
ショーク川
インダス川
カパル
フーシェー
フーシェー川
フルディ
タガス
サルトロ川
ダンサム
ダンサム川
ゴムパカン
ガガル
ゴマ
ルギョン氷河
ギャリ
チュミク氷河
コンダス
コンダス川
ナラム
ピラフォンド氷河
ドンドン氷河
アリブランザ
サルトロ・カンリ
7742
ピラフォンド・ラ
ロロフォンド氷河
Rk33
7120
サルトロ氷河
シュルピガン氷河
7400
ゲント
テラム・カンリ
7464
シア・ラ
シアチェン氷河
コンダス・サルトル
シア・カンリ
7600
コンウエイ・サドル
7312
ウルドック・ピークI
アブルッジ・サドル
アブルッジ氷河
ウルドック氷河
ガッシャーブルム
IV
III
II 8035
7980
南ガッシャーブルム氷河
ヒドン・ピーク
8068
ガッシャーブルム氷河
シャクスガム川
ブロード・ピーク
8047
ゴッドウィン・オースティン氷河
K2
8611
ガッシャーブルム氷河
コンコルディア
ゴレ
マーブル
6010
ミートル・ピーク
ビアンジェ氷河
ルンカ氷河
カラカル氷河
7170
サボイア氷河
ステステ・サドル
ステステ
サルボラッゴ氷河
ムスターグ・タワー
7273
ムスターグ氷河
ロ氷河
ビアンジェ氷河
ビアルチェディ氷河
ミートル氷河
ニーム氷河
バルトロ・カンリ
B.C.
チョゴリザ
7654
カベリ・ピーク
6950
コンダス・ピーク
6758
コンダス氷河
カベリ氷河
チョゴリザ氷河
マッシャーブルム氷河
マッシャーブルム
7821
コロコロ氷河
マンドウ氷河
イエルマネンドウ氷河
バルドカス
バルドカス・ピーク
リリゴ
リリゴ氷河
リリゴ・ピーク
3360
パイジュ
パイジュ氷河
ウリビア氷河
トランゴ・タワー
6257
デンゲ氷河
デュモルド川
パンマー氷河
ビアフォ氷河
ソスプン氷河
バシャ川
チンカン川

バルトロ氷
Baltoro Glacier
チョゴリザ
CHOGOLISA
カベリ
Kaberi
カベリ
Kaberi Glac

チョゴリザ

昭和34年10月25日　発行

編著　京都大学学士山岳会
発行者　朝日新聞社・李家正文
印刷所　凸版印刷株式会社
発行所　朝日新聞社

東京都有楽町　大阪市中之島
小倉市砂津　名古屋市広小路

© 京都大学学士山岳会 1959年

980円

T. Matsuda

1963. 6. 22.